

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第27集

きよ す じょう か まち い せ き  
**清洲城下町遺跡 (Ⅱ)**

1992

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

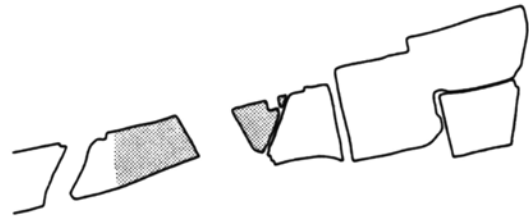
正誤表

頁	行	誤	正
挿図目次左	2	発掘区調査年度別区割り	発掘調査区年度別区割り
挿図目次左	27	60F2区遺構図	60F1区遺構図
図版目次	9	59B区全景	59D区下面全景
図版目次	11	60F区全景	60F1・F3区全景
1	9	南西約6km	南東約6km
2	第2図	59E	59F・59E
2	第2図	60F2	60F1
2	第2図	60F1	60F2
8	29	59F区	59E区
8	33	部分的に認められ	認められ
10	8	60A区の	61A区の
11	12	P265	P267
11	17	南北棟	東西棟
12	4	N-7.5° -Eとこれに直交する方位、	N-7.5° -E、
13	7	SD05	SB05
13	第7図	P257	P267
13	第7図	(S=1/100)	(S=1/200)
17	第10図	(S=1/1,250)	(S=1/1,600)
21	4	南北の幅	南部の幅
25	第18図	(S=1/1,250)	(S=1/1,600)
25	第20図	NR001	NR01
25	第20図	SD010	SD10
25	第20図	SD009	SD09
25	第20図	SD008	SD08
28	21	NR03 (第12図)	SD16
33	第26図	60F2区遺構図	60F1区遺構図
37	キョフ・ジョン	SD73・NR01	SD73・NR05
41	2	NR01	NR05
41	2	この遺構は	この遺構は、遺構図には示されていないが
141	2	NR11	NR01
170	5	1点39	1点(39)
170	26	文政二宋銀	文政二朱銀
192	32	青磁椀、皿・白磁椀、皿、	青磁椀・皿、白磁椀・皿、
205	49-52	NR01	NR05
206	2-25	NR01	NR05
238	17-55	NR001	NR01
239	2-37	NR001	NR01
240	35-55	SD016	SD16
241	2-3	SD068	SD68
241	4-5	SE002	SE02
241	6	SE017	SE07
図版8	タイトル	59B区全景	59D区下面全景
図版10	タイトル	60F区全景	60F1・F3区全景
図版16	キョフ・ジョン	SK184全景南から	SK184全景北から
図版41	キョフ・ジョン	1298	1299

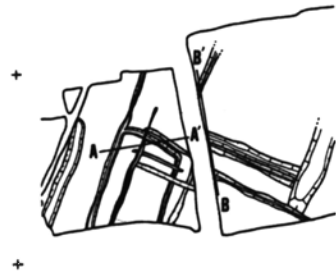
清洲城下町遺跡（Ⅱ）挿図訂正

清洲城下町遺跡（Ⅱ）の挿図のうち以下のものに誤りがありましたので、訂正致します。

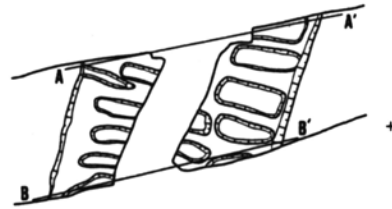
- ① P 2, 3 第2図 発掘調査区年度別区割り（S=1/1,600）
- ② P 9 第5図 遺構配置図と断面模式図（S=1/2,500）  
のうち遺構配置図
- ③ P 10, 11 第6図 中世の遺構配置図（S=1/1,600）
- ④ P 13 第7図 建物遺構図（1）  
のうち当該地点表示補足図
- ⑤ P 16, 17 第10図 城下町前期遺構配置図（S=1/1,600）\*  
\* 本文の（S=1/1,250）は誤り
- ⑥ P 19 第12図 溝のセクション図（2）  
のうち当該地点表示補足図
- ⑦ P 24, 25 第18図 城下町後期遺構配置図（S=1/1,600）\*  
\* 本文の（S=1/1,250）は誤り
- ⑧ P 27 第21図 S D 39（内堀）・S D 52（中堀）セクション図  
のうち当該地点表示補足図



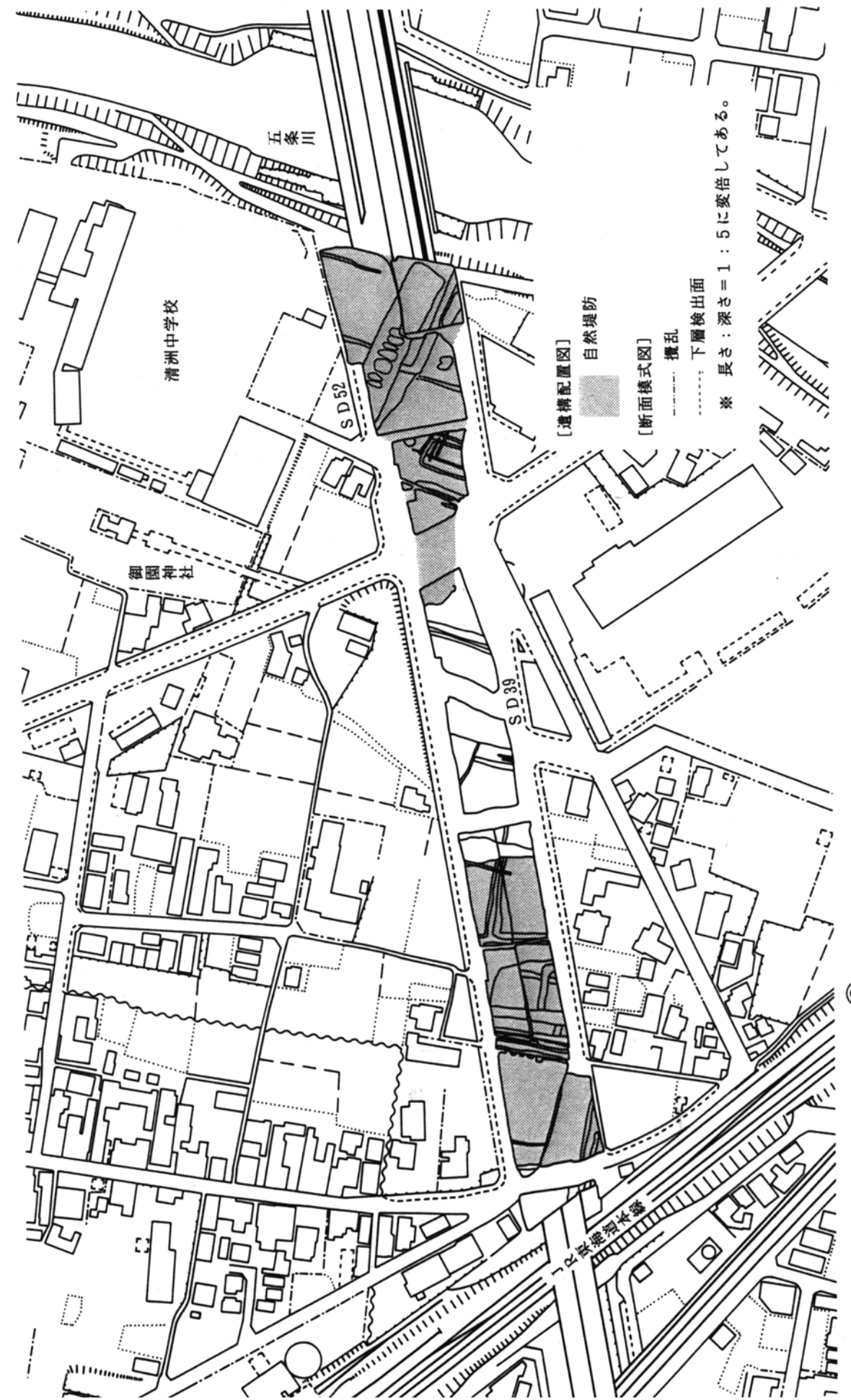
④ 第7図 建物遺構図（1）  
のうち当該地点表示補足図



⑥ 第12図 溝のセクション図（2）  
のうち当該地点表示補足図



⑧ 第21図 S D 39（内堀）・S D 52（中堀）  
セクション図のうち当該地点表示補足図



② 第5図 遺構配置図と断面模式図（S=1/2,500）のうち遺構配置図





60B区 中堀全景 北から



60A区 中堀全景 北から



60E区 御園神社前 北から



61A・B区 内堀全景 北から

## 序

近年の城館跡調査の進展にはめざましいものがあります。愛知県においても、西春日井郡清洲町の市街地ほぼ全域と新川町、春日町の一部をその範囲とする清洲城下町遺跡の名古屋環状2号線建設に伴う調査において、それまでは文献上のみの都市であった「清須」がよみがえり、重要な発見が相次ぎました。

「清須城下町」という都市遺跡は、織田信長の居城地であったのみならず、信長以後の豊臣、徳川政権下においても、織田信雄、豊臣秀次、福島正則、松平忠吉らの有力大名が相次いで配置された要地であり、慶長年間の「清須越」直前には、人口数万を擁する全国屈指の城下町となっておりました。

今回の調査によって、中堀、内堀が発見されるなど清須城とその城下町の構造を解明する上で、多大な成果を上げることができ、戦国時代史を理解する上でも好個の資料を提示できたと考えます。

最後になりましたが、調査に対して御理解、御協力賜わった関係諸機関、発掘調査に参加協力していただきました多くの方々に厚く御礼を申し上げますとともに、本書が埋蔵文化財の保護と研究の一助となれば幸いです。

平成4年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 高木 鐘三

# 例 言

- 1、本書は愛知県西春日井郡清洲町他に所在する清洲城下町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、調査は名古屋環状2号線（一般国道302号）建設に伴う事前調査として、建設省・日本道路公団から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人愛知県教育サービスセンター及び財団法人愛知県埋蔵文化財センターが昭和58年度から昭和61年度にかけて行った。
- 3、調査担当者は下記のとおりである。

昭和58年度 中村美規（現、熱田高校）・田中信夫（現、豊田市立梅坪小学校）  
上部 肇（現、津島市立神島田小学校）・福岡晃彦（現、東浦高校）

昭和59年度 清水雷太郎（現、稲沢市立明治中学校）・竹内尚武（現、国府高校）  
梅村清春（現、小原村立本城小学校）・石黒立人（本センター調査研究員）  
宮腰健司（同）・安藤義弘（現、大府高校）・長島 広（現、春日井南高校）  
福岡晃彦・梅本博志（現、愛知県教育委員会）

昭和60年度 鷲野 勉（現、一宮高校）・竹内尚武・遠藤才文（調査研究員）  
梅本博志・小澤一弘（調査研究員）・松原隆治（同）  
長島 広・丹羽 博（現、福岡県豊前市教育委員会）

昭和61年度 梅本博志・小澤一弘・細野正俊（現、尾西市立起小学校）  
水谷朋和（現、甚目寺町立甚目寺小学校）・中野良法（現、春日井南高校）
- 4、調査に当たっては次の各関係機関の御協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課、建設省中部地方建設局愛知国道工事事務所、  
日本道路公団名古屋建設局、清洲町教育委員会
- 5、調査記録及び出土品の整理等については次の方々の協力を得た。

加藤明美・河合明美・木全左奈恵・小島洋子・早川久美・星野和子・堀田順子  
本所千恵子・水野里美・諸岡成子・八木佳素実・山田律子・吉田恒美（敬称略）
- 6、本書の執筆は小澤一弘・遠藤才文・城ヶ谷和広（主査）・鈴木正貴（調査研究員）服部俊之（同）が分担し、加藤安信（調査課長）が補足したが、第Ⅲ章第3節は西尾市教育委員会の鈴木とよ江氏、第Ⅳ章第1節については東京都立大学大学院生の矢部隆氏にそれぞれ依頼した。本書の編集は加藤調査課長の指導のもと、小澤一弘が担当した。
- 7、遺構の旧番号と新番号の対照、遺物の登録番号については付表に掲載した。
- 8、本書の作成にあたっては、以下の各氏の御指導、御協力を得た。

赤羽一郎・足立順司・伊藤嘉章・井上喜久男・梅本博志・江崎武・古泉弘・斎藤孝正  
佐藤公保・柴垣勇夫・下村信博・住田誠行・千田嘉博・土山公仁・寺島孝一・仲野泰裕  
檜崎彰一・野口哲也・橋口定志・藤澤良祐・森田克行・四柳嘉章（敬称略）
- 9、調査記録の座標は、国土座標第Ⅶ座標系に準拠する。
- 10、調査記録及び出土品は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。



# 目 次

## 第Ⅰ章 遺跡調査の概要

第1節 遺跡の立地と清須城の沿革	1
第2節 調査に至る経緯と調査経過	2
第3節 調査概要	3

## 第Ⅱ章 遺 構

第1節 基本層序と遺構の概要	7
第2節 中世の遺構	11
第3節 城下町期前期の遺構	16
第4節 城下町期後期の遺構	24

## 第Ⅲ章 遺 物

第1節 中世の土器・陶磁器	34
第2節 城下町期の陶磁器	42
第3節 瓦	121
第4節 木 製 品	141
第5節 石 製 品	163
第6節 鉄 製 品	170

## 第Ⅳ章 自然科学的分析

第1節 井戸出土のカメの遺体	173
第2節 清洲城下町遺跡で見られた地震痕	188

## 第Ⅴ章 ま と め

## 付 表

遺 構 一 覧 表	196
遺 物 一 覧 表	205

## 図 版

遺 構 図 版	
写 真 図 版	

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置 .....	1
第 2 図	発掘区調査年度別区割り .....	2
第 3 図	清須村古城絵図 .....	6
第 4 図	遺跡の自然立地 .....	7
第 5 図	遺構配置図と断面模式図 .....	9
第 6 図	中世の遺構配置図 .....	10
第 7 図	建物遺構図 (1) .....	12
第 8 図	井戸実測図 (1) .....	14
第 9 図	井戸実測図 (2) .....	15
第 10 図	城下町前期遺構配置図 .....	16
第 11 図	溝のセクション図 (1) .....	17
第 12 図	溝のセクション図 (2) .....	18
第 13 図	木製品出土状態図 .....	20
第 14 図	建物遺構図 (2) .....	21
第 15 図	遺物出土状態図 (1) .....	22
第 16 図	井戸実測図 (3) .....	22
第 17 図	井戸実測図 (4) .....	23
第 18 図	城下町後期遺構配置図 .....	24
第 19 図	建物遺構図 (3) .....	24
第 20 図	溝のセクション図 (3) .....	25
第 21 図	SD39 (内堀)・SD52 (中堀) セクション図 .....	26
第 22 図	井戸実測図 (5) .....	29
第 23 図	井戸実測図 (6) .....	30
第 24 図	井戸実測図 (7) .....	31
第 25 図	遺物出土状態図 (2) .....	32
第 26 図	60F 2 区遺構図 .....	33
第 27 図	中世の遺物 (1) SE31、SE33、SE21、SK234、SD78 .....	36
第 28 図	中世の遺物 (2) SD73、NR01 .....	37
第 29 図	中世の遺物 (3) SD65、NS01 .....	38
第 30 図	中世の遺物 (4) SD72、SD74、SD66、SD85 .....	39
第 31 図	中世の遺物 (5) SD52 .....	40
第 32 図	城下町期の遺物 (1) SK30 .....	45
第 33 図	城下町期の遺物 (2) SD79 (1) .....	46
第 34 図	城下町期の遺物 (3) SD79 (2) .....	47
第 35 図	城下町期の遺物 (4) SD66 (1) .....	48
第 36 図	城下町期の遺物 (5) SD66 (2) .....	49
第 37 図	城下町期の遺物 (6) SD66 (3) .....	50
第 38 図	城下町期の遺物 (7) SD66 (4) .....	51
第 39 図	城下町期の遺物 (8) SD66 (5) .....	52

第 40 図	城下町期の遺物 (9)	SD66 (6)	.....	53
第 41 図	城下町期の遺物 (10)	SD66 (7)	.....	54
第 42 図	城下町期の遺物 (11)	SD66 (8)	.....	55
第 43 図	城下町期の遺物 (12)	SD66 (9)	.....	56
第 44 図	城下町期の遺物 (13)	NS01 (1)	.....	57
第 45 図	城下町期の遺物 (14)	NS01 (2)	.....	58
第 46 図	城下町期の遺物 (15)	NS01 (3)	.....	59
第 47 図	城下町期の遺物 (16)	SD85 (1)	.....	60
第 48 図	城下町期の遺物 (17)	SD85 (2)	.....	61
第 49 図	城下町期の遺物 (18)	SD85 (3)	.....	62
第 50 図	城下町期の遺物 (19)	SK08 (1)	.....	63
第 51 図	城下町期の遺物 (20)	SK08 (2)	.....	64
第 52 図	城下町期の遺物 (21)	SK08 (3)	.....	65
第 53 図	城下町期の遺物 (22)	SK08 (4)	.....	66
第 54 図	城下町期の遺物 (23)	SK08 (5)	.....	67
第 55 図	城下町期の遺物 (24)	SK08 (6)	.....	68
第 56 図	城下町期の遺物 (25)	SD14 (1)	.....	69
第 57 図	城下町期の遺物 (26)	SD14 (2)	.....	70
第 58 図	城下町期の遺物 (27)	SD14 (3)	.....	71
第 59 図	城下町期の遺物 (28)	SD14 (4)	.....	72
第 60 図	城下町期の遺物 (29)	SD57	.....	73
第 61 図	城下町期の遺物 (30)	SD62 (1)	.....	74
第 62 図	城下町期の遺物 (31)	SD62 (2)	.....	75
第 63 図	城下町期の遺物 (32)	SD62 (3)	.....	76
第 64 図	城下町期の遺物 (33)	SD16 (1)	.....	77
第 65 図	城下町期の遺物 (34)	SD16 (2)	.....	78
第 66 図	城下町期の遺物 (35)	SD16 (3)	.....	79
第 67 図	城下町期の遺物 (36)	SD16 (4)	.....	80
第 68 図	城下町期の遺物 (37)	SD16 (5)	.....	81
第 69 図	城下町期の遺物 (38)	SD16 (6)	.....	82
第 70 図	城下町期の遺物 (39)	SD16 (7)	.....	83
第 71 図	城下町期の遺物 (40)	SD16 (8)	.....	84
第 72 図	城下町期の遺物 (41)	SD52 (1)	.....	85
第 73 図	城下町期の遺物 (42)	SD52 (2)	.....	86
第 74 図	城下町期の遺物 (43)	SD52 (3)	.....	87
第 75 図	城下町期の遺物 (44)	SD52 (4)	.....	88
第 76 図	城下町期の遺物 (45)	SD52 (5)	.....	89
第 77 図	城下町期の遺物 (46)	SD52 (6)	.....	90
第 78 図	城下町期の遺物 (47)	SD52 (7)	.....	91
第 79 図	城下町期の遺物 (48)	SD19 (1)	.....	92
第 80 図	城下町期の遺物 (49)	SD19 (2)	.....	93
第 81 図	城下町期の遺物 (50)	SD19 (3)	.....	94

第 82 図	城下町期の遺物	(51)	NR03 (1)	.....	96
第 83 図	城下町期の遺物	(52)	NR03 (2)	.....	97
第 84 図	城下町期の遺物	(53)	NR03 (3)	.....	98
第 85 図	城下町期の遺物	(54)	NR03 (4)	.....	99
第 86 図	城下町期の遺物	(55)	NR03 (5)	.....	100
第 87 図	城下町期の遺物	(56)	SD39 (1)	.....	101
第 88 図	城下町期の遺物	(57)	SD39 (2)	.....	102
第 89 図	城下町期の遺物	(58)	SD48	.....	103
第 90 図	城下町期の遺物	(59)	SD13 (1)	.....	104
第 91 図	城下町期の遺物	(60)	SD13 (2)	.....	105
第 92 図	城下町期の遺物	(61)	SD13 (3)	.....	106
第 93 図	城下町期の遺物	(62)	SD13 (4)	.....	107
第 94 図	城下町期の遺物	(63)	SK05 (1)	.....	108
第 95 図	城下町期の遺物	(64)	SK05 (2)	.....	109
第 96 図	城下町期の遺物	(65)	SK40	.....	110
第 97 図	城下町期の遺物	(66)	その他 (1)	.....	111
第 98 図	城下町期の遺物	(67)	その他 (2)	.....	112
第 99 図	城下町期の遺物	(68)	輸入陶磁器：白磁	.....	114
第 100 図	城下町期の遺物	(69)	輸入陶磁器：青磁 (1)	.....	115
第 101 図	城下町期の遺物	(70)	輸入陶磁器：青磁 (2)	.....	116
第 102 図	城下町期の遺物	(71)	輸入陶磁器：青花 (1)	.....	117
第 103 図	城下町期の遺物	(72)	輸入陶磁器：青花 (2)	.....	118
第 104 図	城下町期の遺物	(73)	輸入陶磁器：青白磁、青花 (3)	.....	119
第 105 図	城下町期の遺物	(74)	輸入陶磁器：朝鮮陶器	.....	120
第 106 図	城下町期の遺物	(75)	瓦 (1)	.....	123
第 107 図	城下町期の遺物	(76)	瓦 (2)	.....	124
第 108 図	城下町期の遺物	(77)	瓦 (3)	.....	125
第 109 図	城下町期の遺物	(78)	瓦 (4)	.....	126
第 110 図	城下町期の遺物	(79)	瓦 (5)	.....	127
第 111 図	城下町期の遺物	(80)	瓦 (6)	.....	128
第 112 図	城下町期の遺物	(81)	瓦 (7)	.....	129
第 113 図	城下町期の遺物	(82)	瓦 (8)	.....	130
第 114 図	城下町期の遺物	(83)	瓦 (9)	.....	131
第 115 図	城下町期の遺物	(84)	瓦 (10)	.....	132
第 116 図	城下町期の遺物	(85)	瓦 (11)	.....	133
第 117 図	城下町期の遺物	(86)	瓦 (12)	.....	134
第 118 図	城下町期の遺物	(87)	瓦 (13)	.....	135
第 119 図	城下町期の遺物	(88)	瓦 (14)	.....	136
第 120 図	城下町期の遺物	(89)	木製品 (1) SD66 (1)	.....	145
第 121 図	城下町期の遺物	(90)	木製品 (2) SD66 (2)	.....	146
第 122 図	城下町期の遺物	(91)	木製品 (3) SD66 (3)	.....	147
第 123 図	城下町期の遺物	(92)	木製品 (4) SD66 (4)	.....	148

第 124図	城下町期の遺物 (93)	木製品 (5)	SD66 (5)	.....	149
第 125図	城下町期の遺物 (94)	木製品 (6)	SD66 (6)	.....	150
第 126図	城下町期の遺物 (95)	木製品 (7)	SD66 (7)	.....	151
第 127図	城下町期の遺物 (96)	木製品 (8)	SD66 (8)	.....	152
第 128図	城下町期の遺物 (97)	木製品 (9)	NR01 (1)	.....	156
第 129図	城下町期の遺物 (98)	木製品 (10)	NR01 (2)	.....	157
第 130図	城下町期の遺物 (99)	木製品 (11)	NR01 (3)	.....	158
第 131図	城下町期の遺物 100	木製品 (12)	SD16、SD68	.....	160
第 132図	城下町期の遺物 101	木製品 (13)	SE02、SE22、SE17	.....	162
第 133図	城下町期の遺物 102	石製品 (1)	硯・砥石 (1)	.....	164
第 134図	城下町期の遺物 103	石製品 (2)	砥石	.....	165
第 135図	城下町期の遺物 104	石製品 (3)	敲石・すり石・他	.....	166
第 136図	城下町期の遺物 105	石製品 (4)	台石	.....	167
第 137図	城下町期の遺物 106	石製品 (5)	五輪塔	.....	168
第 138図	城下町期の遺物 107	石製品 (6)	その他	.....	169
第 139図	城下町期の遺物 108	金属製品 (1)	小柄・煙管・他	.....	171
第 140図	城下町期の遺物 109	金属製品 (2)	銭貨	.....	172
第 141図	イシガメの背甲の骨板と甲板の構成				174
第 142図	イシガメの腹甲の骨板と甲板の構成				174
第 143図	イシガメの骨格				175
第 144図	イシガメの頭骨				175
第 145図	スッポンの背骨				177
第 146図	スッポンの腹甲				177
第 147図	日本産のカメ				182
第 148図	カメ出土状態				183
第 149図	出土したイシガメの甲羅 (1)				184
第 150図	出土したイシガメの甲羅 (2)				185
第 151図	出土したイシガメの甲羅 (3)				186
第 152図	甲羅以外の骨格				187
第 153図	クサガメの骨格				187
第 154図	愛知県周辺の活断層				189
第 155図	清洲城下町遺跡における砂脈の方向性				190
第 156図	清洲城下町遺跡 (91A区) で観察された噴砂模式図				191

## 図 版 目 次

- |      |               |      |                          |
|------|---------------|------|--------------------------|
| 図版 1 | 発掘風景          | 図版25 | 井戸 (3)                   |
| 図版 2 | 中堀            | 図版26 | 井戸 (4)                   |
| 図版 3 | 中堀南側上面        | 図版27 | 井戸 (5)                   |
| 図版 4 | 中堀南側下面        | 図版28 | 井戸 (6)                   |
| 図版 5 | 内堀全景          | 図版29 | 出土遺物 SD79、SD66 (1)       |
| 図版 6 | 内堀全景          | 図版30 | 出土遺物 SD66 (2)            |
| 図版 7 | 59 A 区全景      | 図版31 | 出土遺物 NS01、SD85           |
| 図版 8 | 59 B 区全景      | 図版32 | 出土遺物 SD08 (1)            |
| 図版 9 | 59 C 区全景      | 図版33 | 出土遺物 SD08 (2)            |
| 図版10 | 60 F 区全景      | 図版34 | 出土遺物 SD14、SD57、SD62、SD16 |
| 図版11 | 中堀 (SD52)     | 図版35 | 出土遺物 SD16、SD52           |
| 図版12 | 中堀 (SD52)     | 図版36 | 出土遺物 SD19、NR03 (1)       |
| 図版13 | 内堀 (SD39)     | 図版37 | 出土遺物 NR03 (2)、SD39       |
| 図版14 | 内堀 (SD39)     | 図版38 | 出土遺物 SD48、SD13 (1)       |
| 図版15 | 溝             | 図版39 | 出土遺物 SD13 (2)、SK40       |
| 図版16 | 瓦出土状態 (1)     | 図版40 | 出土遺物 その他・輸入陶磁器 (1)       |
| 図版17 | 瓦出土状態 (2)     | 図版41 | 出土遺物 輸入陶磁器 (2)           |
| 図版18 | 護岸施設 SD66 (1) | 図版42 | 出土遺物 瓦 (1)               |
| 図版19 | 護岸施設 SD66 (2) | 図版43 | 出土遺物 瓦 (2)               |
| 図版20 | 護岸施設 SD66 (3) | 図版44 | 出土遺物 木製品 (1)             |
| 図版21 | 護岸施設 SD66 (4) | 図版45 | 出土遺物 木製品 (2)             |
| 図版22 | 護岸施設 SD68     | 図版46 | 出土遺物 木製品 (3)             |
| 図版23 | 井戸 (1)        | 図版47 | 出土遺物 木製品 (4)             |
| 図版24 | 井戸 (2)        | 図版48 | 出土遺物 木製品 (5)             |

# 第I章 遺跡調査の概要

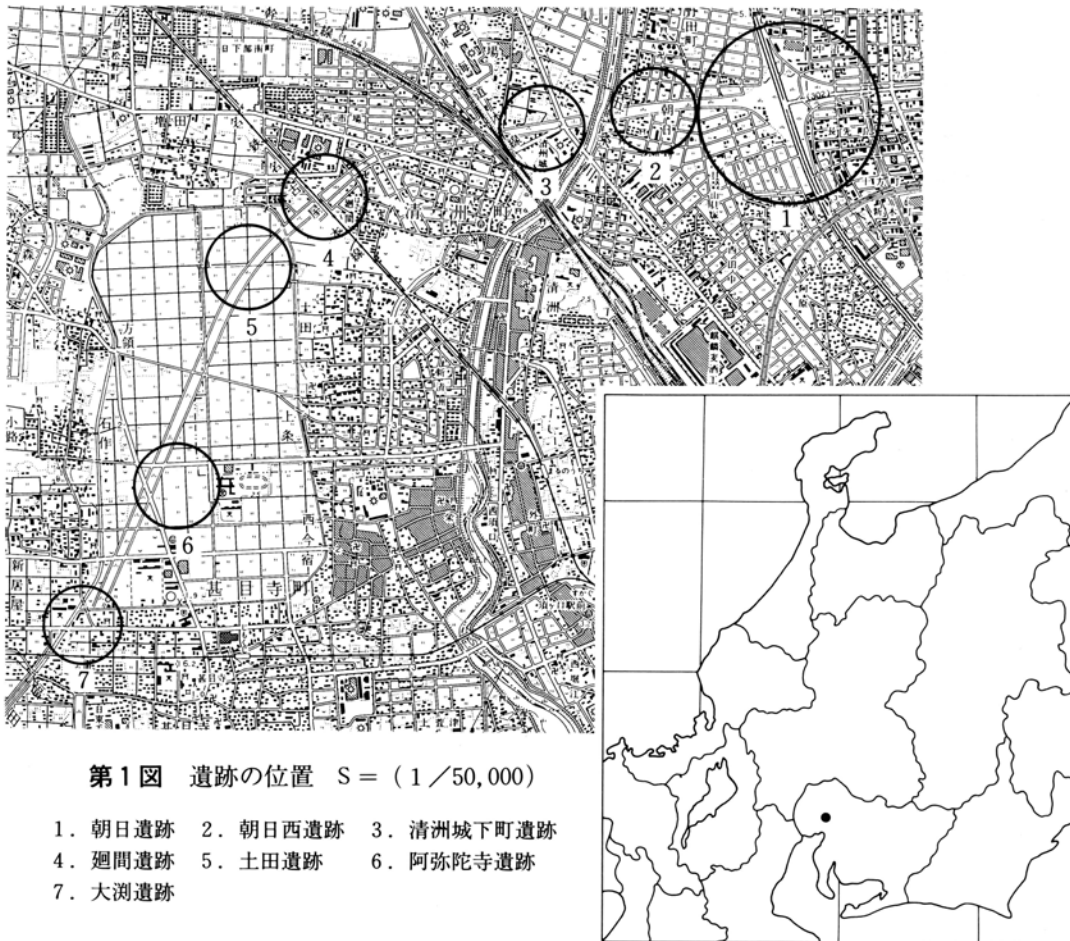
## 第1節 遺跡の立地と清須城の沿革

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南下する五条川の中流域に形成された、標高5 m前後の自然堤防帯に立地し、行政的には、愛知県西春日井郡清洲町の中心部ほぼ全域、及び新川町、春日町の一部をその範囲とする。

こんにち清須城の天守台と本丸推定地とされる部分は清洲公園（清須城故地）として整備されているが、それは調査区から南の方向約 300mの地点に位置している。この本丸推定地には東海道新幹線及びJR東海道本線が横断し、分断されている。なお、清須城の北約5 kmには下津城（稲沢市）、北東7 kmには岩倉城（岩倉市）、北東約10kmには小牧山城（小牧市）、南西約6 kmには那古野城（名古屋市中区）がある。

遺跡基盤は砂層であり、したがって本遺跡は低湿地かつ脆弱な地盤上に構築された遺跡であるといえる。

清須城は、織田信長の居城地として知られているが、城自体は、応永年間（1394～1428）尾張守護職であった斯波氏により築かれたとされており、文明10年（1478）頃には尾張守護所が下津（現稲沢



市下津町) から清須に移され、この地方の中心的都市として機能していたようである。

また、信長以後の豊臣、徳川政権下でも、織田信雄、豊臣秀次、福島正則、松平忠吉らの有力大名が次々と配置され、慶長年間に行われた「清須越」直前には、人口数万を擁した全国屈指の城下町となっていた。

三重の堀に囲まれ、東西約 1.5km、南北約 2.7kmにわたって街づくりがおこわれた清須城下町も、慶長15年(1610)から3年の歳月をかけた「清須越」によって名古屋の地に移り、城下町は解体された。その後は美濃街道沿いの「清須宿」と周囲に点在する農村へと変貌していった。

これまでに知られている清須城下町に関する資料としては、『春日井郡清須村古城絵図』(名古屋市蓬左文庫所蔵・第3図)と伝清須城出土鯨瓦、金箔軒丸瓦・軒平瓦、鳥衾飾瓦などの採集された各種の瓦がある。このほかには清須城を具体的に語る資料はなく、したがって城の遺構および家臣団をはじめとした城下に集まった人々の生活や文化をうかがうことは極めて難しい。(小澤一弘)

## 第2節 調査に至る経緯と調査経過

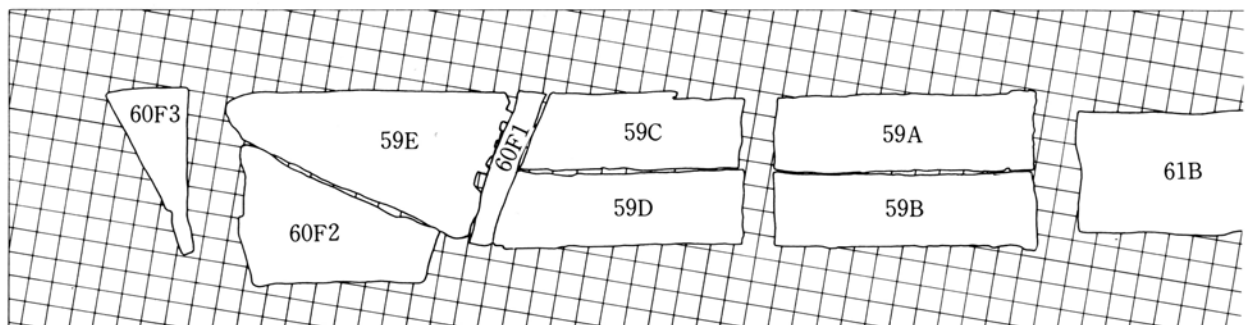
本調査は名古屋市域の周辺部を環状に囲む道路、名古屋環状2号線(一般国道302号)の建設に伴う調査として、昭和58年度から財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部が実施し、昭和60年度以降は同調査部を発展的解消して設立された財団法人愛知県埋蔵文化財センターが担当した。当初、遺跡の範囲と内容が不明瞭であったため、五条川以東を「朝日西遺跡」、以西を「清洲城下町遺跡」として調査を実施した。

その結果、両遺跡共に中世末から近世初頭にかけての「清須城」の遺構、遺物を良好に残していることが確認され、異なった遺跡名を付したものの、こんにちでは両者は「清須城下町」という都市遺跡の各部分に相当するものと理解している。本書は五条川を挟んで西に位置する部分の調査報告である。

調査は、昭和58年7月から9月にかけて実施した試掘調査を契機とし、本調査は昭和59年から昭和61年7月までの「内堀」調査で終了した。発掘調査は、湧水対策としてウエルポイントを設置して進めたので、その結果、堀の内部構造を確認するという成果も得られた。

なお、本報告書作成にかかる整理作業については、平成2年及び3年度の2ヶ年を充てた。

(小澤一弘)



第2図 発掘調査区年度別区割り



### 第3節 調査概要

次章以下において、調査成果を詳述するが、本節でその概要をあらかじめ簡潔に示す。

発掘調査面積は、昭和58年度600㎡、59年度5,222㎡、60年度7,474㎡、61年度3,935㎡で総計17,231㎡に及ぶ。調査区は、各年度毎に排土置き場、土地条件等を勘案して分割し、国土座標を基準にしたグリッドを設定して調査を進めた。調査当時に使用した調査区名、遺構登録番号は本書において使用せず、新遺構番号をつけたが、その対照は巻末の遺構一覧表に記した。

調査の結果、中世の集落跡、戦国時代を中心とした清須城下町に関連する遺構・遺物群、江戸時代の宿場町跡が確認された。このうち、中心となるのは清須城下町に伴う時期で、以下に調査年次ごとの概要を記す。

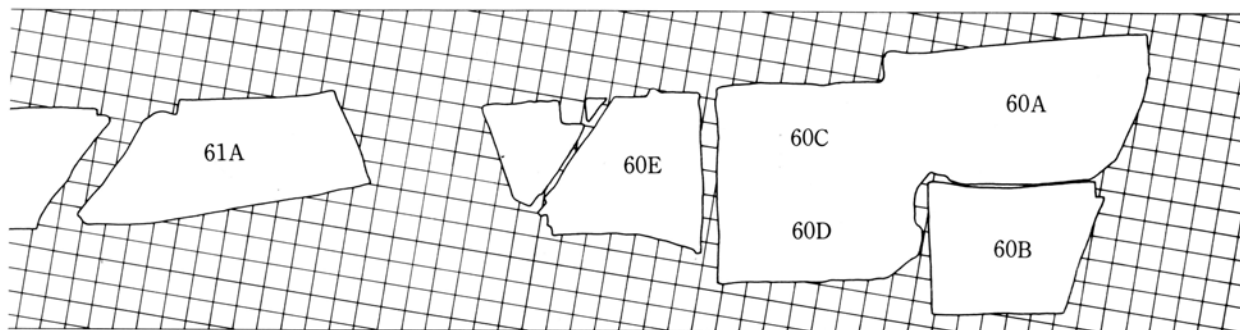
昭和59年度の調査では、幅5m、深さ0.8mの規模でやや東に振れながら南北方向に走り、西岸に木と竹を格子状に組んだ護岸の柵列をもつ溝SD66を検出し、溝の中から陶磁器を中心に、木製品他が多く出土した。

昭和60年度の調査では、幅18m、深さ3mの「中堀」を確認した。「中堀」は、構造的には直接五条川とは接続せず、南（本丸）側に掘削された幅3mの溝SD54が五条川との水路の役割を果たしている。また、「中堀」の底部からは堀内の水位を保つための湧水対策と思われる土坑群が検出された。この「中堀」からは、天正14年の紀年銘瓦が出土した。

昭和61年度の調査では、幅45m、深さ2mの「内堀」を確認した。この「内堀」は自然の沼沢地に手を加えて堀としたもので、『清須村古城絵図』に描かれた「中堀」に向かってのびる南北方向の堀に相当する。「内堀」の底部からは、「中堀」同様の湧水施設として機能していたものと思われる土坑群が検出された。

その他の遺構としては、屋敷地等を区画したと思われる幅2mから5m程度の溝や桶組みの井戸、廃棄土坑等がある。これらの遺構の一部には、最大厚1mにも及ぶ整地層の上面で検出されたものもあり、整地層を基準にして城下町の遺構を層位的に区分することが可能となった。

出土品は陶磁器を中心に、木製品、石製品、金属製品と多種多様なものが大量に出土した。その数量は27ℓ入りコンテナーにして700箱を数える。（小澤一弘）



(S = 1 / 1,600)

第1表 清須城及びその城下町遺跡に関する略年表

西 暦	年 号	城 主	尾 張 ・ 清 須 城 下 町	全 国
(14C)			「神鳳抄」に「清須御厨」の記載（「清須」の初見）	
1400	応永 7		斯波義重尾張守護となり、織田常松を守護代とする	
1416	〃 23		この頃、斯波義重により清須築城か	
1452	享徳 1		連歌師正徹、清須の景観を歌に詠む	
1467	応仁 1		斯波義敏尾張守護となる	応仁の乱はじまる
1475	文明 7		東軍斯波義敏の軍尾張へ下向	
1478	〃 10		守護斯波義廉、尾張にくだる	
			尾張守護所下津より清須に移る（文明8年とする説もあり）	
			清須城の尾張守護代織田敏定を岩倉の織田敏広と美濃の斉藤妙椿が包囲攻撃	
1479	〃 11		清須、岩倉の両織田氏和睦、尾張の分割支配はじまる	
1482	〃 14		清須城内で日蓮宗法論おこなわれる	
1485	〃 17		万里集九 織田敏定邸で犬追物を見る	
1522	大永 2		駿河の今川氏親那古野城を築き、氏豊を置く	
1532	天文 1		織田信秀、清須・小田井の織田氏とあらそう	
1534	〃 3		織田信長生まれる	
1537	〃 6		豊臣秀吉生まれる	
1542	〃 11		徳川家康生まれる	
1543	〃 12			種子島に鉄砲が伝わる キリスト教伝来
1549	〃 18			
1551	〃 20		織田信秀没	
1555	弘治 1	織田信長	織田守護代家滅亡、信長清須城に入る	
1557	〃 3		織田信長、弟信行を清須城内で殺す	
1558	永禄 1		信長、岩倉織田氏への攻略はじめる	
			信長、東美濃攻略のため小牧山に築城	
1559	〃 2		信長、岩倉の織田信賢を下し、尾張の実質支配を完成	
1560	〃 3		桶狭間の戦、今川義元敗死	
1561	〃 4		信長、尾張守護斯波義銀を追放	
1562	〃 5		信長、家康と同盟	
1563	〃 6		信長、小牧山へ居城を移す（小牧越）	
1567	〃 10		信長、岐阜へ居城を移す	美濃加納に楽市楽座令
1568	〃 11		信長、將軍足利義昭を奉じ入京	
1573	天正 1			室町幕府滅亡
1574	〃 2		織田信忠、尾張の支配権を与えられる	
1575	〃 3	(信忠)	信忠、岐阜城主となる	長篠の戦
1576	〃 4		信忠、尾張国中の道路幅を定め整備	信長安土築城
1582	〃 10	(信雄)	清須会議の結果、織田信雄が尾張、伊勢、伊賀領主となる	本能寺の変で信長、信忠没
1584	〃 12		小牧、長久手の戦	
1585	〃 13		天正大地震、岡崎城等崩壊（天正13年11月29日）	秀吉、関白となる

西 暦	年 号	城 主	尾 張 ・ 清 須 城 下 町	全 国	
1586	天正14	織田信雄	木曾川大洪水 この頃、信雄居城を清須に移す 「天正十四」銘丸瓦	秀吉天下統一	
1590	〃 18	豊臣秀次	信雄が追放され、豊臣秀次が尾張領主となる		
1591	〃 19		秀次、尾張の検地を実施		
1593	文禄2		秀吉、尾張の再検地を実施 清須町人の家数調査実施（家数 2,729軒） 清須町周辺及び津島、熱田までの道路ぞいの荒地を新田開発 「文禄二年」銘碗		
1594	〃 3		清須来住の農民を帰郷させる		
1595	〃 4	福島正則	秀吉、秀次を追放し、福島正則を清須へ転封 「慶長四年」銘卒塔婆		
1600	慶長5	松平忠吉	家康、関ヶ原の合戦後、四男松平忠吉を清須へ転封		関ヶ原の戦
1601	〃 6	徳川義直	松平忠吉死去に伴い徳川義直（家康九男）が甲府より転封 朝鮮通信使が清須を通過、その繁栄を記録する 伊奈忠次尾張の検地を実施、尾張国洪水 徳川義直尾張に入る。家康名古屋築城を決定 名古屋築城（清須越はじまる） 堀川の開削工事はじまる。庄内川洪水 清須から藩士、町人、寺社などの移住はじまる		東海道に伝馬制を制定 徳川幕府成立
1603	〃 8				
1607	〃 12				
1608	〃 13				
1609	〃 14				
1610	〃 15				
1613	〃 18		清須越ほぼ終了する		大坂夏の陣（豊臣氏滅亡）
1614	〃 19		五条川洪水		
1615	元和1				
1616	〃 2		徳川義直駿府より入国 清須に伝馬所置かれる		
1624	寛永1		久証寺甚目寺村よりうつされる		島原の乱
1637	〃 14				
1646	正保3		清須新田村の最終的な検地おこなわれる		
1662	寛文2		尾張の大地震		
1668	〃 8		桑名町の清須宿、火災のため神明町に移転		
1669	〃 9		五条川落合付近瀬替え		
1707	宝永4		天野信景「総社参詣記」に清須城をしのぶ		
1752	宝暦2		清須宿の町幅を広げ裏道をつくる		
1757	〃 7		五条川大洪水、清須地内堤防三ヶ所決潰		
1794	寛政6		五条川瀬替普請		
1867	慶応3			大政奉還	
1886	明治19		武豊線、東海道線（熱田―一宮）開通、清洲駅設置		
1891	〃 24		濃尾大震災により建物の大半が倒壊		
1922	大正11		清洲公園開設		

（『清須－織豊期の城と都市－資料編』より転載）

1. 1. 1.  
1. 1. 1.  
1. 1. 1.

第 3 図 清須村古城絵図（蓬左文庫蔵）

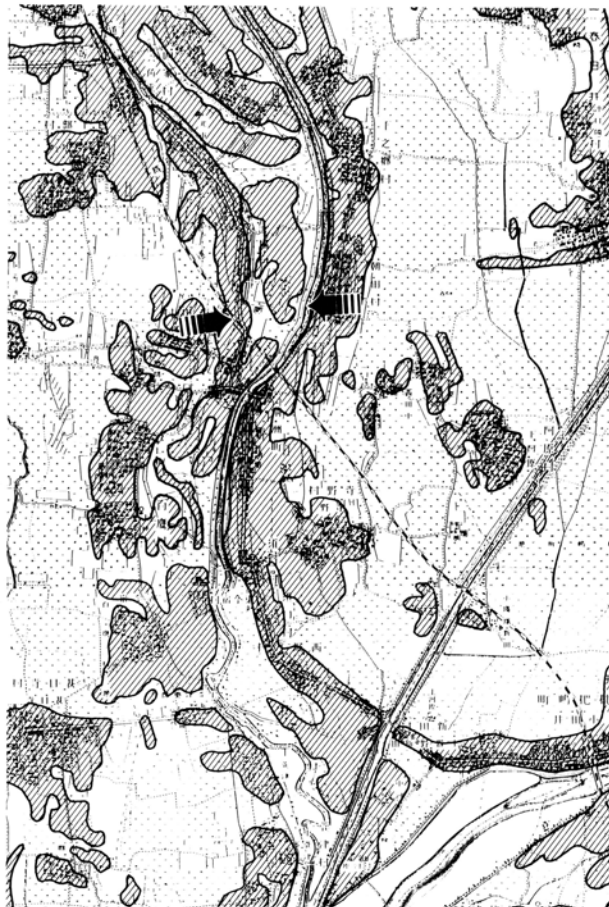
## 第Ⅱ章 遺構

### 第1節 基本層序と遺構の概要

#### 1. 遺構の立地

清洲城下町遺跡は、濃尾平野の南東部に位置し、東西約 1.5km、南北 2.7kmに及ぶ広大な遺跡の範囲は現清洲町域の大半をしめている。戦国時代の旧地表でみると、海拔 2～4 mをはかる低平な地形に立地し、見渡すかぎり起伏に乏しい平坦な景観を見せている。しかしながら、広域な遺跡の範囲内には、木曾川の分流たる旧五条川が形成した自然堤防や後背湿地、さらには旧河床部を含み込んで、微地形的には実に変化に富んだ地形となっている。調査地点によってまったく異なる地形・土層がみられるのも、主要にはこの点にかかわる。したがって、こうした自然立地に展開された都市建設は、一面では自然と人々との厳しい切り結びをも物語っているのである。

本報告の対象となる環状2号線地点は、清須城の北側、東西 460mの長きにわたる調査区で、中央に幅 115mの後背湿地(旧河床部か)があり、その両側に自然堤防が展開する。二つの自然堤防は、いずれも南北に細長く伸び、西側の自然堤防は調査区の西端で西に広がる後背湿地に接続し、東側の自然堤防の東端には五条川が接して南流している。これらの自然堤防の形成は意外に新しく、古墳時



◀ 周辺の自然堤防と調査位置  
(地形図は明治24年測量)

▼ 調査区現況位置図 (S = 1/10,000)



第4図 遺跡の自然立地

代以降に始まり中世初頭に至ってようやく安定したものと思われる。この点では、古墳時代中期以降の遺物が出土し古代以降の遺構が検出される。五条川左岸の自然堤防とは形成の様相を若干異にしている。

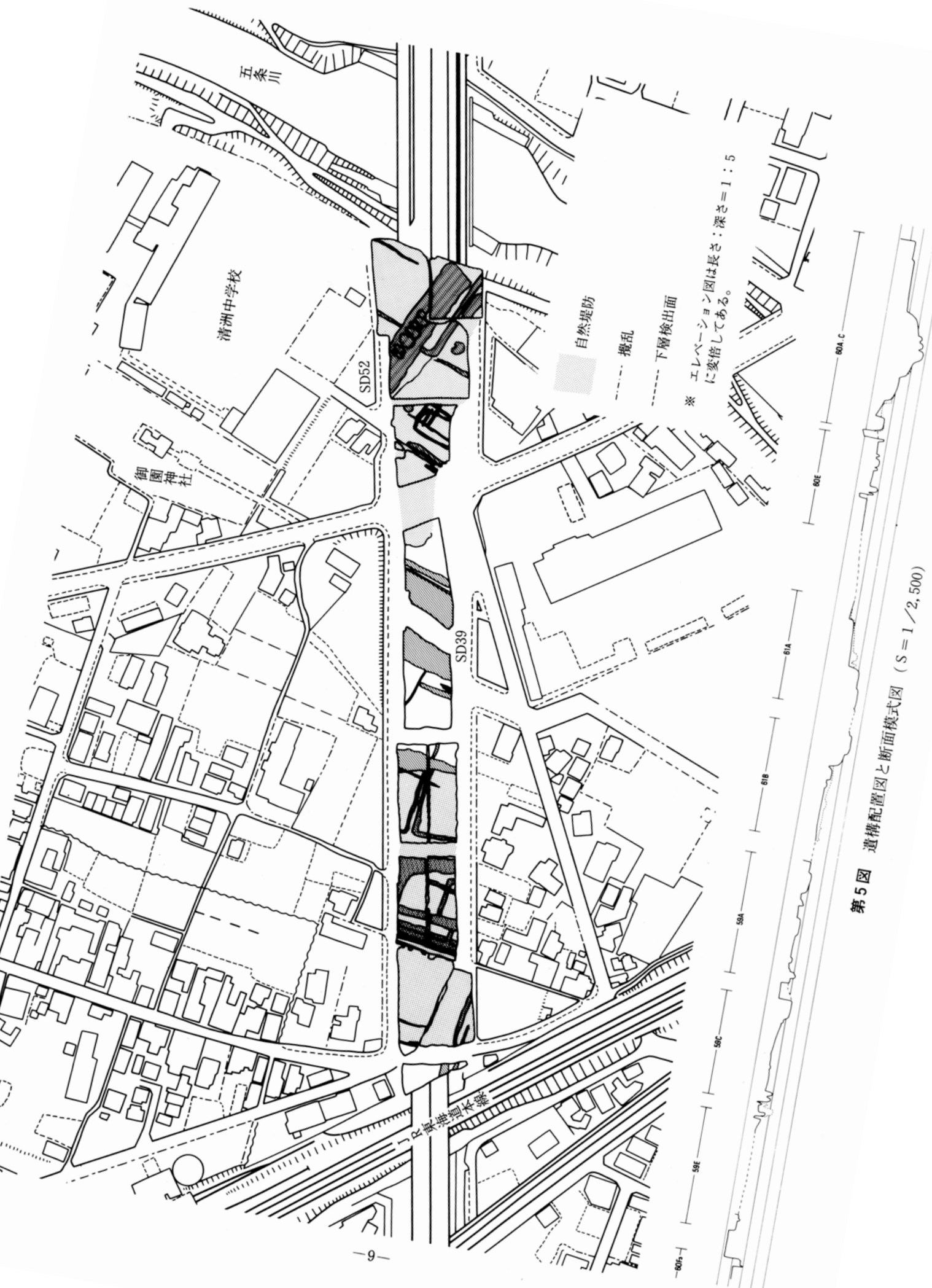
調査区域内の旧土地利用は水田・畑・宅地・道路等であったが、環状2号線用地となって以降の攪乱・盛土が激しく、包含層などの遺存状態が著しく悪かった。このため、表土掘削した段階で遺構が露出する地点が多く、表土以下の層序は不明確なものとなっている。遺構は、自然堤防上では黄褐色砂質土層をベースとしていて、後背湿地では砂層もしくはシルト層をベースとする。ただし、後述するように、城下町期後期の遺跡は、地点によってはベースの上に褐色砂質土を主体とする盛土あるいは埋め立てによる整地層を介在させて掘り込まれている。

検出された遺構には、掘立柱建物・柵列・堀・溝・井戸・土坑などがあり、それらは、時代的に概ね3期に区分される。いま、それらを便宜的にⅠ～Ⅲ期とすると、Ⅰ期は13～14世紀の中世の時期であり、Ⅱ期は15世紀末～17世紀初頭、Ⅲ期は17世紀中葉～19世紀後半の時期となる。なかでもⅡ期は、戦国動乱から近世初頭にいたる日本の歴史における一大変革期でもあり、清須にとっては、守護所が設置されやがては尾張の領主の城と町が築かれるという、画期をなす時である。その意味で城下町期とも呼びうる時期であり、遺跡の名称も実にこのことに関わっている。またⅡ期は、遺構群のあり方からさらに二つの相前後する小期に区分することができ、層位上も先述したごとく整地層の上下によって分かつことができる。

## 2. 各調査区の概要

各区の検出遺構の概要は、以下のごとくである。

- 60F3区 環状2号線地点の西端に位置し、近世美濃街道と東海道線との間の小三角地帯である。地形的には後背湿地に立地し、上面ではⅢ期に属する畠とおぼしき畝状の遺構が検出されている。畝状遺構の軸線は、他地形の遺構のそれとは異なり美濃街道と直交していて、街道との有機的一体性が強く認められる。下位ではシルト・粘質土の水平堆積した湿地性の互層がみられ、Ⅱ期以前の遺構の有無については判然としなかった。
- 59F・60F1区 西側の自然堤防の西半に位置し、北側の59F区はことに近年の攪乱が激しく、遺構の残存状態は極めて悪い。遺構では、東西に走る溝や掘立柱の建物1棟、井戸などがある。また59F区の西端では西側の後背湿地への漸移面が認められた。これらの遺構の大半はⅡ期に属し、他にⅢ期のものもあるが、Ⅰ期のものは希薄である。
- 60F2区 59F区の東側に接して南北方向に走る道路下の調査区で、道路とほぼ同一の方位をもつ溝が数条検出されている。時期もⅠ期からⅢ期にわたっていて、ここに中世以来の主要な軸線＝地割り線が存在することを想定させる。
- 59C・D区 西側の自然堤防のほぼ中央に位置し、黄褐色砂質土の整地層を挟んで上下二つの検出面がある。また上面では部分的に噴砂とおぼしき黄白色砂が部分的に認められ、Ⅱ一後期の遺構はそれを切り込んでつくられている。上面では、Ⅱ一後期の溝、掘立柱建物1棟、井戸などがあり、下面ではⅠ期～Ⅱ一前期の溝、井戸などが検出されている。溝は調査区西端に集中して存在し、



第5図 遺構配置図と断面模式図 (S=1/2,500)

60F2 区の溝と併走している。また、この溝に沿って検出されたⅡ一前期に属する4基の井戸は、ほぼ等間隔をおいて南北方向に並んでおり、留意される。

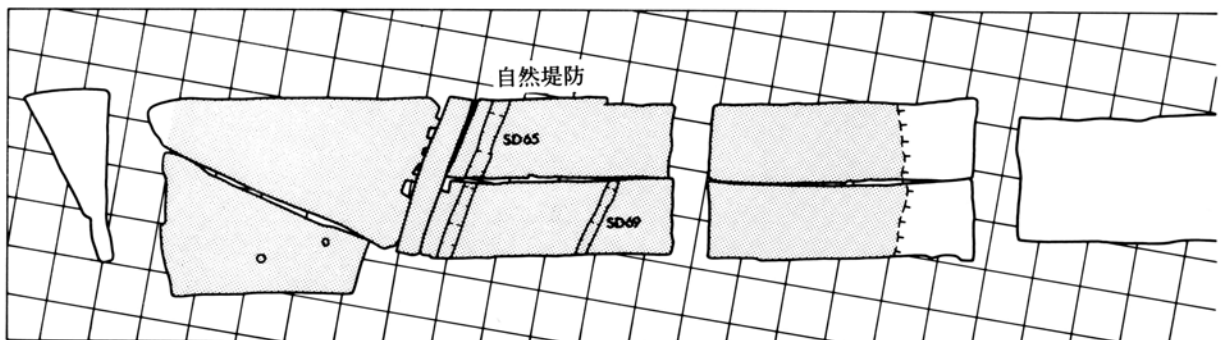
59A・B区 西側の自然堤防の東端に位置し、調査区の東側では旧河床部かと思われる後背湿地へと移り変わっている。攪乱が激しく、一面の調査となっているが、セクションで見ると一部に整地層の灰(黄)褐色砂質土層が認められ、この地区においても盛土による整地がなされていることが想定される。検出された遺構は、Ⅱ期に属するものがほとんどで、掘立柱建物1棟、L字状に屈曲する溝、井戸などがある。また、Ⅲ期の溝や井戸などもあるが、Ⅰ期の遺構はない。

61B・A区 旧河床部と思われる後背湿地に位置し、60A区の東端は東側の自然堤防にかかる。Ⅰ期の段階では沼沢地となっていたと思われ、暗灰褐色粘質土や粗砂などの互層となっていて、これらの土層から多くの遺物が出土している。Ⅰ期の遺構には、掘立柱建物や溝などがあり、東側の自然堤防上に集中している。Ⅱ一前期のものは希薄であり、後期に至るとこの窪地を利用して東西両側を埋め立て、幅45mの内堀を築造している。

60E区 東側の自然堤防の西半に位置し、攪乱が激しかったため一面調査となったが、セクションからは厚さ40～50cmほどの整地層がよみとれた。遺構は、Ⅰ期からⅡ期にかけての溝や柵列、井戸などがある。とりわけⅡ一前期に属する溝群は、溝自体の規模が小さいばかりでなく、溝によって区画される空間も小規模であること、短期間内での作り替えが激しいなど、後期の溝のあり方と好対照を示している。

60CD・AB区 環状2号線地点のうち最も東寄りの調査区で、自然堤防上に展開するⅠ期～Ⅱ期の遺構が検出されている。60CD区では盛土による整地層がみとめられ、上下二面の調査となっているが、A区では整地層そのものがなかった。上面ではⅡ一後期の遺構があり、調査区を東西に斜めに横断するかたちで検出された幅17mほどの中堀を中心に、建物の基礎地業と思われる土坑群や溝などがある。中堀は、旧河床部や後背湿地を利用するのではなく、自然堤防を新たに開削してつくられていること、五条川と直接につながらず、堤塘が存在していること、また整地層の有無は中堀の内か外かにかかわっていることなど、注目すべき事実が明らかとなった。下面では、掘立柱建物や柵列、あるいは井戸などが検出されている。Ⅰ期の井戸はこの調査区に集中している。

(遠藤才文)



第6図 中世の遺構配置図

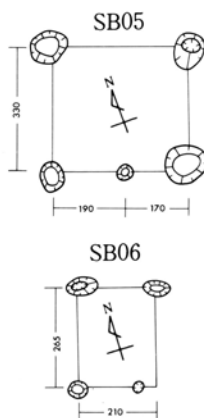


## 第2節 中世の遺構

中世の遺構には、掘立柱建物や溝、井戸、土坑などがある。分布を見ると、西側の自然堤防上では全体に希薄で、溝が検出されている程度であり、主要な遺構は専ら東側の自然堤防上に展開している。しかも、それらは東西の自然堤防によって地割り軸線の方位が異なっている。西側ではN—7.5°—E前後を、東側ではN—18°—E前後を示している。このことは、相似た自然堤防の形状を前提に考えたとき、自然立地に基づく差異というよりは、むしろ遺構をうみだした主体が両者によって異なることを示唆しているといえる。ちなみに五条川を挟んで対岸に所在する朝日西遺跡の中世遺構の軸線がN—18°—E前後を示していて、東側の自然堤防上の遺構群と同様のあり方をとっていることは、この点を考える上で注目される。

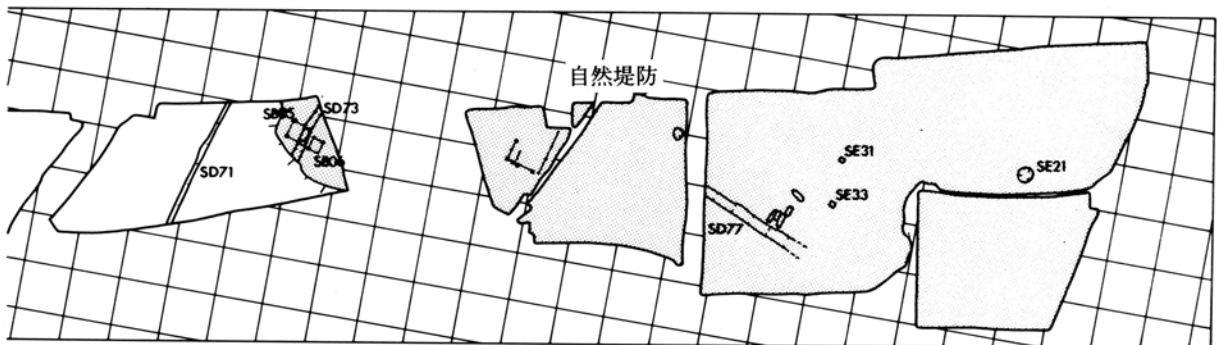
### 1. 掘立柱建物

掘立柱建物は、61A区東端——東側の自然堤防の西端——で2棟（SB05、SB06）検出されている。この他にも、60E区で検出されたSK165、SK170、P265を結ぶL字状に並ぶ柱穴列（第7図）は、北と東側の対応する柱穴列が検出されていないものの、掘立柱建物となる可能性がある。この可能性を認めれば、建物は3間（5.8m）×2間（4.2m）の東西棟建物で、梁間の柱間寸法は2.1mであるが、桁行は1.3m、1.3m、3.2mと等間隔にはなっていない。あるいは南西隅に出入口があったのかもしれない。



SB05（第7図） 1間（3.3m）×2間（3.6m）の小規模な南北棟建物で、梁間の柱間寸法は1.8mを測る。東に隣接するSB06とは1.5mとその間隔が狭く、またSD73の埋没後に立てられていることなどを考慮すれば、両者の並存は考えがたく、SB06廃絶後の建物と思われる。建物方位はN—17°—Eを示す。

SB06（第7図） 1間×1間の小規模な建物で、柱間寸法は南北で2.65m、東西で2.1mを測る。ただし、建物の東側は攪乱等で判然としないが、なお東方へ延びていたものと思われ、梁間1間の東西棟建物であろう。建物方位は、N—15°—Eを示す。



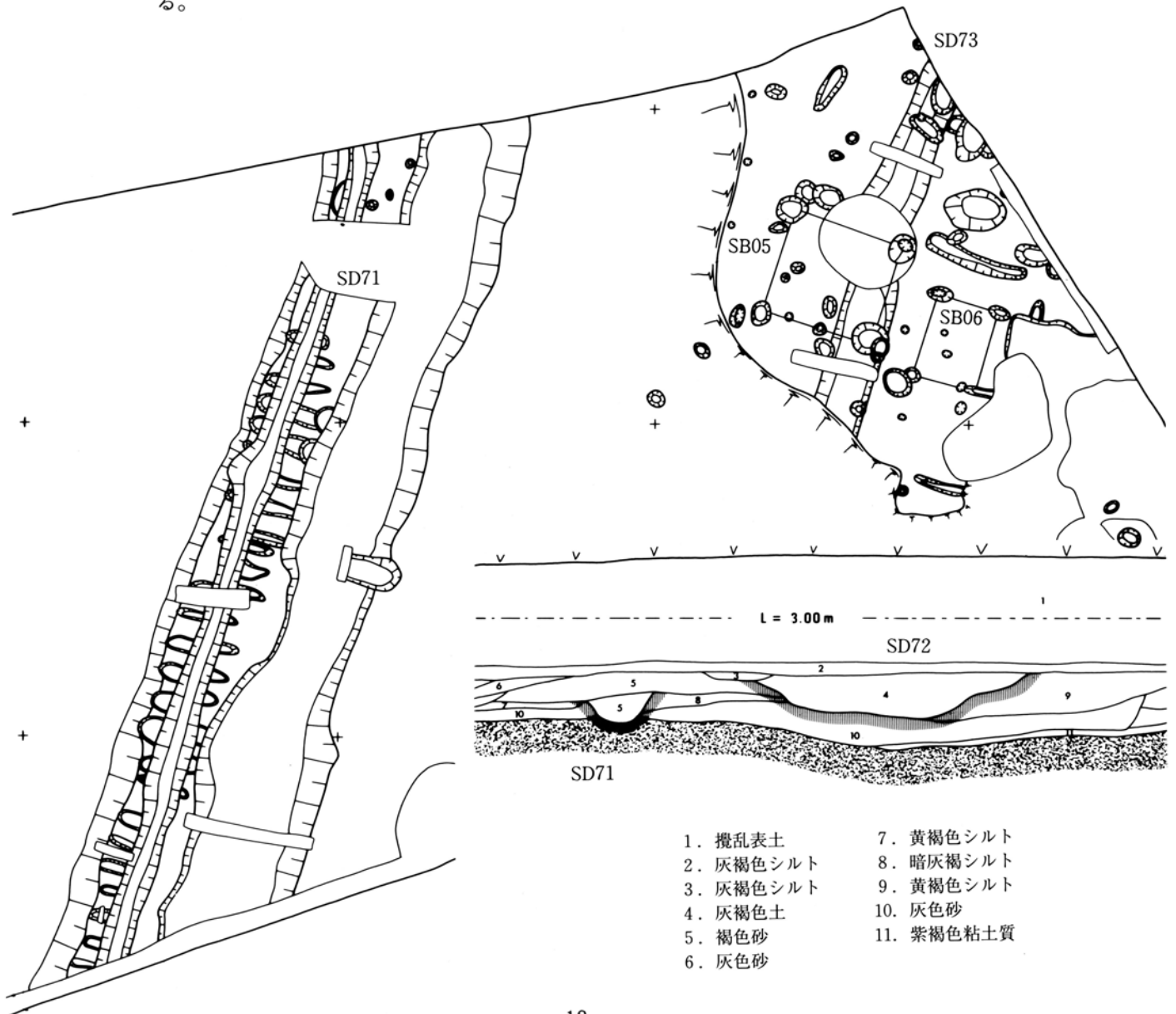
(S = 1/1,600)

## 2. 溝

溝は、西側の自然堤防上に2条（SD65・SD69）、東側の自然堤防上に2条（SD71・SD73）存在する。すべて素掘りで護岸施設を伴うものは存在しない。西側の2条（SD65・SD69）の方位はN—7.5°—Eとこれに直交する方位、東側の2条（SD71・SD73）の方位はN—18°—Eを示している。これらの溝は自然堤防に影響されていない方位で設定されている。

SD65（第11図） 59CD区の西端部を南北に走る溝で、方位はN—7.5°—E。幅 1.5m～2.1m、深さ 1.0m～1.4mを測る。土層堆積から見ると平行して走るSD13・SD14・SD66に切られており、掘り直しが行われている。SD13・SD14はⅡ—後期、SD66はⅡ—前期に属していることなどから、この地割りが近世まで残っている。西側が自然堤（微地形）の縁に当たっているが、方向は地形に影響されていない。出土遺物から見て13世紀から14世紀以降の時期である。

SD69（第11図） 59D区の中央部を南北に走り、幅 2.5m前後を測る溝。方位はN—7.5°—Eで、SD65とは30m隔てて平行している。59C区では検出できず、北端部と南端部の状況は明らかではない。SD69に直交する溝 SD68（Ⅱ—前期）に切られており、Ⅰ期に属すると考えられる。



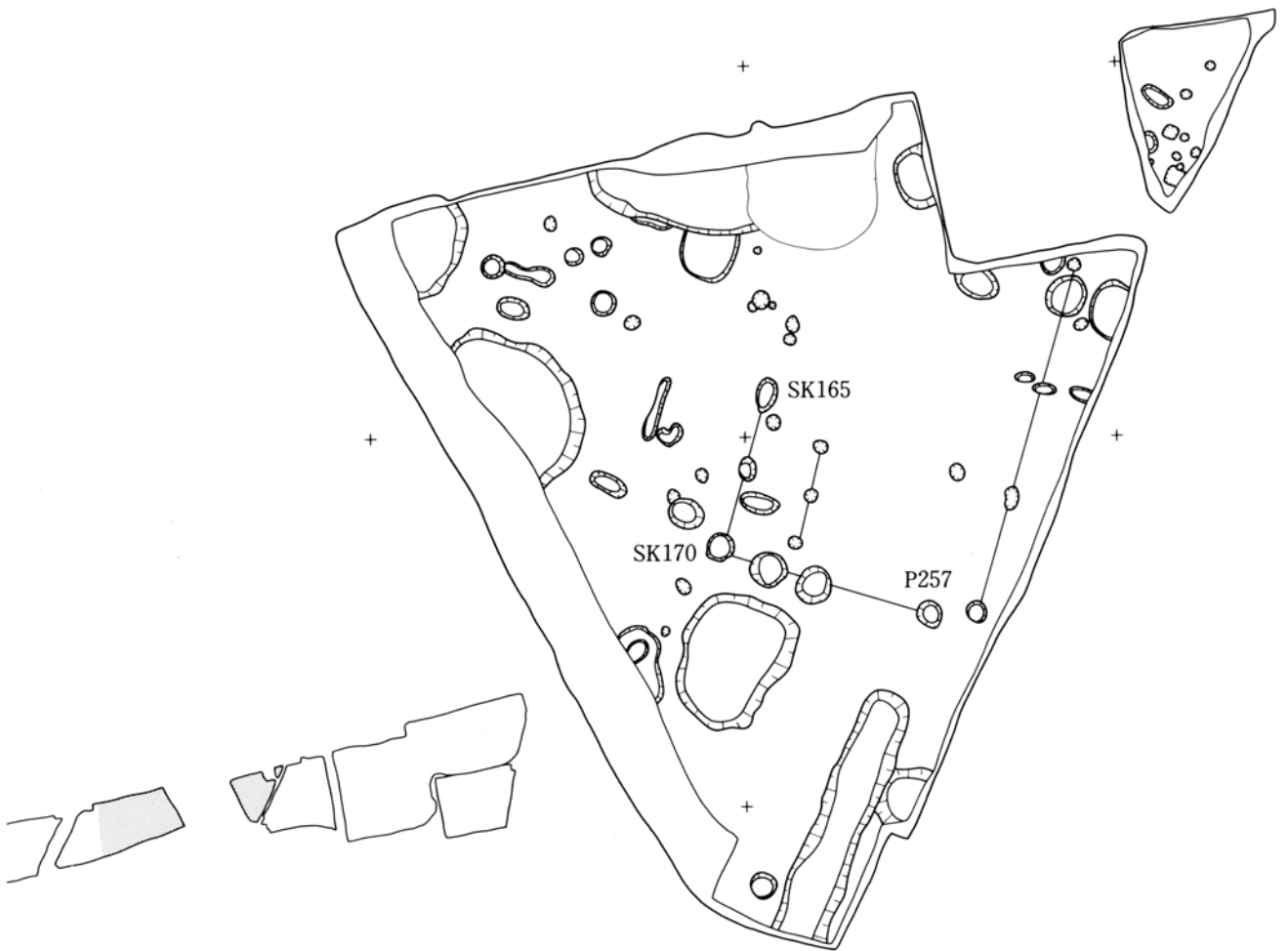
SD71 (第7図) 61A区の中央部に所在するN—18°—Eの方位で走る溝。幅1.0m、深さ0.5mを測り、埋土は褐色砂が堆積する。SD71が埋没した後の整地層(褐色砂)の上面からⅡ—前期に属する溝SD72が掘削されており、Ⅰ期に属すると考えられる。溝の両岸に溝肩に接する形でピット列が並んでおり、土留めの木柵の柱列と考えられる。溝は東の自然堤防の西縁の位置に当たっている。

SD73 (第7図) 61A区の東北部で検出された溝で幅0.8mを測る。N—21°—Eの方位で走っているが、南部では検出面が低くなり、状況は明らかにできない。SD05に切られており、Ⅰ期も幾つかの段階に分かれることが判明した。

### 3. 井戸

井戸は内部施設によって分類が可能であり、①方形の木組と曲物を組み合わせたものと、②方形の木組のみを設けるものに分けられる。井戸は通常、廃棄の際に内部構造物を抜き取る場合があるが、この時期にはそういった確実な事例は存在しない。

SE33 (第8図) 60C区に所在する井戸でSE15に切られる。径約3.2mの円形の掘り形の中央

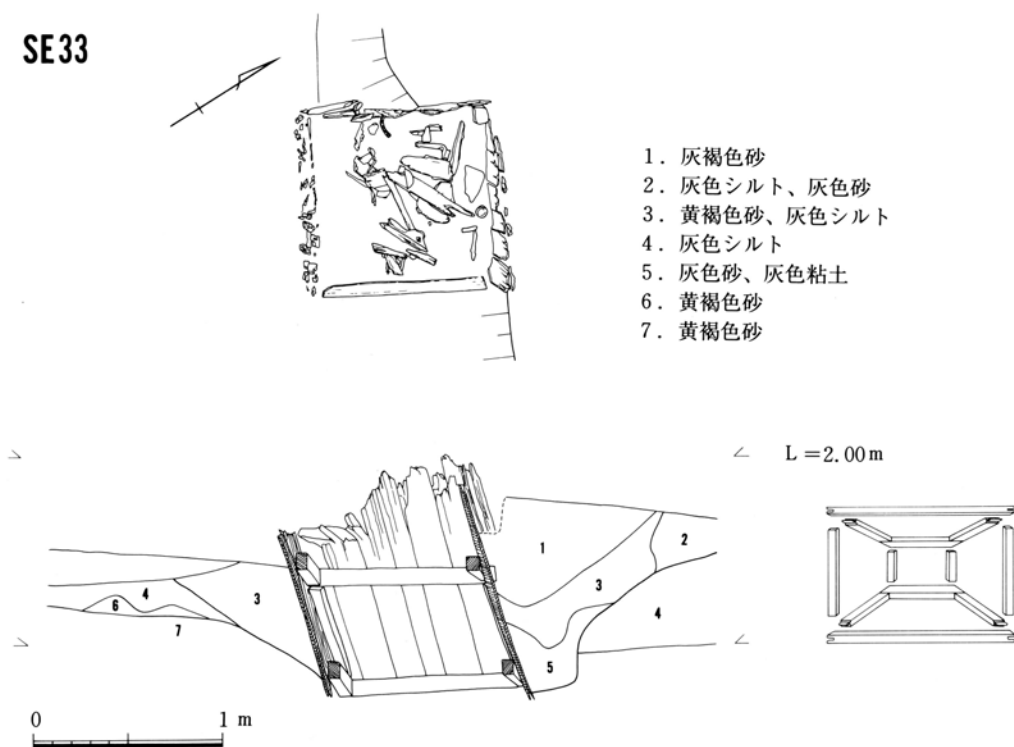


第7図 建物遺構図(1) (S=1/100)

に方形の木組が存在する。最下部に曲物は設置されていない。方形の木組は、横棧を組んだ後にその周囲に縦板を立てている。横棧は、ほぞ加工を施した角材を「三枚組手接」で接合して一辺約 1.0m の方形に組んで、上下 2 段に配置している。下段の横棧の四隅に隅柱を設置し、その上に上段の横棧を置く。隅柱は特別なほぞ加工を加えず横棧の四隅に乗せているだけである。縦板は各辺に 6～8 枚の板を並べ、上端部が欠損しており残存長 1.2m を測る。井戸枠の内部には木材や石材が投棄されている。

SE21 (第 9 図) 60A区に存在する深さ 1.5m の井戸で、径約 3.4m の円形の掘り形の中央に方形の木組が設置される。最下部に曲物が 1 段存在している。方形の木組は、SE33 と同様、横棧を組んだ後にその周囲に縦板を立てている。横棧は、先端を加工した角材を「相欠組手接」で接合して一辺約 0.6m の方形に組んで、上下 3 段に配置している。下位の横棧の四隅に特別なほぞ加工を加えていない隅柱を設置し、その上に上位の横棧を置く。縦板は長さ 1.1m を測る。

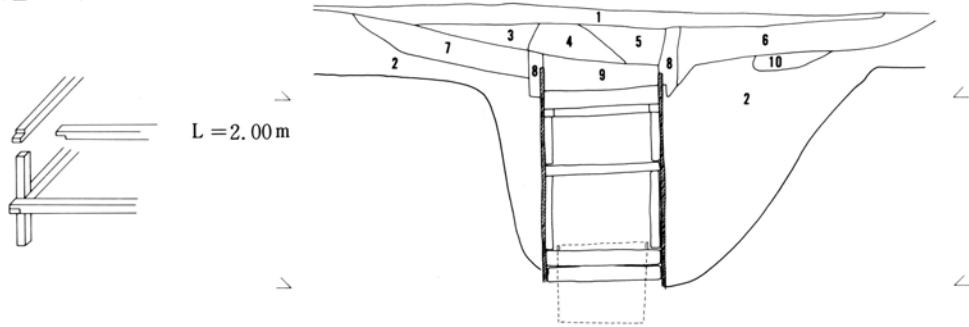
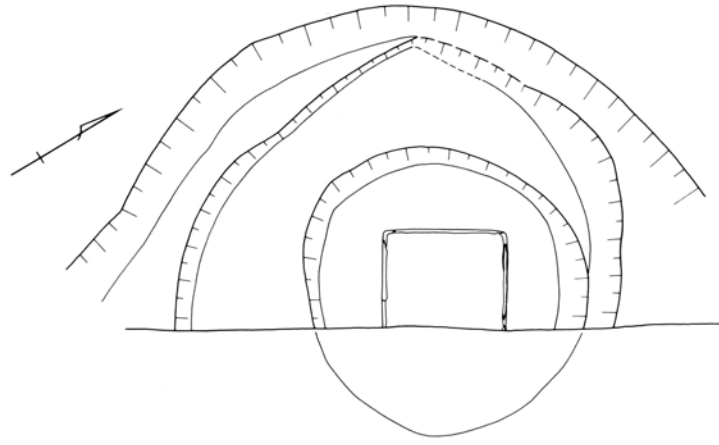
SE31 (第 9 図) 60C区で検出された井戸。長径約 3.3m の楕円形の掘り形の中央に方形の木組が存在し、最下部に曲物が 1 段置かれている。方形の木組は上部が破損して不明な部分があるが、残存した部分について記すと、下端部は幅広の横板を方形に組み、その上に角材による横棧を置き、周囲に縦板を並べる構造である。横板は幅 0.4m、長さ 0.8m の材であり「相欠組手接」で接合している。横棧は、先端にほぞ加工を施した角材を「三枚組手接」で接合している。横棧の四隅の上面に隅柱が 2 本残存しており、横棧は上部にも存在していたようである。縦板は横板の下端から設置され、長さは 0.7m 以上を測る。最下部の曲物は径 0.4m 強、高さ 0.3m で、一重巻であるが、外側にも曲物の側板が残る。(遠藤才文・鈴木正貴)



第 8 図 井戸実測図 (1)

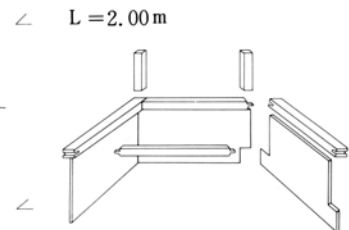
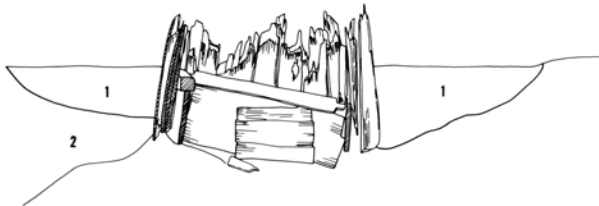
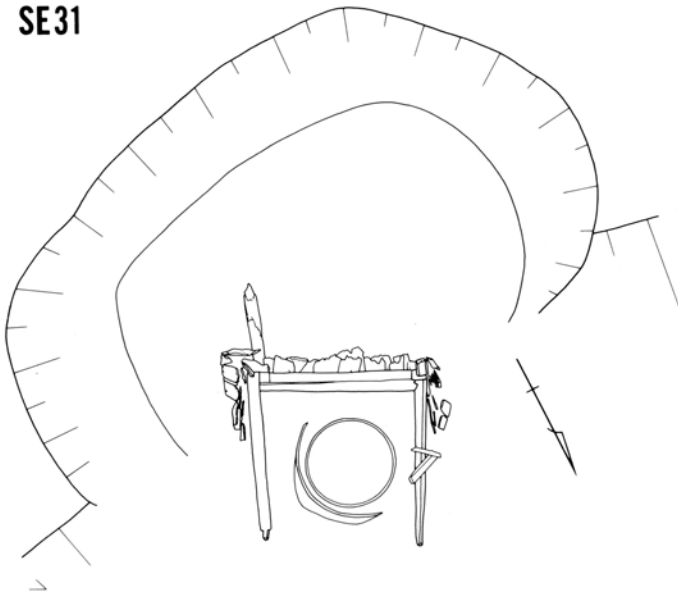
SE21

1. 黄灰色砂質土
2. 黄灰色砂
3. 黄灰色砂質土
4. 灰褐色砂
5. 灰色シルト
6. 灰色シルト
7. 黄褐色砂
8. 灰色シルト
9. 灰色シルト
10. 灰色シルト

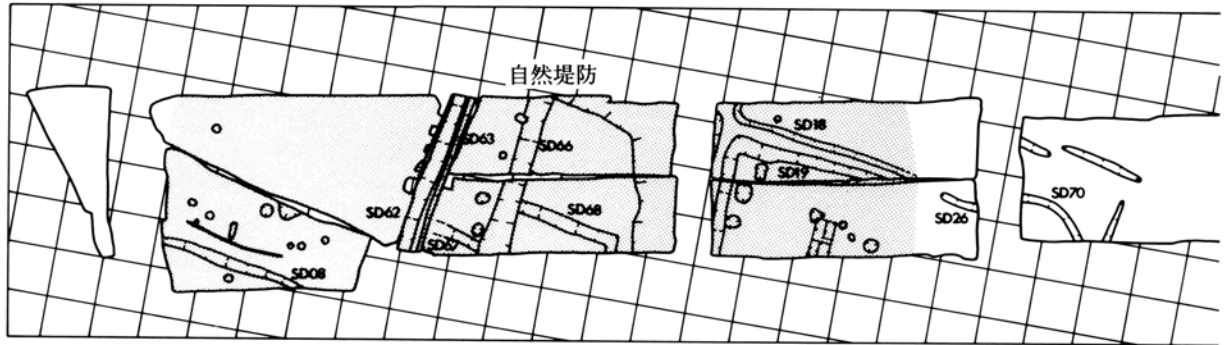


SE31

1. 灰色粘質土
2. 青灰色粘土



第9図 井戸実測図 (2)



第10図 城下町前期遺構配置図

### 第3節 城下町前期の遺構

城下町前期の遺構には、掘立柱建物・溝・井戸・土坑などがある。主要な遺構の方位は中世と同様である。この時期の自然地形は中世と同様で、西側の自然堤防と東側の自然堤防が存在し、遺構はこの2つの自然堤防上に展開している。更に調査区の中央部に広がる低地部分にも遺構が西側の自然堤防から拡大しており、沼沢地の乾燥化がこの時期に進んできたことがいえよう。西側では、自然堤防の中央に側溝を持つ道路に沿って井戸が並んでおり、一本街村状の短冊型地割の屋敷が展開している。一本街村状の屋敷の東には、溝によって区画されたやや大きめの方形の屋敷が幾つか存在する。一方、東側では、小規模な区画溝を何回か掘り返した状態が確認され、可変的な屋敷が広がっている。御園神社の前に位置していることから、門前に広がっていた町屋の遺構群と推定される。

#### 1. 溝

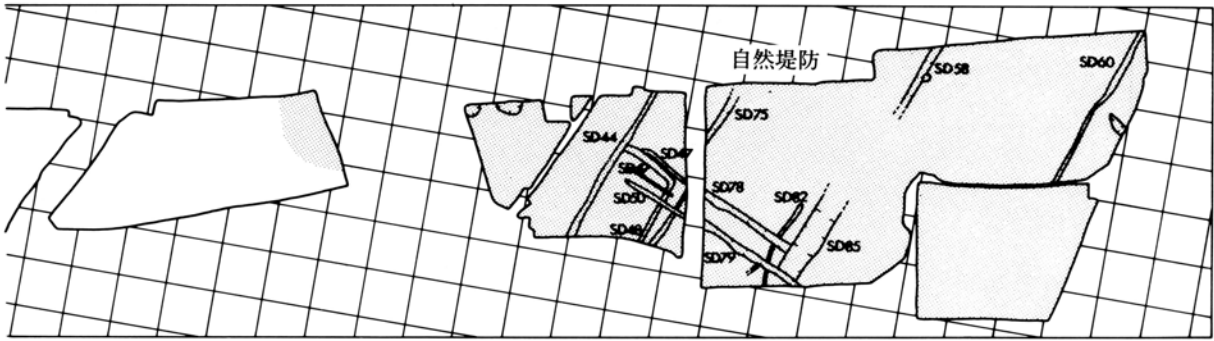
溝は遺構の主体を成すもので、その規模は多種多様である。護岸施設として「しがらみ」を施したSD68を除くすべての溝は、護岸施設を伴わない素掘りである。西側の自然堤防上の溝の方位はN—7.5°—E、東側の自然堤防上の溝の方位はN—18°—Eに規制されている。溝の機能は屋敷や領域を区画する機能の他、用水・排水に利用されたと考えられる。

SD08 60F1区の南部を東西に走る溝で、幅 2.0m～2.2mを測る。西端はやや蛇行する。ここからは土師器皿などが多量に出土した。

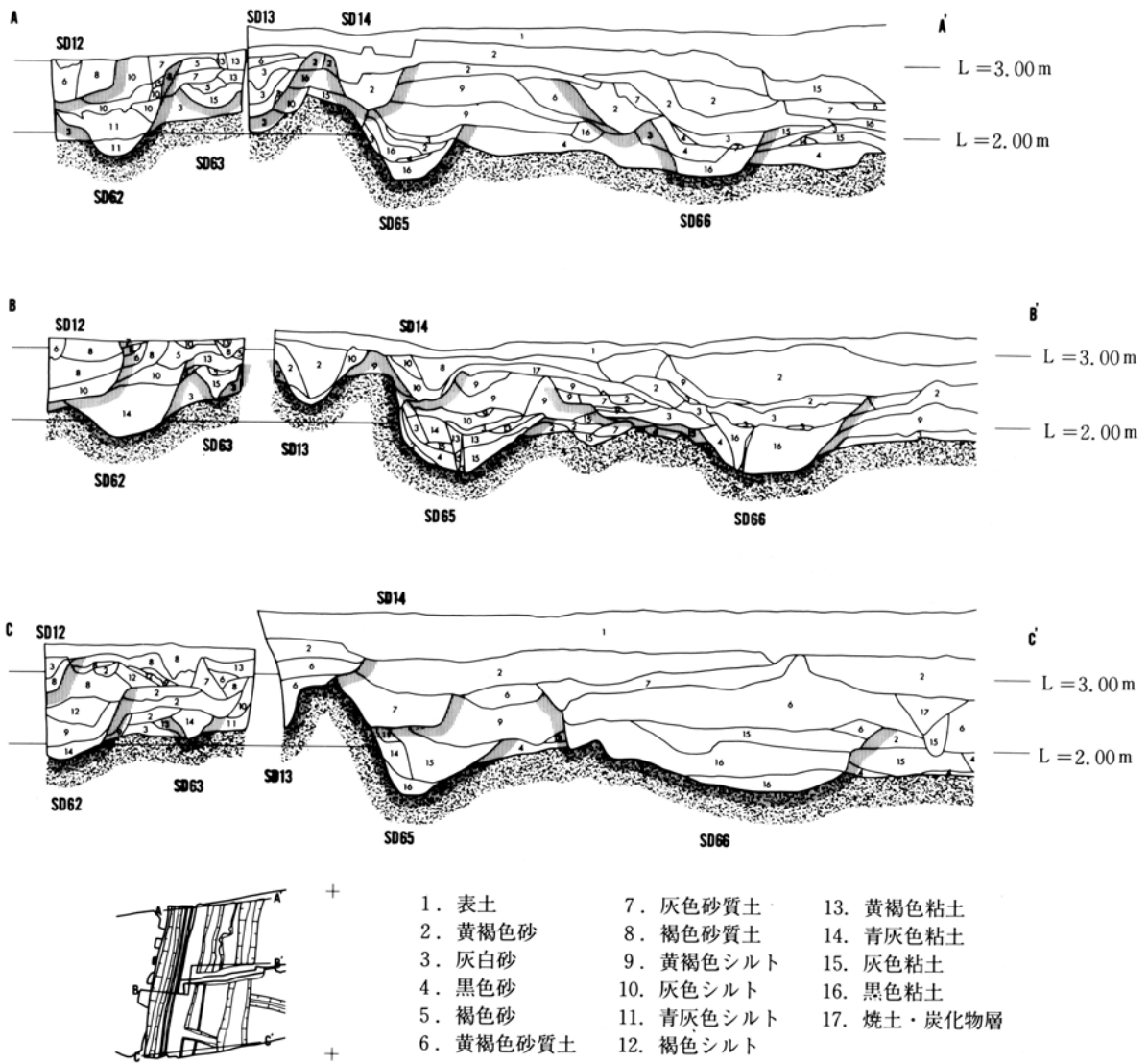
SD62 (第11図) 60F2区を南北に走る溝で、SD12に切られSD63を切る。幅1.5m、深さ1.3m。

SD63 (第11図) 60F2区を南北に走る溝で、SD62に切られながら併走する。

SD66 (第11図) 59CD区の西端部を南北に走る溝で、方位はN—7.5°—E。幅 5.3m、深さ 1.5mを測る。溝の西側斜面にテラスを持ち、平行するSD65を切る。下層は滞水性を帯びており、木製品などが多量に出土した。特に、溝の南部・西側斜面からは柾木とその中に平行して配置された角材などが出土している(第13図)。これは連子窓を持つ塀などが倒壊し、溝内に埋もれたものと思われる。また、溝の北部・西側斜面でも加工材が一定の配列を持って出土しており(第13図)、建築物の基礎の一部と考えられる。このことから、SD66の西側には板塀かそれに



(S = 1 / 1,250)



第11図 溝のセクション図 (1) (S = 1 / 100)

類する施設が溝に平行して存在した可能性が高い。

SD68 (第13図) 59D区を東西に走る溝で、幅 3.0m ~ 3.5m を測る。同時に存在する SD66 に直交しており、東端で南に屈曲している。溝の南西側斜面には「しがらみ」による護岸施設が存在し、溝の中には木製品などが投棄されている。

SD18 (第12図) 59A区を東西に走る溝で、幅 1.0m ~ 1.5m を測る。盛土(整地層)の下層から掘り込まれ、Ⅱ前期の遺構と考えられる。西端で北に屈曲しており、この溝は北側の屋敷地を区画するものであろう。

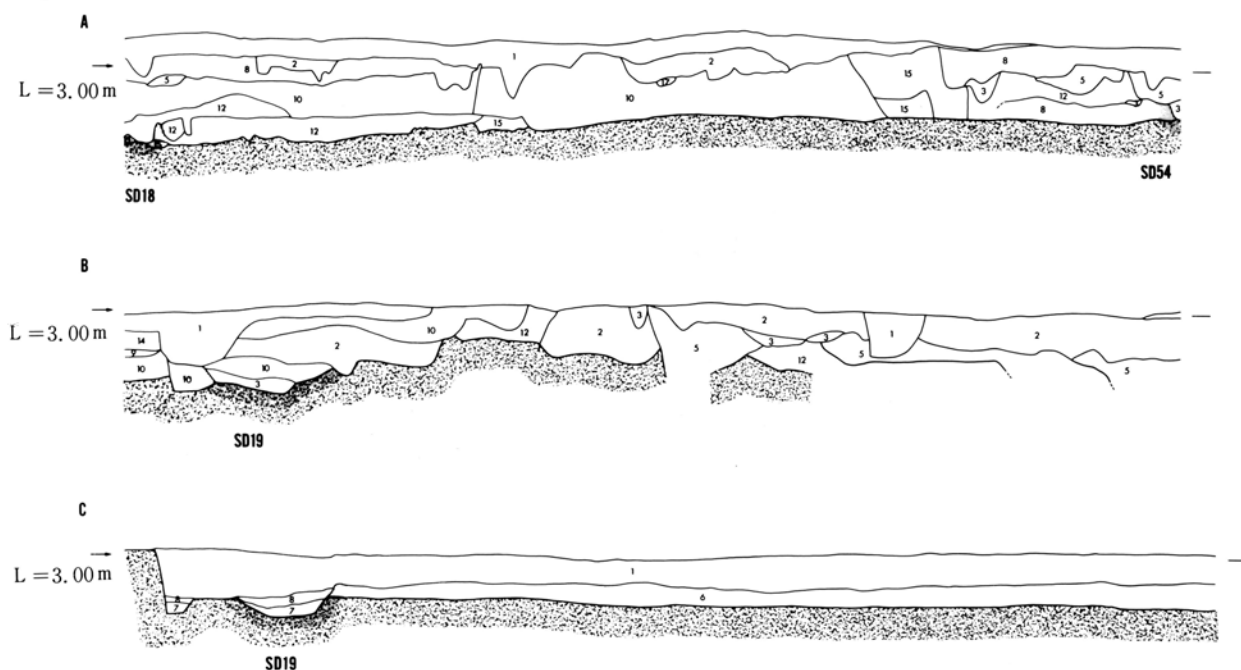
SD19 (第12図) 59A区を東西に走り、西端で南に屈曲して 59B区を南北に走る溝である。幅 1.6m ~ 3.5m を測り、SD18 と同様、盛土(整地層)の下層から掘り込まれる。この溝で囲まれた空間は方形の屋敷地となるだろう。

SD44 (第12図) 東側の自然堤防上の 60E区に所在する南北溝で、幅 1.0m ~ 1.5m を測る。

SD48 (第12図) 60E区に所在する L 字に屈曲する溝で、西端で SD44 に接続する。幅 1.0m ~ 1.5m、深さ 0.7m を測り、SD49・SD50 に切れ、南北溝は SD44・SD51 に平行し、東西溝は SD49・SD50 に平行する。SD44 と共に長方形の空間を区画する。

SD47 (第12図) 60E区に所在する SD48 と併走する。幅は 1.0m 前後で小規模である。

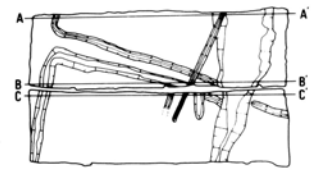
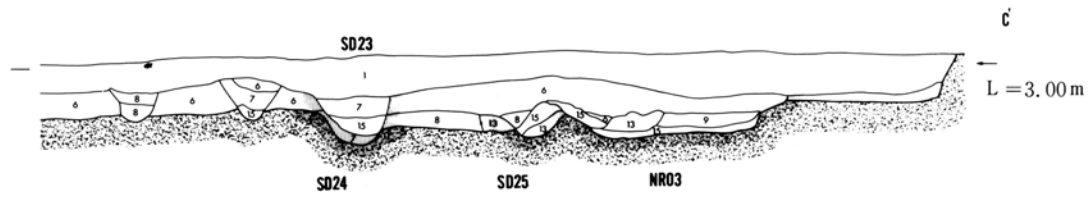
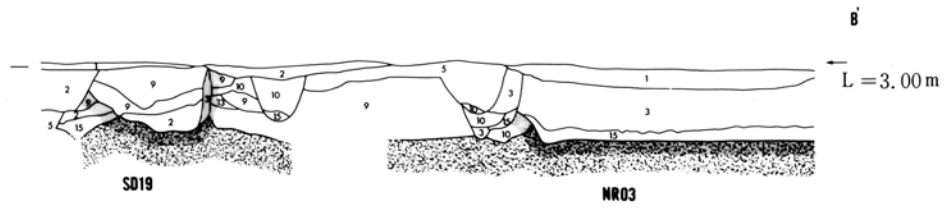
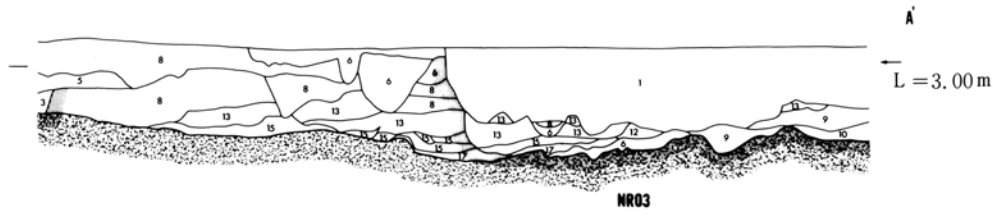
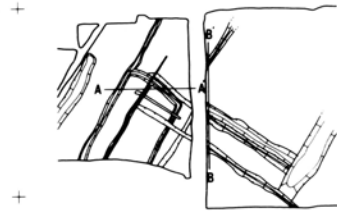
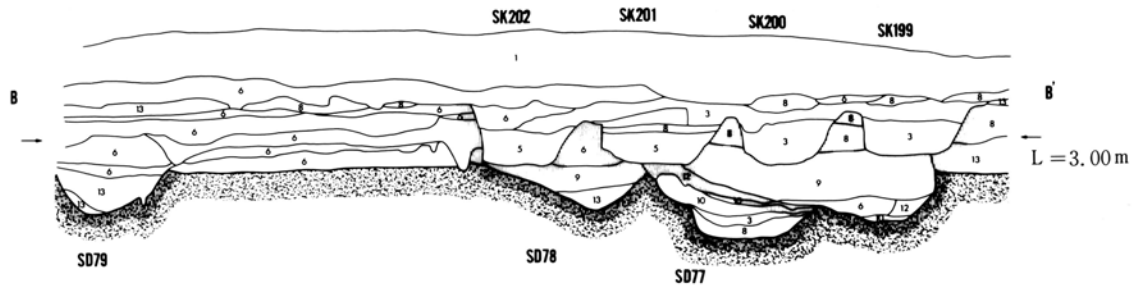
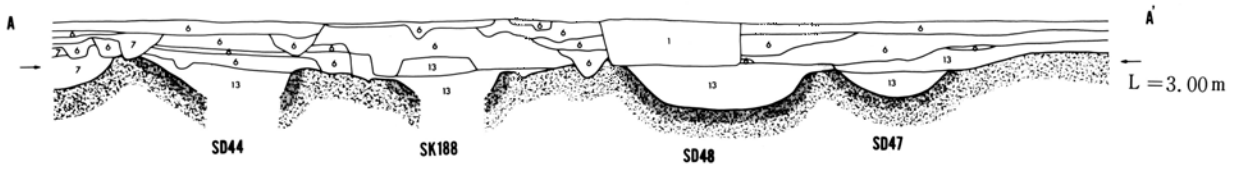
SD77 (第12図) 60C区を東西に走る溝で、盛土(整地層)の下層から掘り込まれる。



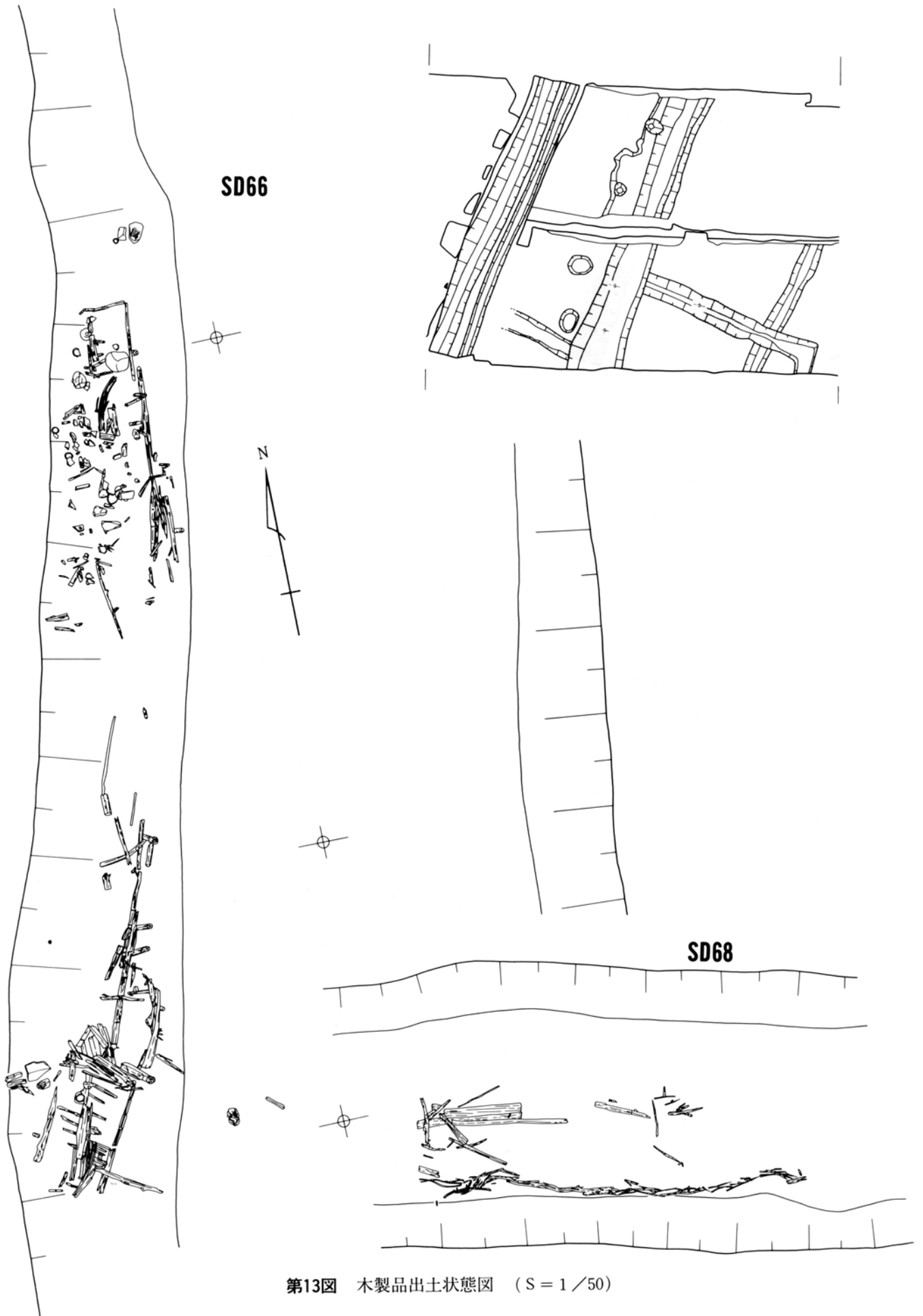
- |           |           |             |
|-----------|-----------|-------------|
| 1. 表土     | 7. 灰色砂質土  | 13. 黄褐色粘土   |
| 2. 黄褐色砂   | 8. 褐色砂質土  | 14. 青灰色粘土   |
| 3. 灰白砂    | 9. 黄褐色シルト | 15. 灰色粘土    |
| 4. 黒色砂    | 10. 灰色シルト | 17. 焼土・炭化物層 |
| 5. 褐色砂    | 12. 褐色シルト |             |
| 6. 黄褐色砂質土 |           |             |

第12図 溝のセクション図(2)





( S = 1 / 100 )



第13図 木製品出土状態図 (S = 1/50)

- SD78 (第12図) 60C区をSD77に平行して走る溝で、SD77に切られる。
- SD79 (第12図) 60C区をSD77に平行して走る溝で、幅は2.0m余りである。SD78との間隔は約4mである。
- NR03 (第12図) 59AB区を南北に走る溝で、南北の幅約3.5m、北部の幅12.5mを測る。溝の形態が不定形で自然流路の可能性が高い。Ⅱ一前期に掘削されたと思われるが、Ⅲ期まで継続する。

## 2. 掘立柱建物

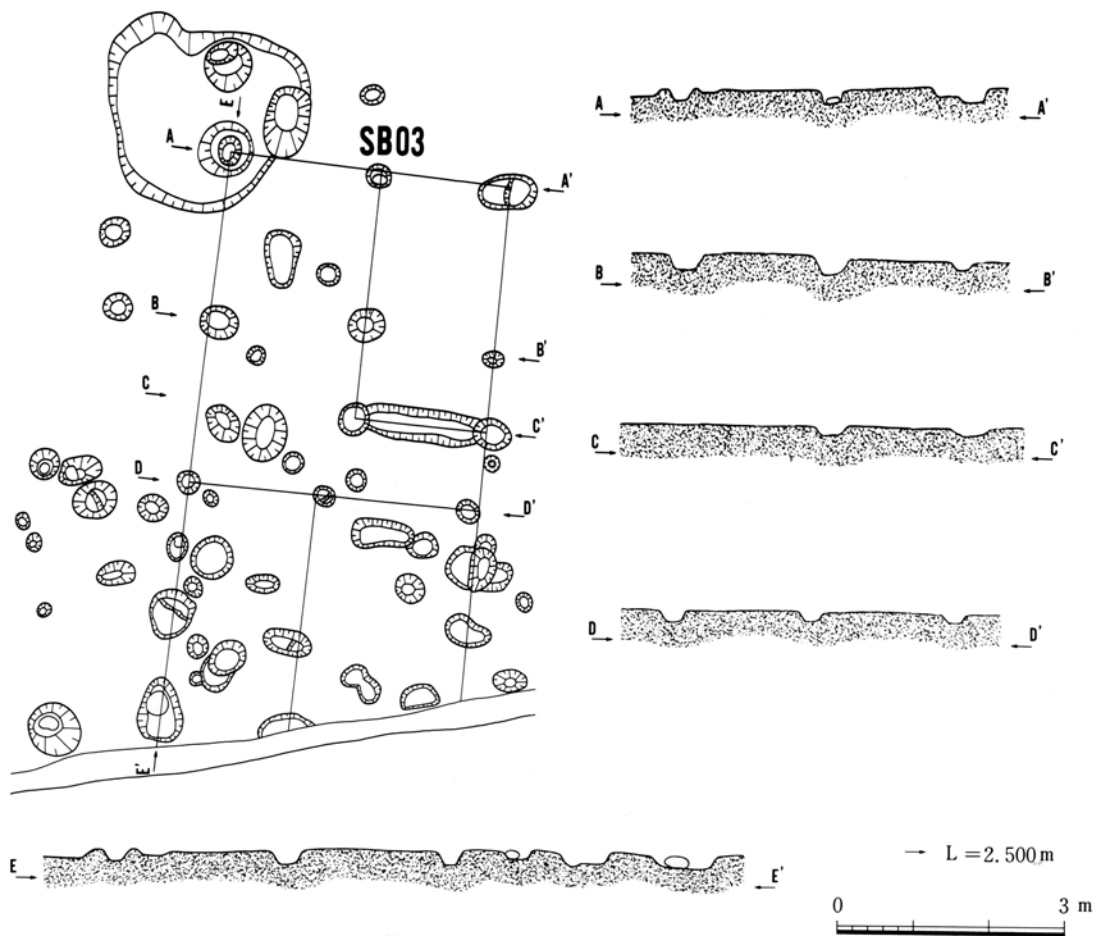
掘立柱建物は、西側の自然堤防上で1棟(SB03)検出されている。

- SB03 (第14図) 59B区の中央部に所在する4間以上(8.0m)×2間(3.7m)の南北棟掘立柱建物である。柱穴には根石が残存しているものもある。梁間の柱間寸法は2.2m、桁行の柱間寸法は西から2.0m、1.7mを測る。北東隅の部分には1間(1.7m)×2間(3.3m)の間仕切りがある。

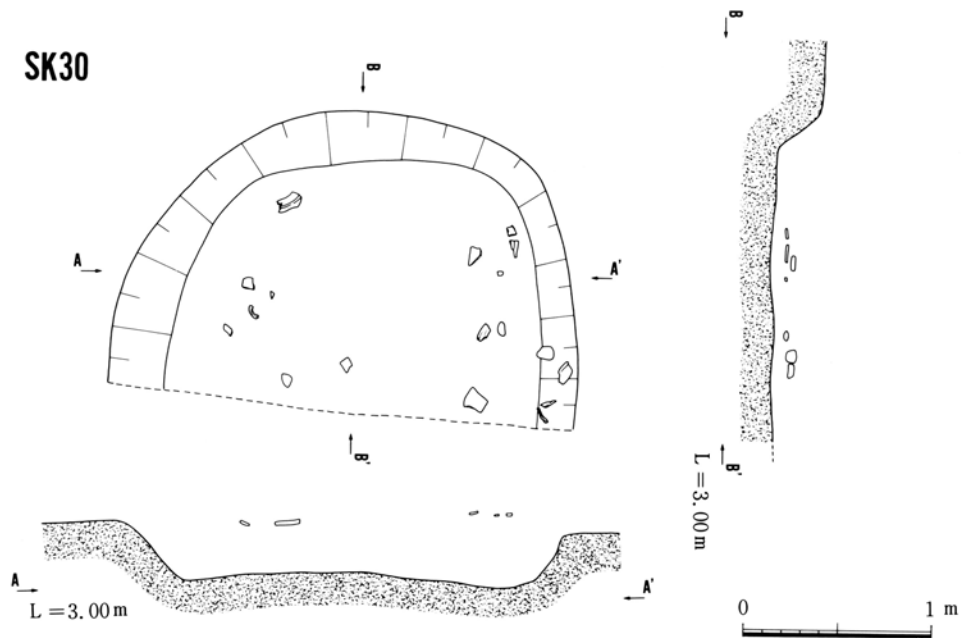
## 3. 土坑

土坑は非常に多く検出され、規模や形態は多種多様である。ここではSK30を取り上げる。

- SK30 (第15図) 60F1区で検出された。径2.5mほどの円形のプランで深さは0.3mと浅い。



第14図 建物遺構図(2)



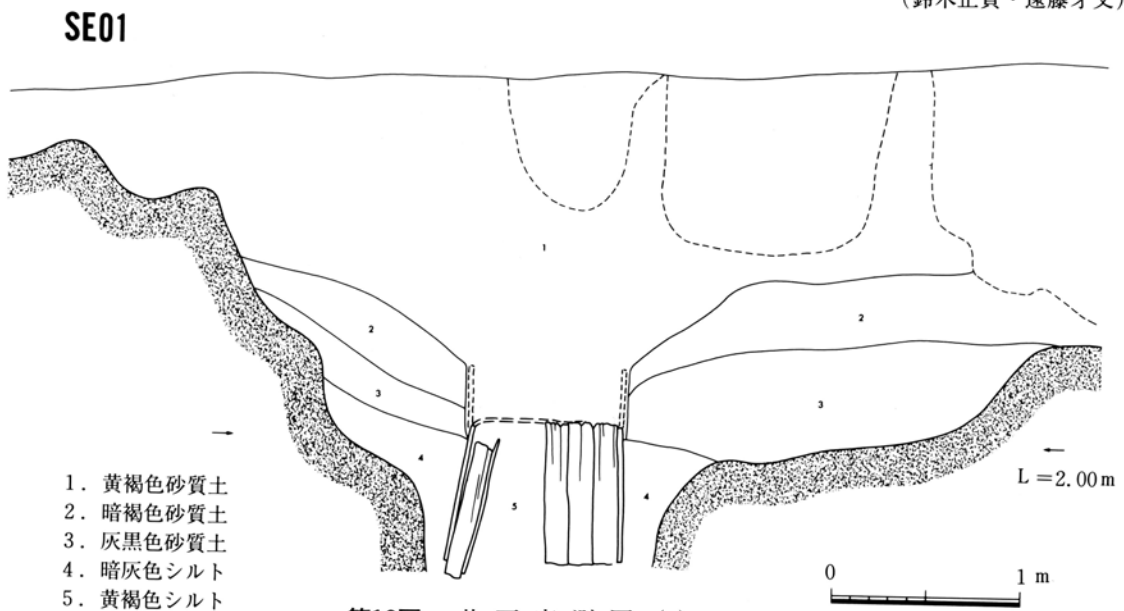
第15図 遺物出土状態図 (1)

#### 4. 井戸

井戸は内部構造物が抜き取られて不明なものもあるが、全て結桶を井戸枠としたものと思われる。

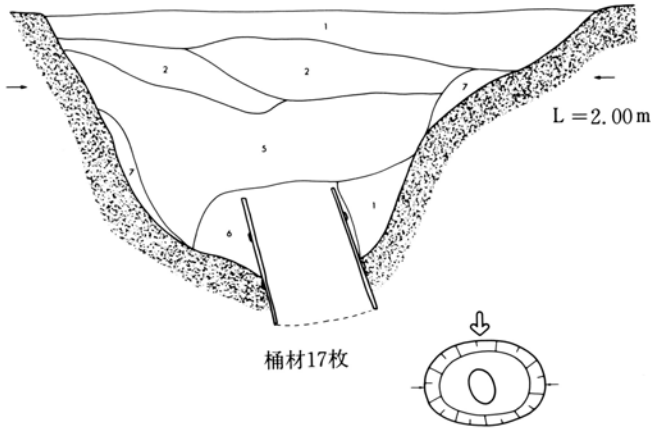
- SE01 (第16図) 60F1区で検出された結桶が1段残存した井戸である。深さは2.6m。
- SE26 (第17図) 59D区に位置する楕円形の掘り形を持つ井戸で、結桶が1段残存する。
- SE27 (第17図) 59D区に位置する楕円形の掘り形を持つ井戸で、結桶が1段残存する。
- SE10 (第17図) 59B区に所在する深さ1.0mの土坑である。形状と規模から結桶が設置された井戸で、既に抜き取られたものと考えられる。
- SE05 (第17図) 59A区で検出された井戸で、タガが残存する結桶が抜き取られたものである。
- SE20 (第17図) 60A区に位置する楕円形の掘り形を持つ井戸で、結桶が1段残存する。

(鈴木正貴・遠藤才文)

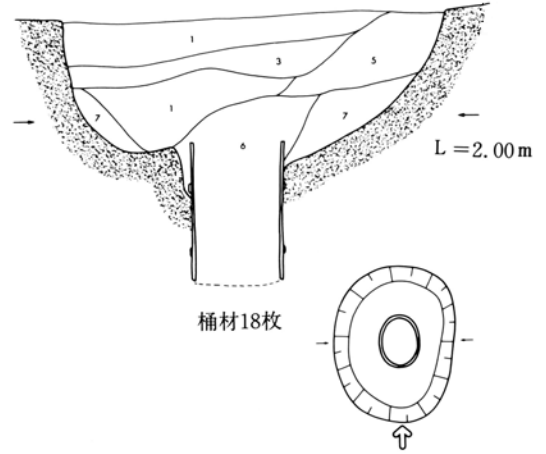


第16図 井戸実測図 (3)

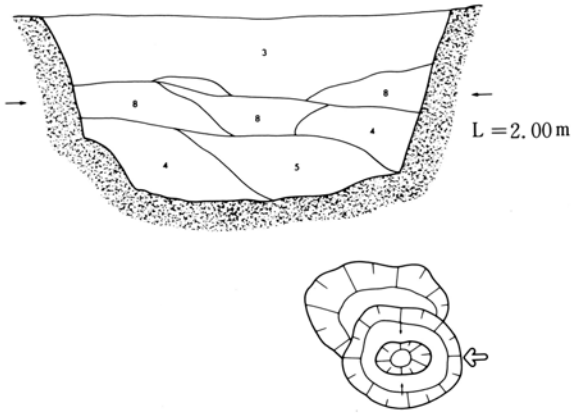
SE26



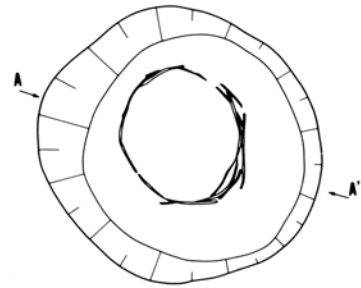
SE27



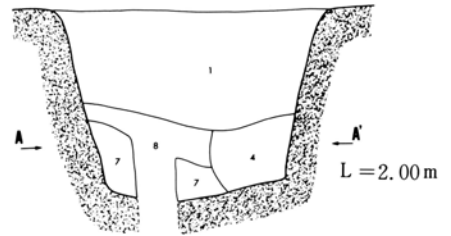
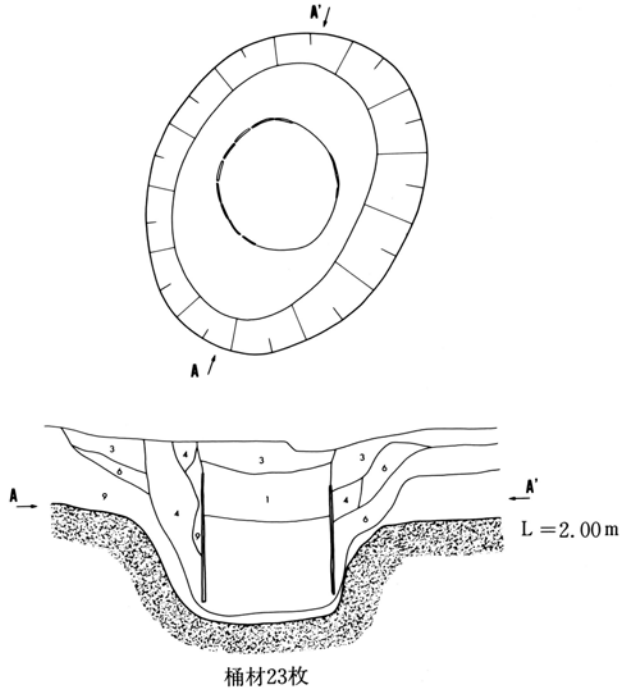
SE10



SE05



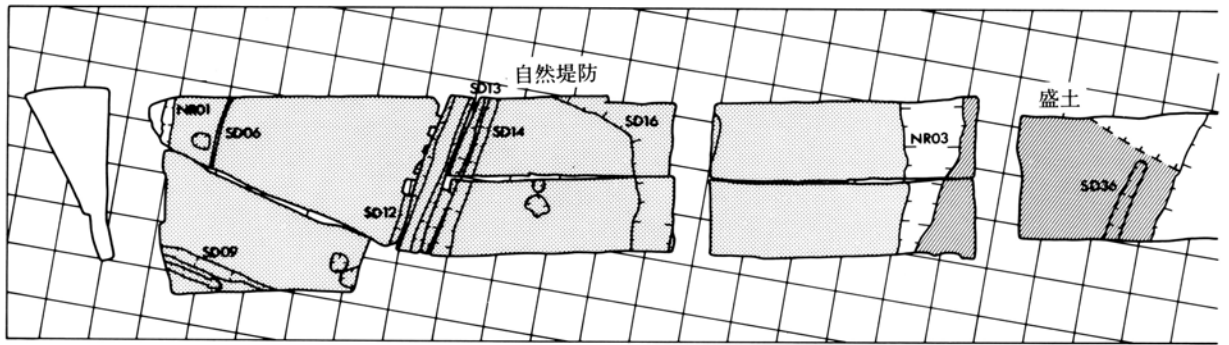
SE20



1. 暗褐色砂質土
2. 灰黒色砂質土
3. 黄褐色砂質土
4. 暗灰色シルト
5. 灰色砂質土
6. 黄褐色砂
7. 灰色粘土
8. 灰褐色シルト
9. 灰白色砂



第17図 井戸実測図 (4)



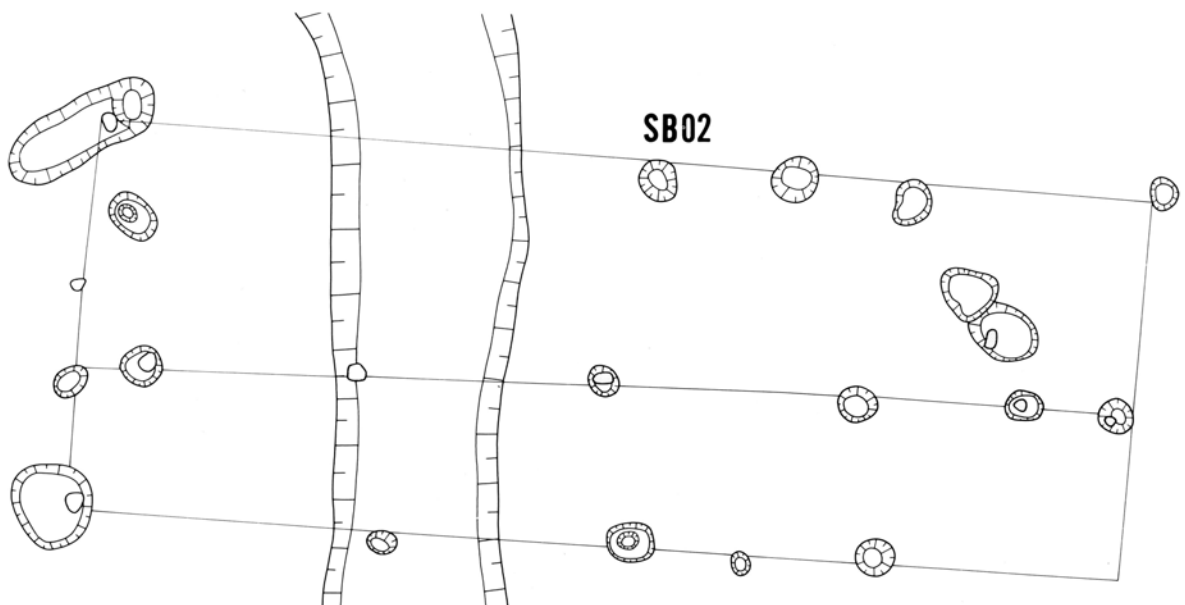
第18図 城下町後期遺構配置図

#### 第4節 城下町期後期の遺構

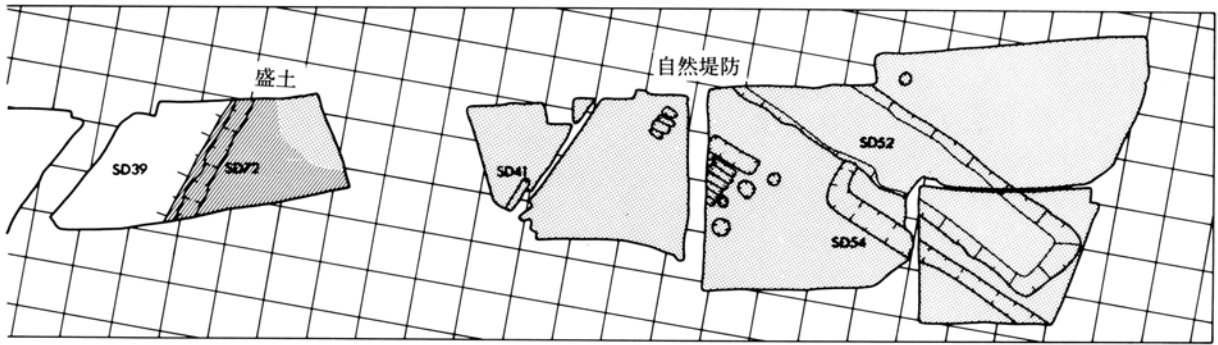
城下町期後期の遺構には、掘立柱建物・溝・井戸・土坑などがある。この時期には、調査区の中央にあった沼沢地が埋め立てられ、大規模な整地が行われている。これに伴って巨大な堀群が掘削されている。また、掘立柱建物・溝・井戸・土坑などの遺構は整地を実施した後に掘り返している形になる。ただし、掘立柱建物・溝などの主要な遺構の方位は前代と同様である。調査区内における城郭・屋敷の構成を概観すると、SD39(内堀)を境に東側には城郭部・西側にはNR03によって囲まれる樹木屋敷などの屋敷が広がっていたと考えられる。前期の一本街村状の町屋を大きな屋敷に改変していることが判明した。

##### 1. 堀

幅が20mを超える大規模な溝を堀として報告する。調査区内では2本の堀(SD39(内堀)・SD52(中堀))が確認された。両者とも整地を実施した後に掘削されている。

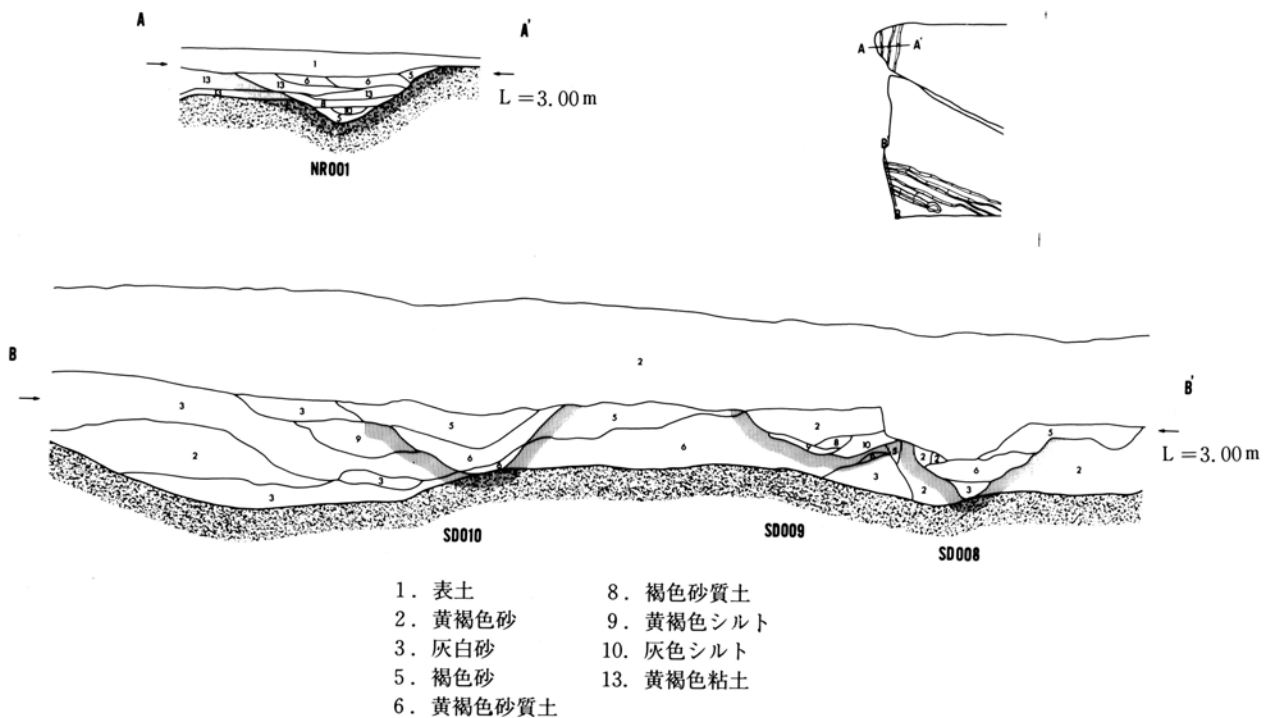


第19図 建物遺構図(3) (S=1/100)

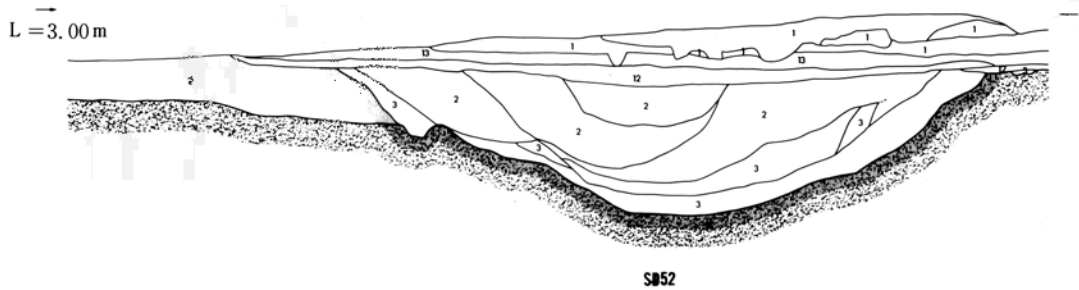
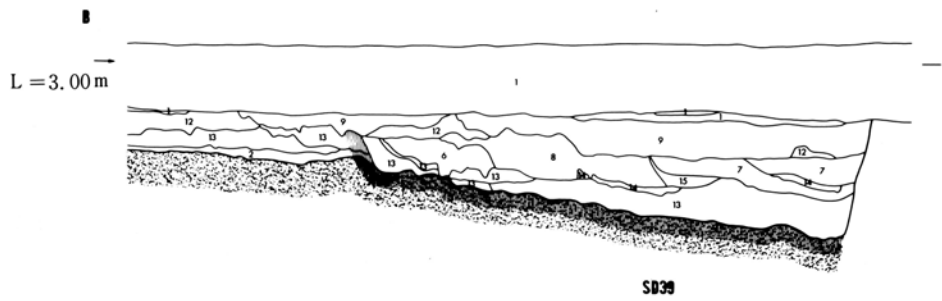
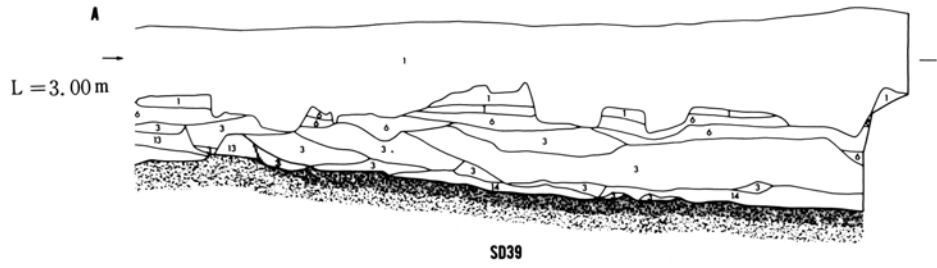


(S = 1/1,250)

SD39 (内堀) (第21図) 調査区のほぼ中央 (61A区・61B区) で検出された幅約45.0m・深さ約 2.0mを測る南北方向に走る大溝である。方位はN-18°-Eで、五条川の流路に平行して対となっている。堀の底には、深さが 0.5m程度で、1.5m～2.5m×6.5m～7.5mの隅丸方形の土坑が2～3列配列している。これらは沖積地の上部砂層まで掘り込んでおり、調査時点においても湧水が激しい状況であった。堀底に設けられた防御施設とは考え難く、堀の中に水を蓄えるための湧水施設と考えるのが妥当である。この溝は『春日井郡清須村古城絵図』(蓬左文庫所蔵)の内堀に相当する。(なお、この内堀は、これまで「水堀」という呼称で表現されてきたが城郭構造上から「内堀」とここでは呼ぶことにした。)



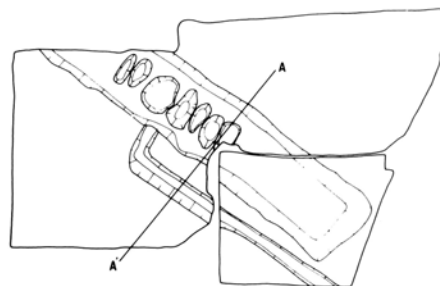
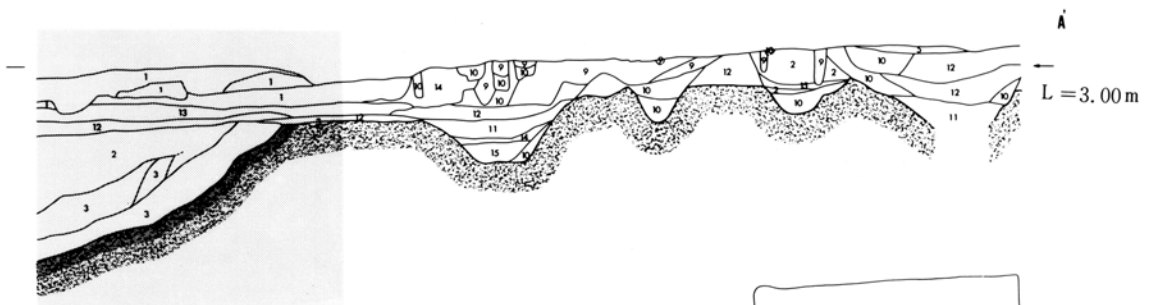
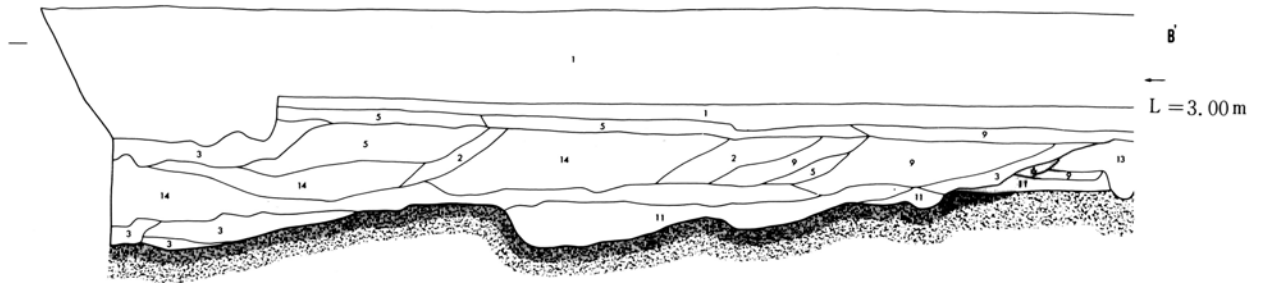
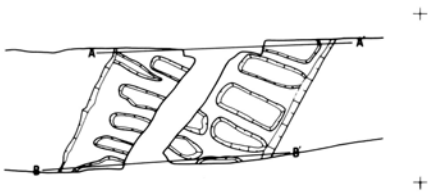
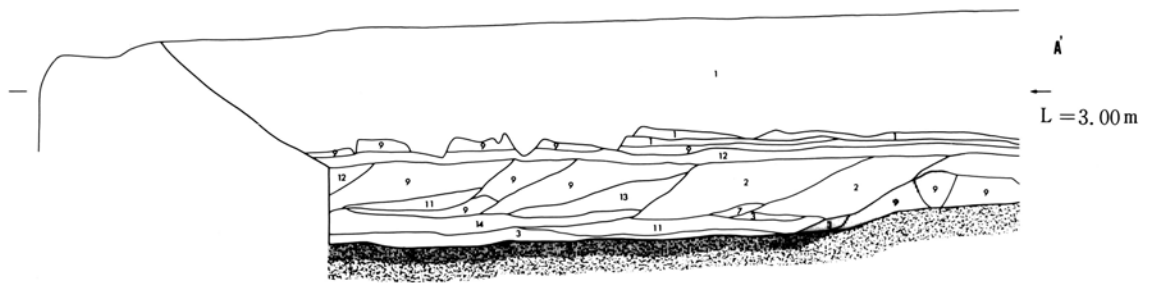
第20図 溝のセクション図 (3) (S = 1/100)



- |           |            |           |
|-----------|------------|-----------|
| 1. 表土     | 7. 灰色砂質土   | 12. 褐色シルト |
| 2. 黄褐色砂   | 8. 褐色砂質土   | 13. 黄褐色粘土 |
| 3. 灰白砂    | 9. 黄褐色シルト  | 14. 青灰色粘土 |
| 5. 褐色砂    | 10. 灰色シルト  | 15. 灰色粘土  |
| 6. 黄褐色砂質土 | 11. 青灰色シルト |           |

第21図 SD39 (内堀)・SD52 (中堀)





セクション図 (S = 1/100)

SD52（中堀）（第21図） 調査区の東部（60A区・60B区・60C区・60D区）で検出された幅約18.0m、深さ約3.0mを測る東西方向に走る大溝である。方位はE-18°-Sで、五条川の手前約20mの地点で収束しており、川とは接続していない。堀底には、深さがおよそ0.5mで、1.4m～1.8m×0.8m～1.4mの不定形の土坑が1列配されており、SD39（内堀）と同様、水を蓄えるための湧水施設と考えられる。堀の南側にはSD54が併走しており、SD54は西端で北に屈曲してSD52に接続する。SD54とSD52の間は一段低くテラス状を呈している。SD52（中堀）の北側では一段低い地形が展開しており、顕著な遺構は見られない。溝からは「天正十四」銘が入った丸瓦を初めとする多量の瓦が出土している。この溝は『春日井郡清須村古城絵図』（蓬左文庫所蔵）の中堀に相当する。

## 2. 溝

堀とした巨大な溝を除くと、溝はこの時期にはそれ程多く掘削されていない。西側の自然堤防上に前代と同じ方向に走る小規模な溝が数条走る他は、「樹木屋敷」を囲むNR03が存在する程度である。

SD09（第20図） 60F1区を東西方向に走る溝である。幅は2m強、深さは0.7mを測る。

SD11 60F1区を南北に走る溝で、幅は0.2mと小規模である。屋敷内を区画する溝と考えられる。

SD36 61B区を南北に走る溝で、幅は2.5mと中規模である。溝の北端部は収束しており、南へは調査区域外へ更に伸びる。

SD54（第21図） SD52（中堀）に接続する溝で、東は調査区外へ更に伸び、おそらく五条川へ通じていたものであろう。SD52が増水した際に排水する施設であったと考えられる。

NR01（第20図） 59F区の西端で検出された溝で、西肩の状況は不明瞭である。性格も不明。

NR03（第12図） 59CD区の東端で検出された溝で、北東角でL字に屈曲する。溝の肩は蛇行して直線的ではなく、東肩は検出できなかった。城下町期以降の時期の遺物も出土したことから、近世に至るまで利用され、新田開発に用いられていたと思われる。

## 3. 建物

掘立柱建物は、西側の自然堤防上で1棟（SB02）検出されている。この他には、60F1区に平行して走るピット列があり、これも掘立柱建物と考えられる。これは1間×4間の東西棟掘立柱建物となる。

また、60CDE区に所在する長方形の土坑列も建物基礎と考えられる。60CD区では、3.5m×6.0mの長方形の土坑が6基並んだ列が1列検出されている。60E区にも同様な土坑列が確認できる状況と考え合わせて復元すると、6基並んだ列は3列配列されていたであろう。土坑列の北側には規模の大きな長方形の土坑が隣接している。これらの遺構群はSD39（内堀）とSD52（中堀）の交わるコーナーに所在し、SD52（中堀）に接していることなどから、櫓のような建物の基礎になる可能性がある。

SB02（第19図） 59D区の中央部で検出された3間×4間の東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は、梁間は東から3.2m、3.2m、4.2m、桁行は北から2.2m、1.2m、1.7mとなり、規格性が若干存在する。梁行方向の中央部に1列の柱穴列がある。柱穴には、根石が残存しているも

のもみられる。柱穴の配列は若干乱れて蛇行している。

#### 4. 井戸

井戸は内部構造物が抜き取られて不明なものもあるが、全て結桶を井戸枠としたものと思われる。

SE02 (第22図) 60F1区で検出された結桶が1段残存した井戸である。掘り形にはテラスが存在し、深さは1.7m。

SE03 (第23図) 60F1区に位置する井戸で、掘り形の形態が他の遺構で攪乱されて不明である。結桶が1段残存する。上段の結桶は抜き取られた可能性がある。

SE04 (第23図) 59D区に位置する楕円形の掘り形を持つ井戸で、掘り形の傾斜は緩い。結桶が1段残存する。

SE15 (第23図) 60C区に所在する深さ1.4mの土坑である。形状と規模から、結桶が設置され既に抜き取られた井戸と考えられる。

SE16 (第24図) 60C区で検出された。形状と規模から、結桶が設置され既に抜き取られた井戸と考えられる。最下層までは確認できなかった。

SE17 (第24図) 60C区に位置する円形の掘り形を持つ井戸で、結桶が1段残存する。結桶の内部には石材が多量に投棄されていた。

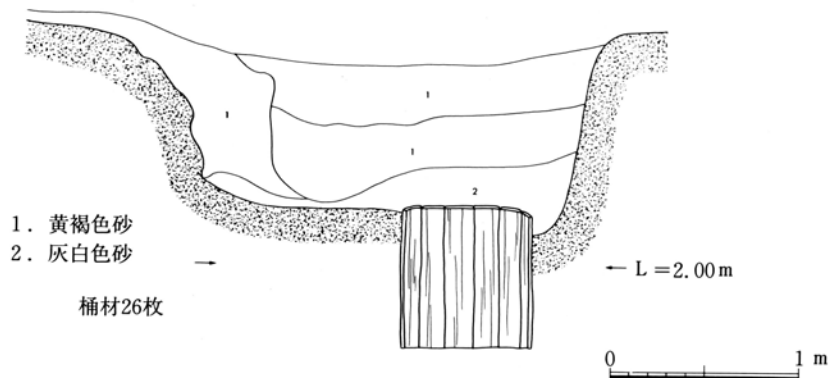
SE28 (第24図) 59D区で検出された井戸で、結桶が1段残存する。結桶の内部の上層からカメラが出土した。

SE30 (第24図) 60C区に位置する円形の掘り形を持つ井戸。形状と規模から、結桶が設置され既に抜き取られた井戸と考えられる。ただ、土層堆積からはその痕跡は確認できない。

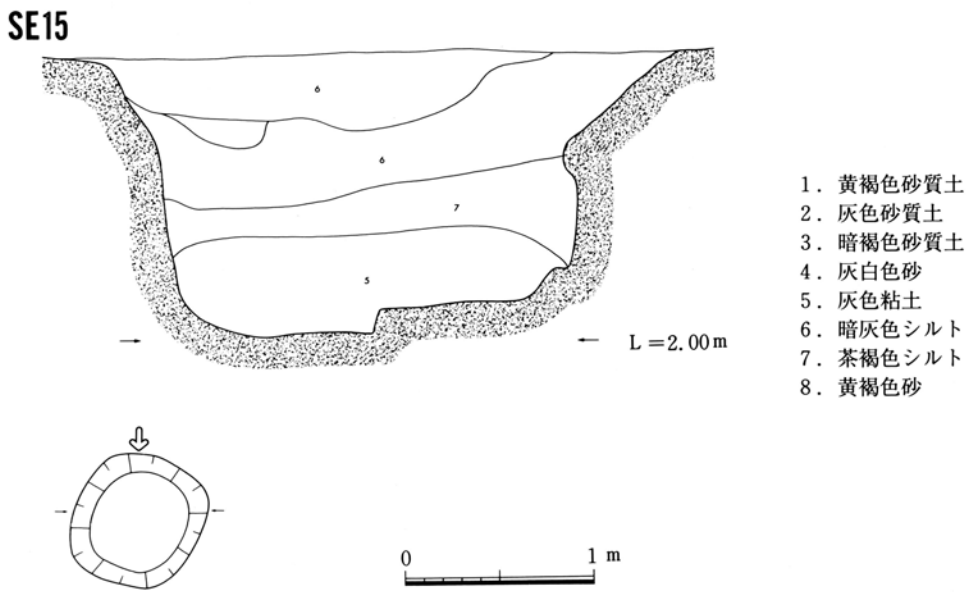
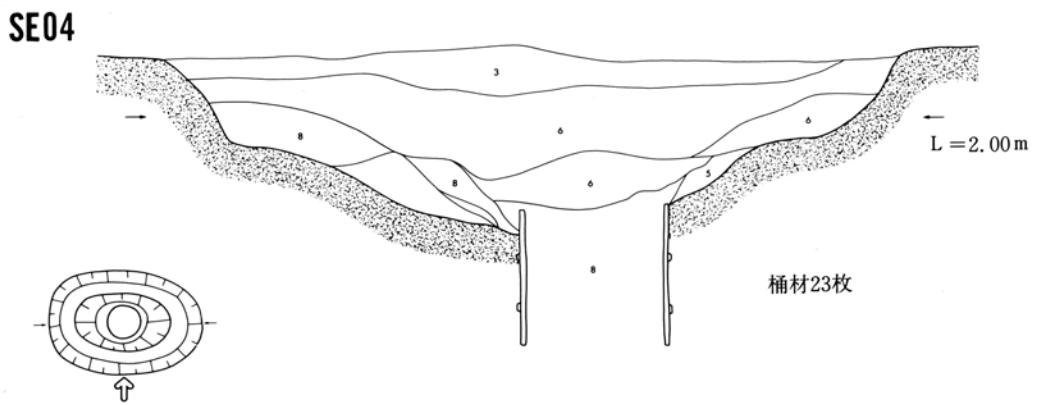
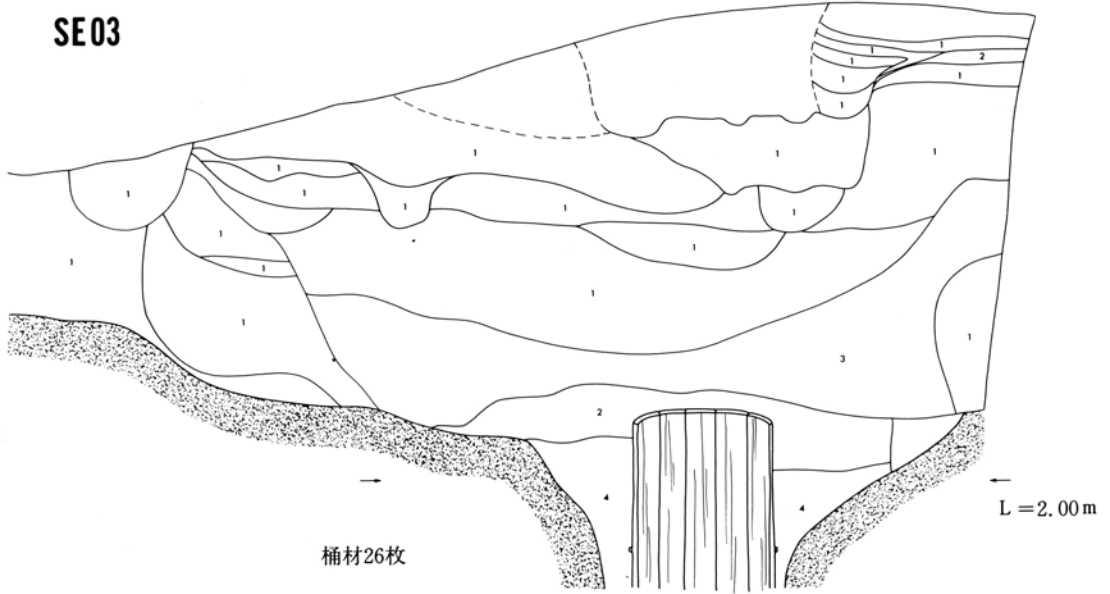
(鈴木正貴・遠藤才文)

※ 本章の図版類作成については遠藤才文が担当し、原稿については第1節を除き、鈴木正貴がそれらの図版類に基づき執筆した。

### SE02

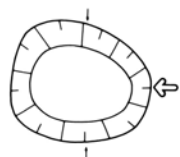
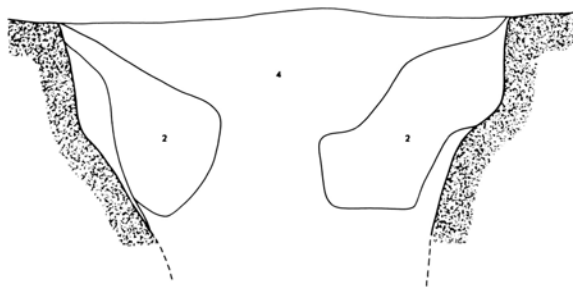


第22図 井戸実測図 (5)

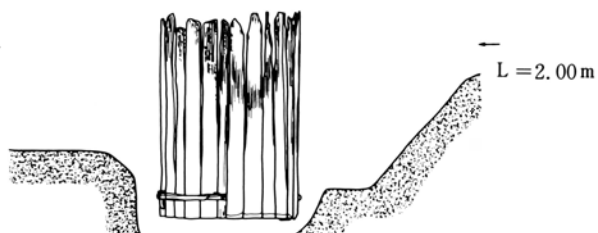
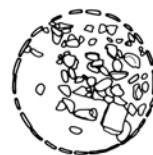


第23図 井戸実測図 (6)

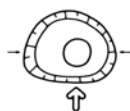
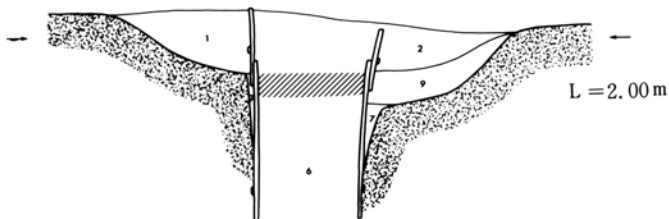
SE16



SE17



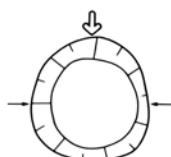
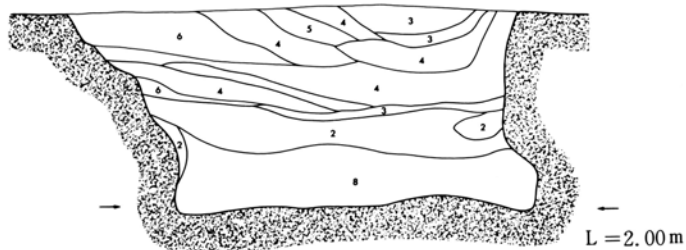
SE28



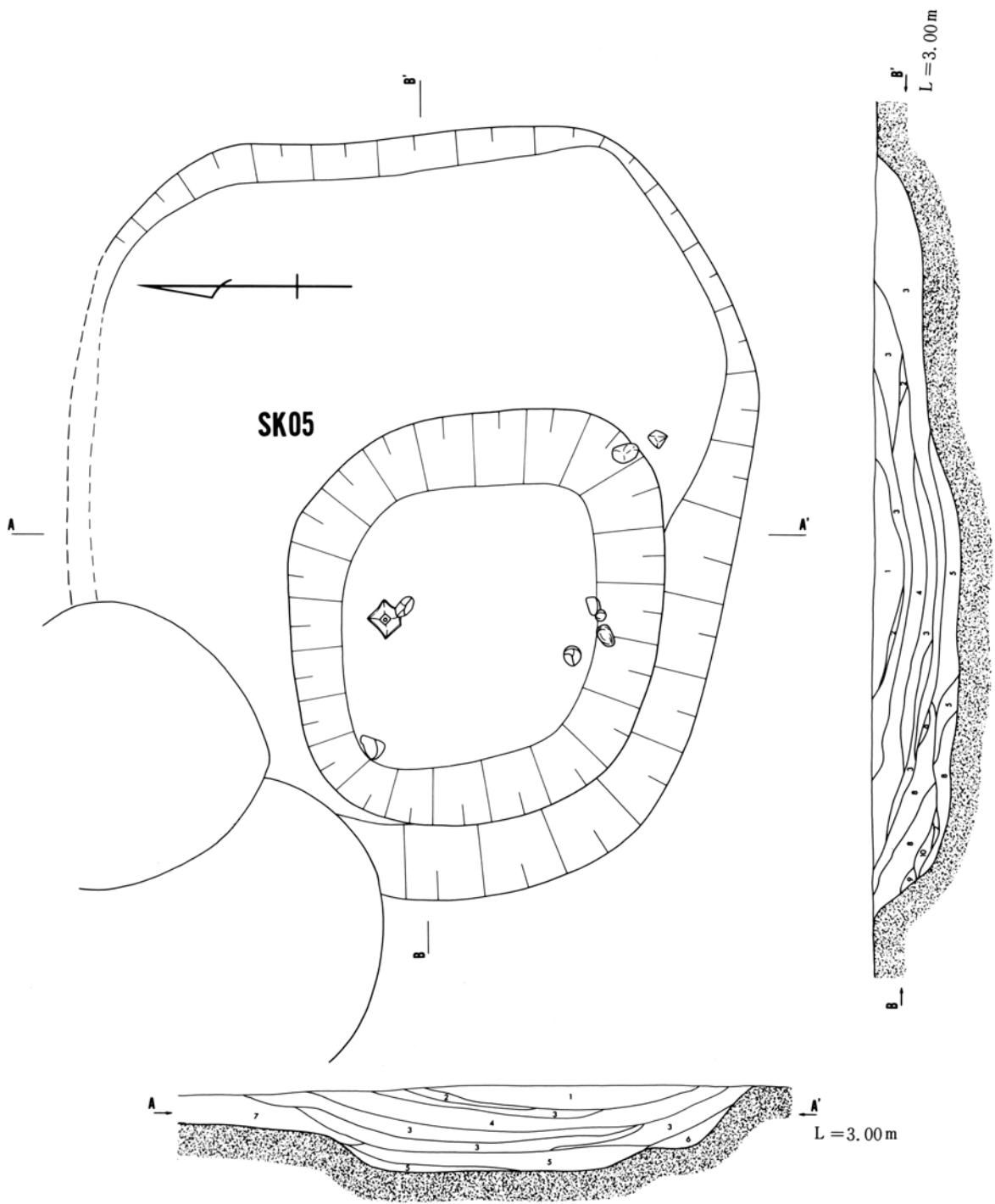
亀の検出レベル  
桶材 上段22枚  
下段19枚

- 1. 暗灰色シルト
- 2. 茶褐色シルト
- 3. 黄褐色砂質土
- 4. 灰色砂質土
- 5. 暗褐色砂質土
- 6. 黄褐色砂
- 7. 灰黒色砂質土
- 8. 灰白色砂
- 9. 灰色粘土

SE30



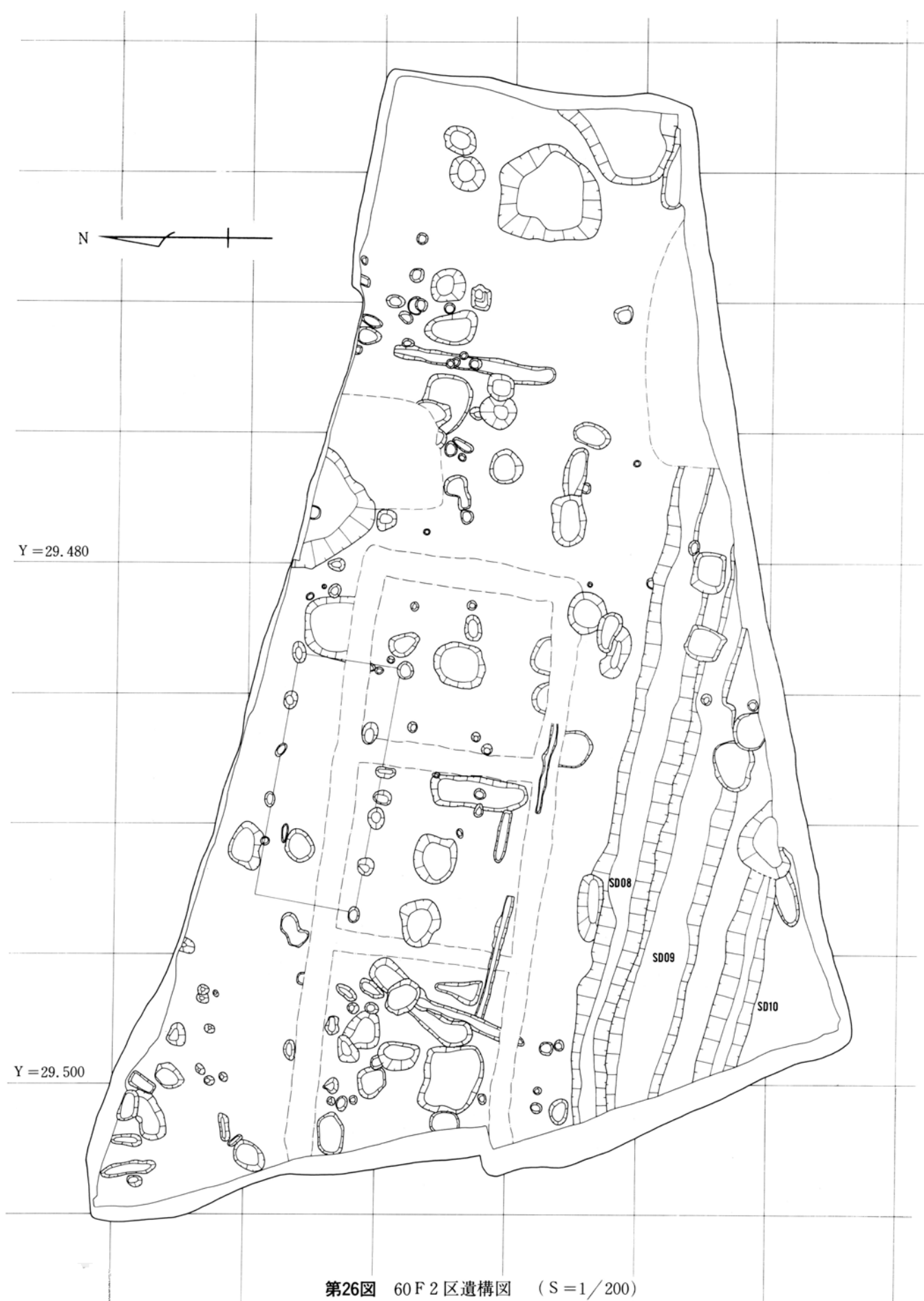
第24図 井戸実測図 (7)



- |         |           |
|---------|-----------|
| 1. 明褐色土 | 6. 黄褐色シルト |
| 2. 炭化物  | 7. 明褐色シルト |
| 3. 褐色土  | 8. 暗灰褐色土  |
| 4. 灰褐色土 | 9. 黄灰色シルト |
| 5. 灰色粘土 | 10. 暗灰色砂  |

0 2 m

第25図 遺物出土状態図 (2)



第26图 60F2区遺構図 (S=1/200)

# 第Ⅲ章 遺物

## 第1節 中世の土器・陶磁器

### 1. 概要

清洲城下町遺跡の中世の遺構から出土した土器・陶磁器はあまり多くなかったが、「墨書陶器」など興味深い遺物群もいくつか見られた。また、城下町期の遺構の下層からは中世の遺物群がかなりまとまって出土している。

出土した土器・陶磁器の種類には、土師器、山茶碗（類）、施釉陶器、焼き締め陶器、輸入陶磁器、陶製品、加工円盤等がある。

土師器には皿、鍋、釜がある。皿は一般的には出土する状況が特殊で、溝などから集中して出土する例が多く、法量や形態にもバラエティーがある。基本的には手づくねの成形である。法量はおおよそ大・中・小にわかれる。胎土は白色で比較的精良なものと赤色で砂粒を多く含むものがある。鍋は伊勢型鍋と呼ばれる器形で、器壁が薄く細片が多い。釜は鑊を持ったいわゆる羽釜と呼ばれる器形のものであるが、口縁部が受け口状に大きく開き、三足がつくものも若干見られる。

山茶碗（類）は瓷器系陶器第Ⅱ類に分類される無釉の陶器である。出土した器種は碗、皿、鉢であるが、量的には碗・皿が大多数を占め、遺物全体の割合で見ても90%以上となる。山茶碗は大きく分けて、東海地方北部系と呼ばれるものと東海地方南部系と呼ばれるものとに分類される。前者は砂粒をほとんど含まない均質な胎土を持ち、器壁が薄いのが特徴である。生産地として美濃、瀬戸の北部が挙げられる。後者は砂粒を多く含んだ粗い胎土を持つもので、長石分の吹き出しなども見られる。生産地としては東海地方の南部地域で、瀬戸南部、猿投、常滑、渥美などがある。

山茶碗の底部には墨書されるものも多く見られた。

施釉陶器は瓷器系陶器第Ⅰ類に分類されるものである。一般的には“古瀬戸”と呼ばれる瀬戸で生産された灰釉や鉄釉を施した陶器である。量的にはごくわずかである。器種としては平碗、天目茶碗、皿、鉢、四耳壺などがあるが、全形を復元しうるものはない。

焼き締め陶器は瓷器系陶器第Ⅲ類に分類される壺、甕類を中心とした無釉の陶器である。全体的に産地は常滑がほとんどで、器種には甕、壺がある。

輸入陶磁器は全てが中国陶磁で、青磁と白磁がある。器種は青磁、白磁ともに碗・皿のみである。

そのほか、陶製品として陶丸、陶錘等がある。また、加工円盤は用途がはっきりしないが、山茶碗等の底部を2次的に加工したものである。

### 2. 出土状況

中世の遺構から出土した遺物はあまり多くない。しかし、城下町期の遺構の下層から中世の遺物が多量に出土することがよくある。これらの遺構が中世から存続したのか、城下町期における遺構構築時に混入したのか、判定するのが難しい。この節では代表的な中世の遺構出土の遺物について述べるが、これらの城下町期の遺構の下層などから出土しているものについても、e) その他の遺物として記述することとする。個々の遺物の詳細は巻末の遺物一覧表に記した。



a) 井戸出土遺物

中世の井戸のなかで興味深い遺物が出土した遺構に SE31 と SE33 の2つがある。両者は位置的にも近く、存続期間も近接していたものと思われる。

SE31 (第27図 1～5) 遺物は、ほとんどが山茶碗で、器種には碗・皿・鉢がある。碗はすべて体部が薄い美濃産の碗で占められる。遺物の型式差も余り見られず、14世紀前葉頃の短期間の存続であったことが窺われる。破片の数は余り多くないが、墨書陶器が何点か見られる。なかでも1～3は「あこ」とひらがな2文字が書かれている。1と2は碗の底部で、3は皿の底部である。書かれている位置は両者とも底外面中央部であるが、墨の太さに違いがある。

それ以外の器種としては土師器皿と陶丸が見られるが、小片で図示し得ない。

SE33 (第27図 6～17) 良好な資料が出土した数少ない中世の遺構である。遺物は井戸の上層の暗灰色シルト層から比較的まとまって出土した。SE31と同じように美濃産の薄い均質な胎土をもつ山茶碗がほとんどである。時期的にも14世紀前葉で、遺物の形態にほとんど差がなく、一時期に投棄したものと考えられる。そのうち、碗2点と皿2点にSE31と同じ、「あこ」の墨書を持つものがある。それぞれ、形態的にほとんど同じである点などから、同時に墨書され、投棄されたものであろう。ただ、書体は2種類あり、6と10が太い字で書体も似ている。また、これらはSE31の1や2にも似ている。7と11は細い字でやや小さめに書かれており、SE31の3に近い形である。「あこ」とは「水夫」を意味する言葉であると思われる。

山茶碗以外には土師器皿、中国陶磁の龍泉窯系青磁碗、無釉の小壺、陶丸などが見られる。土師器の皿は手づくね成形の15が復元されたのみで、数は少ない。16は白色で砂粒分を含み、山茶碗に近い胎土を持つ小壺である。かなり小さい点などから実用には向かず、祭祀等の用途が考えられる。「あこ」の墨書と併せて、これらの井戸の遺物を考える上で一つの手がかりとなろう。

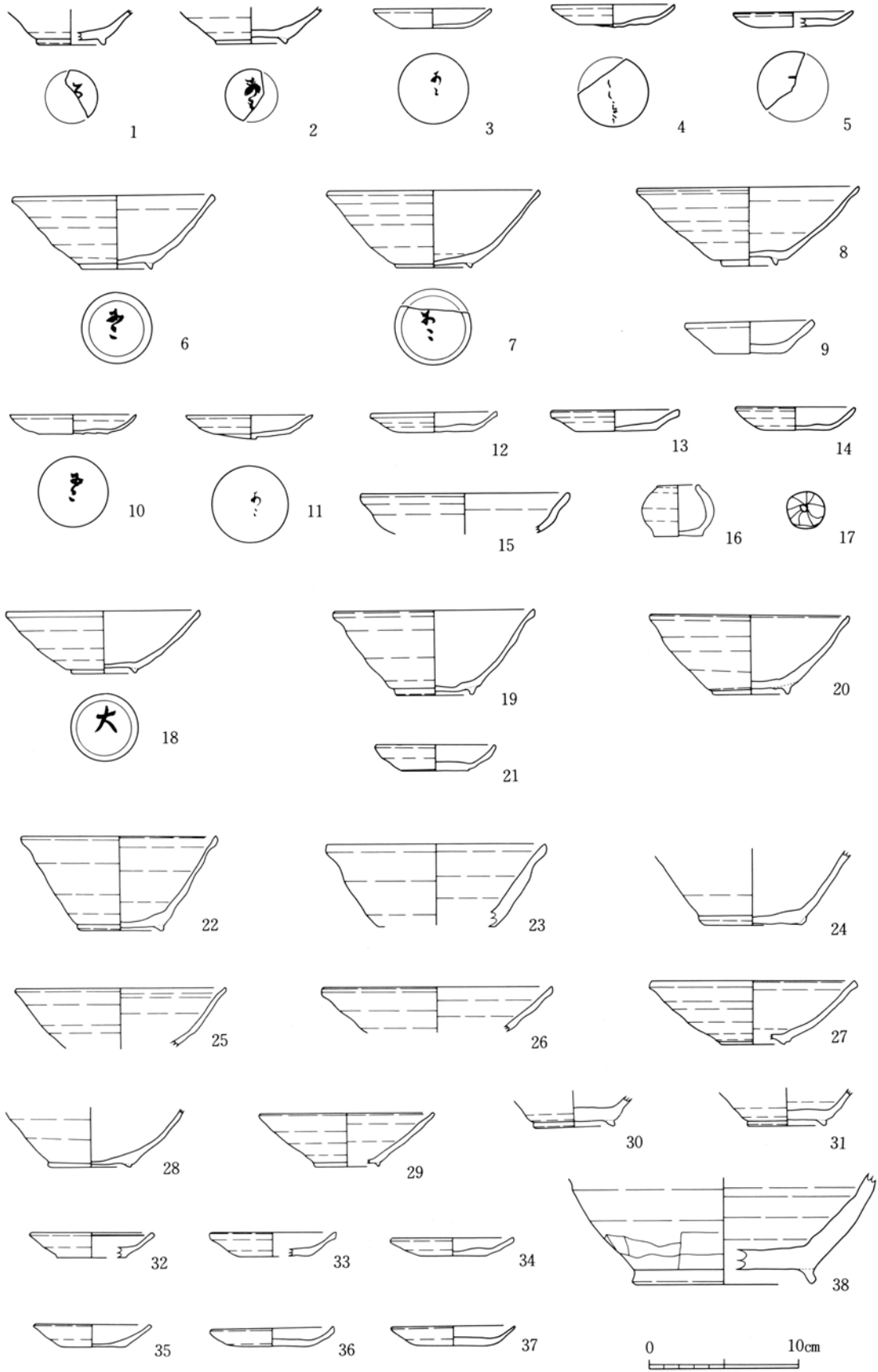
b) 土坑出土遺物

SK234 (第27図 19～21) 中世の土坑から出土した遺物は図に示した3点のみであった。これらの遺物はすべて均質な胎土を持つ美濃産の山茶碗で、形態的にもよく似ている。14世紀前後のもので、同時期に一括で投棄されたものと考えてよい。3点がほぼ完形で出土したという状況はやや特異であり、特殊な用途も考えられる。

c) 溝出土遺物

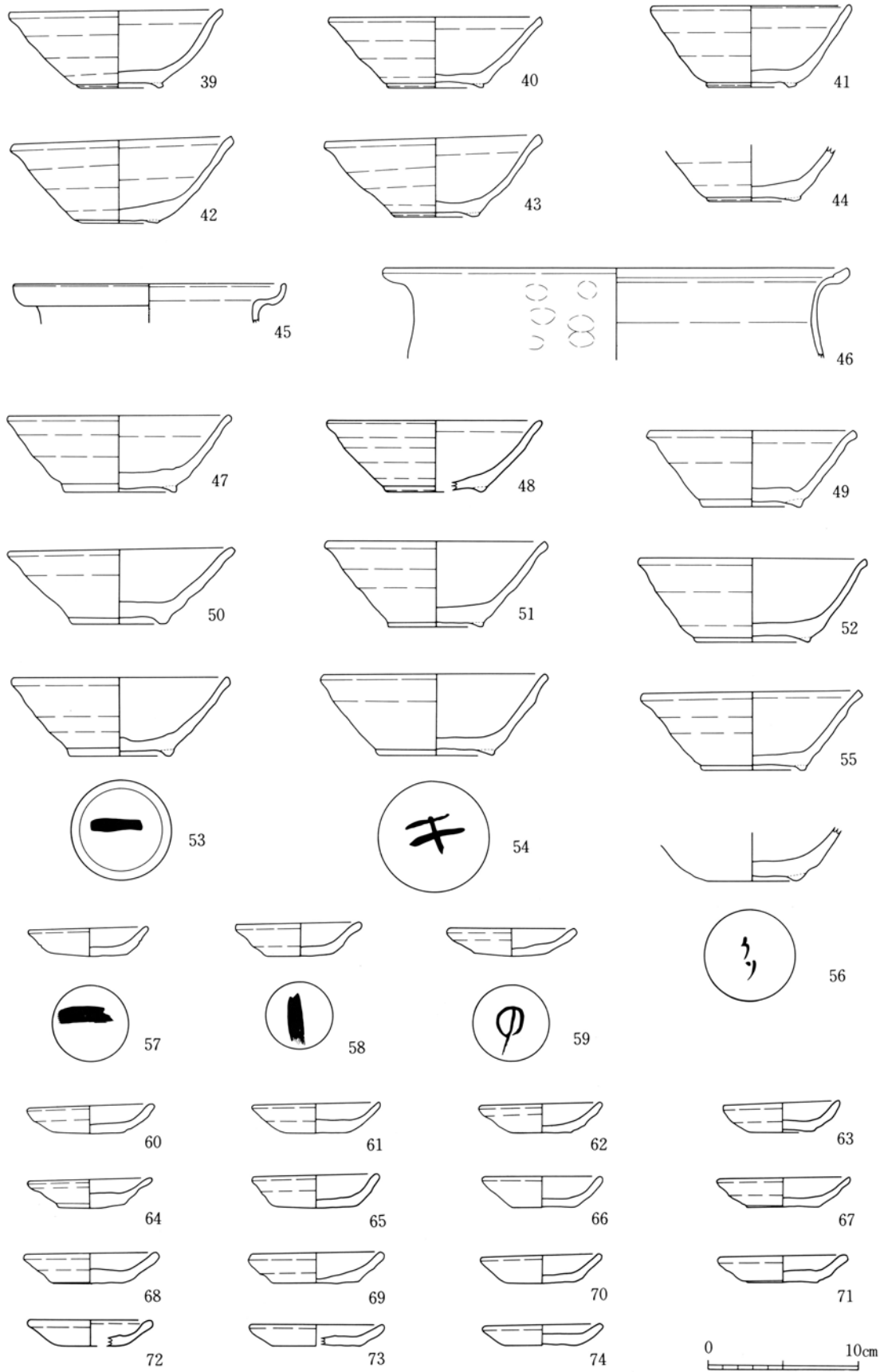
SD73 (第28図 39～46) 出土遺物は、若干、12世紀代に溯るものも見られるが、ほとんどは13世紀前葉を中心とする山茶碗である。産地は瀬戸産が多く、美濃産の均質な胎土を持つものはほとんど見られない。

土師器は皿が少し見られる他は、鍋が少し出土した。45は口縁部が受け口状になったもので、全形を知り得ないが、三足がつく可能性がある。46はいわゆる「伊勢型」と呼ばれるもので、口縁部の立ち上がりが大きい。



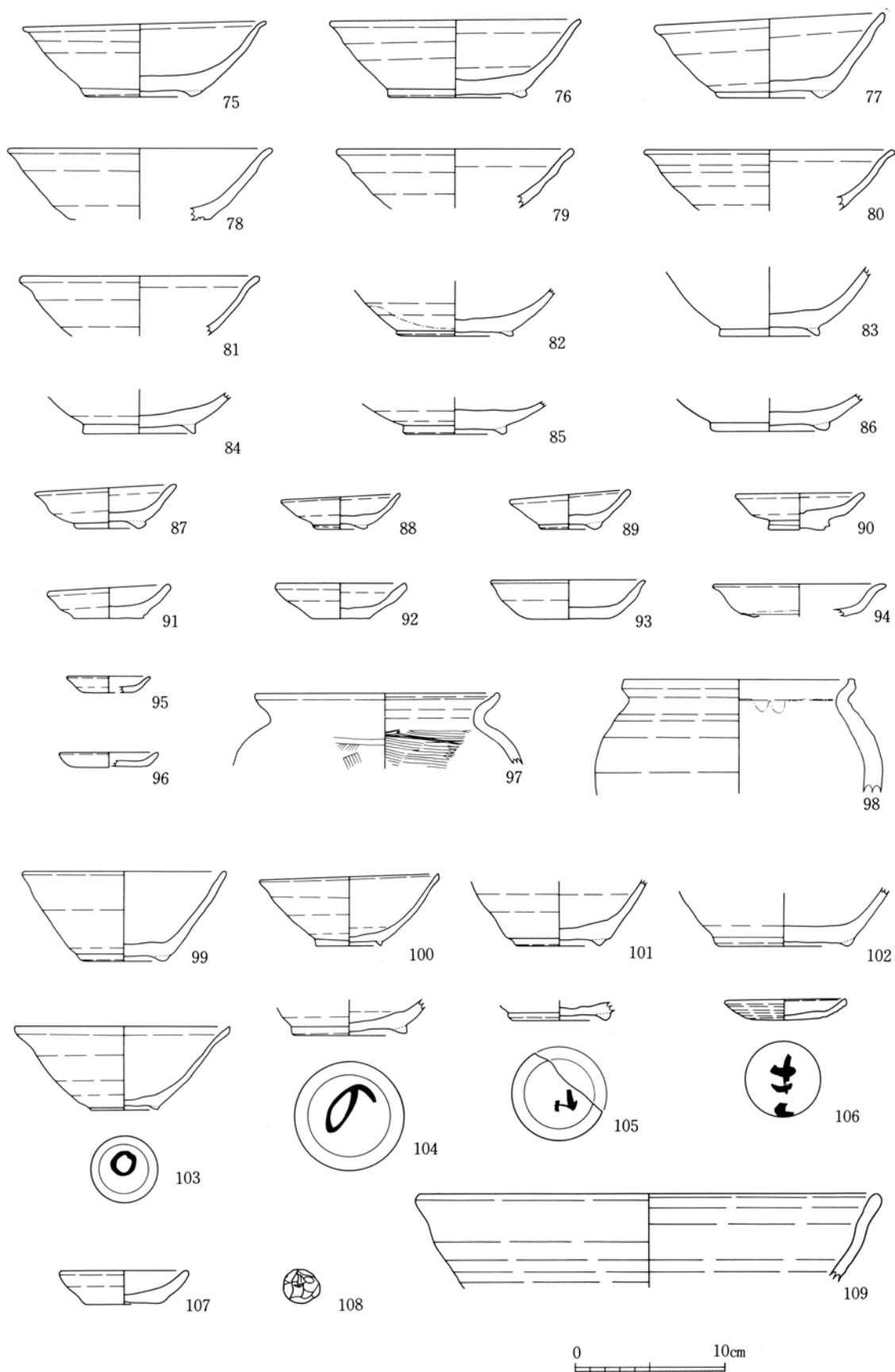
第27図 中世の遺物 (1)

SE31・SE33・SE21・SK234・SD78



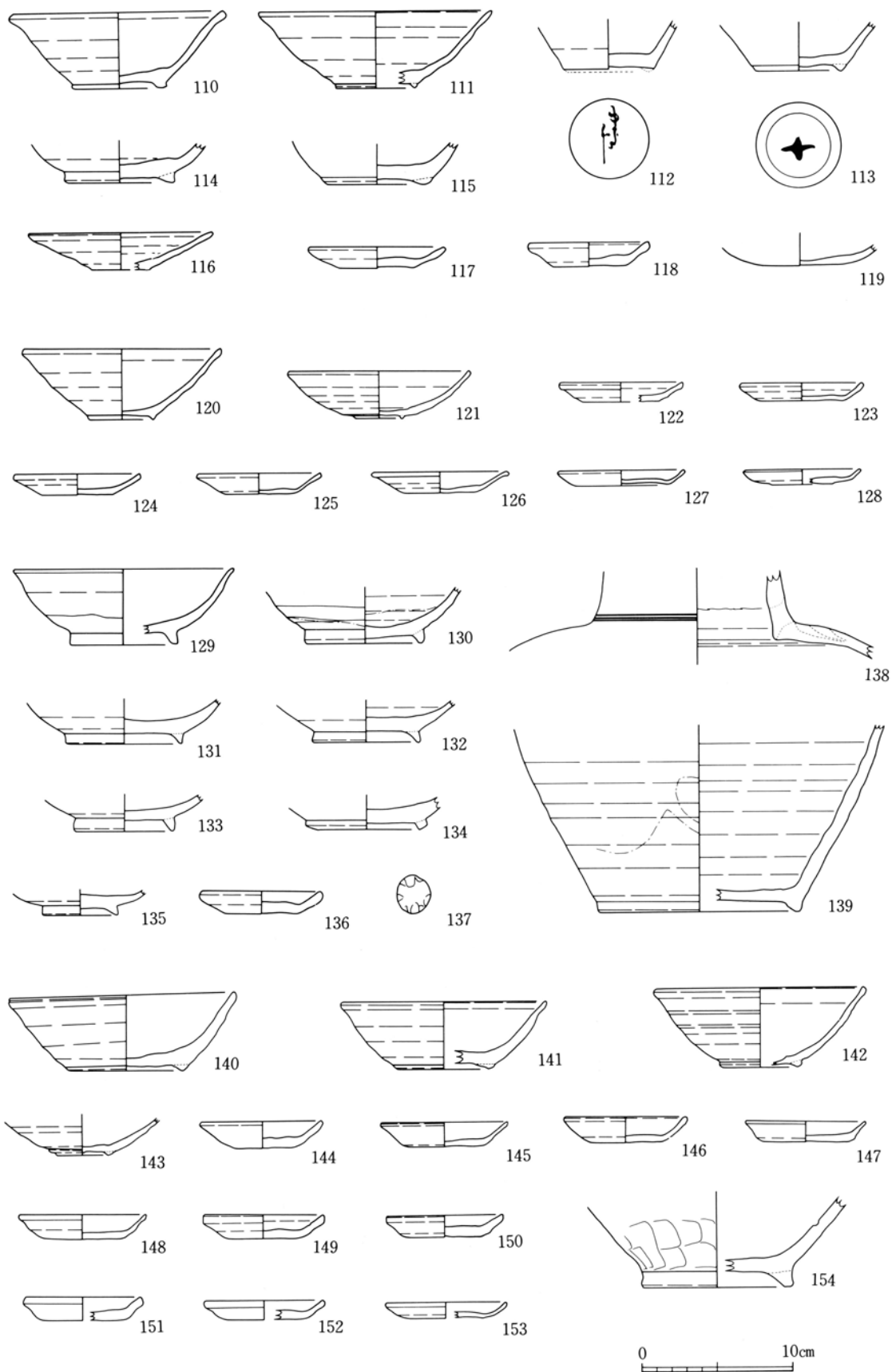
第28図 中世の遺物 (2)

SD73・NR01



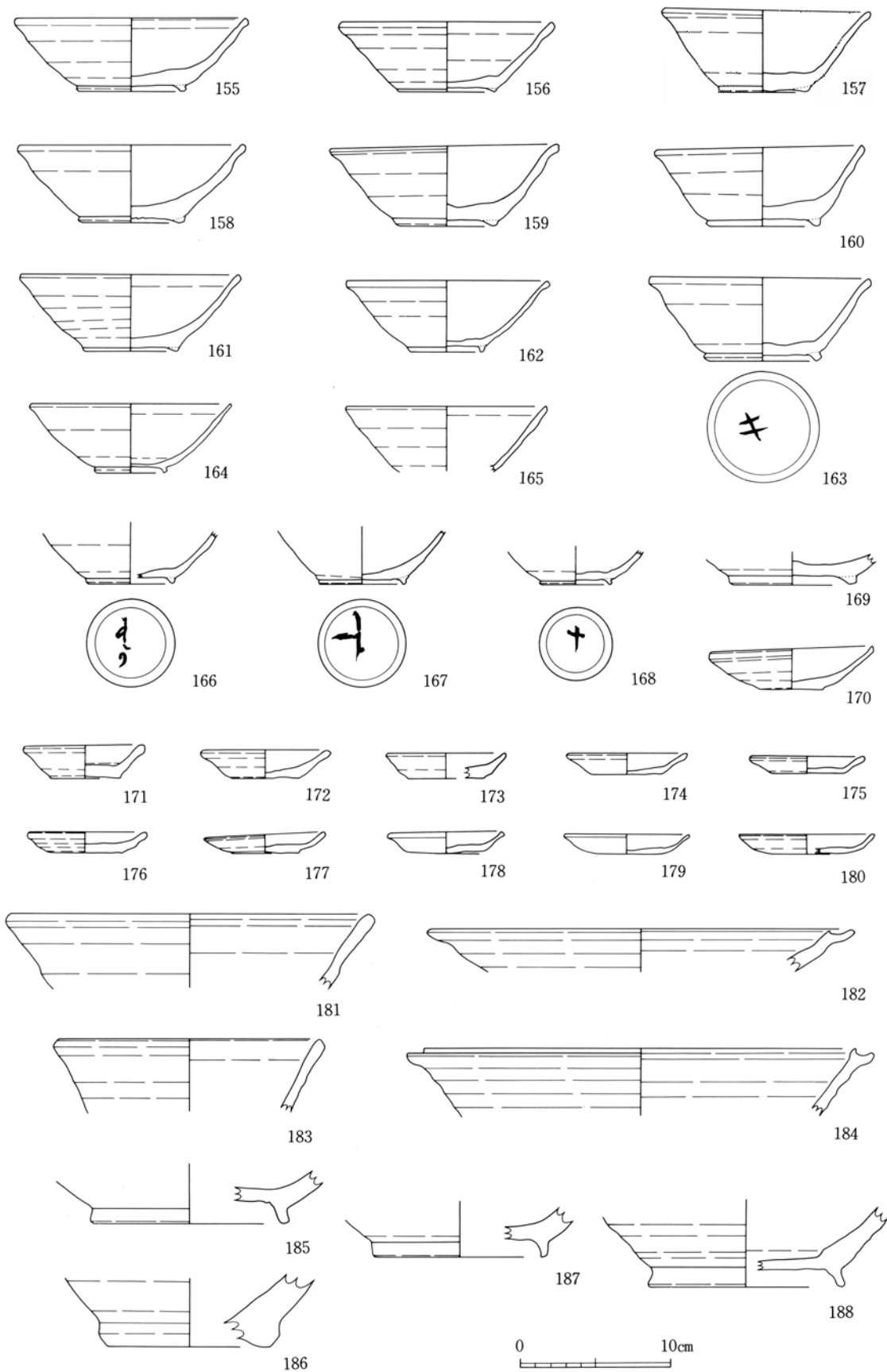
第29図 中世の遺物 (3)

SD65・NS01



第30図 中世の遺物 (4)

SD72・SD74・SD66・SD85



第31図 中世の遺物 (5)

SD52

d) その他の遺構出土遺物

NR01 (第28図 47~74) この遺構は城下町期中の堀の下にある自然流路と考えられる遺構で、山茶碗類が大量に出土している。遺物は山茶碗がほとんどで、時期的には比較的まとまっており、13世紀代と考えられる。産地としては常滑、瀬戸が考えられる。中には53、56、57のように、底部に同じ「一」の墨書を持つ陶器がある。器種には碗と皿があるが、字の書き方が太い筆を用いている点などが似ており、同じ状況で墨書されたものと考えられる。

NS01 (第29図 99~109) 城下町期の遺物が若干混じるが、主体となるのは中世の遺物で、山茶碗がかなり出土した。胎土が均質のものとは粗なものがおおよそ半々に見られる。中には底部に「○」、「き」、「の」といった墨書を持つものも見られる。時期としては14世紀代が考えられる。

e) その他の遺物

SD52 (第31図 155~188) SD52は清洲城下町後期の溝(中堀)である。出土した遺物の中には城下町期のものに混じって、下層を中心として中世の遺物が多量に出土している。時期的には13~14世紀の遺物が多い。

中心となる器種は山茶碗類で、碗・皿が多い。碗は155~160のように砂粒をたくさん含んだ胎土を持つ瀬戸産のものが多い。これらは高台が低く体部がやや深めで、直線的である。碗の中で底部に墨書を持つものも散見される。184は施釉陶器で口縁部に灰釉を施している。

SD65 (第29図 75~98) SD65には若干時期が下がるとされるようなものも混じっているが、12世紀代から14世紀代の山茶碗類が多く見られる。碗では比較的口径の大きい12世紀代のものが目立つ。皿でも87や88のように高台を持つものも存在している。

SD66 (第30図 129~139) SD66は城下町期の遺構であるが、129から135のような灰釉陶器最末期の碗などが出土している点に注目しておきたい。

SD74 (第30図 120~128) SD74も城下町期の遺構であるが、14世紀代の美濃産の均質な胎土を持つ山茶碗を大量に出土している。なかには121のように15世紀に降るものもある。

(城ヶ谷和広)

## 第2節 城下町期の陶磁器

### 1. 概要

清洲城下町遺跡から出土した陶磁器は大きく分類すると瀬戸・美濃窯の陶器、常滑・信楽・備前・唐津・楽焼などの瀬戸・美濃窯以外の陶器、土師器、瓦器、輸入陶磁器、陶製品に分けられる。

主体となるのは瀬戸・美濃窯の製品である。これらの陶磁器は遺構に対応する形で、大きく前後2小期に分けることができた。清洲城下町遺跡では前期の遺物が多いが、五条川をはさんで東岸に立地する朝日西遺跡では後期の遺物が主体である。

前期の状況について見てみると瀬戸・美濃窯の製品では天目茶碗が多数見られる。それらの大半は化粧掛けを有するものである。丸碗、平碗は量的には多くない。皿類では、緑釉、全面施釉のもののほか、内禿のものがある。いずれも灰釉または鉄釉を施すもので、長石釉の製品は全くみられない。量的には灰釉を全面に施し「端反り」の形態となるものが多い。瀬戸・美濃窯の編年では古瀬戸Ⅳ期（窖窯末）から大窯Ⅲ期頃までに比定することができる。

土師器には皿、鍋、釜がある。皿はロクロ成形のものと手づくね成形のものがある。口径はロクロ成形のものが8cm～18cm前後、手づくね成形のものが6cm前後である。いずれも口縁外側に横撫でを施すものである。煮炊具では、内耳鍋、羽釜と金属器を模したと考えられる「茶釜型」の羽釜などがある。

この他、青磁、白磁、青花等の中国陶磁器もある。

後期においては、瀬戸・美濃窯の天目茶碗は化粧掛けを施さないものが大半である。皿類は、鉄釉、灰釉に加えて、長石釉の丸皿、菊皿が多くなる。また黄瀬戸製品も僅かに見られる。瀬戸・美濃窯の編年では大窯Ⅳ期から登窯の時期である。

土師器には、前期と同様に皿、鍋、釜がある。皿はロクロ成形と手づくね成形のものがあり、手づくね成形のものでは、口縁部の横撫でが省略され、中央部をくぼませた円盤状になる。煮炊具では直口両耳鍋も見られる。

この他、青磁、白磁、青花等の中国陶磁器、朝鮮陶器がある。また、地元である瀬戸・美濃窯以外の信楽・備前・唐津の各窯の製品の搬入も認められた。

第2表は主要な遺構の出土遺物の総破片数を器種ごとに計測したものである。なお、時期のところの中Ⅰ、Ⅱはそれぞれ中世前期（12世紀～13世紀）、中世後期（14世紀～15世紀）を表し、城Ⅰ、Ⅱはそれぞれ城下町期前期、城下町期後期を、宿は宿場町期を表す。

### 2. 出土状況

本書では遺構出土の一括資料を重視し、中でも出土量の多い遺構を抽出した。

SK30（第32図1～7） 鉄釉小壺、鉄釉大鉢、土師器皿、瓦器風炉が出土した。いずれも15世紀後半の時期である。土師器皿はすべて底部に糸切り痕がある。

SD79（第33、34図8～37） 瀬戸・美濃窯の製品では天目茶碗、平碗、緑釉皿、三足盤、卸し皿、香炉、四耳壺、播鉢等がある。15世紀後半のものが多いが、一部の天目茶碗と稜皿は大窯Ⅰa





期の製品である。土師器皿の底部には糸切り痕が残る。その他に、瓦質の壺や14世紀後半の常滑窯の甕も出土している。

SD66 (第35～43図38～181) 瀬戸・美濃窯の製品では四耳壺、平椀、鉢、香炉、皿等の窖窯Ⅳ期後半の一群と天目茶椀、托付椀、稜皿、丸皿、双耳壺、重圈皿、播鉢等の大窯Ⅰa期の一群の遺物が出土している。71の稜皿底部には篋によってつけられた「×」印がある。土師器には茶釜型羽釜・内耳鍋・皿がある。皿には手づくね成形とロクロ成形がある。ロクロ成形の皿のなかに墨書のあるものが7点ある。全て口径10cmから12cm、器高2cmから2.5cmの大きさで、粘土で積み上げた後、ロクロ成形をした同タイプのものである。7点とも墨書後に底部が穿孔されている。176の墨書は「小人」とも読め、「人」と書かれた後、異筆によって「小」が書き加えられたと思われる。これらの底部穿孔の墨書土師器皿は当時の信仰を考える上で貴重な資料である。その他に墨書はされていないが、底部穿孔皿が2点、側面に穿孔のある皿が1点出土している。それ以外の遺物には瓦質の香炉と鉢があり、鉢については黒色で篋磨きが丁寧に施されている。

NS01 (第44～46図 182～239) 瀬戸・美濃窯の製品では平椀、托付椀、縁釉皿、鉢、双耳壺など窖窯最末の一群と天目茶椀、丸皿、稜皿、重圈皿、双耳壺等の大窯Ⅰa期の製品が出土している。播鉢はⅠb期に下るものもある。土師器には内耳鍋、手づくねの皿、ロクロ成形の皿がある。

SD85 (第47～49図 240～280) 瀬戸・美濃窯の製品では、水注、卸し皿など13世紀代のもの、14世紀後半の三足盤、15世紀代の天目茶椀、卸し皿、仏花瓶、双耳壺、三足盤等の若干時期の遡るものと天目茶椀、托付椀、稜皿、印花文皿、重圈皿、播鉢等の大窯Ⅰa期の時期の製品がある。264の内面灰釉・外面鉄釉の天目茶椀(黄天目)と265の稜皿はⅡa期のものである。土師器には羽釜、内耳鍋、ロクロ成形の皿がある。他に常滑窯の14世紀後半の甕と15世紀後半の甕が出土している。

SD08 (第50～55図 281～357) 瀬戸・美濃窯の製品では天目茶椀、托付椀、縁釉皿など窖窯Ⅳ期の一群、天目茶椀、丸椀、印花文皿、ひだ皿、丸皿、重圈皿、播鉢等の大窯Ⅰa・b期の一群、内側面丸彫りの菊皿、稜皿、丸皿、内側面に二段の段がある鉢、重圈皿等の大窯Ⅱ期の製品がある。284の天目茶椀の高台と298の丸皿の底部には篋による文字か記号らしきものが書かれている。318は破片からの推定復元図であるが、上の部分は蓋になるものと思われる。胴部には透かしの窓があり、底部には中央に焼成前の推定6cmの穴が開いている。図示した以外につまみ状の破片もあり、円筒形をした燈籠になるものと思われる。343は瓦質の三足付風炉であると思われる。土師器には大型の羽釜、茶釜型羽釜、内耳鍋、手づくね皿、ロクロ成形の皿がある。331の土師器皿には側面に4カ所と、底部にも1ヶ所の穿孔があり、底部穿孔の部分を中心に篋による直線が12本巡っている。335の底部には「さうてい」の墨書が記されている。

SD14 (第56～59図 358～437) 瀬戸・美濃窯の製品には縁釉皿、鉢、香炉等の15世紀後半の瀬戸窯の一群と天目茶椀、托付椀、端反皿、德利、播鉢等の大窯Ⅰa・b期の製品、天目茶椀、稜皿、重圈皿、播鉢等の大窯Ⅱa・b期の製品がある。土師器には羽釜、内耳鍋、手づくね皿、

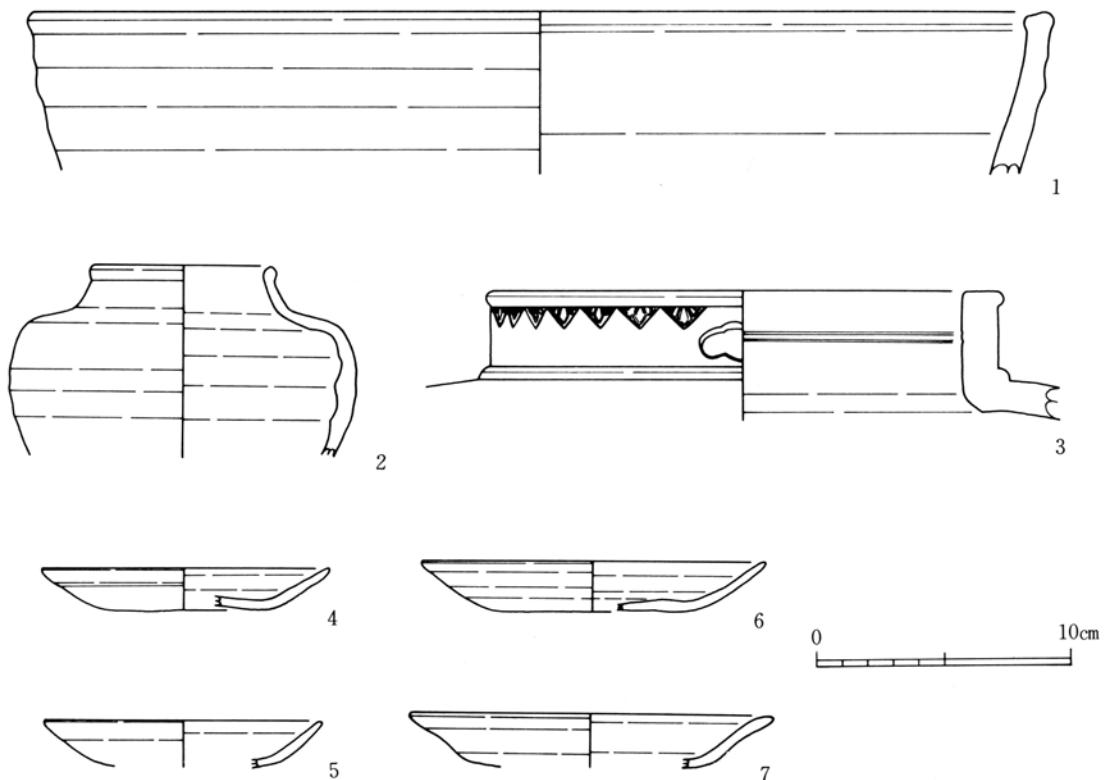
ロクロ成形の皿、小型の器種で小壺・つまみのある蓋がある。その他に土鈴も出土している。

410は15世紀後半の常滑窯の甕である。

SD57 (第60図 438～457) 天目茶椀、稜皿、播鉢、双耳鍋、重圈皿等の大窯Ⅰa期の製品が主体である。440の底部には篋による文字か記号らしきものがある。456は灰色を呈した瓦質の風炉である。土師器の皿はロクロ成形のもので底部に糸切り痕が残っている。

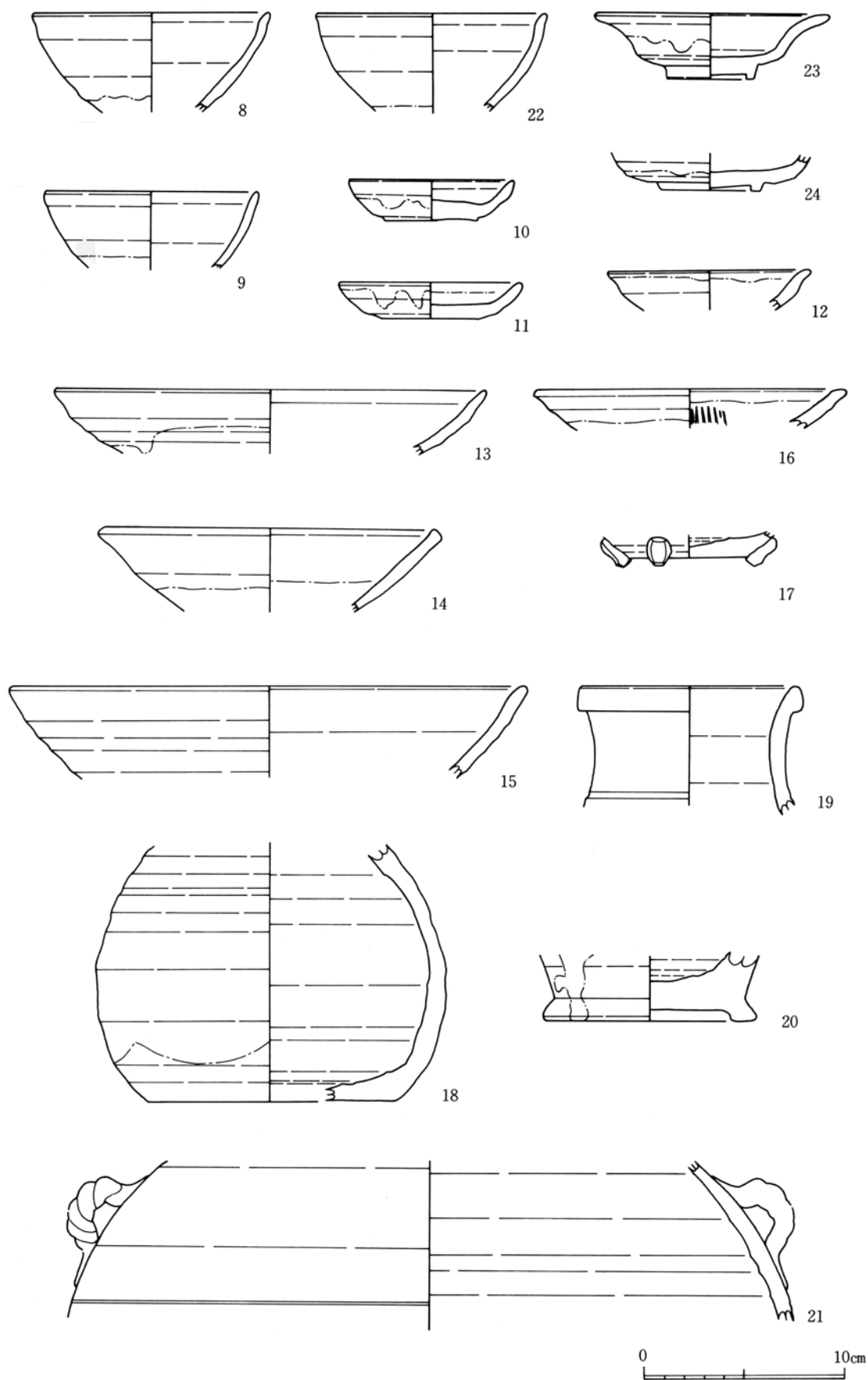
SD62 (第61～63図 458～497) 緑釉皿、卸し皿、鉢等の15世紀代の瀬戸窯の製品と常滑窯の三筋壺・甕の古い一群が若干混じるが、主体となるのは天目茶椀、丸椀、托付椀、緑釉皿、ひだ皿、香炉、重圈皿、播鉢等の大窯Ⅰ期の製品とⅡa期の天目茶椀、丸皿、Ⅱb期の天目茶椀の高台片等である。土師器には手づくねの皿、ロクロ成形の皿があり、ロクロ成形のもの底部には糸切り痕が残る。

SD16 (第64～71図 498～639) 出土遺物がかなり時期幅をもっており、天目茶椀、平椀、鉢、縁釉皿、香炉、甕、双耳壺、四耳壺等の窖窯Ⅳ期の一群をはじめ、Ⅰ期からⅤ期までの大窯期の天目茶椀、鎬蓮弁文の丸椀、筒型椀、稜皿、ひだ皿、菊皿、丸皿、徳利、黄瀬戸向付等の製品がある。しかし大窯Ⅳ期の製品は出土していない。土師器には手づくね皿とロクロ成形の4種類の皿があり、ロクロ成形のもの底部には糸切り痕がある。その他に双耳鍋と内耳鍋、スタンプ文様の施された瓦質の小壺、風炉がある。



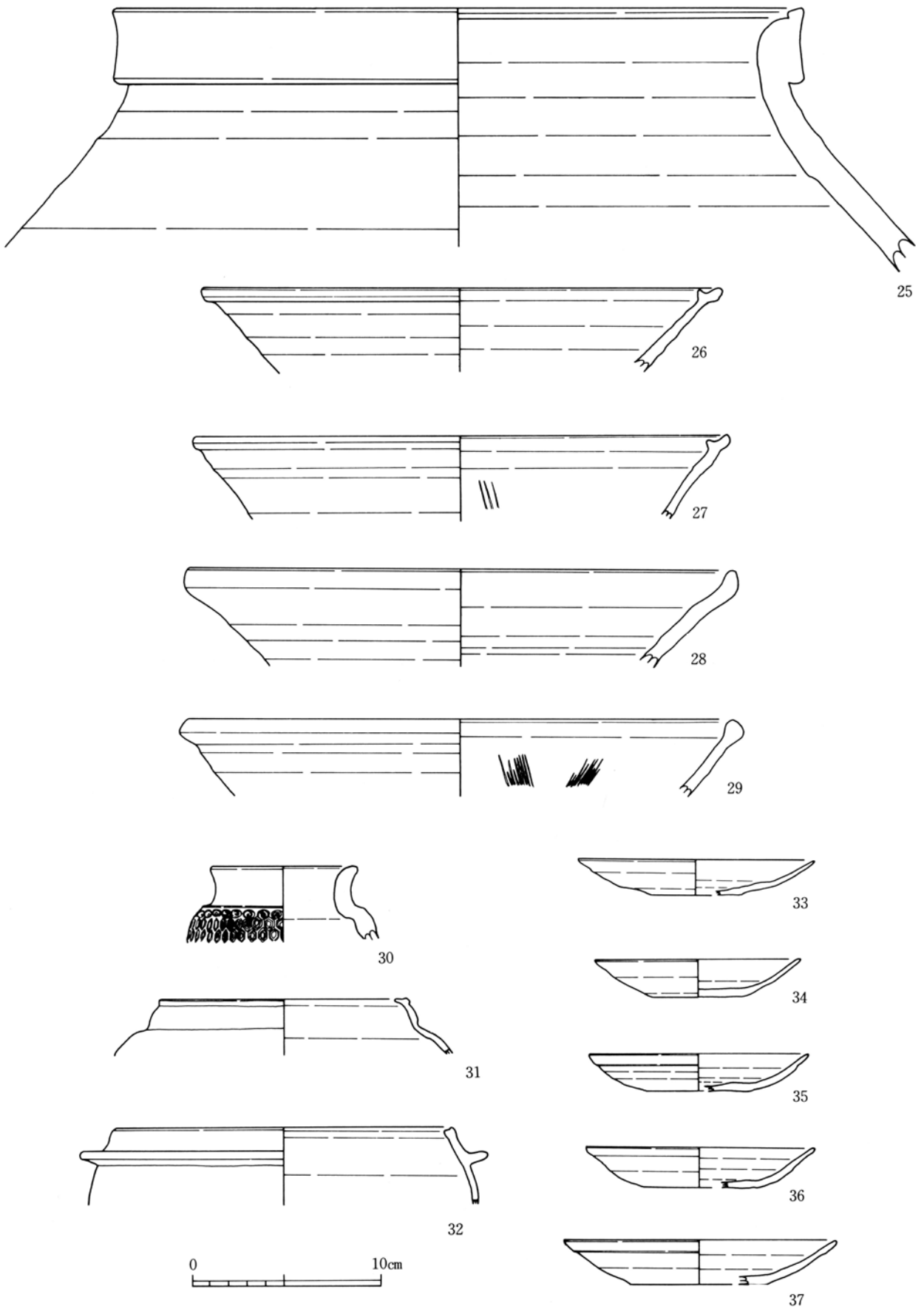
第32図 城下町期の遺物 (1)

SK30



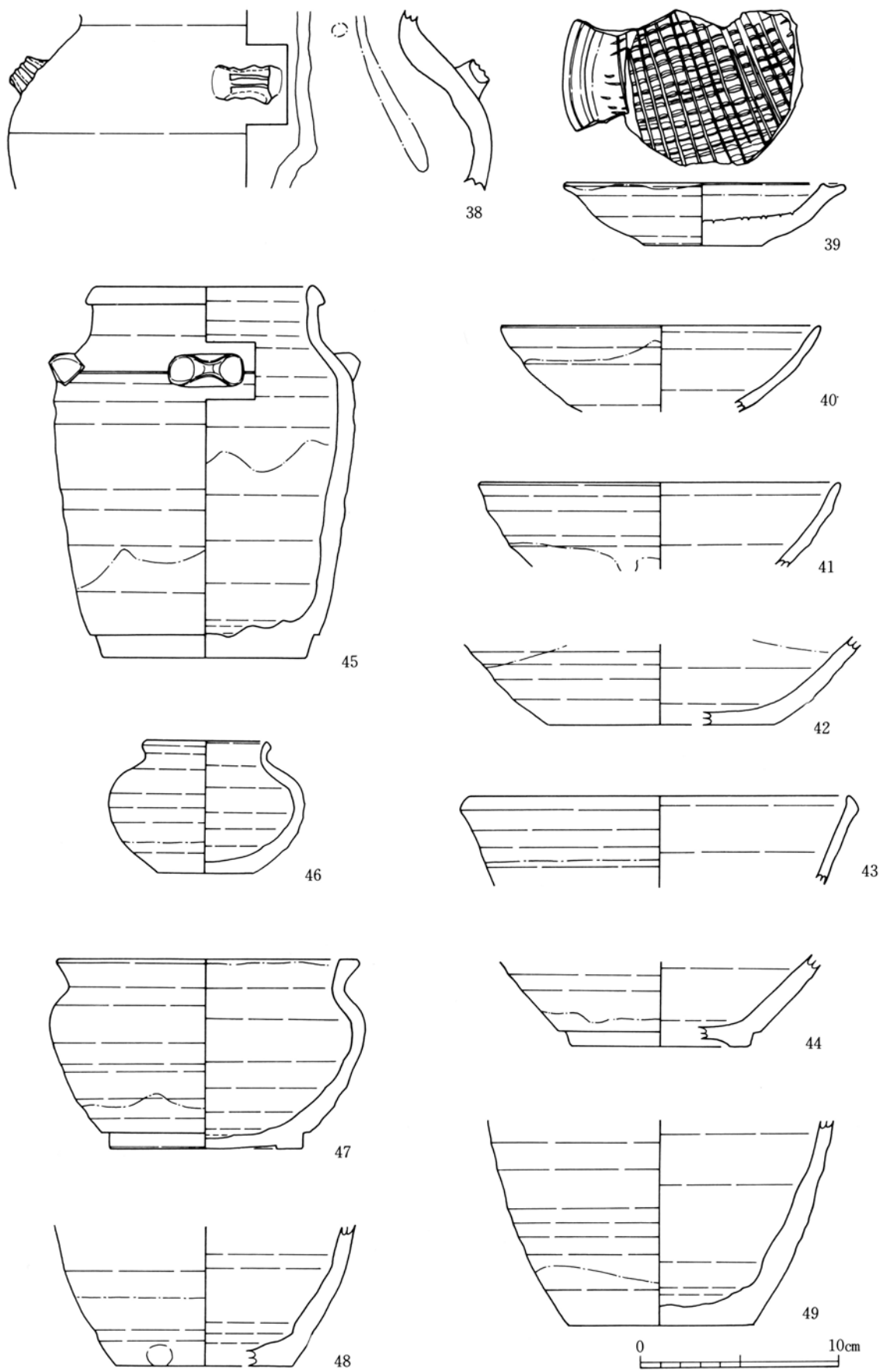
第33図 城下町期の遺物 (2)

SD79 (1)



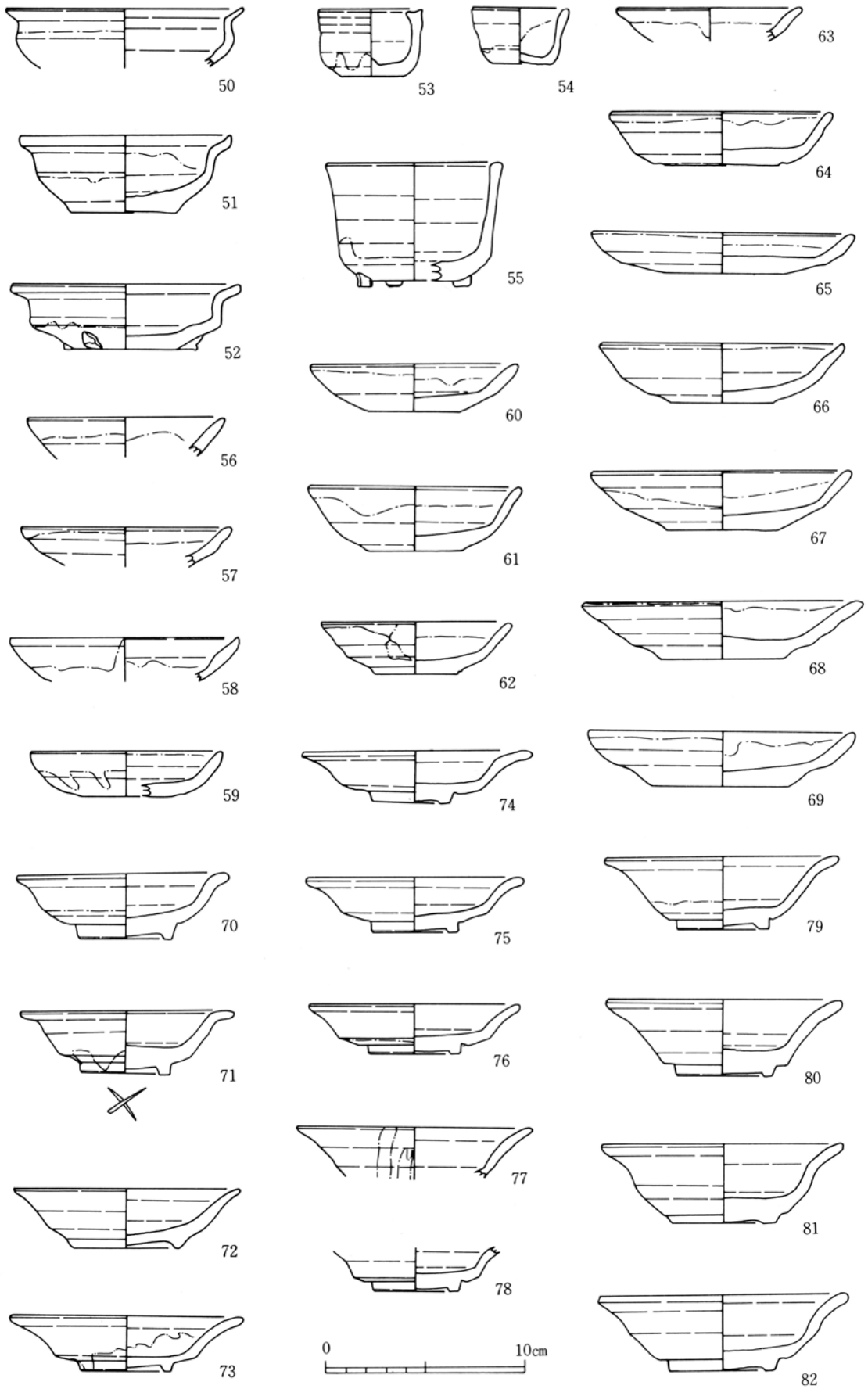
第34図 城下町期の遺物 (3)

SD79 (2)



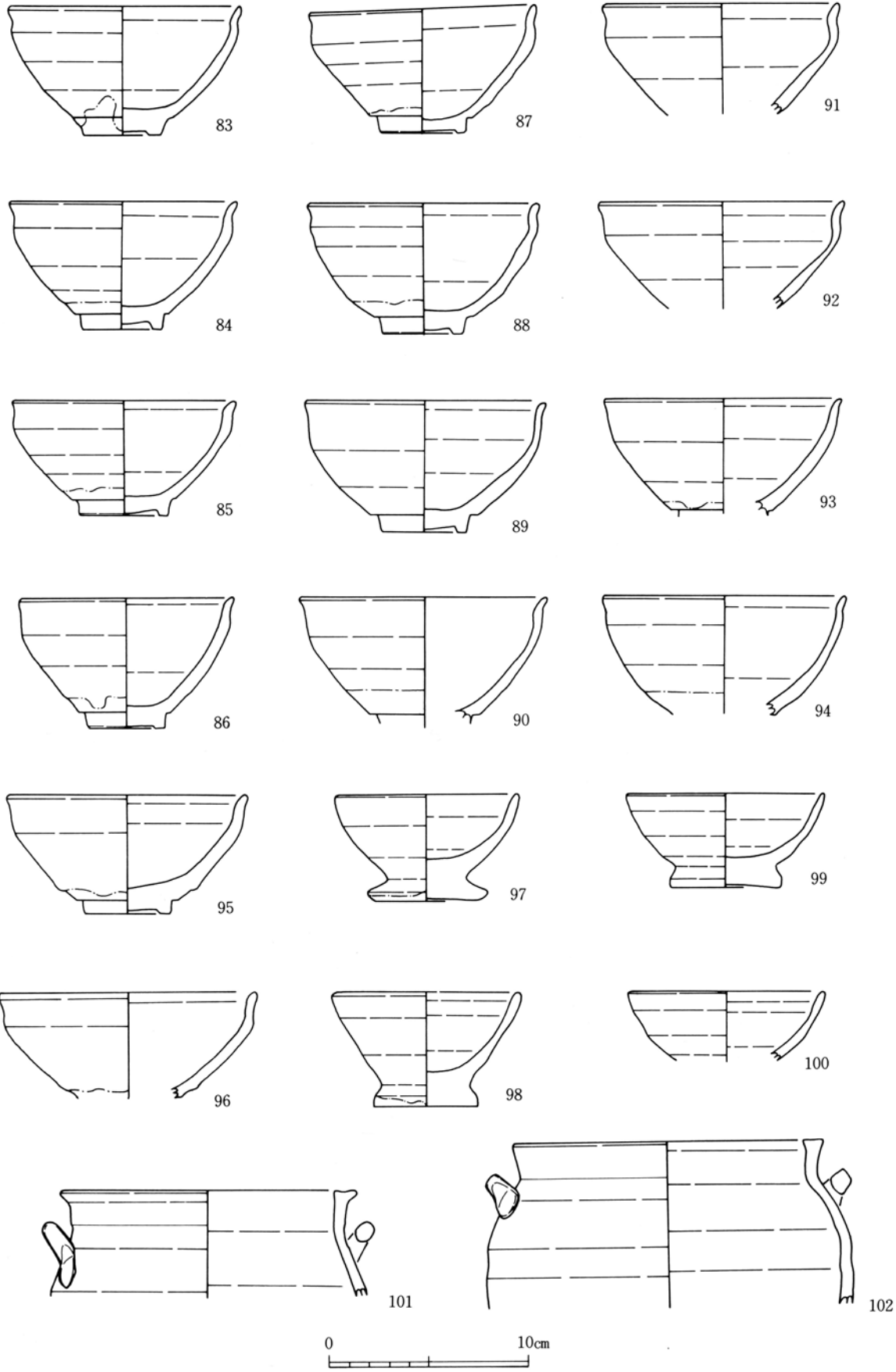
第35図 城下町期の遺物 (4)

SD66 (1)



第36図 城下町期の遺物 (5)

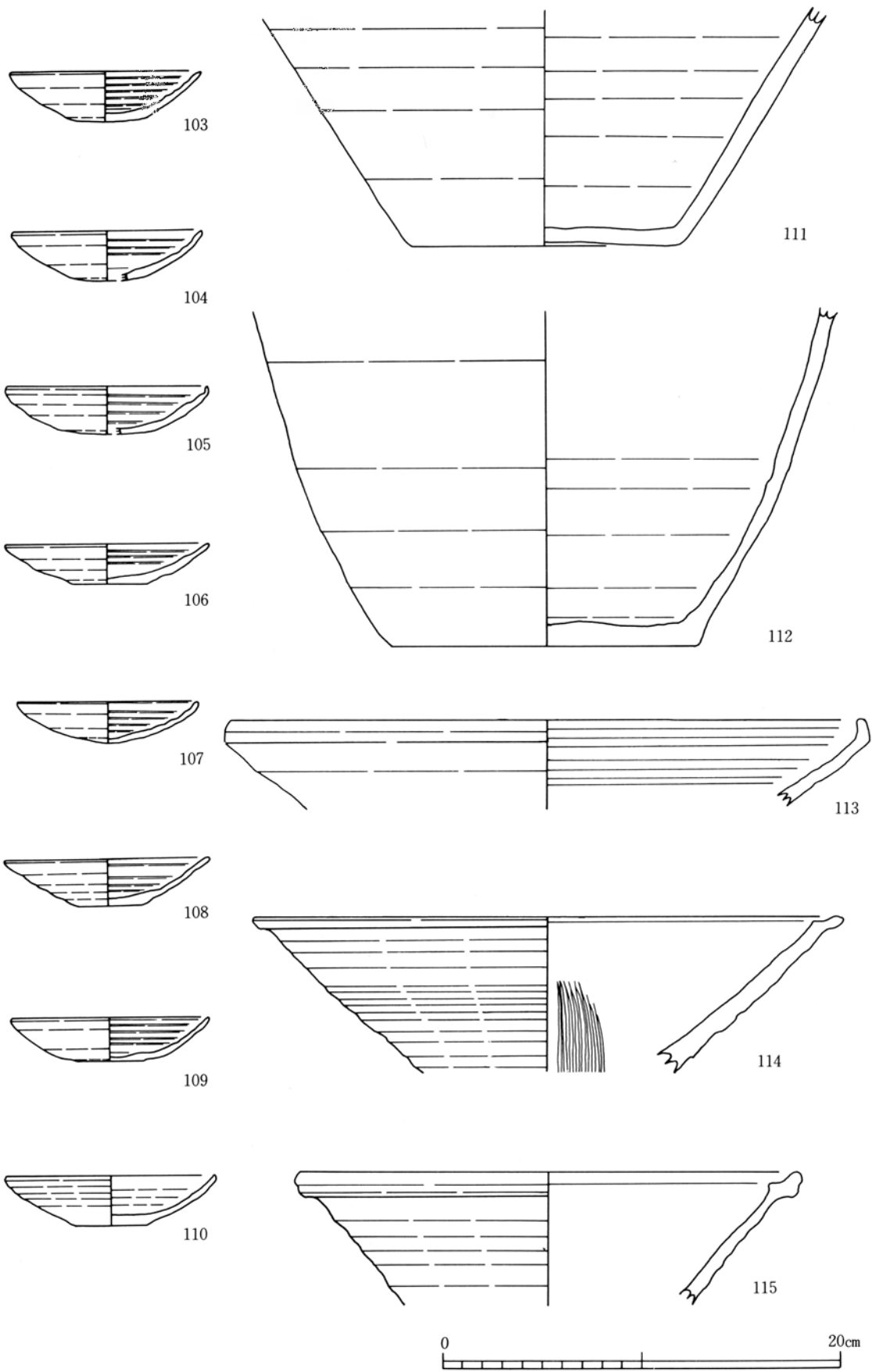
SD66 (2)



第37図 城下町期の遺物 (6)

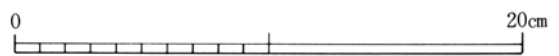
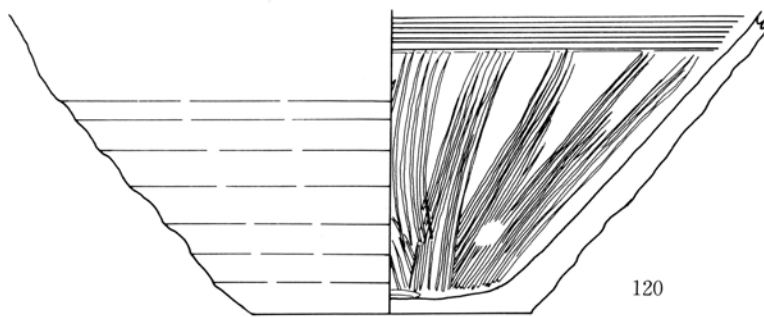
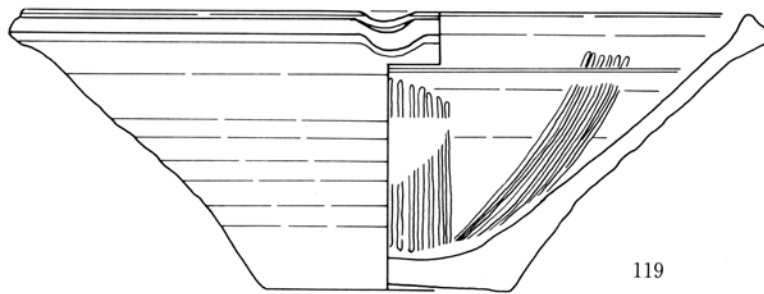
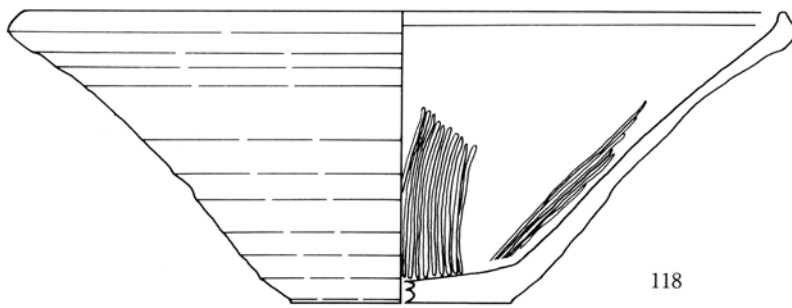
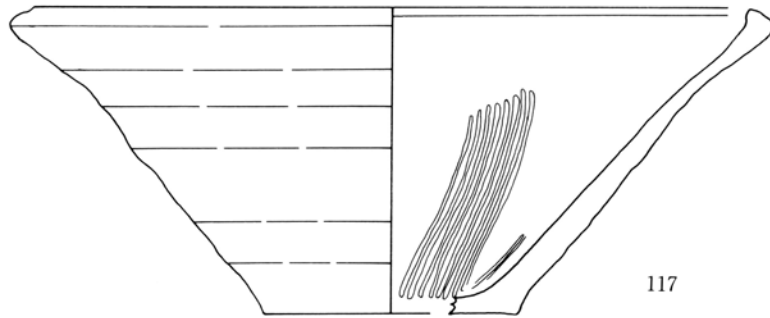
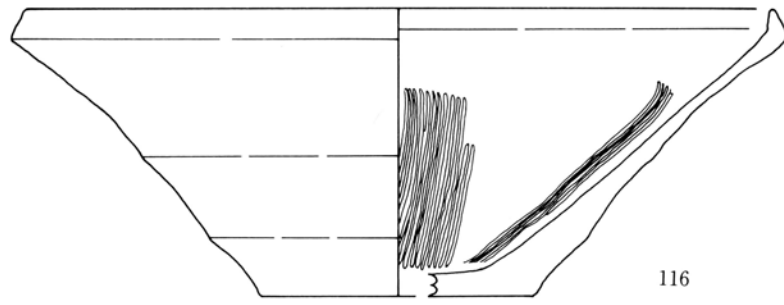
SD66 (3)





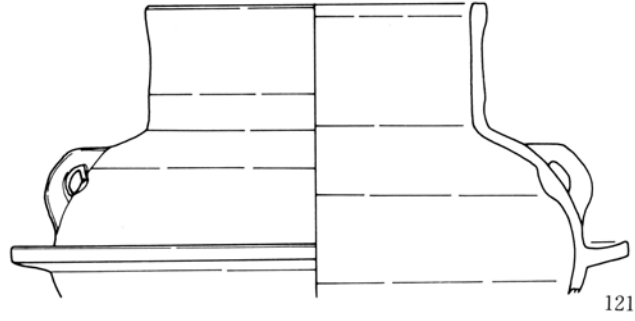
第38図 城下町期の遺物 (7)

SD66 (4)

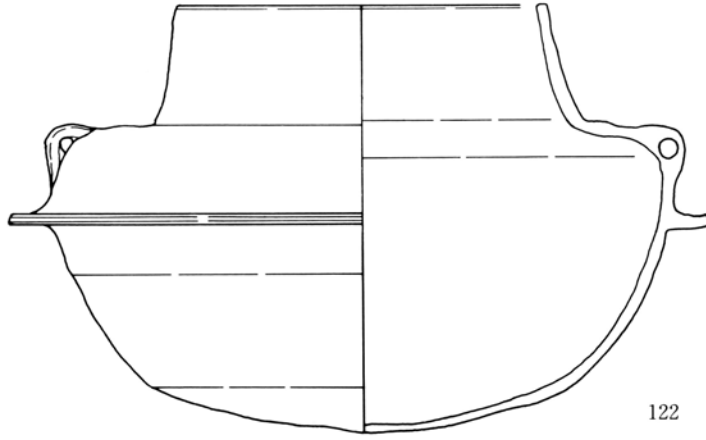


第39図 城下町期の遺物 (8)

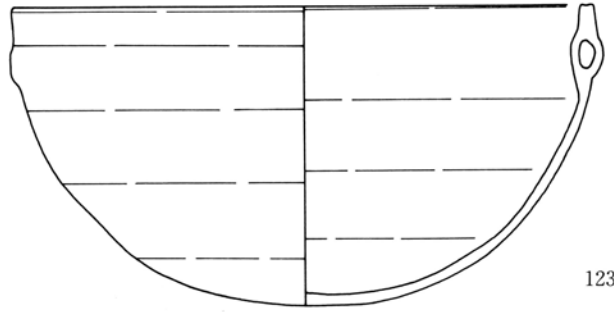
SD66 (5)



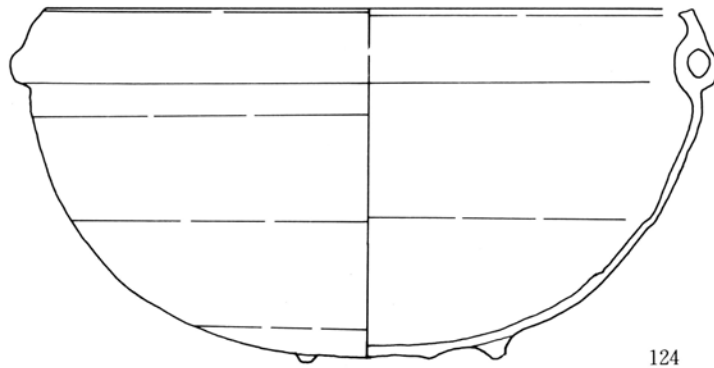
121



122



123

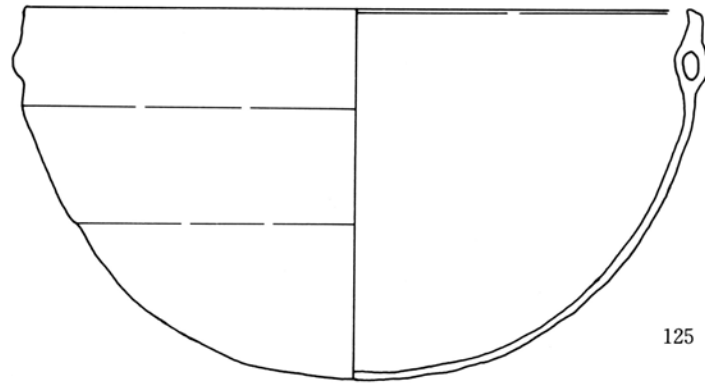


124

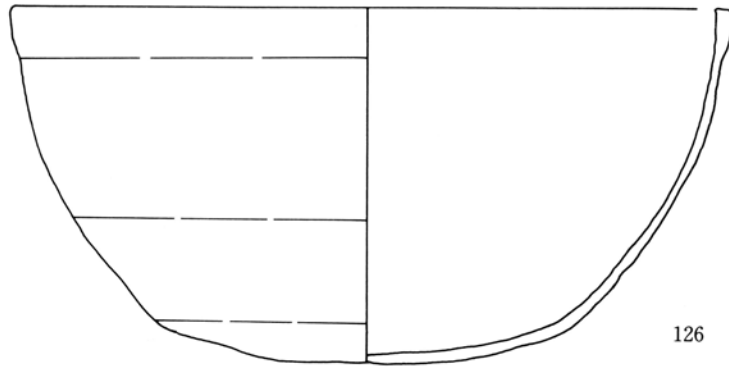


第40図 城下町期の遺物 (9)

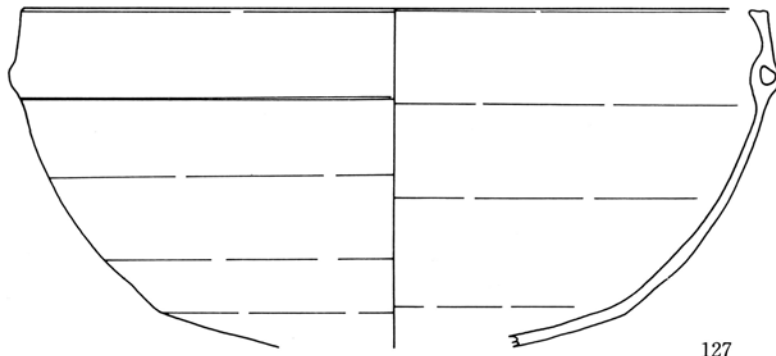
SD66 (6)



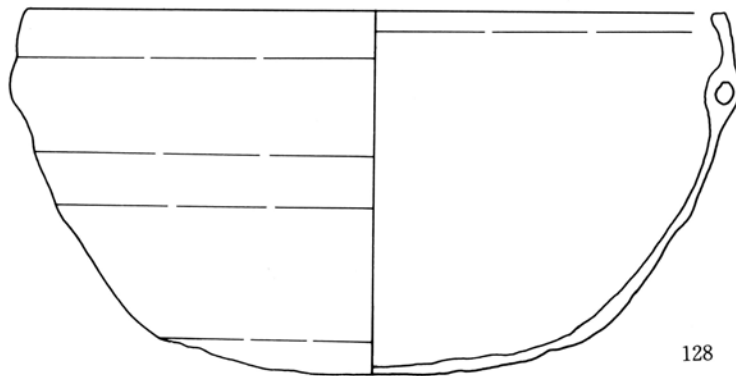
125



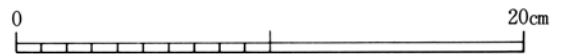
126



127

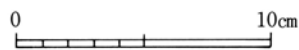
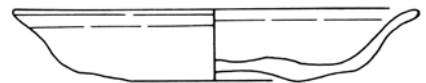
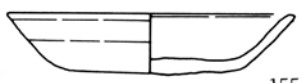
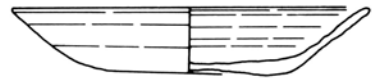
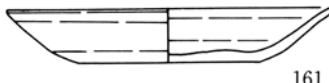
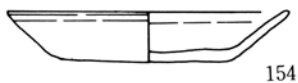
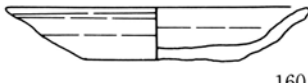
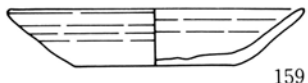
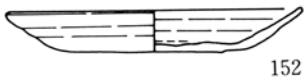
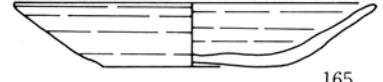
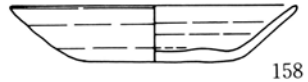
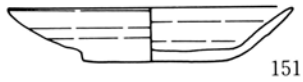
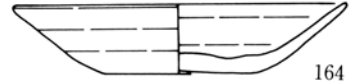
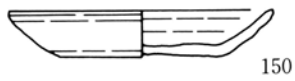
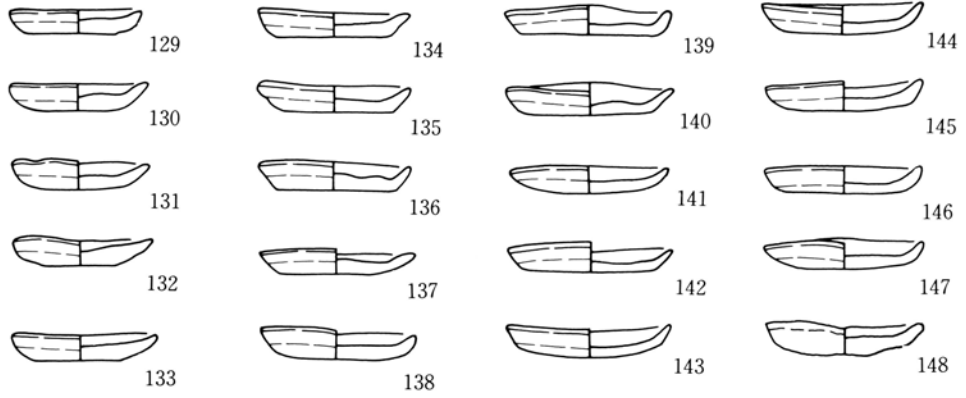


128



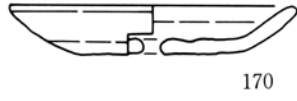
第41図 城下町期の遺物 (10)

SD66 (7)

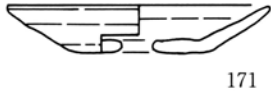


第42図 城下町期の遺物 (1)

SD66 (8)



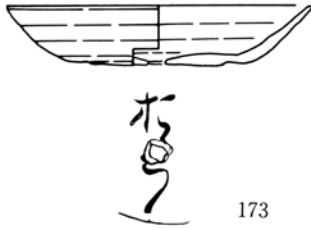
170



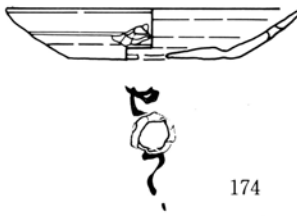
171



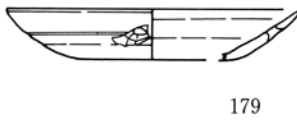
172



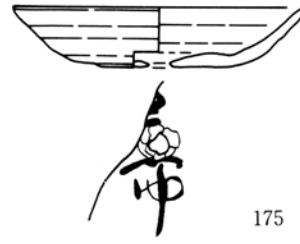
173



174



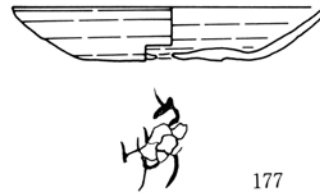
179



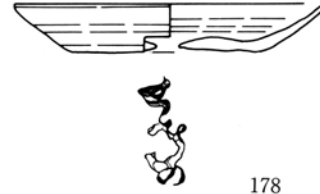
175



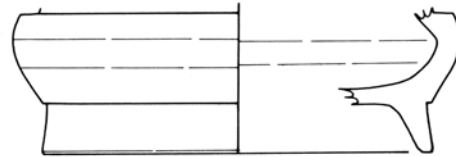
176



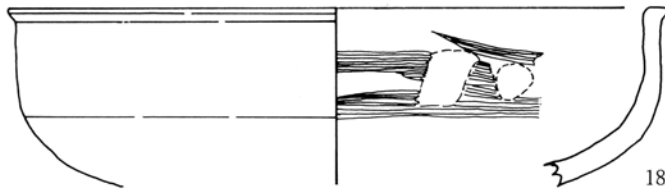
177



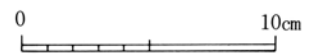
178



180

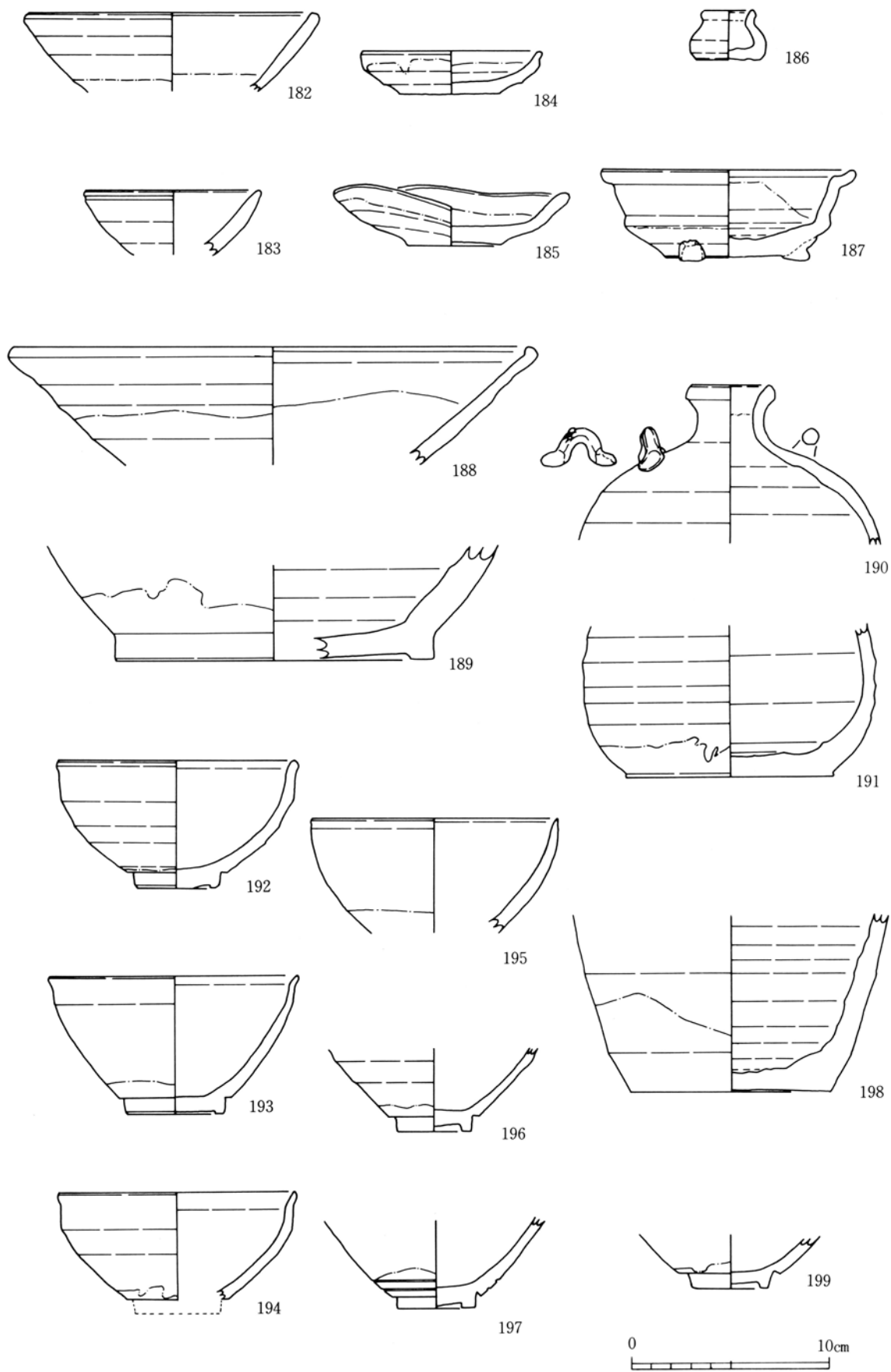


181



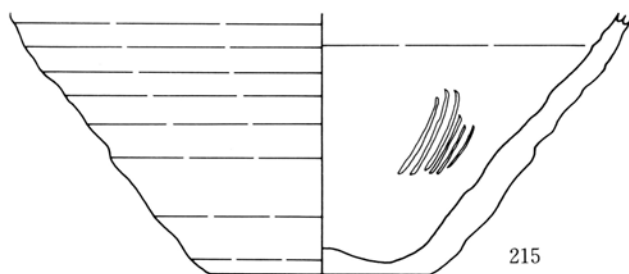
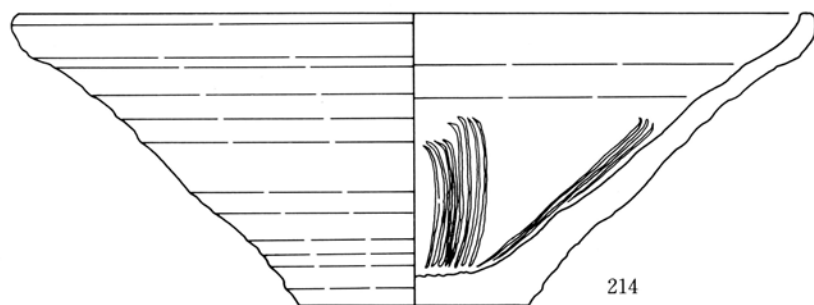
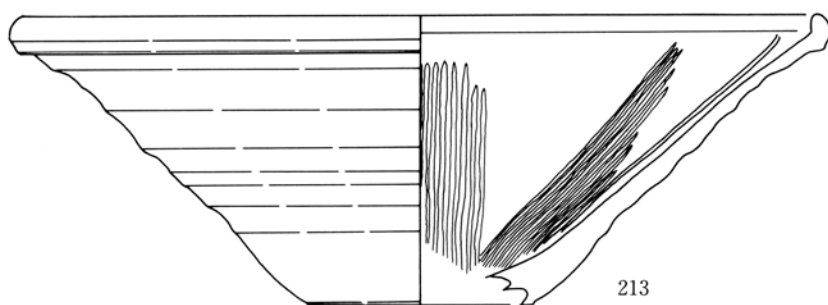
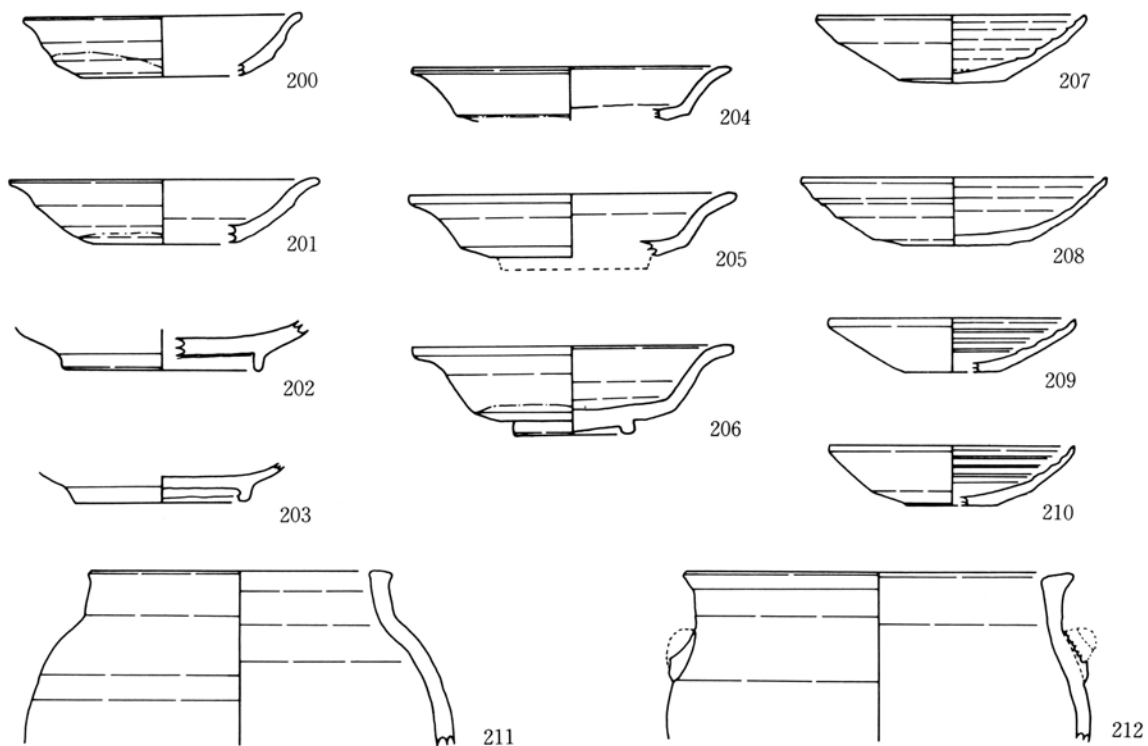
第43図 城下町期の遺物 12

SD66 (9)



第44図 城下町期の遺物 (13)

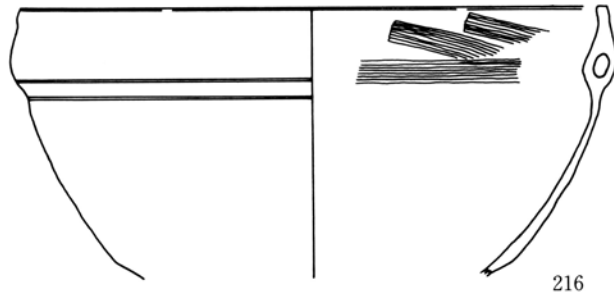
NS01 (1)



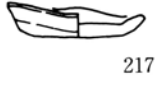
第45図 城下町期の遺物 (14)

NS01(2)





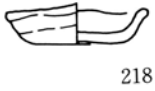
216



217



226



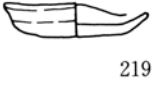
218



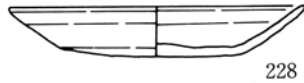
227



234



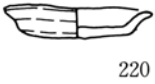
219



228



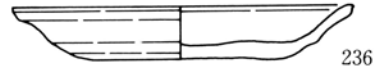
235



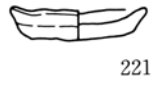
220



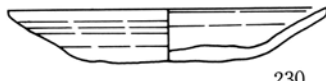
229



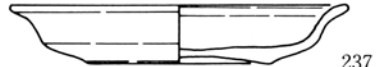
236



221



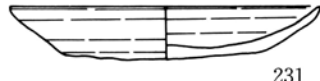
230



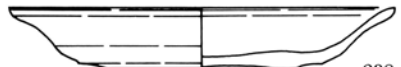
237



222



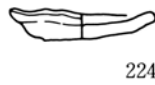
231



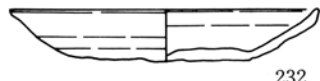
238



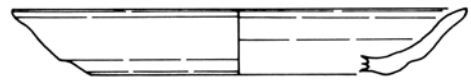
223



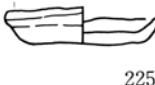
224



232



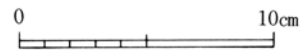
239



225

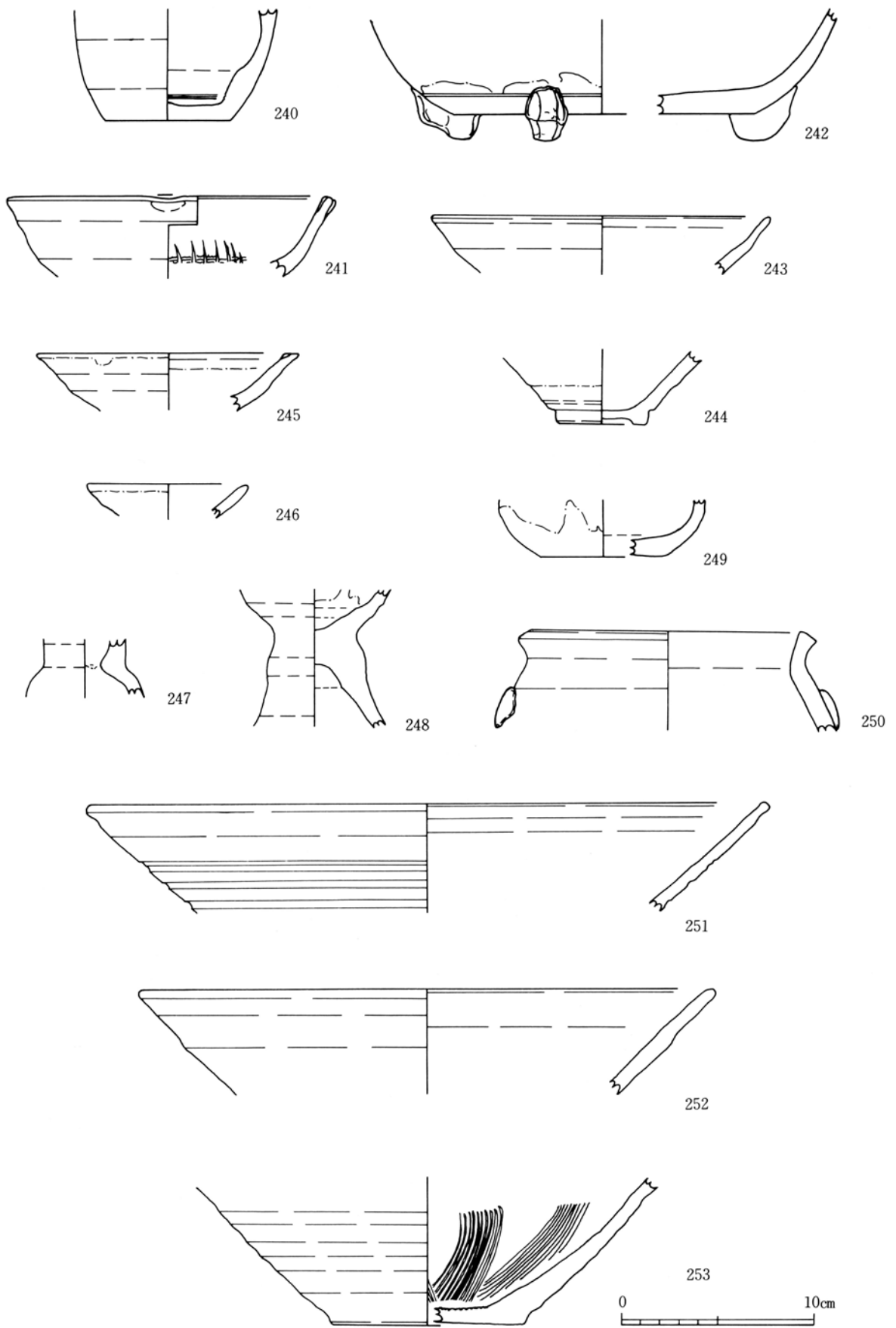


233



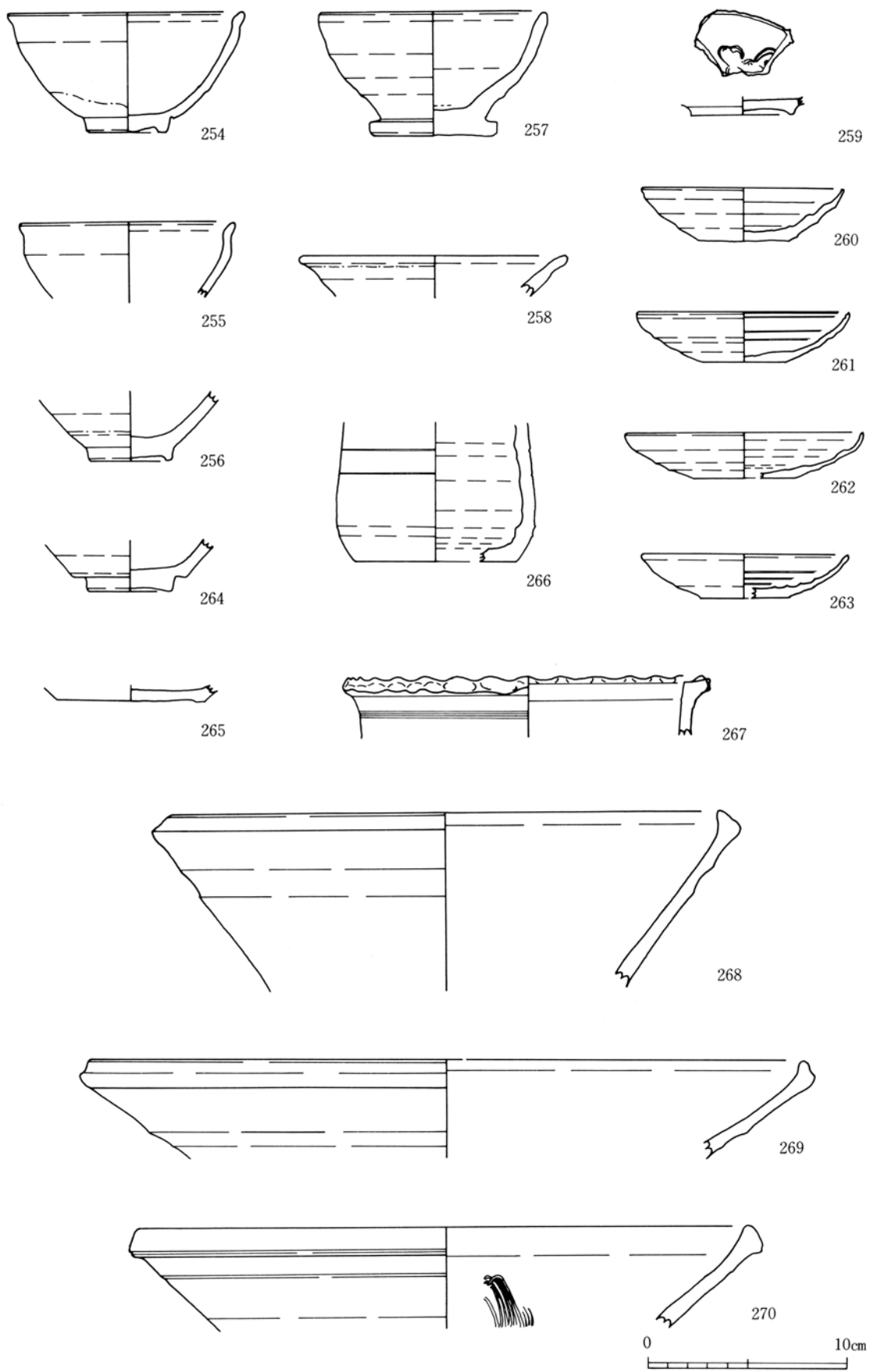
第46図 城下町期の遺物 (15)

NS01 (3)



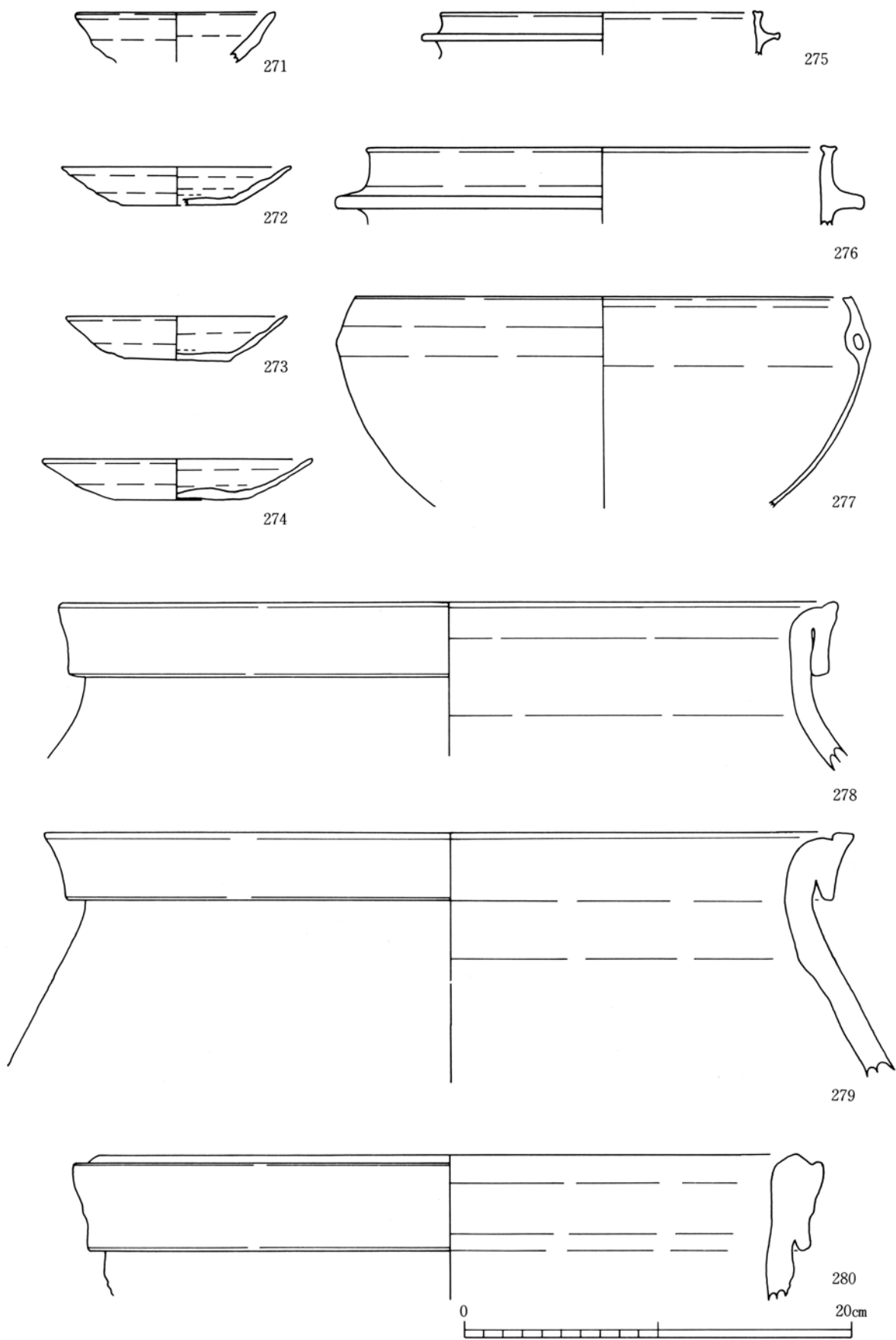
第47図 城下町期の遺物 16

SD85 (1)



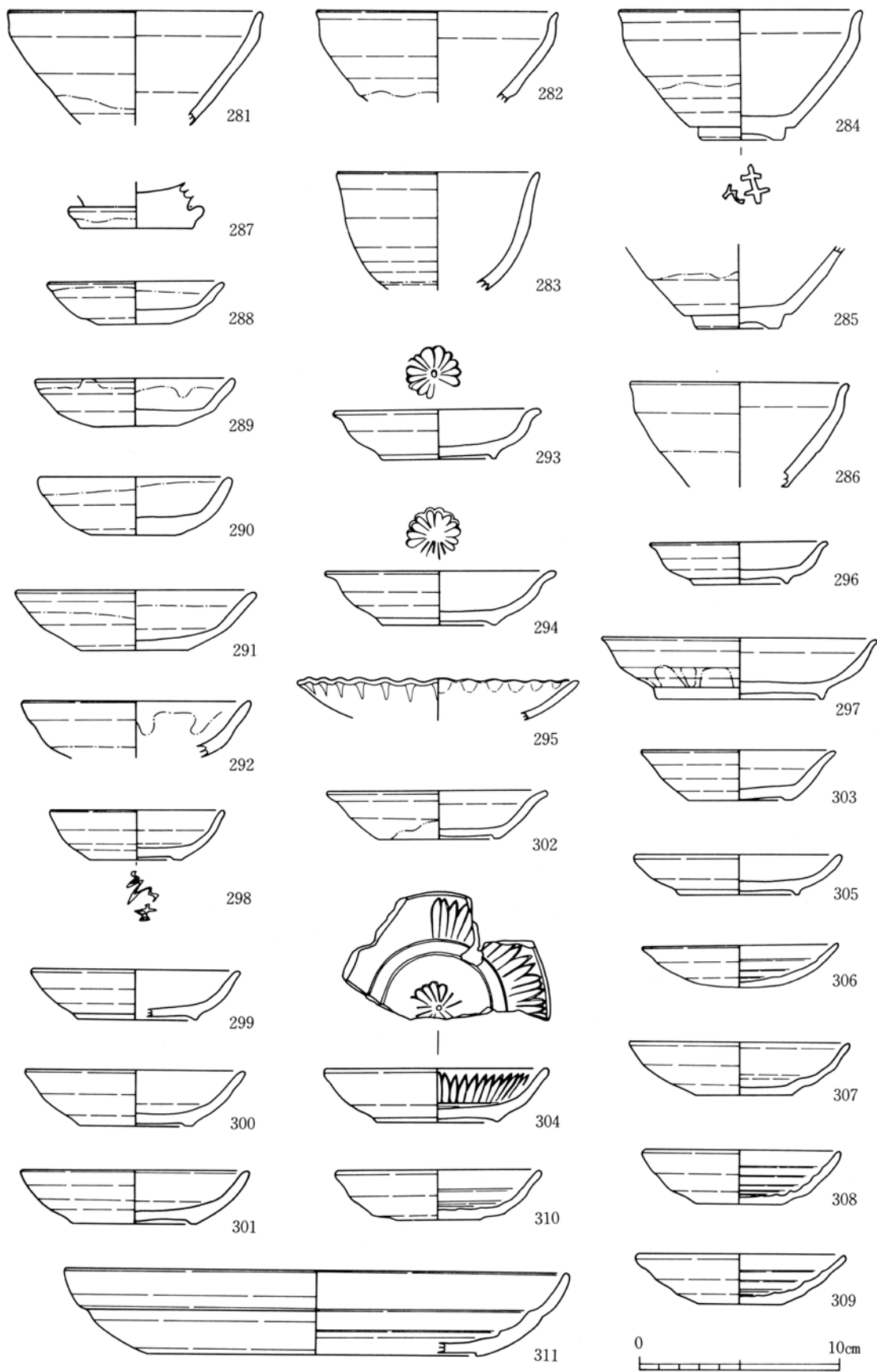
第48図 城下町期の遺物 (17)

SD85 (2)



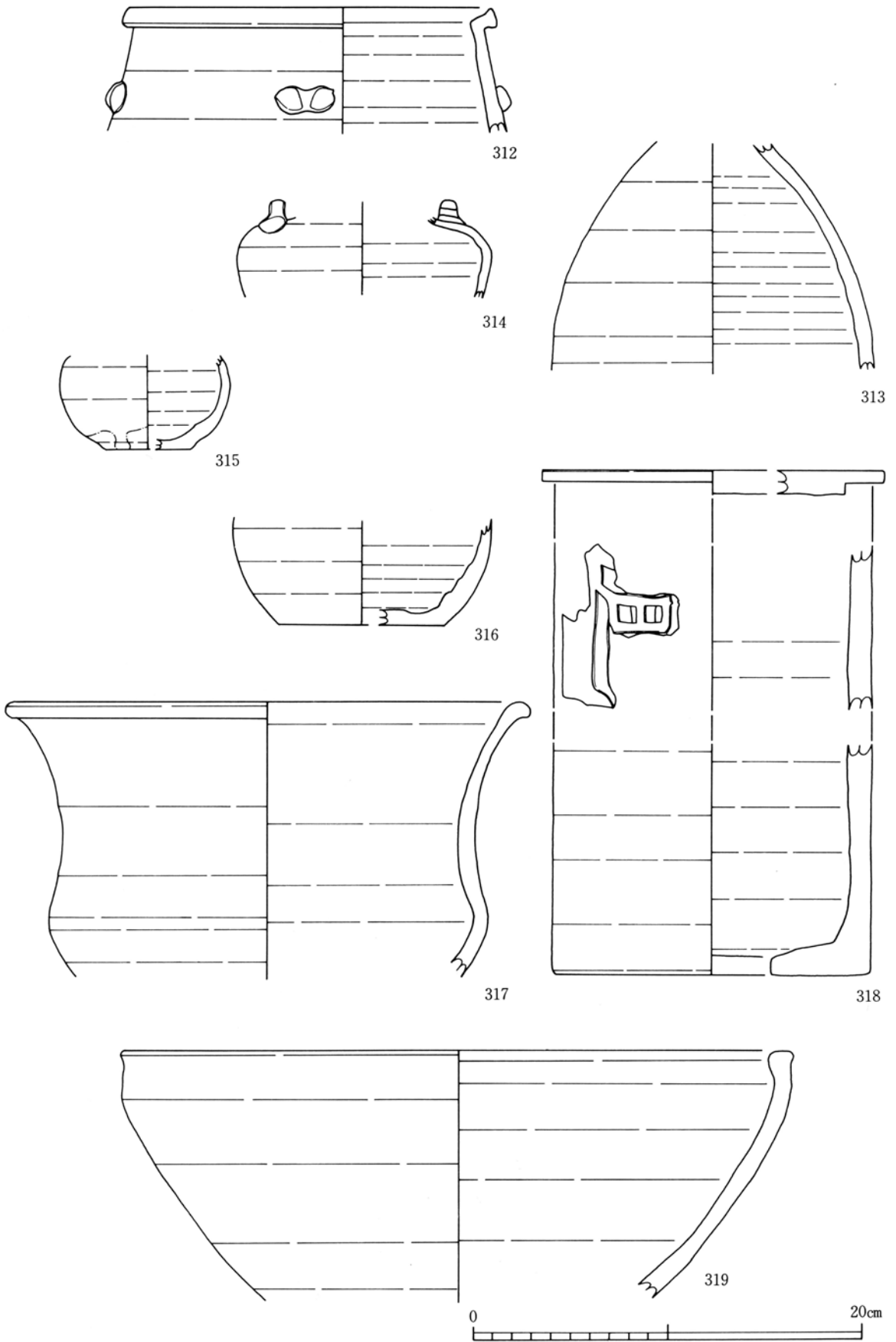
第49図 城下町期の遺物 18

SD85 (3)



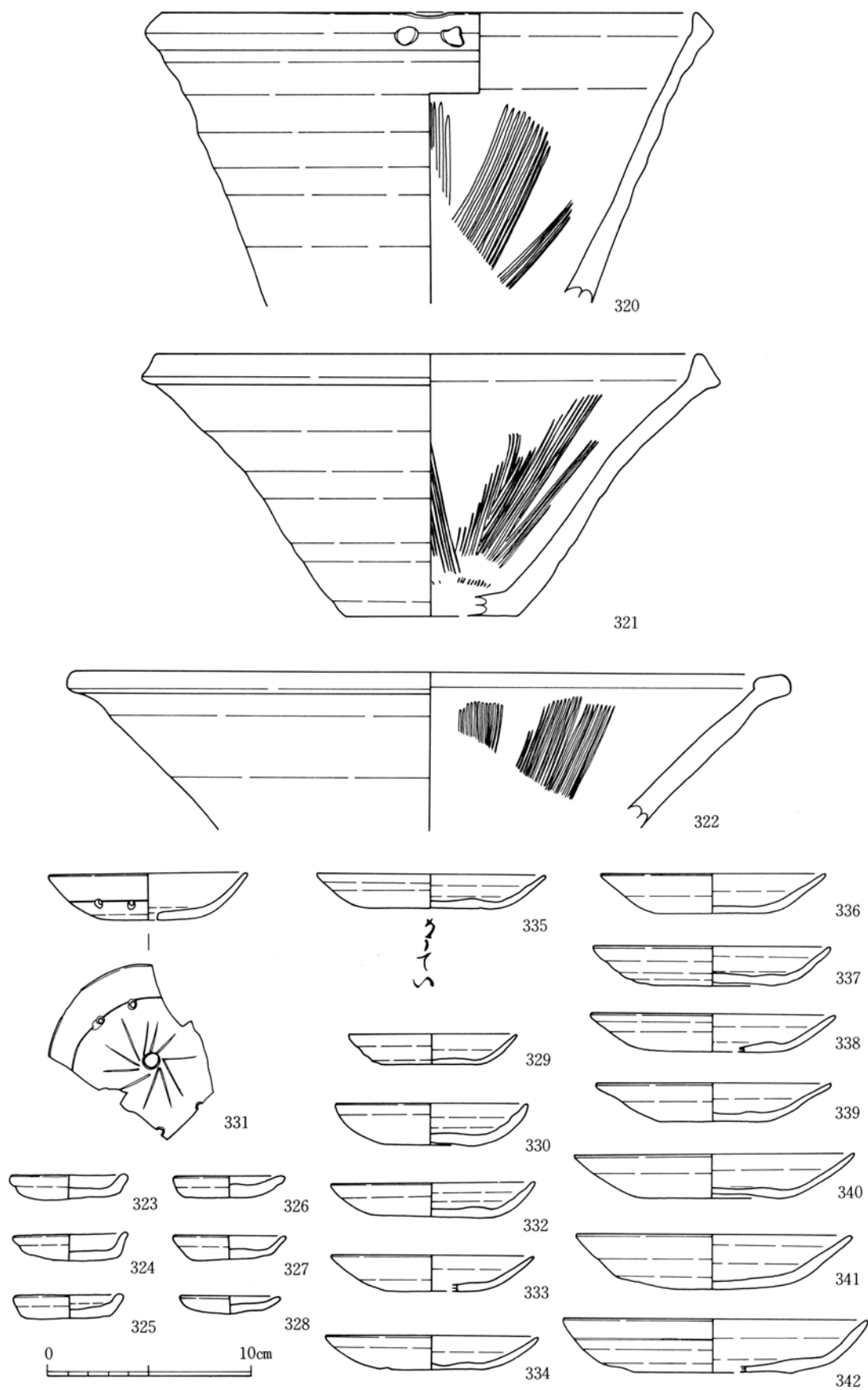
第50図 城下町期の遺物 (19)

SD08 (1)



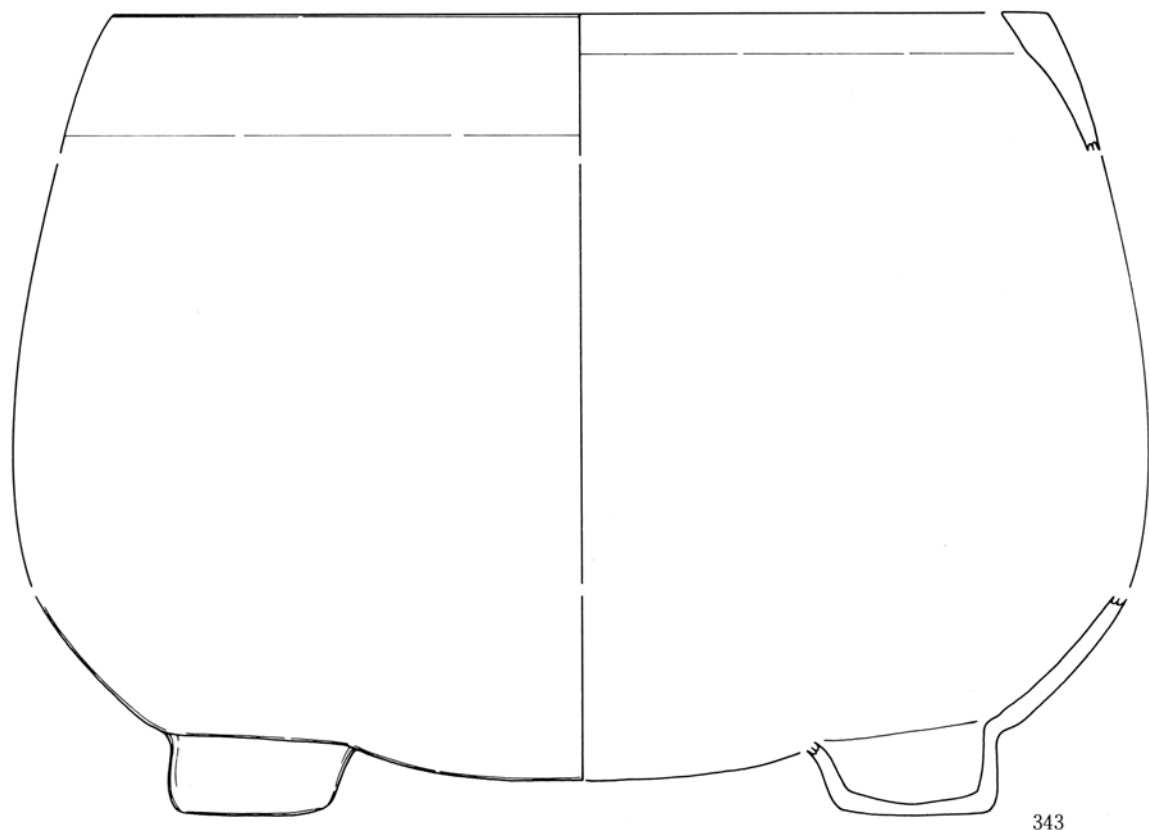
第51図 城下町期の遺物(20)

SD08 (2)

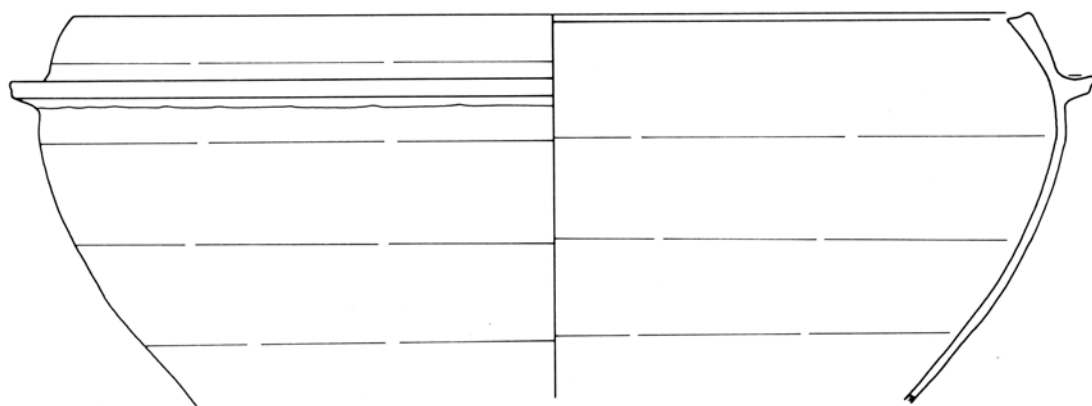


第52図 城下町期の遺物 (2)

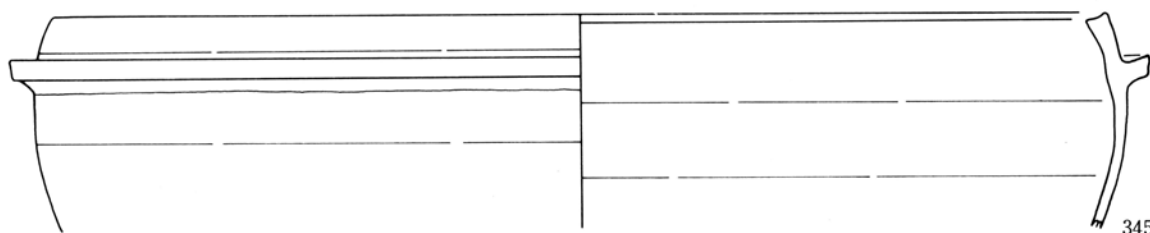
SD08 (3)



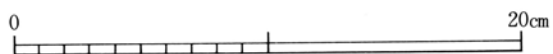
343



344



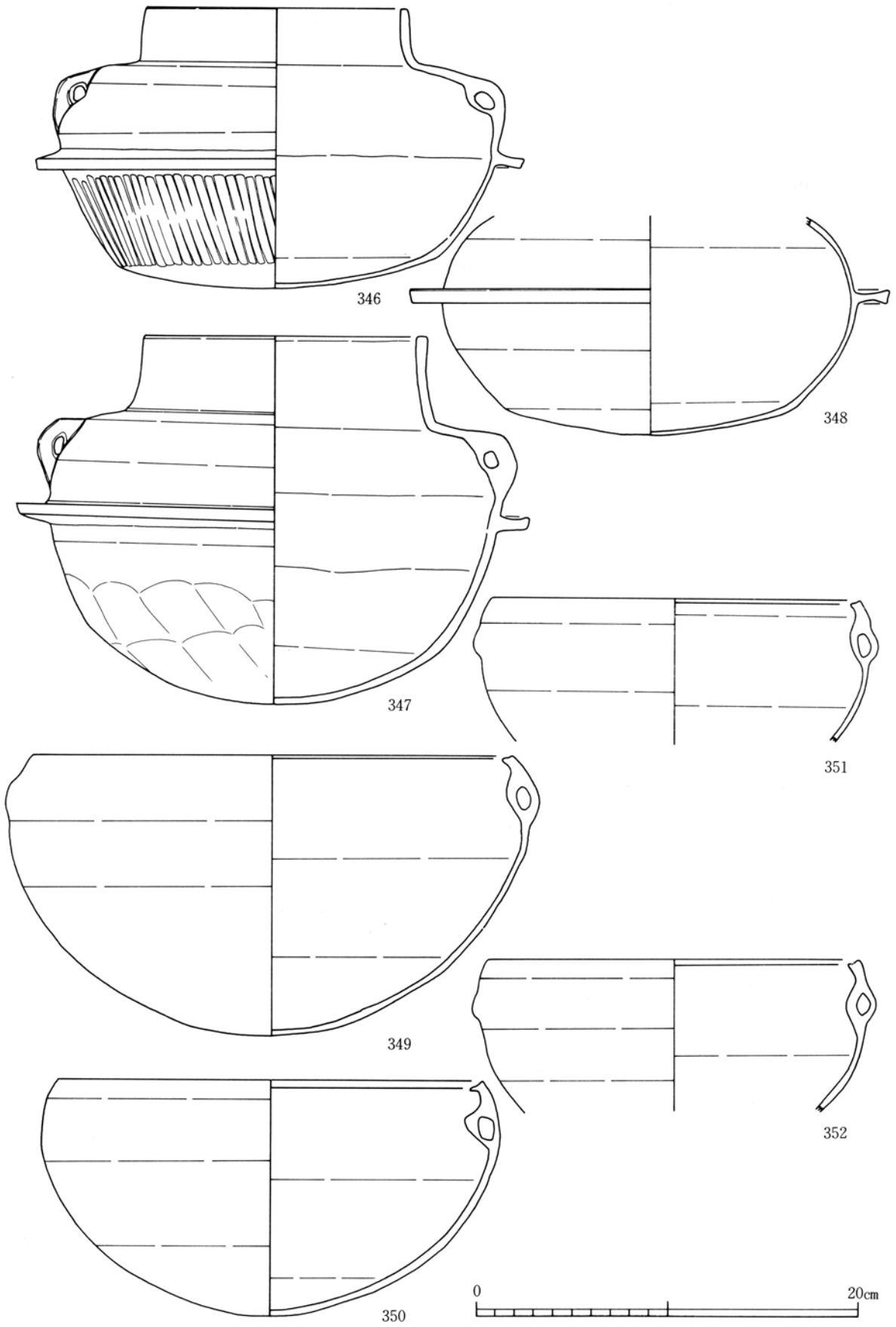
345



第53図 城下町期の遺物 (22)

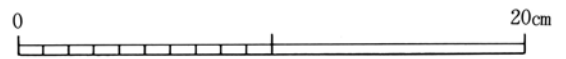
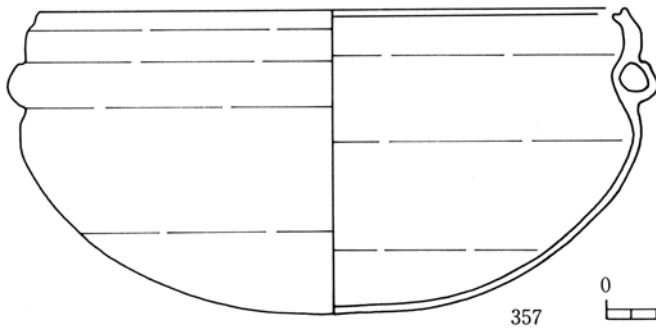
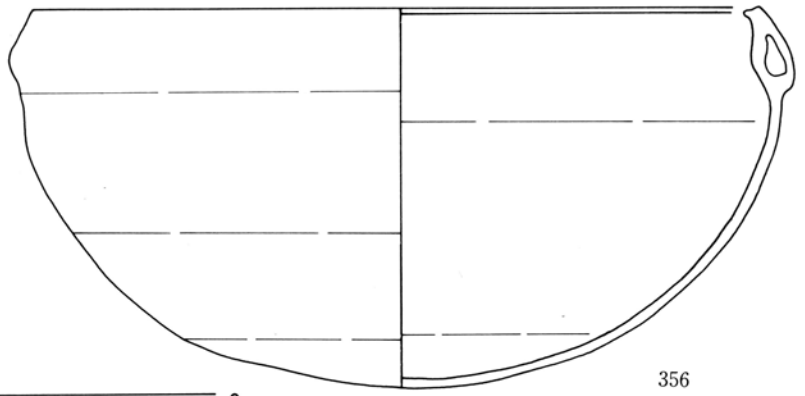
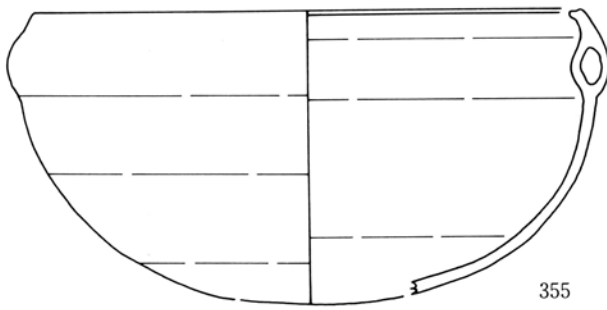
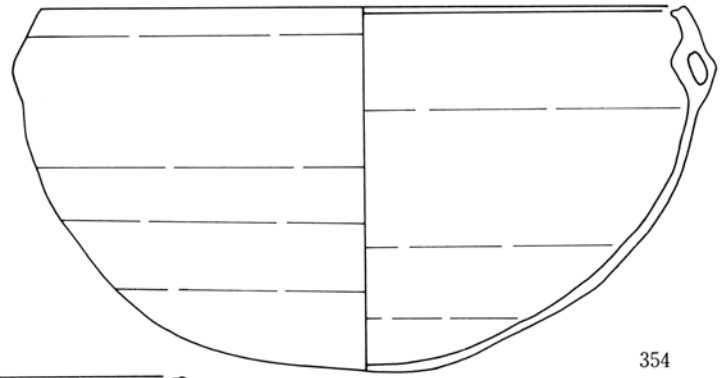
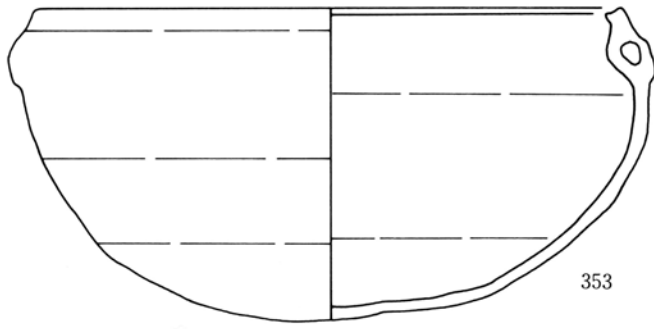
SD08 (4)





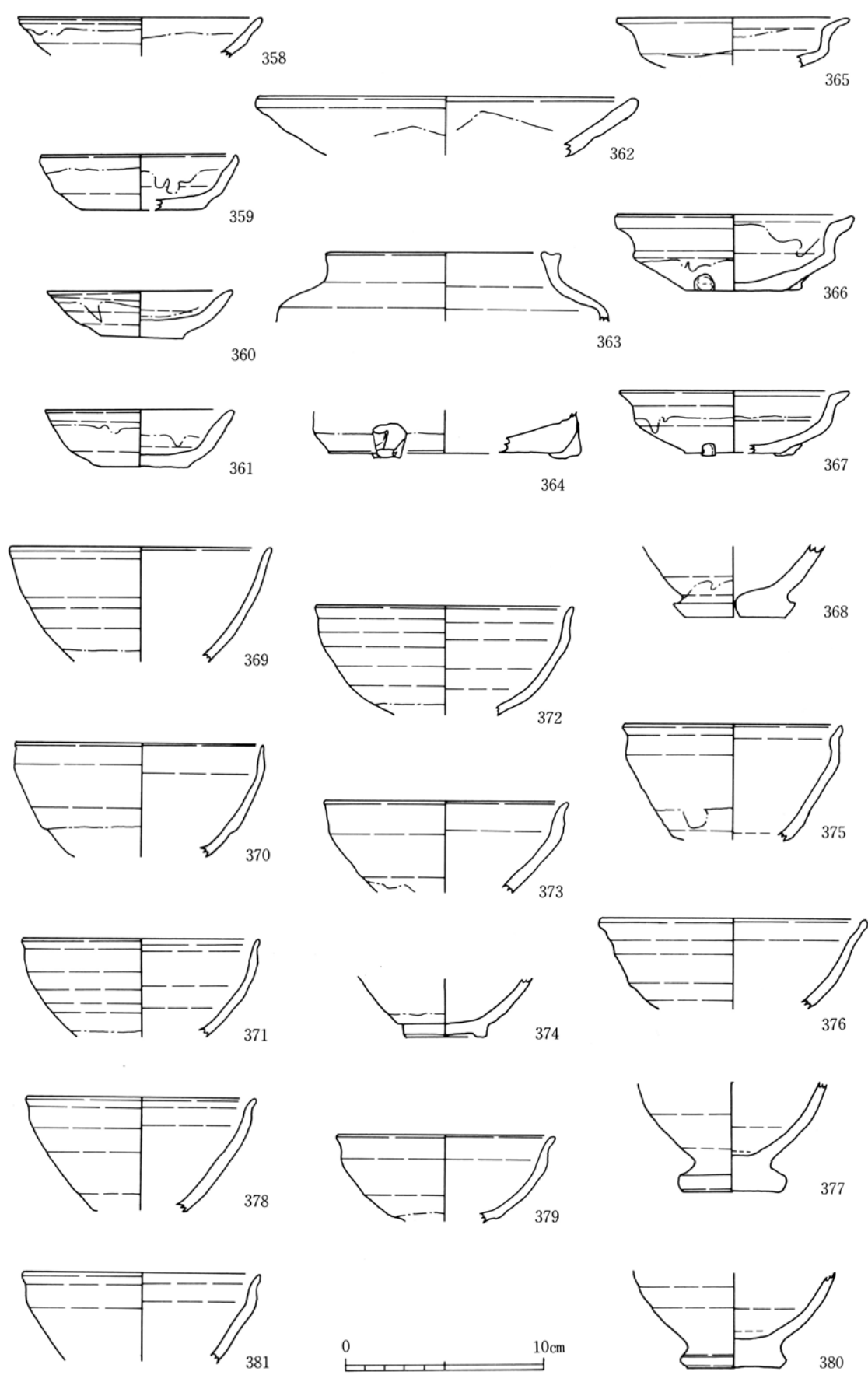
第54図 城下町期の遺物 (23)

SD08 (5)



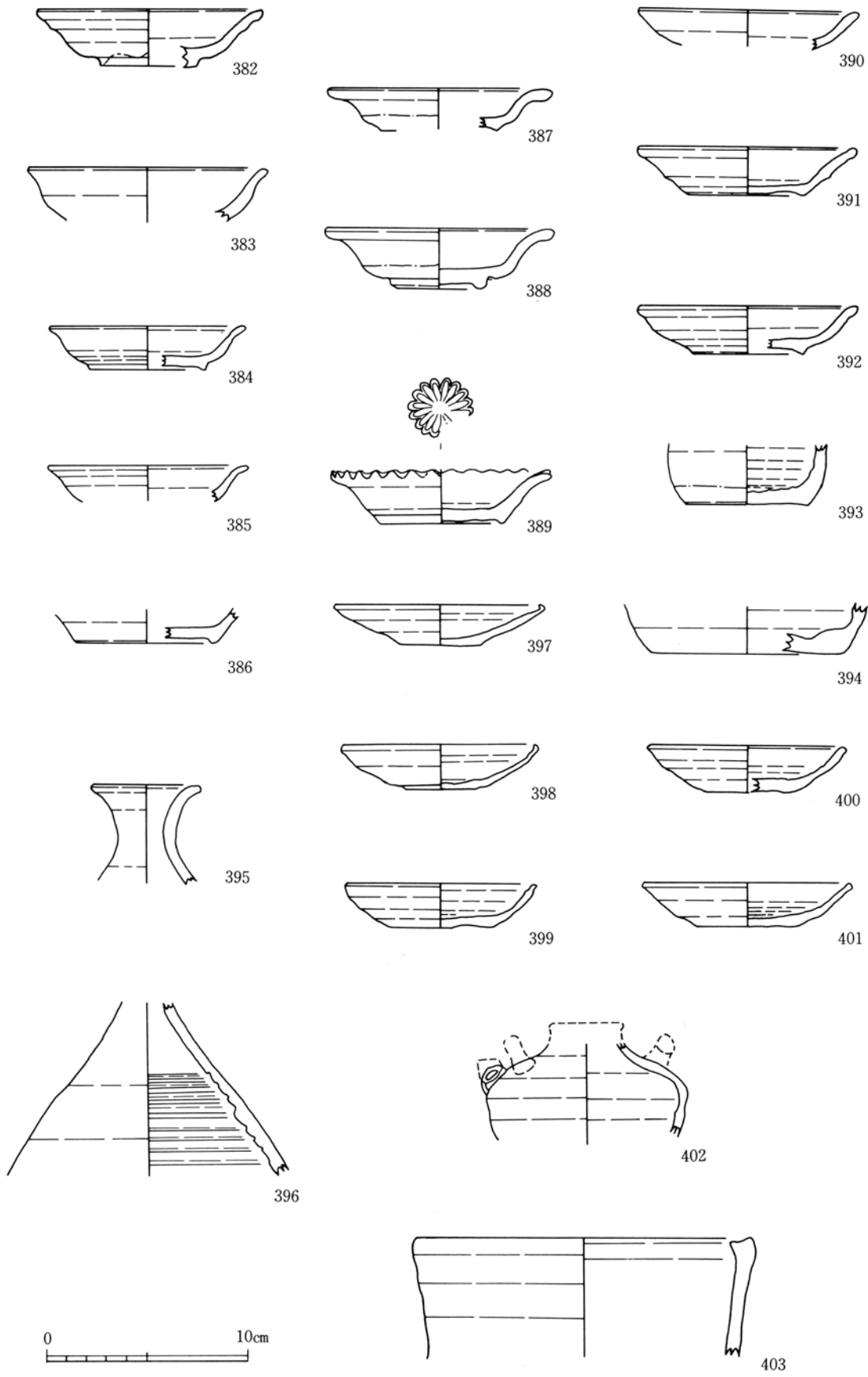
第55図 城下町期の遺物 (24)

SD08 (6)



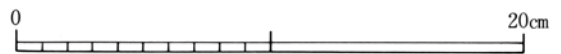
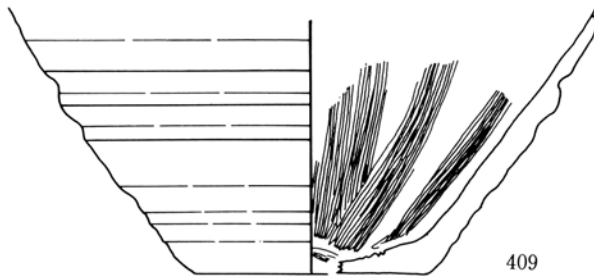
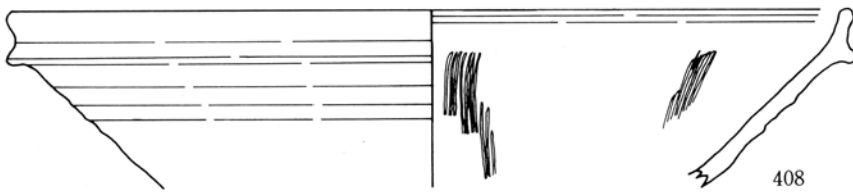
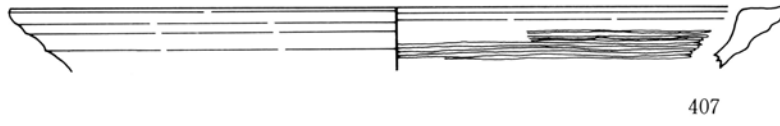
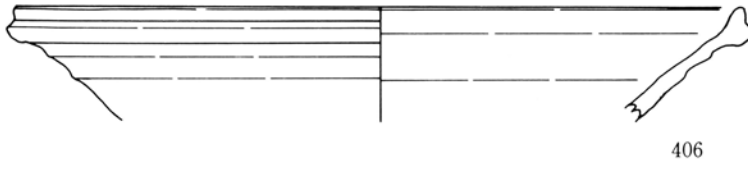
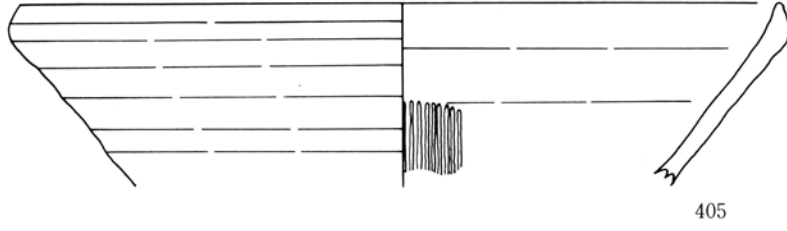
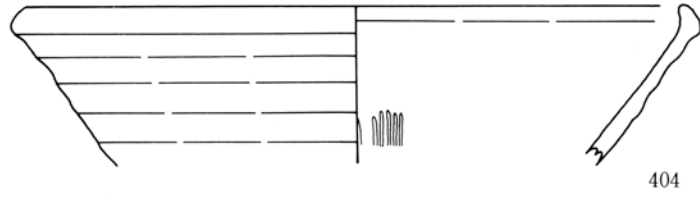
第56図 城下町期の遺物 (25)

SD14 (1)



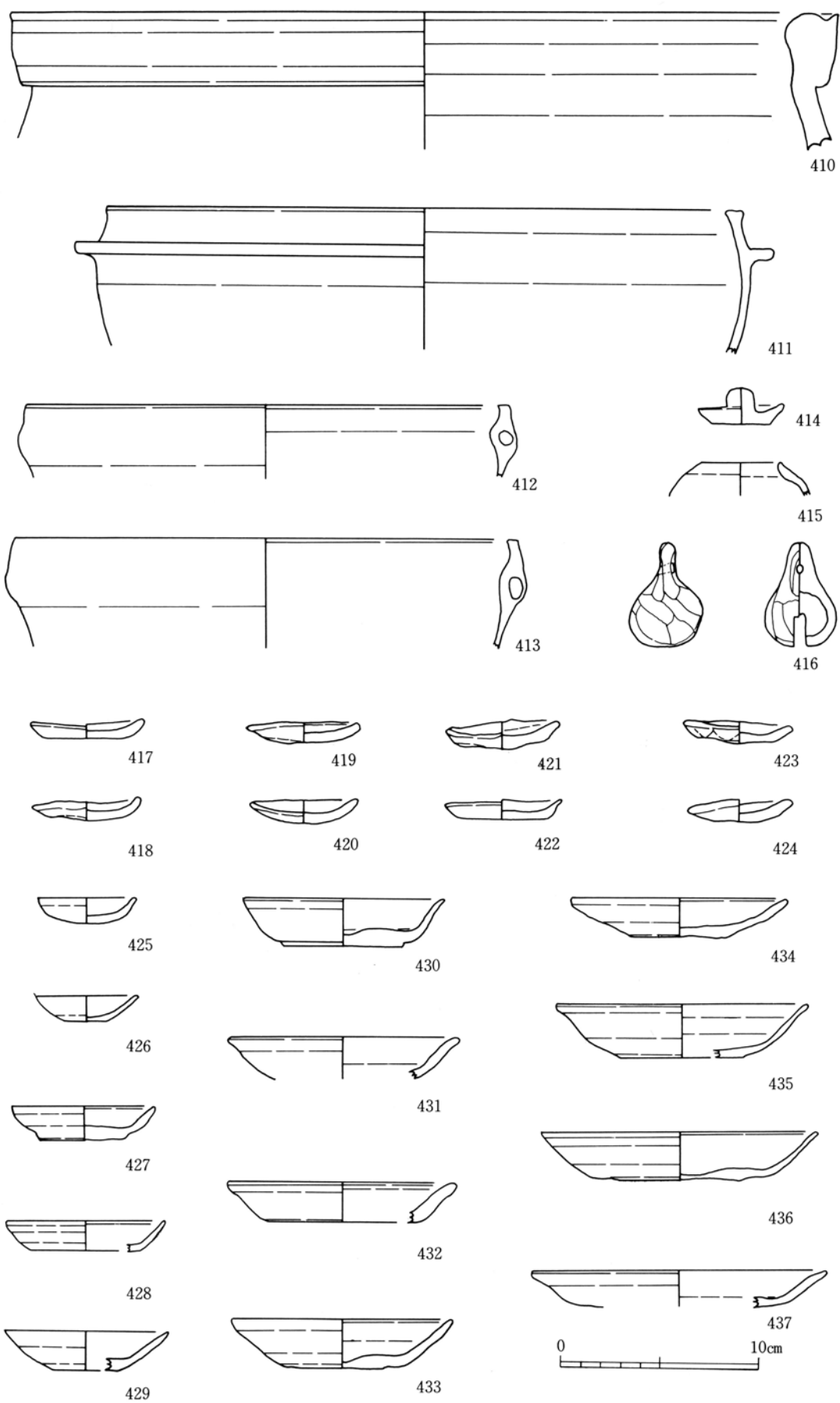
第57図 城下町期の遺物 (26)

SD14 (2)



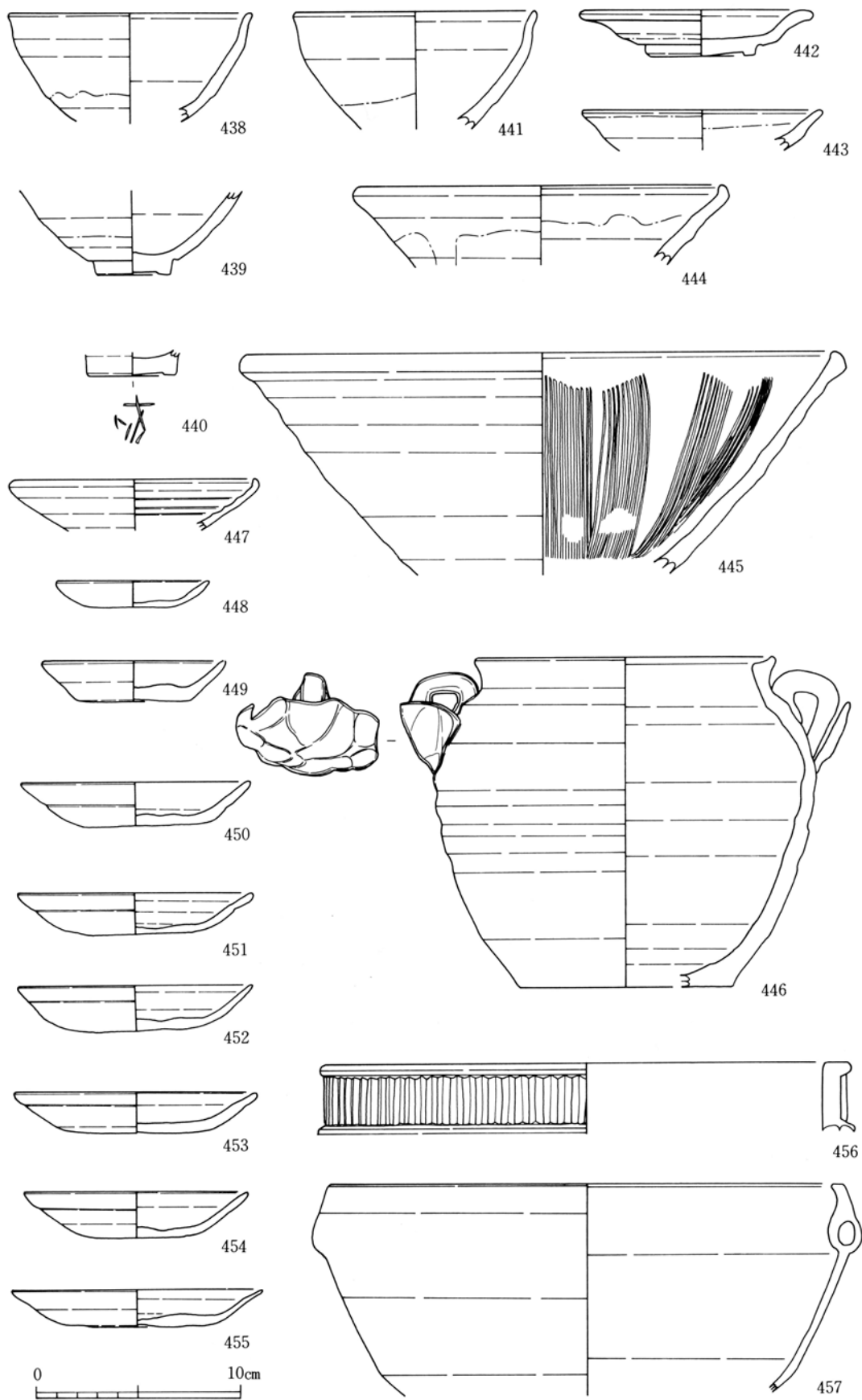
第58図 城下町期の遺物 (27)

SD14 (3)



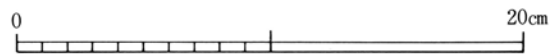
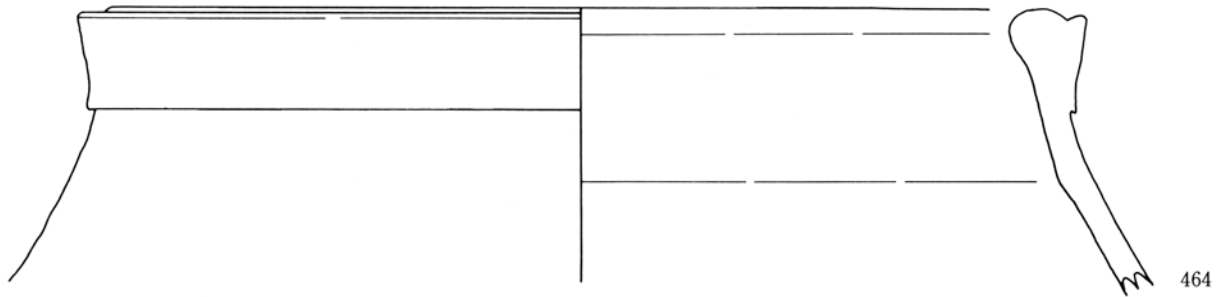
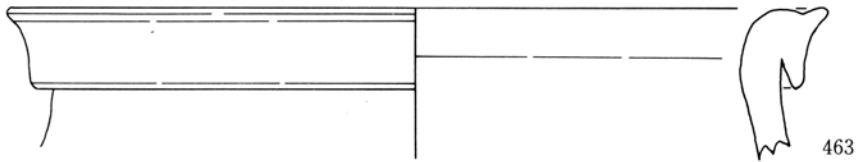
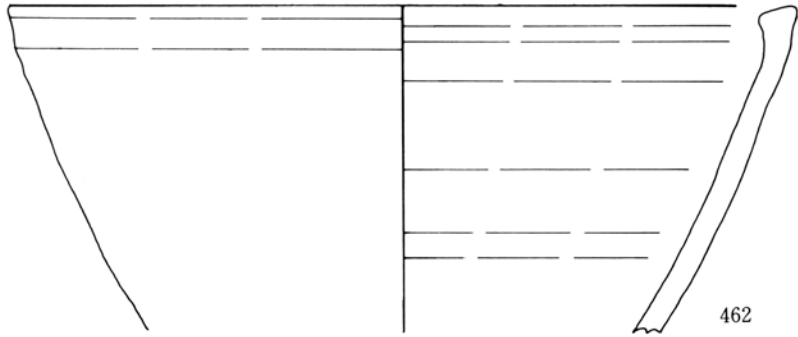
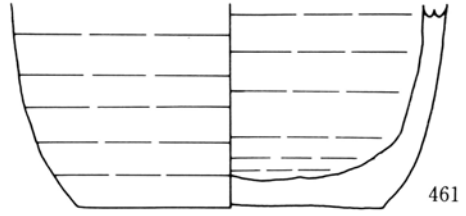
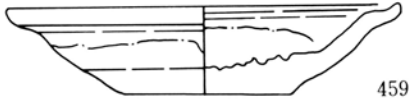
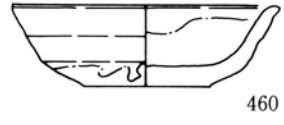
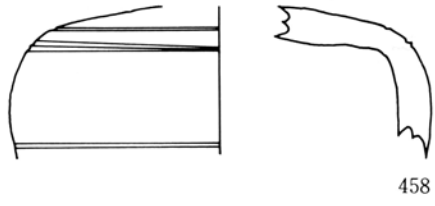
第59図 城下町期の遺物 (28)

SD14 (4)



第60図 城下町期の遺物 (29)

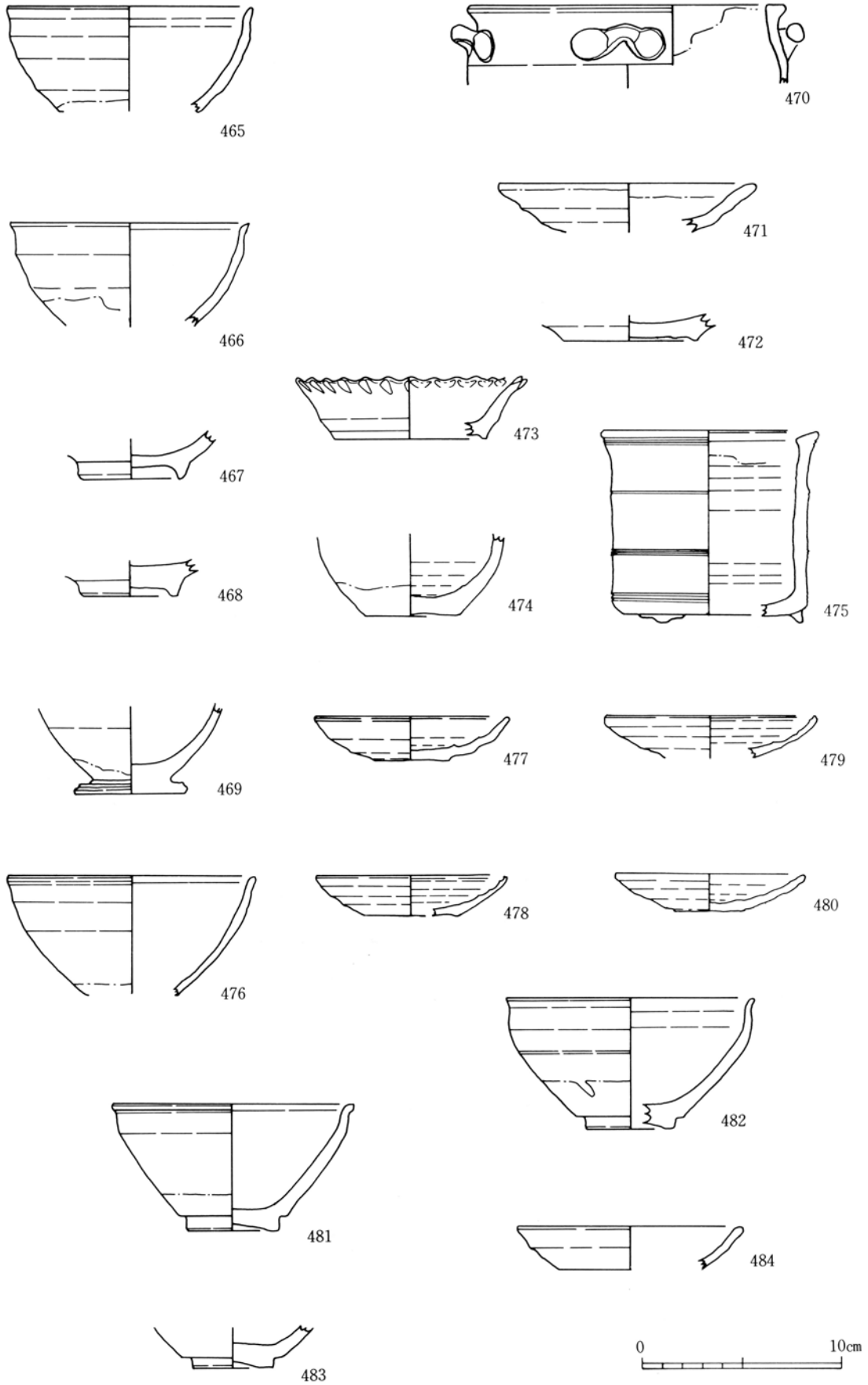
SD57



第61図 城下町期の遺物 (30)

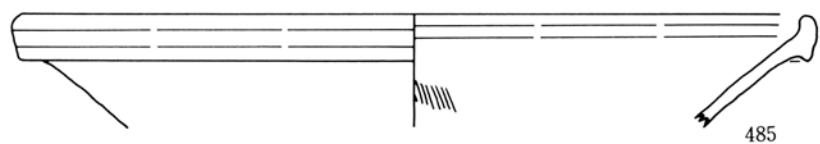
SD62 (1)



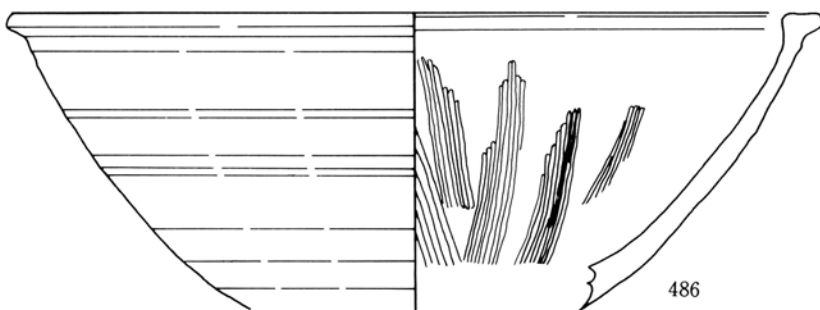


第62図 城下町期の遺物 (31)

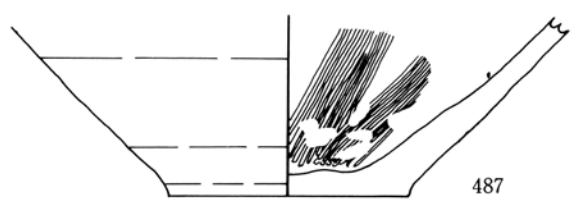
SD62 (2)



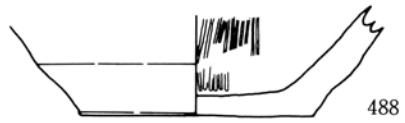
485



486



487



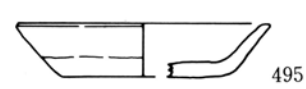
488



489



492



495



490



493



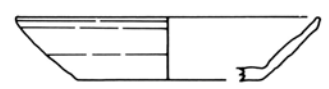
496



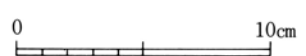
491



494

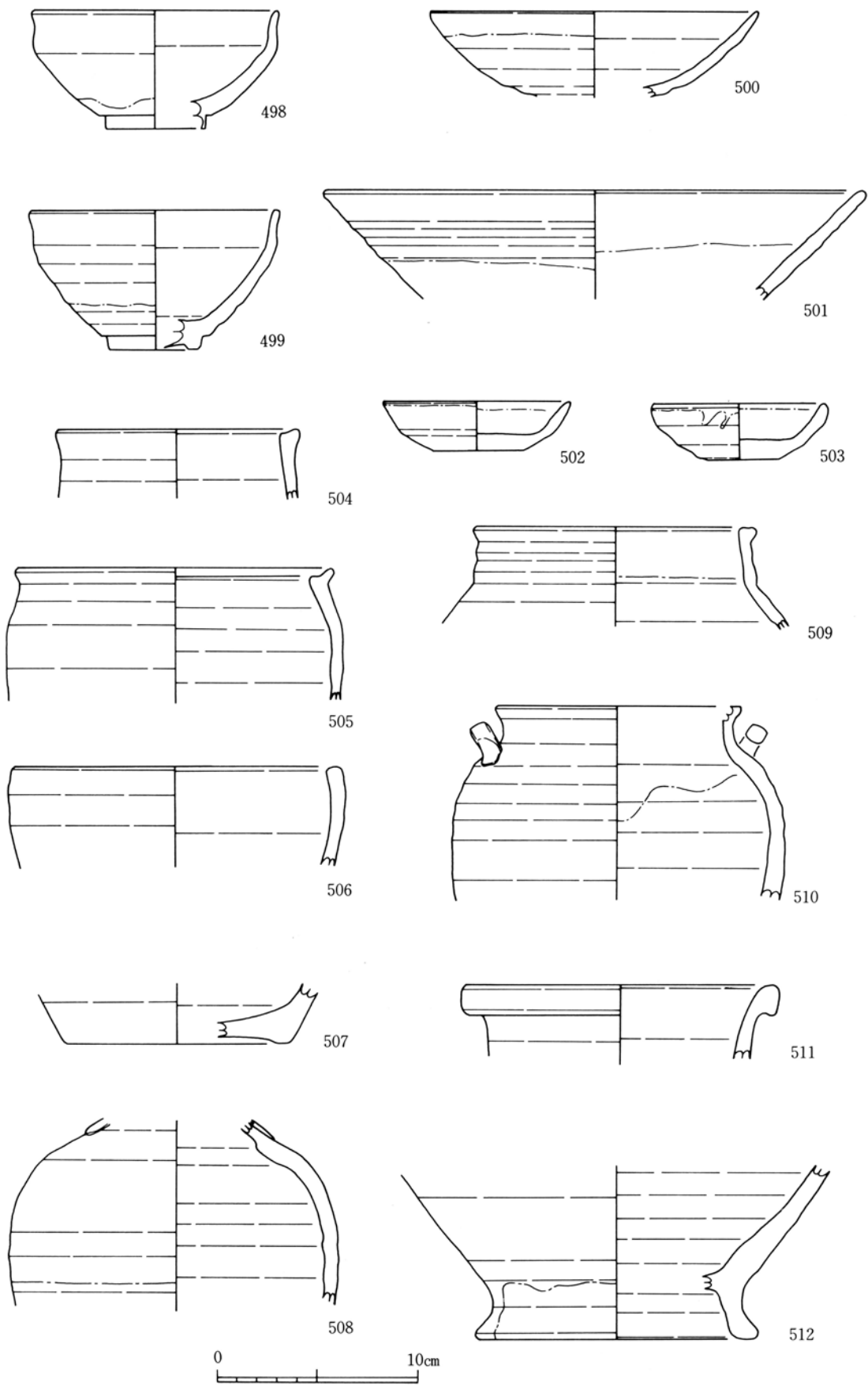


497



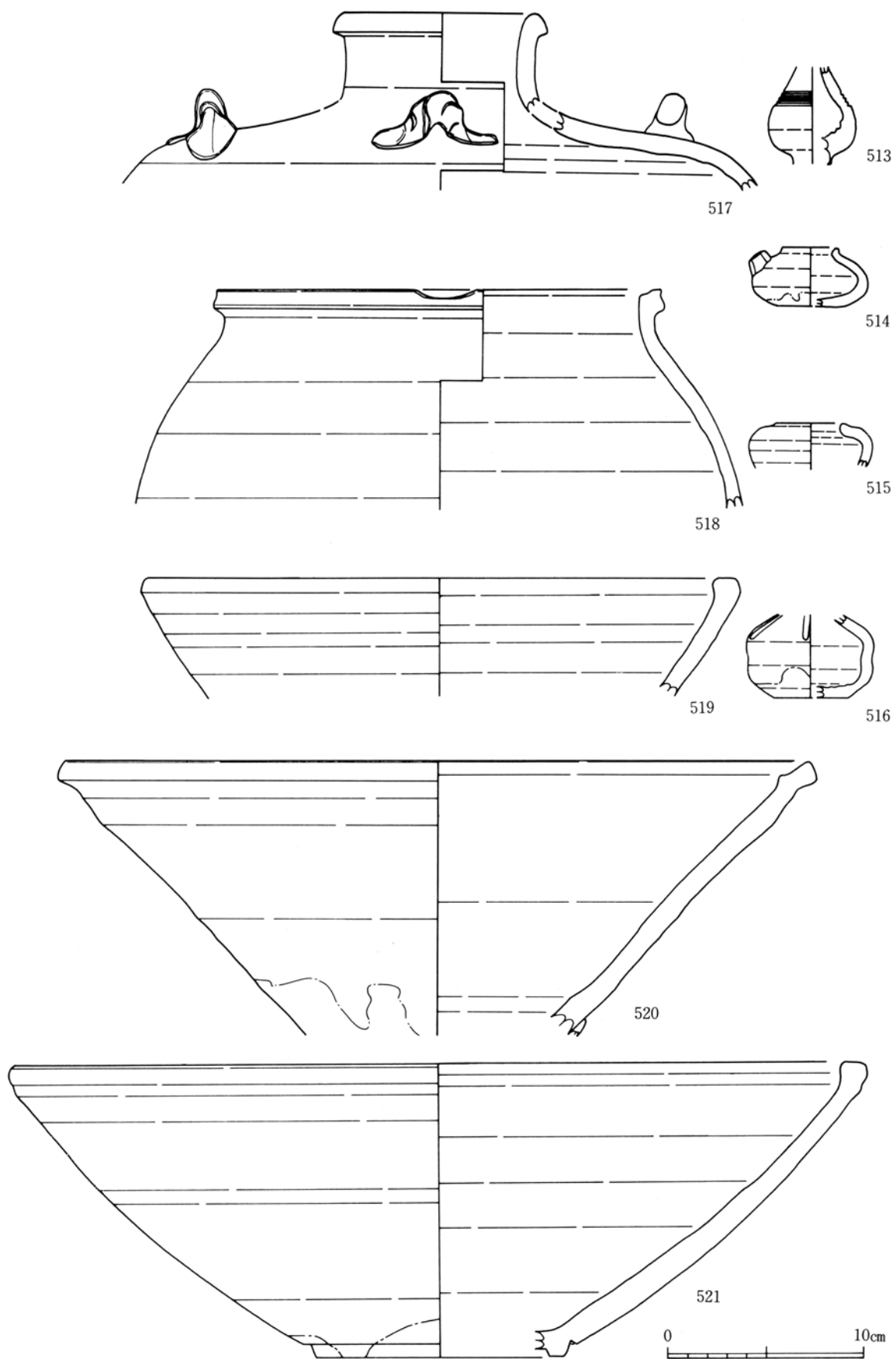
第63図 城下町期の遺物 (32)

SD62 (3)



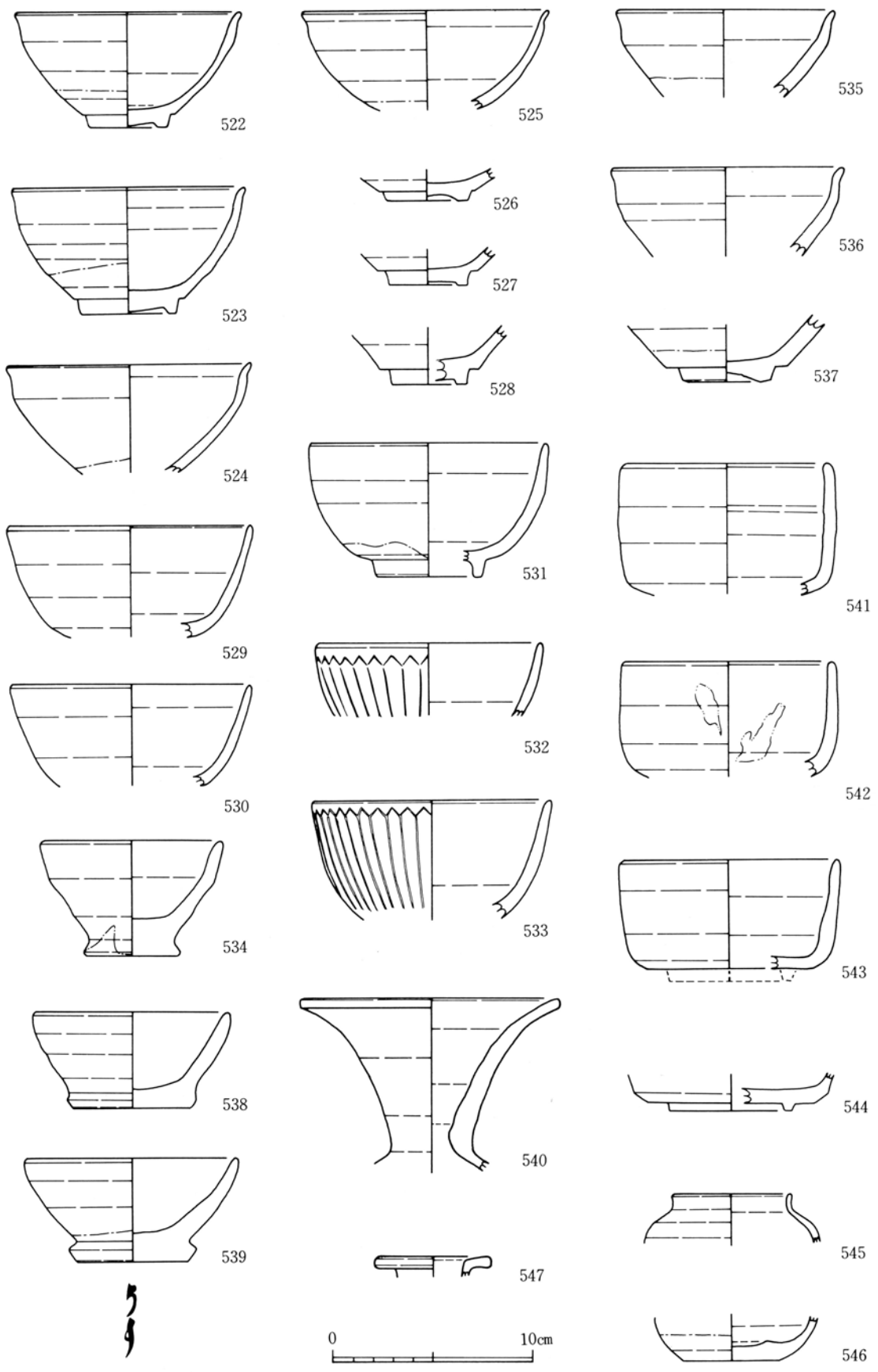
第64図 城下町期の遺物 (33)

SD16 (1)



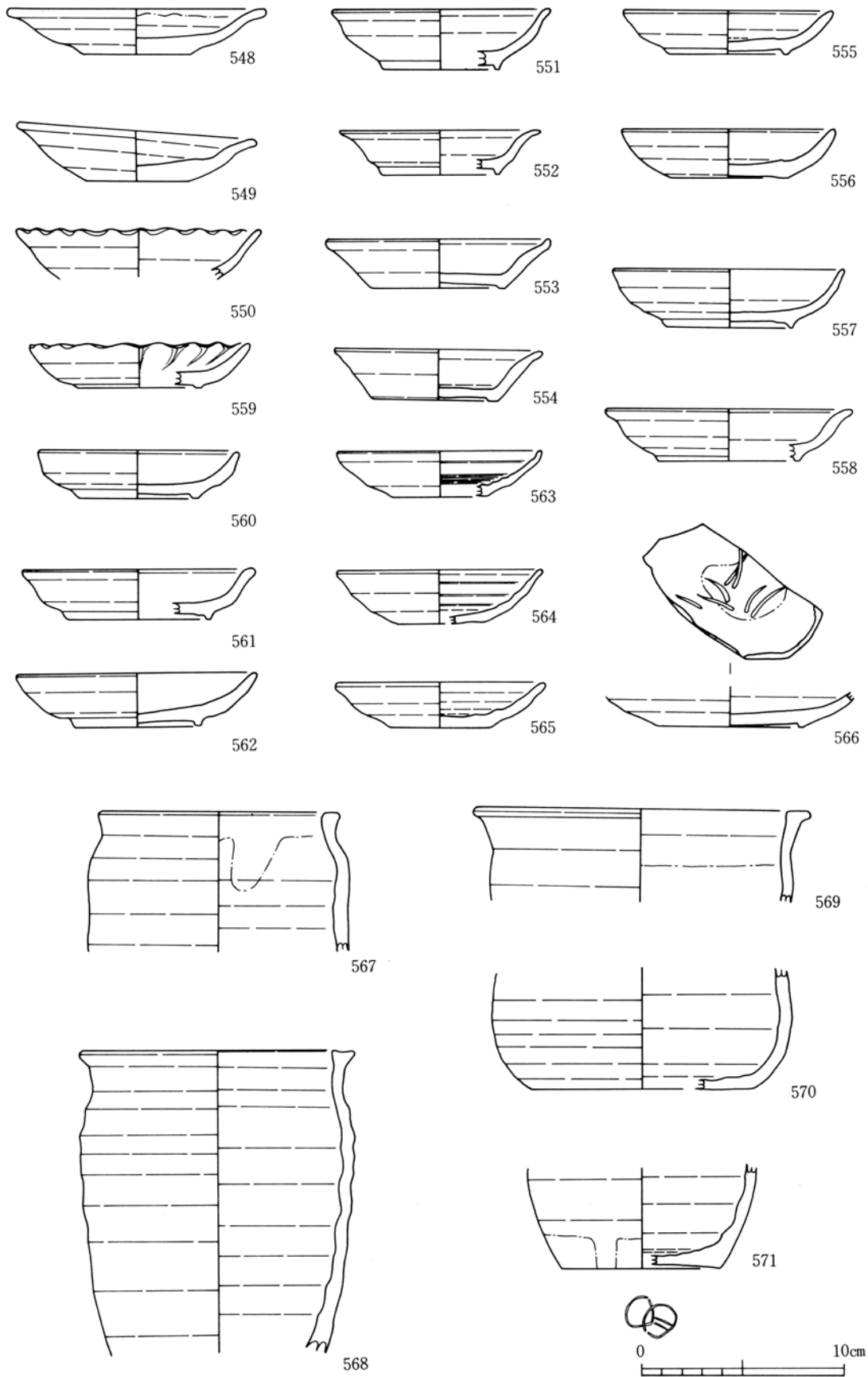
第65図 城下町期の遺物 (34)

SD16 (2)



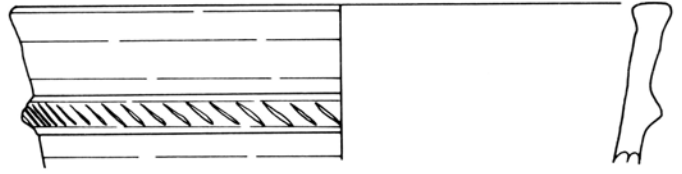
第66図 城下町期の遺物 35

SD16 (3)

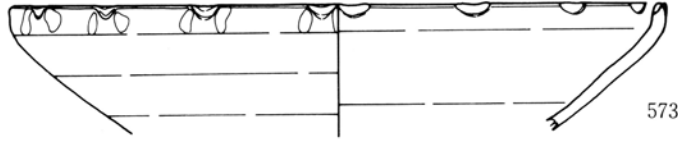


第67図 城下町期の遺物 (36)

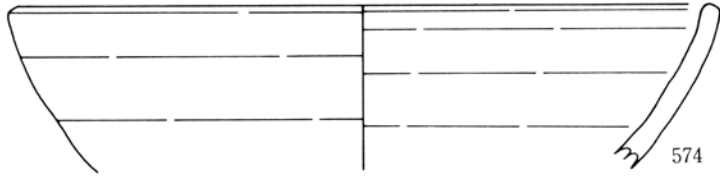
SD16(4)



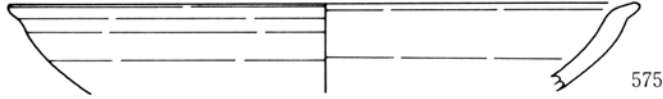
572



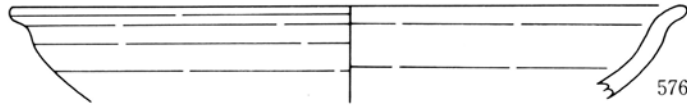
573



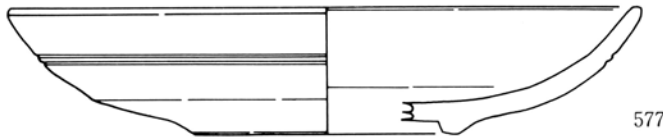
574



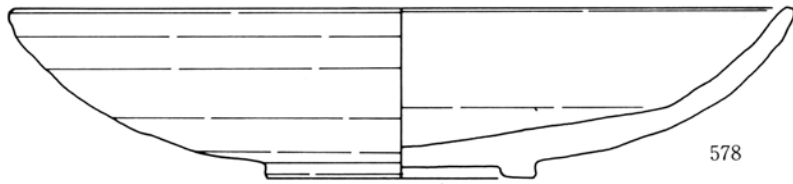
575



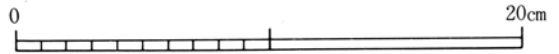
576



577

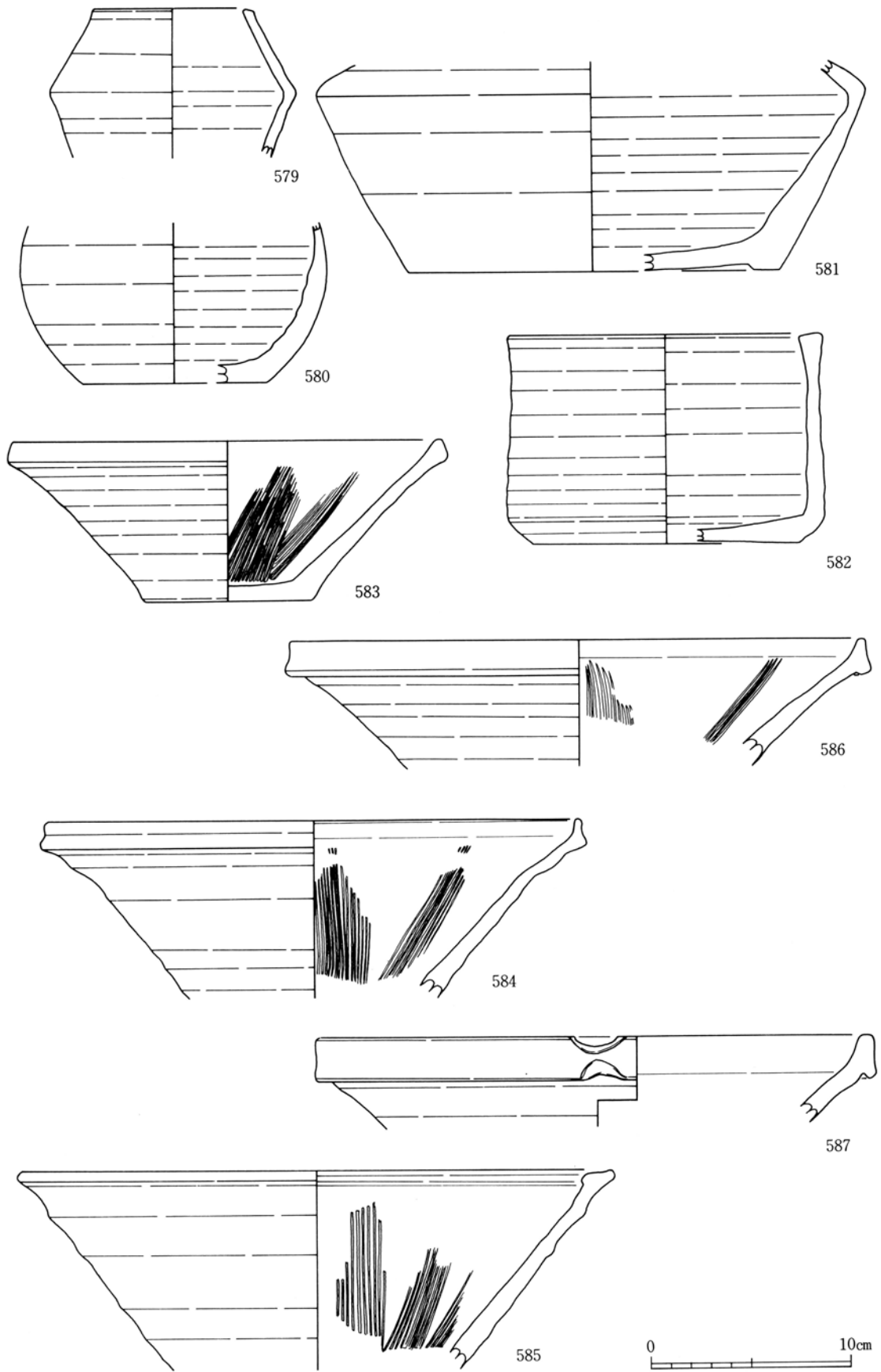


578



第68図 城下町期の遺物 (37)

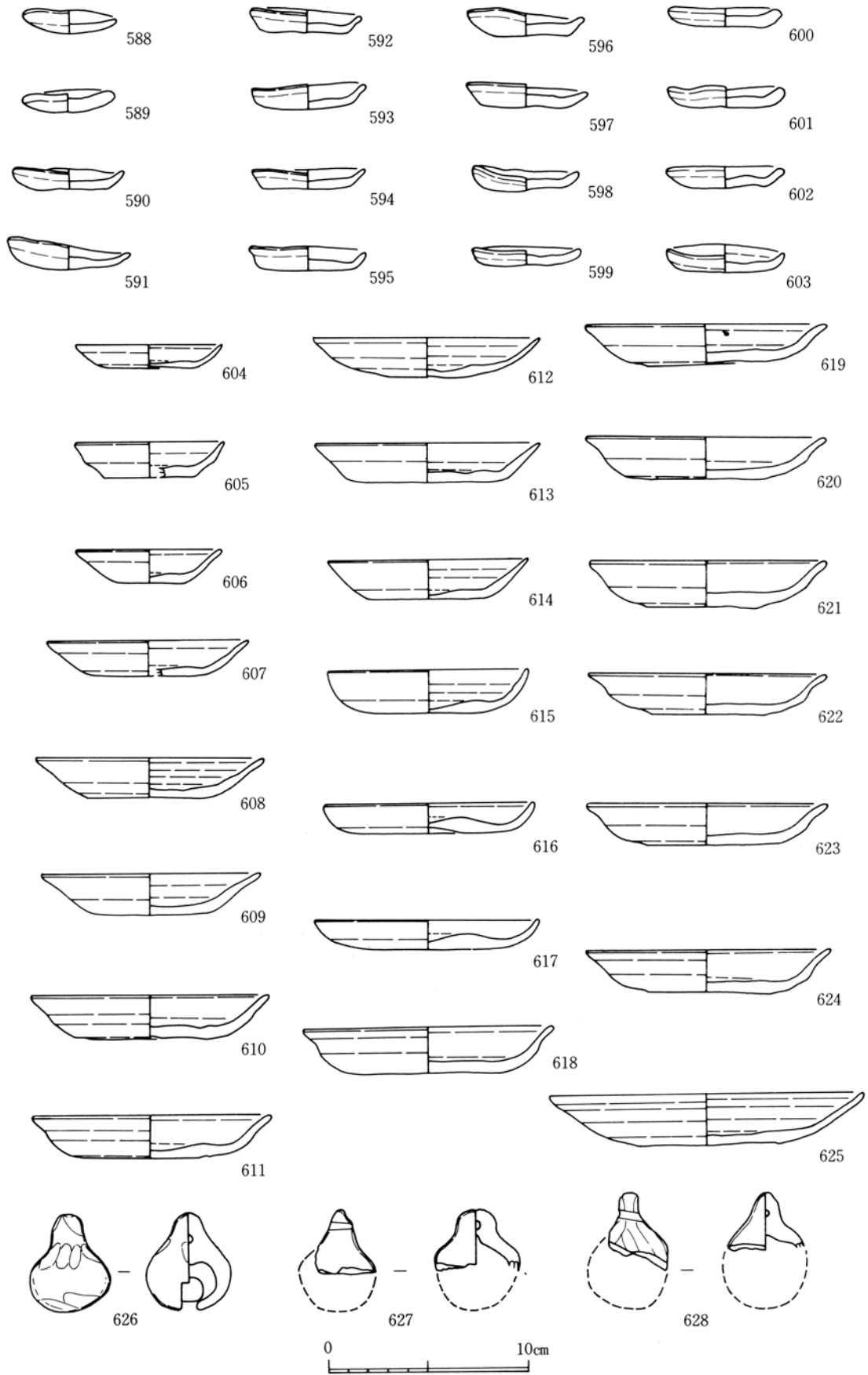
SD16 (5)



第69図 城下町期の遺物 (38)

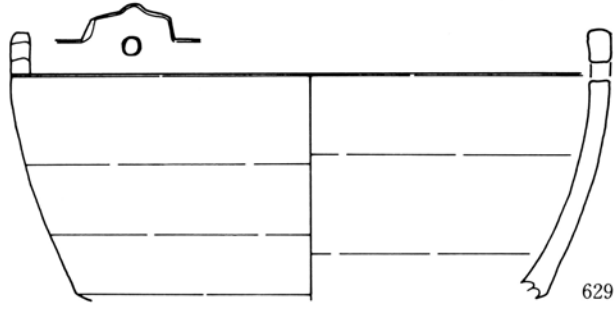
SD16 (6)





第70図 城下町期の遺物 (39)

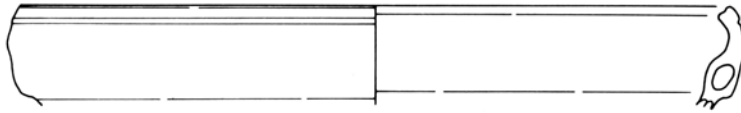
SD16 (7)



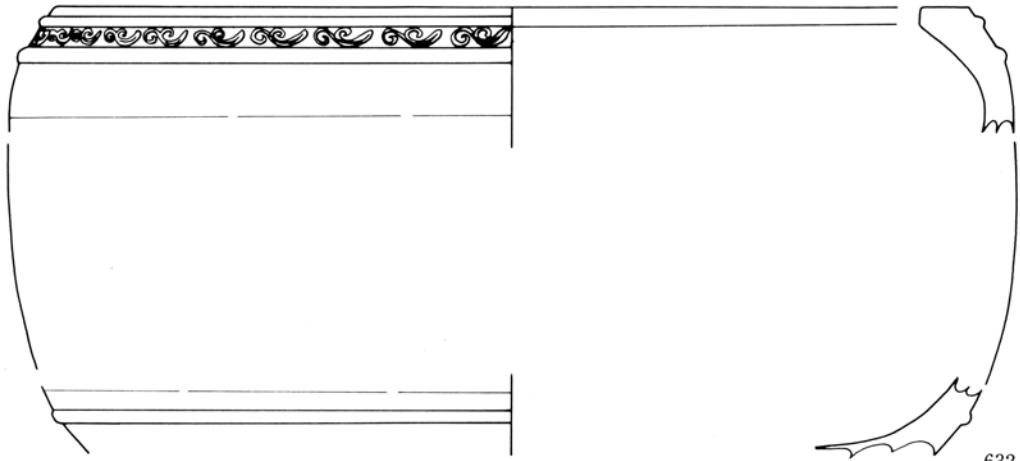
629



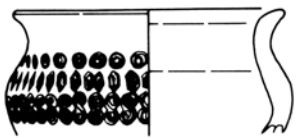
630



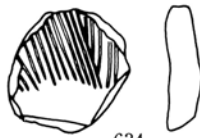
631



632



633



634



635



636



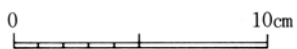
637



638

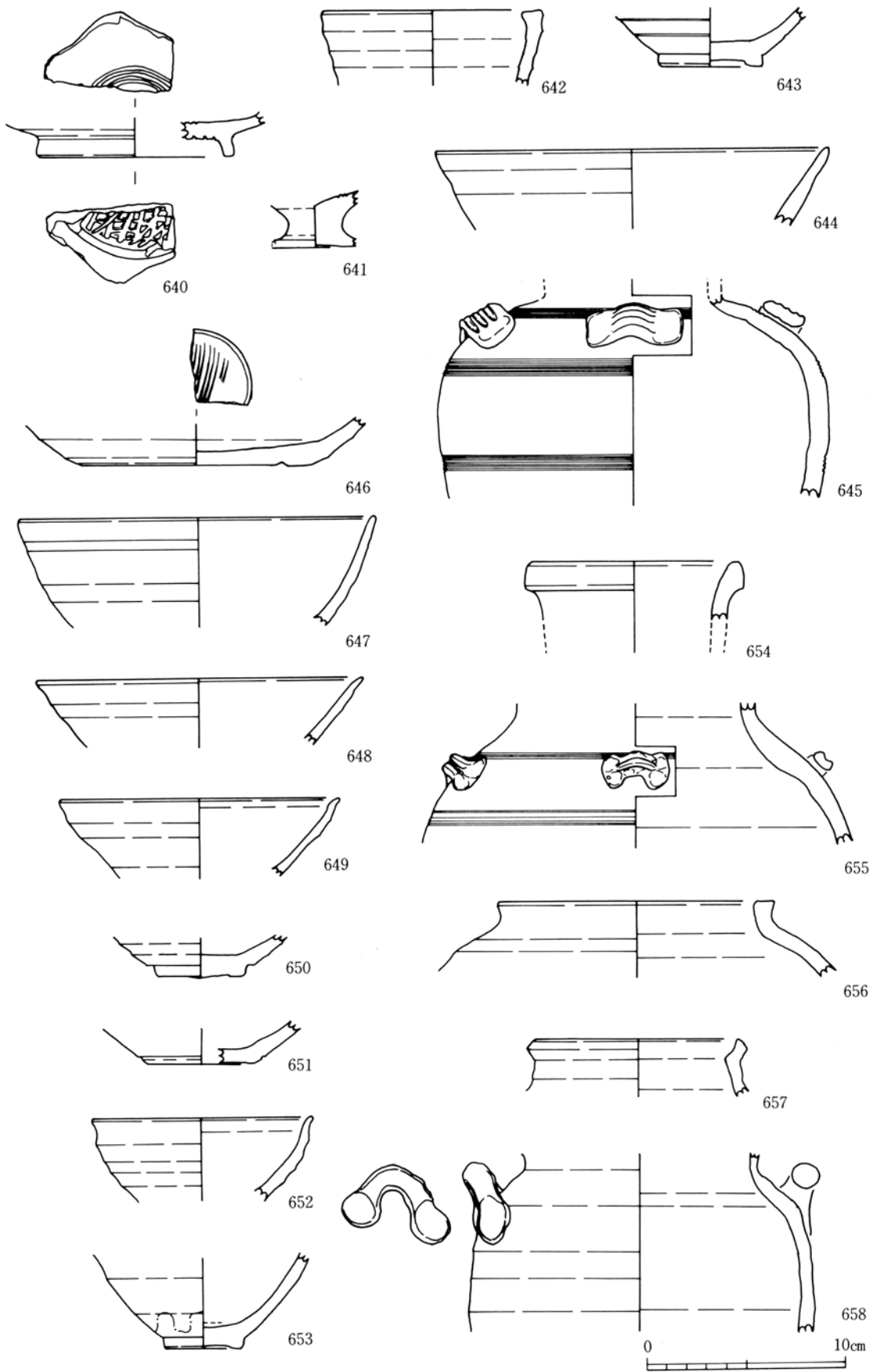


639



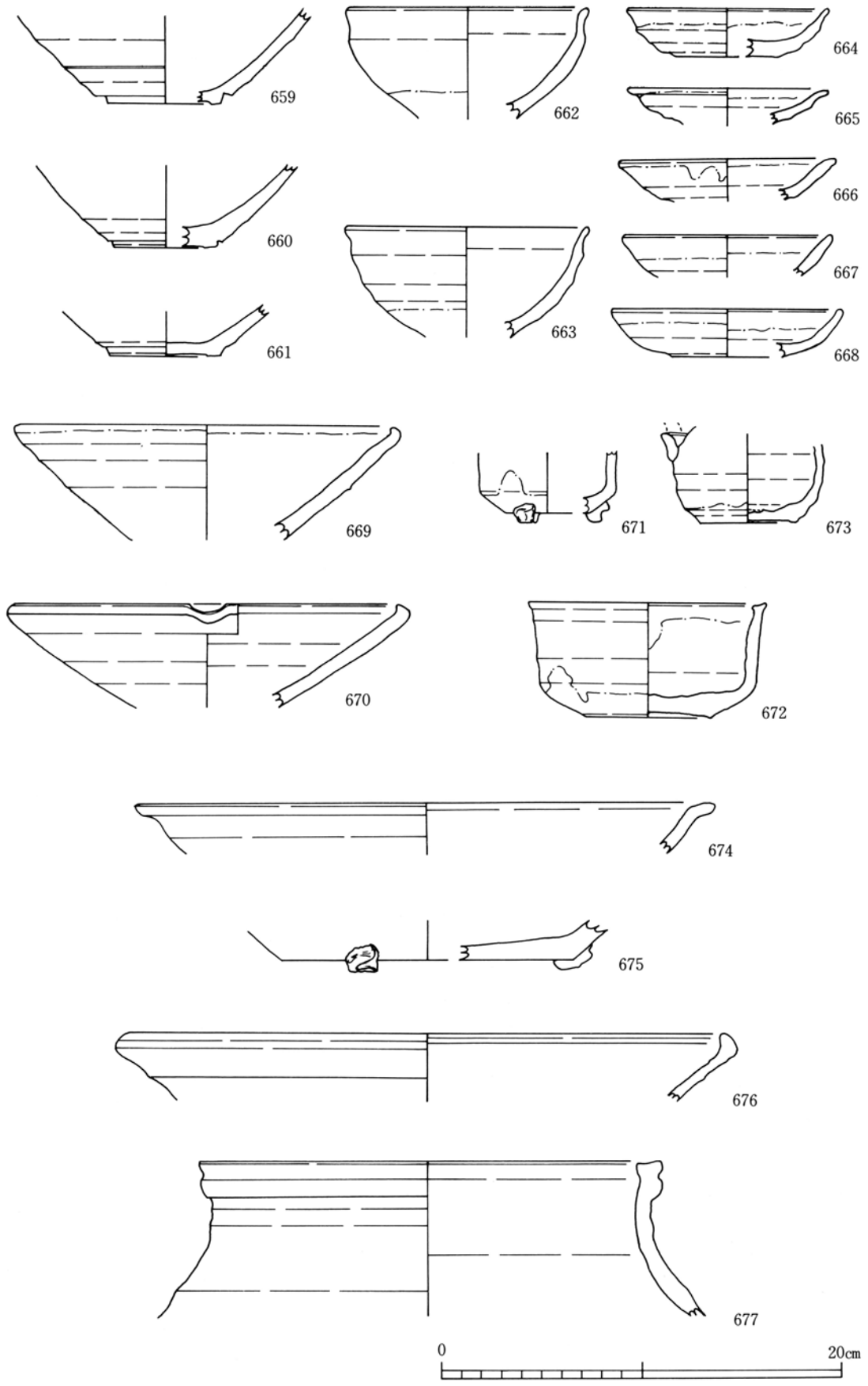
第71図 城下町期の遺物 (40)

SD16 (8)



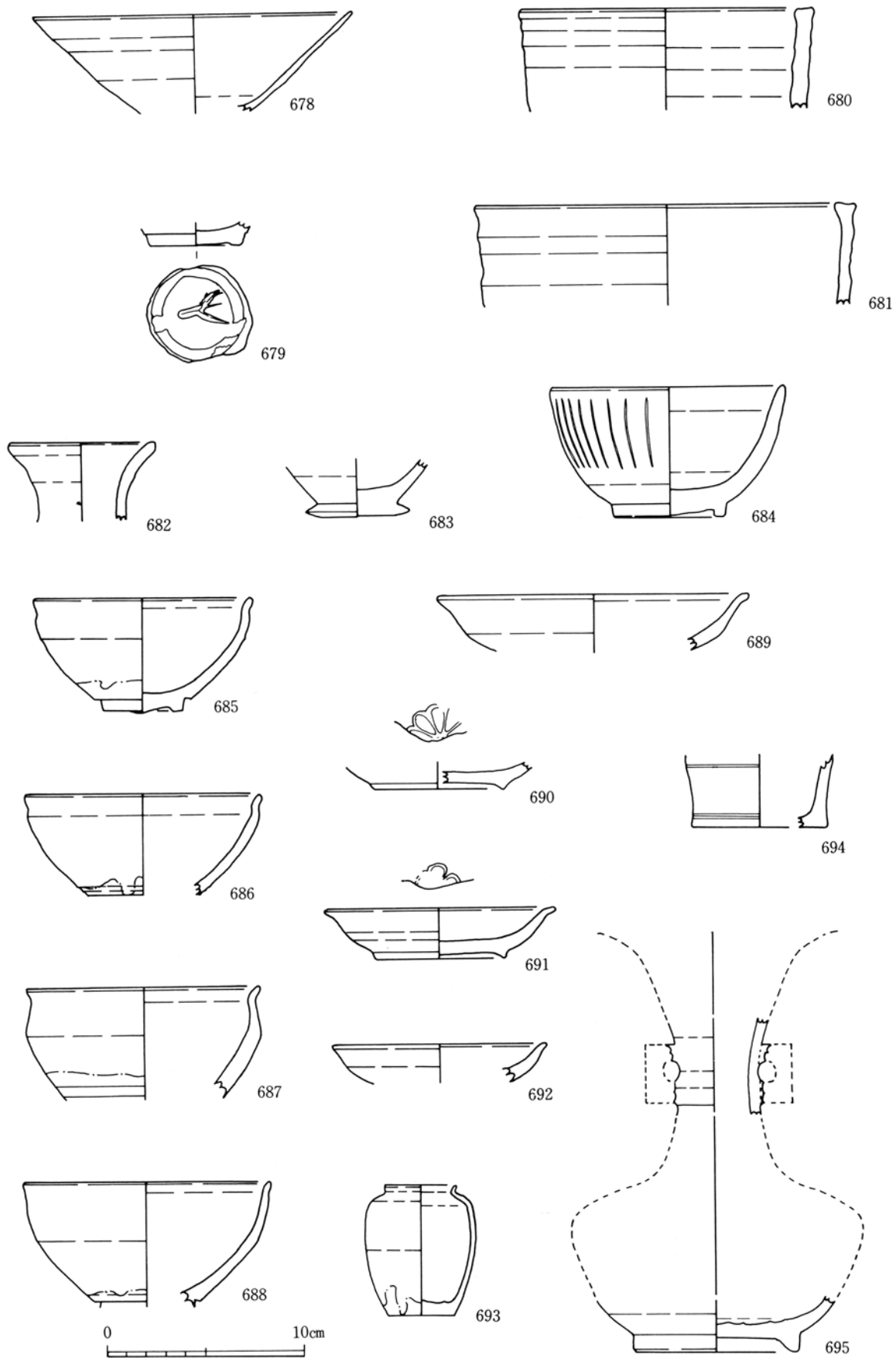
第72図 城下町期の遺物 (41)

SD52 (1)



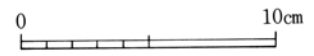
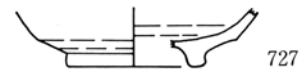
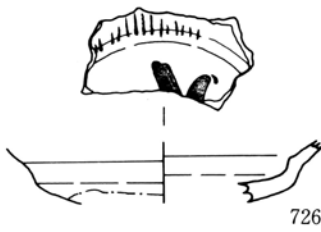
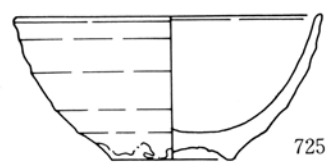
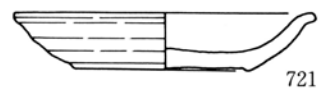
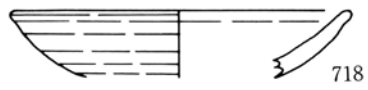
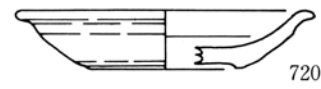
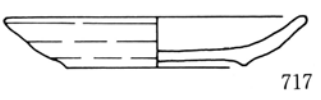
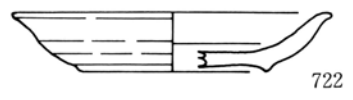
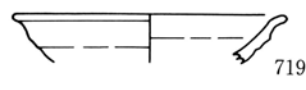
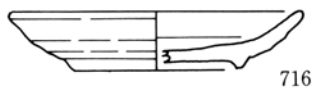
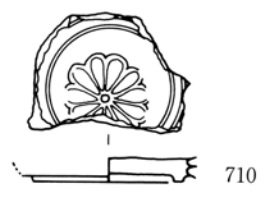
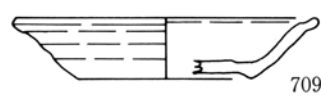
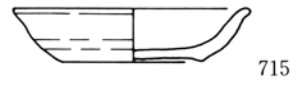
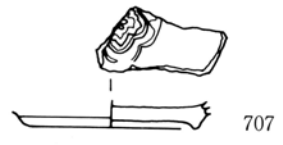
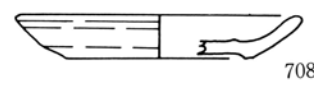
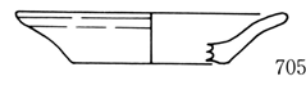
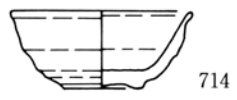
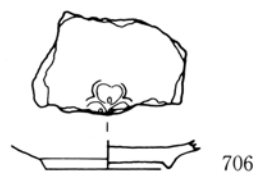
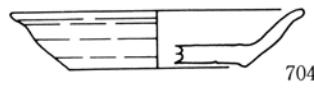
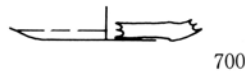
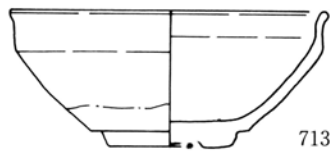
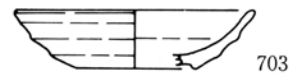
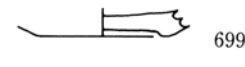
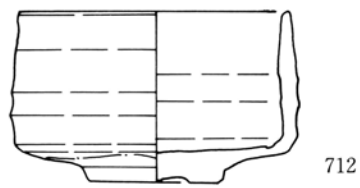
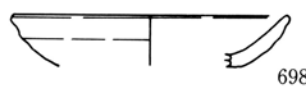
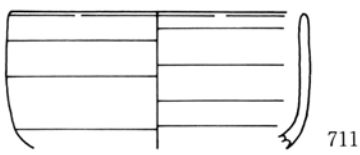
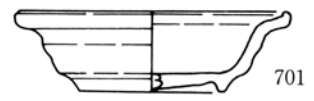
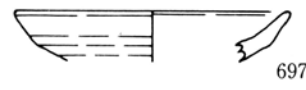
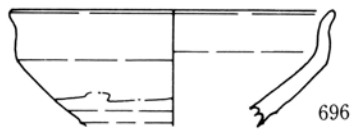
第73図 城下町期の遺物 (42)

SD52 (2)



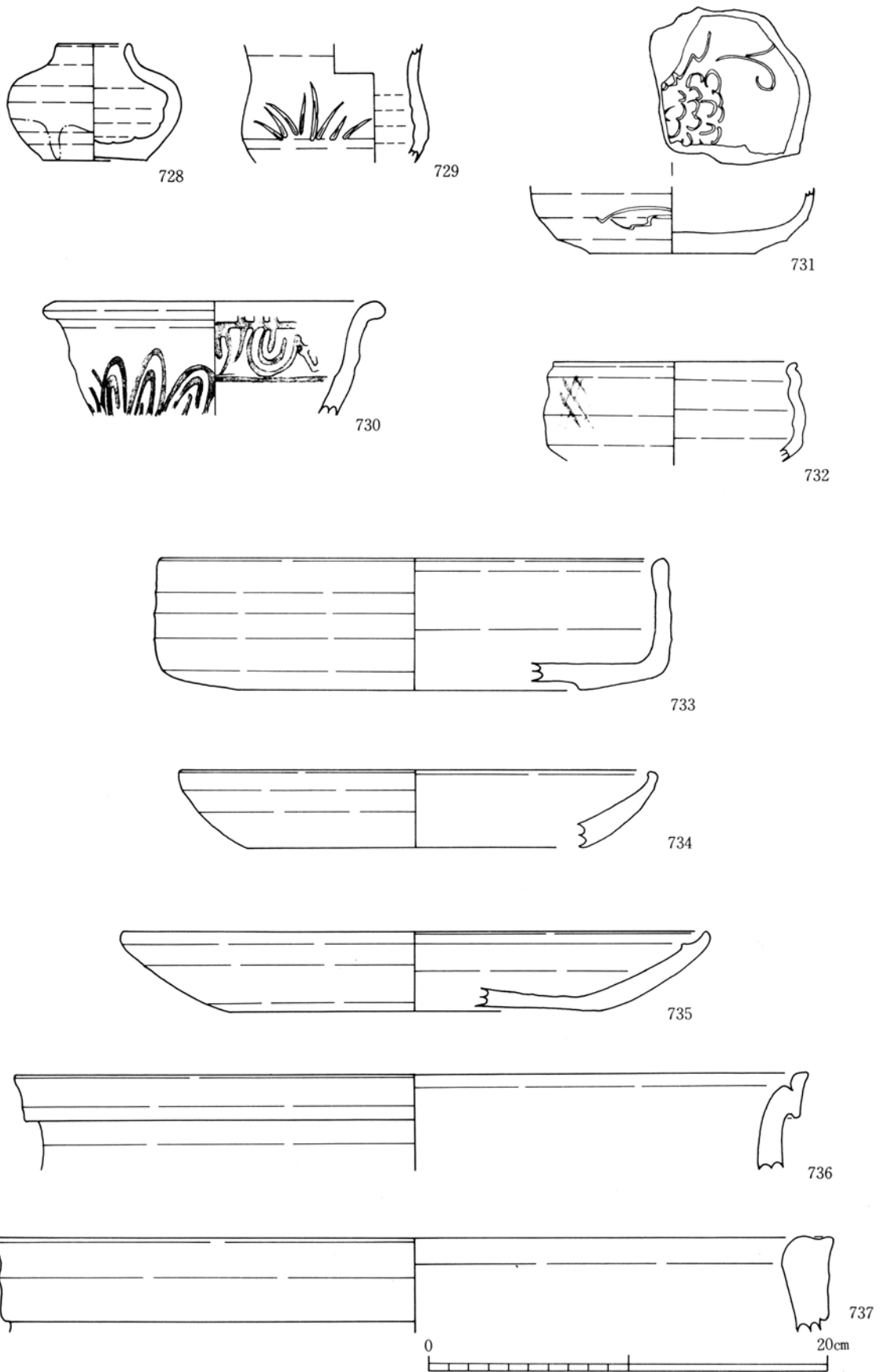
第74図 城下町期の遺物 (43)

SD52 (3)



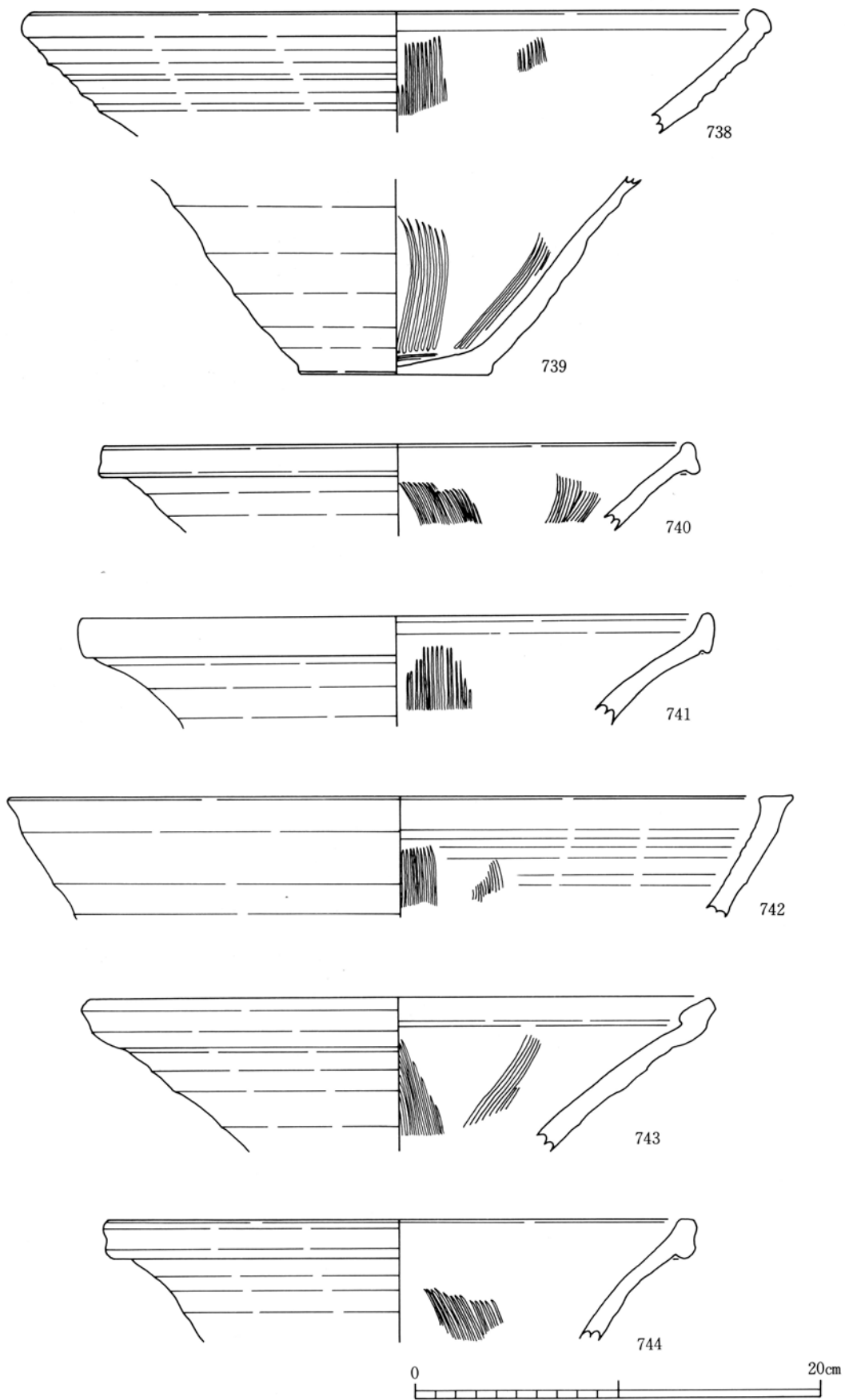
第75図 城下町期の遺物 (44)

SD52 (4)



第76図 城下町期の遺物 (45)

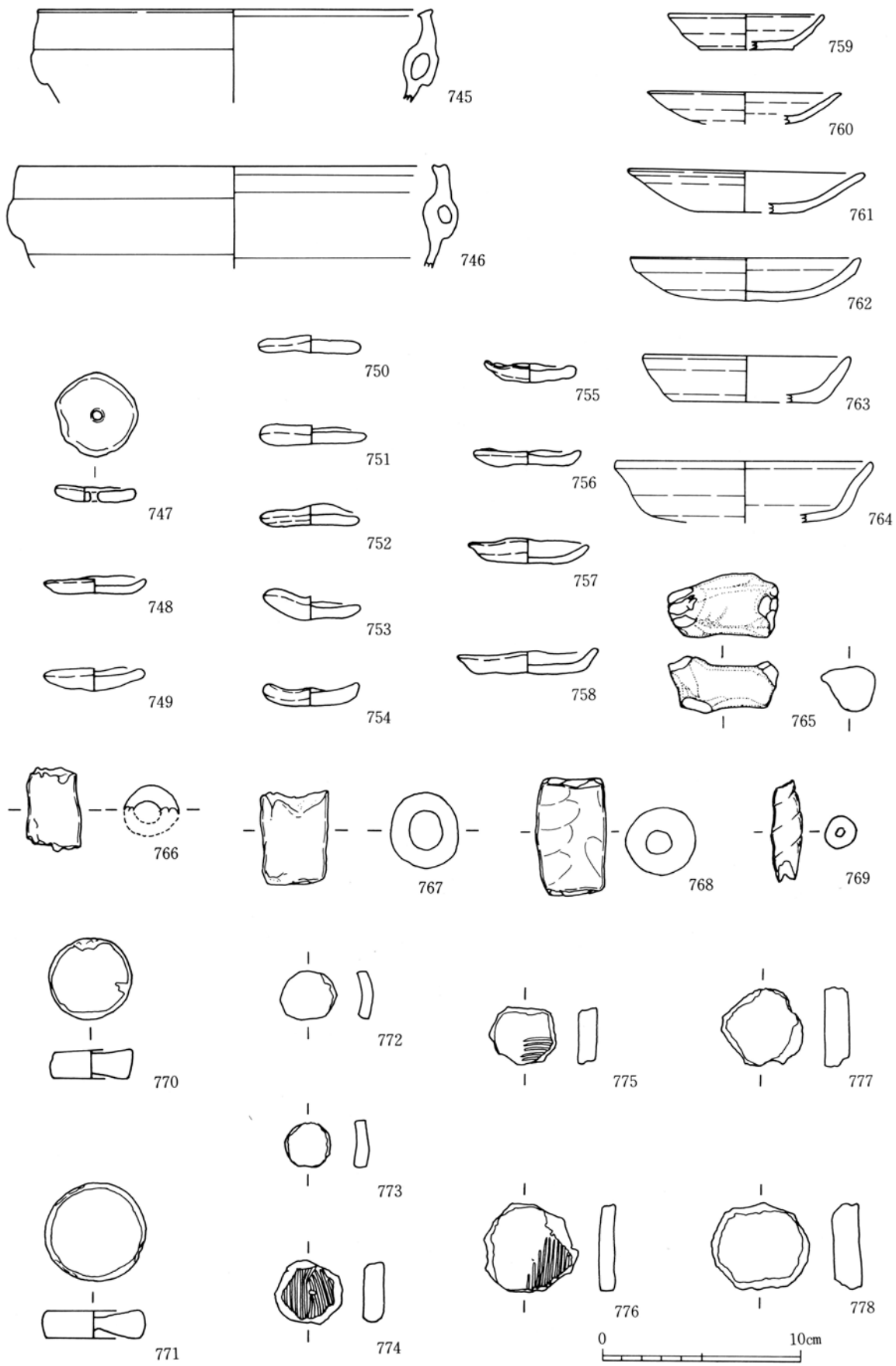
SD52 (5)



第77図 城下町期の遺物 (46)

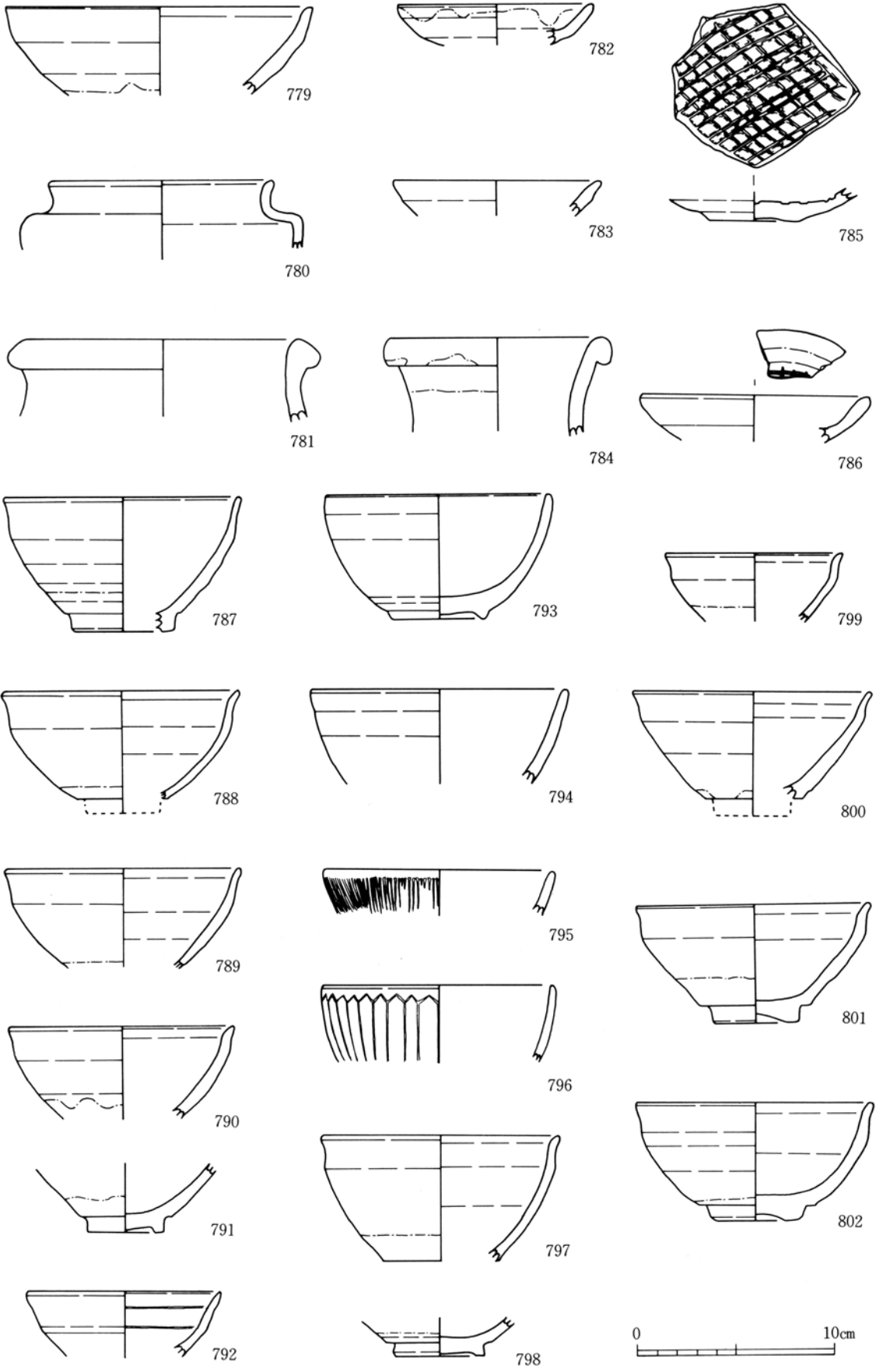
SD52 (6)





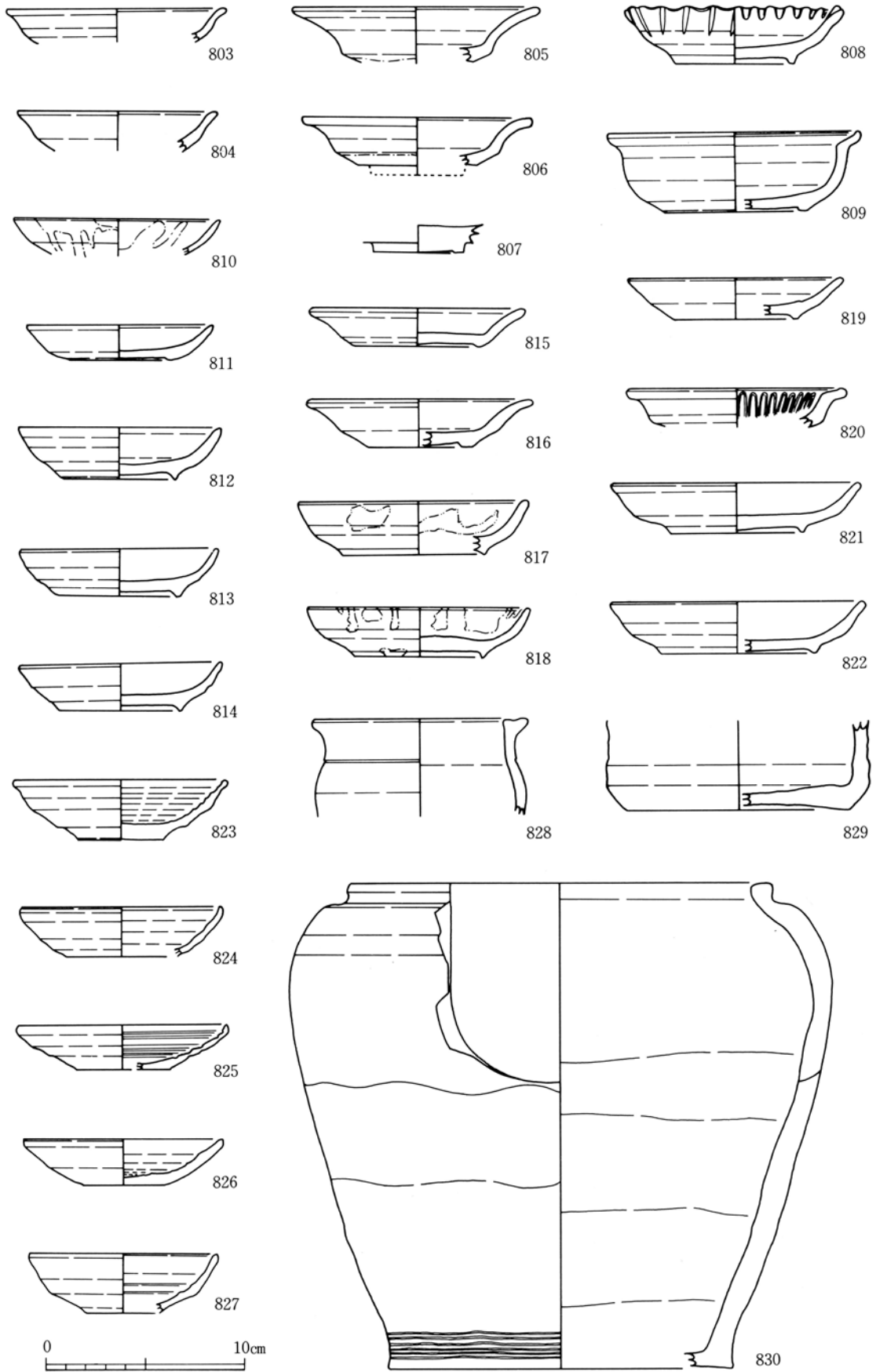
第78図 城下町期の遺物 (47)

SD52 (7)



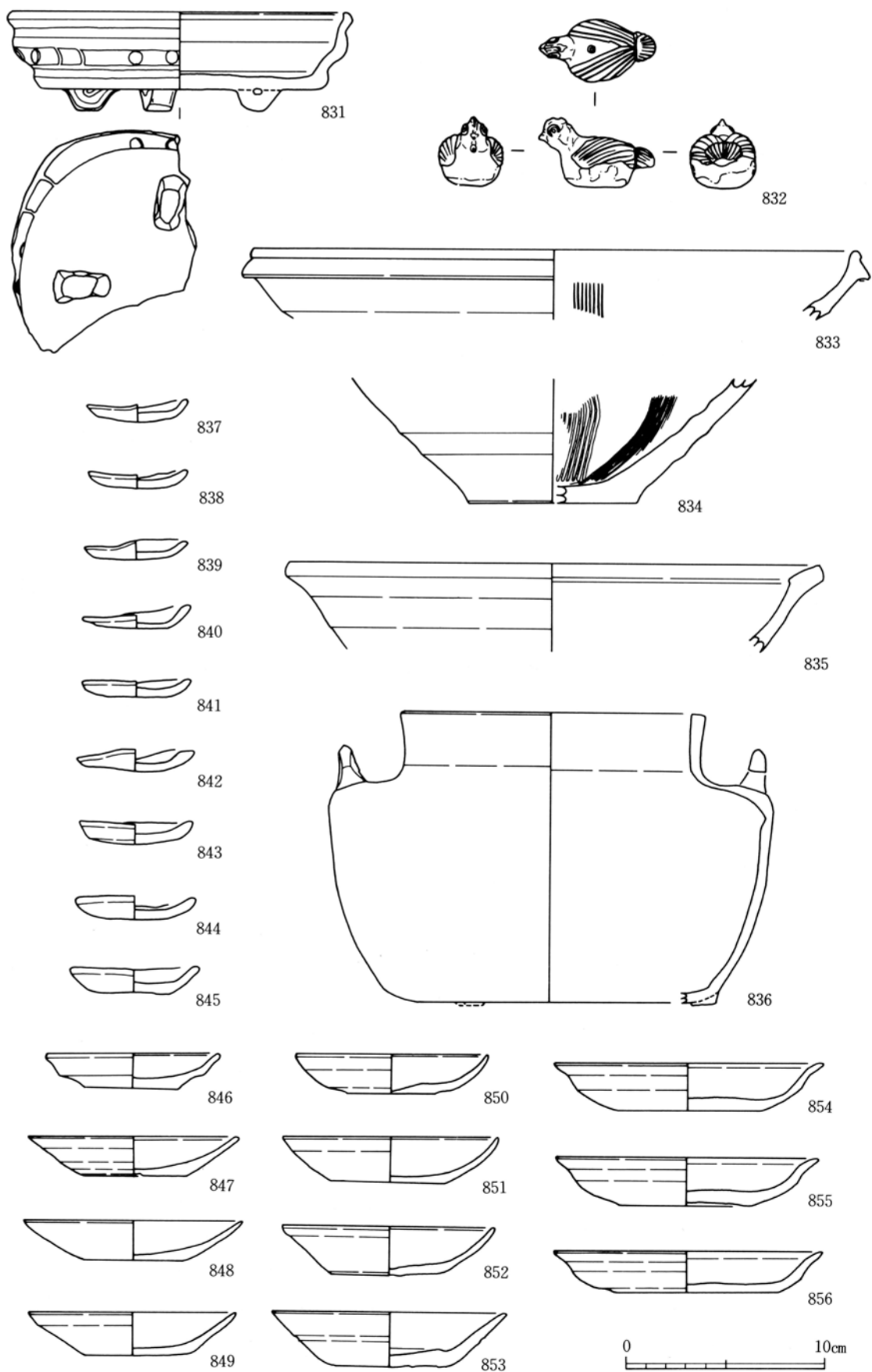
第79図 城下町期の遺物 (48)

SD19 (1)



第80図 城下町期の遺物 (49)

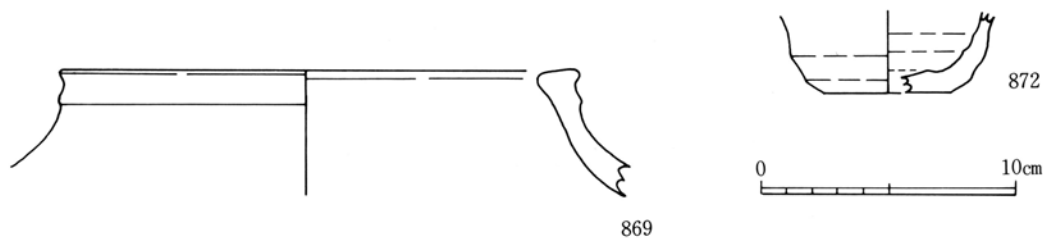
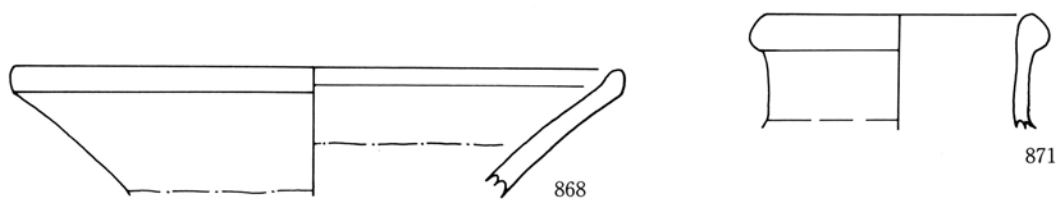
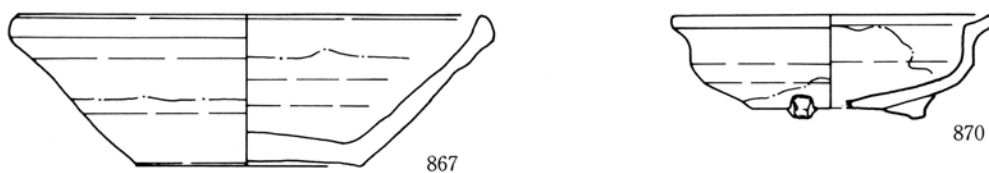
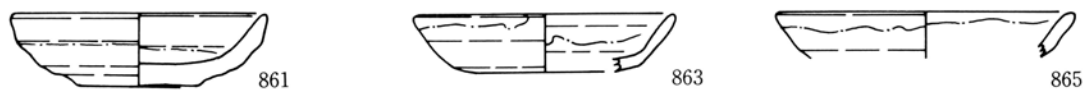
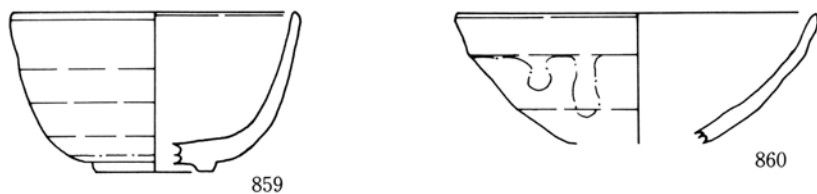
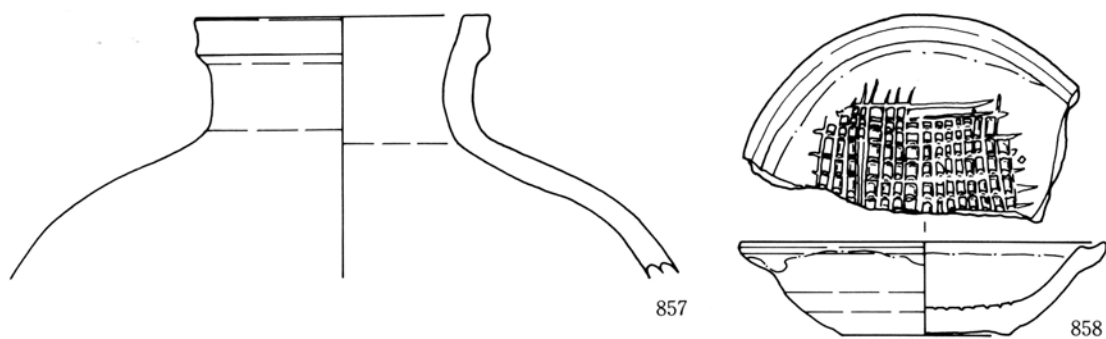
SD19 (2)



第81図 城下町期の遺物 (50)

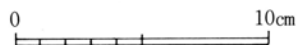
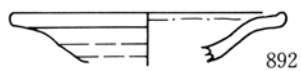
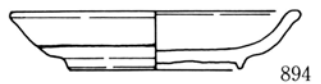
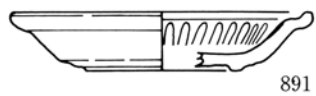
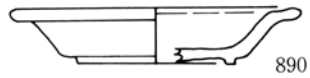
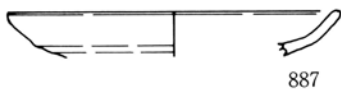
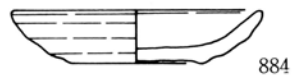
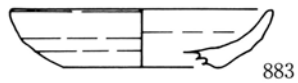
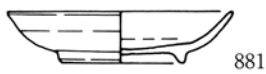
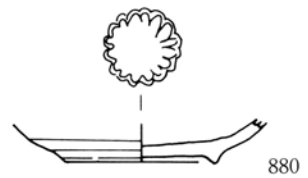
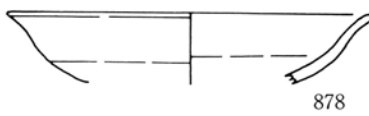
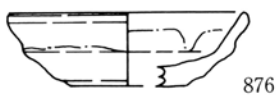
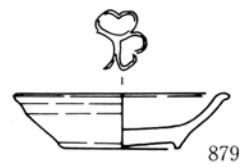
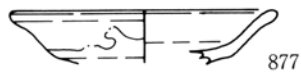
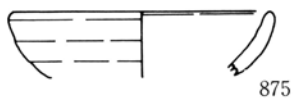
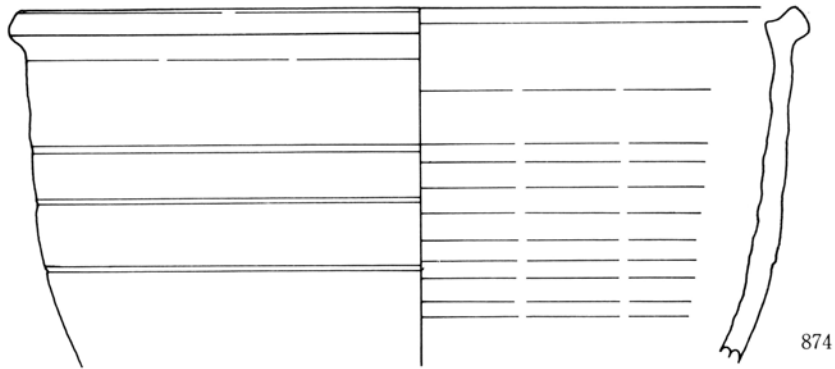
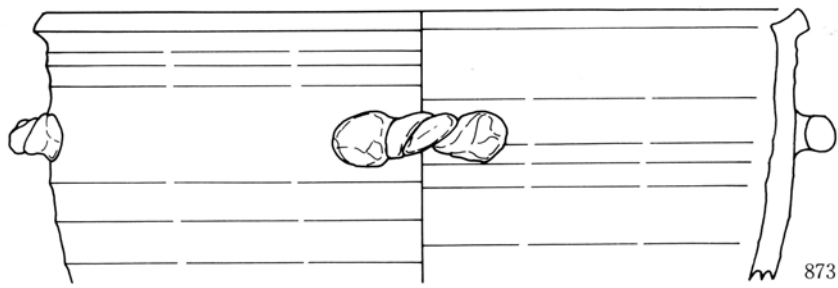
SD19(3)

- SD52 (第72～78図 640～778) 出土遺物はかなりの時期差があるものを含んでいる。卸し皿と仏供は13世紀後半代、香炉、平椀、四耳壺は14世紀後半代、天目茶椀、平椀、緑釉皿、鉢、盤、水注、香炉、双耳壺、甕等は15世紀代と考えられる。大窯期の製品はⅠ期からⅤ期まで出土しているが、Ⅳ期の製品はない。器種としては、天目茶椀、筒形椀、半筒椀、端反皿、印花文皿、丸皿、内禿皿、ひだ皿、菊皿、折縁皿、茶入、香炉、花瓶、水注、向付、鉢、播鉢がある。Ⅰ期の灰釉蓮弁文の椀(684)は釉が厚いため蓮弁の先が不明である。向付の中には、内底面に牡丹紋のある内外面掛け分けのものがある。瀬戸・美濃・常滑の窯以外の製品として16世紀後半の唐津窯の椀(725)と鉄絵向付(726)、楽系の椀(727)などがある。土師器には手づくね皿とロクロ成形の皿があり、ロクロ成形の皿には糸切り痕がある。土製の犬も1点出土している。
- SD19 (第79～81図 779～856) 瀬戸・美濃窯の製品では大窯Ⅰ・Ⅱ期のものが主体となっている。器種としては天目茶椀、丸椀、ひだ皿、稜皿、内禿皿、重圈皿、折縁小鉢、播鉢などが見られる。829は時期が不明であるが、生産地でみられる窯道具の「サヤ」の底部である。そのほか、灰釉平椀、灰釉緑釉皿、灰釉卸し皿、灰釉四耳壺などの窖窯Ⅳ期の製品(779～786)や大窯Ⅴ期の志野四方向付(831)、志野皿、フクラスズメの形をした水滴(832)などもみられる。830は常滑甕であるが、時期的には15世紀後半まで上がるものとも考えられる。土師器には皿、鍋などがある。
- NR03 (第82～86図 857～962) 瀬戸・美濃窯の製品では、古い時期のものとして15世紀後半の緑釉皿(861)、鉄釉香炉(870)鉄釉壺(871)、鉄釉鉢(873)なども見られるが、主体となるのは大窯Ⅰ期のものである。また、それに加えて若干Ⅴ期のものも少し見られる。大窯製品の器種としては天目茶椀、平椀、丸椀、緑釉皿、稜皿、折縁菊皿、丸皿、折縁皿、重圈皿、播鉢などがある。879は灰釉端反皿で底内面にカタバミの印花文がある。土師器皿は口径約8cmの手づくね成形のものと大・中・小の3種類の大きさに分かれるロクロ成形の皿がある。937は内耳をもつ鍋である。それ以外に天正期と考えられる備前大皿や黒楽茶椀なども出土している。
- SD39 (第87～88図 963～1006) 出土する遺物は15世紀代の窖窯のものから17世紀代の登窯のものまで、かなり年代幅の広いものである。瀬戸・美濃窯の製品では窖窯Ⅳ期のルソン壺と呼ばれる鉄釉壺(978)や鉄釉茶釜(968)なども見られる。大窯の製品には天目茶椀や各種皿の他に大窯Ⅳ期の鉄絵を施した灰志野鉢(994)もある。995は備前産の小壺である。登窯の製品は鉄釉天目茶椀(998・999)や輪禿皿などがある。
- SD48 (第89図 1007～1028) 瀬戸・美濃窯の製品では窖窯末期～大窯Ⅰ期のものが主体である。1015、1016は窖窯Ⅳ期のものがあるが、火を受けた形跡がある。1007は大窯Ⅰa期の指標とされる瀬戸市小金山窯の製品とよく似た形態である。土師器鍋は内側に耳がつく「内耳鍋」と呼ばれるものであるが、底部が丸みを持つもの(1019)と平底のもの(1020)がある。
- SD13 (第90～93図 1029～1130) 瀬戸・美濃窯の製品では大窯Ⅰ～Ⅲ期のものが主体である。1084は鉄釉を施した匣鉢である。1085・1086は香炉、1087・1088は茶入である。重圈皿(1098～1108)は大窯Ⅱ期に属するものである。それ以外の製品には引出し黒丸椀などもある。1109～1112はとり皿である。近くにフィゴの羽口なども出土しており、鍛冶に関連した施設がある



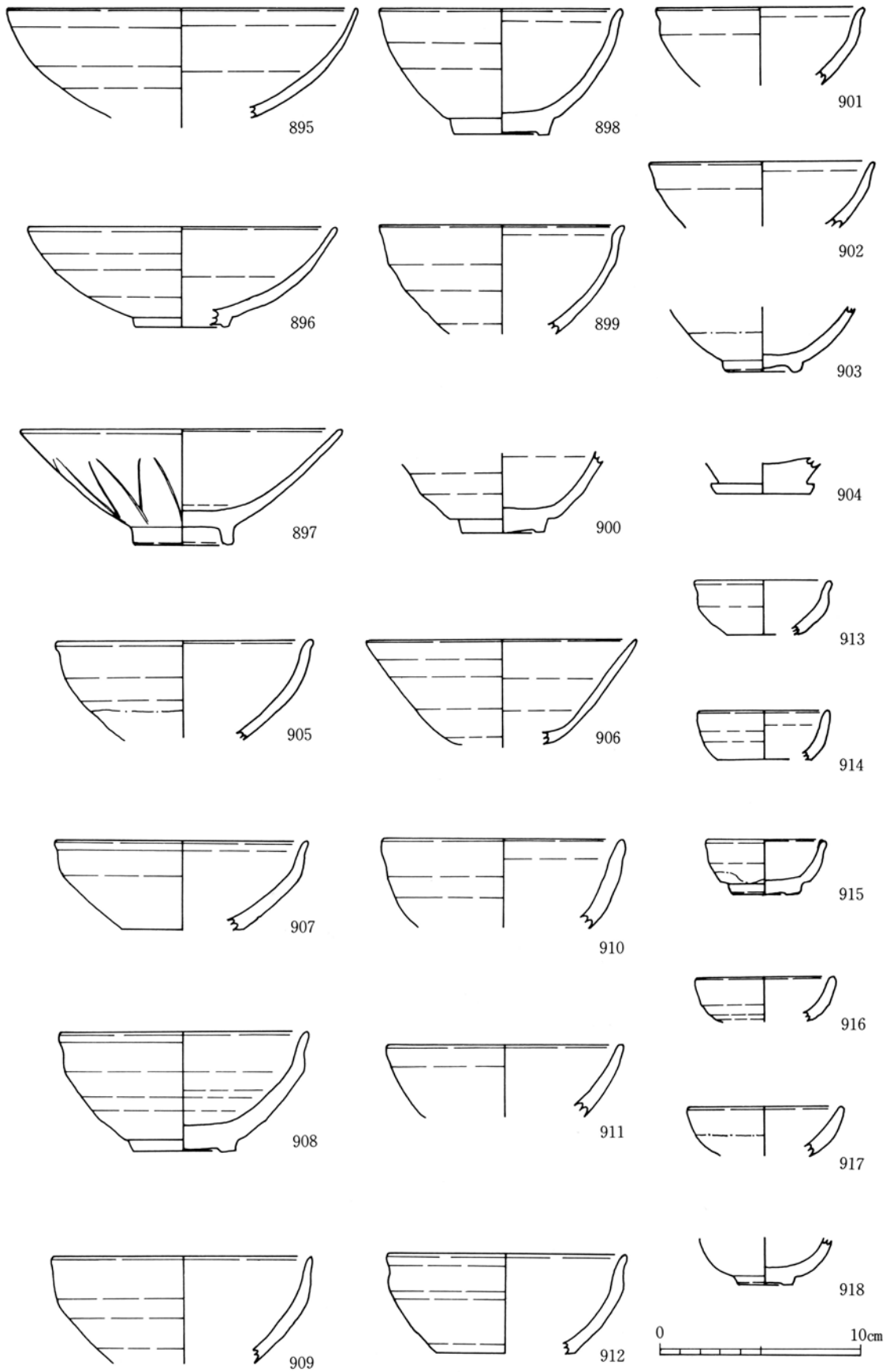
第82図 城下町期の遺物 (51)

NR03 (1)



第83図 城下町期の遺物 (52)

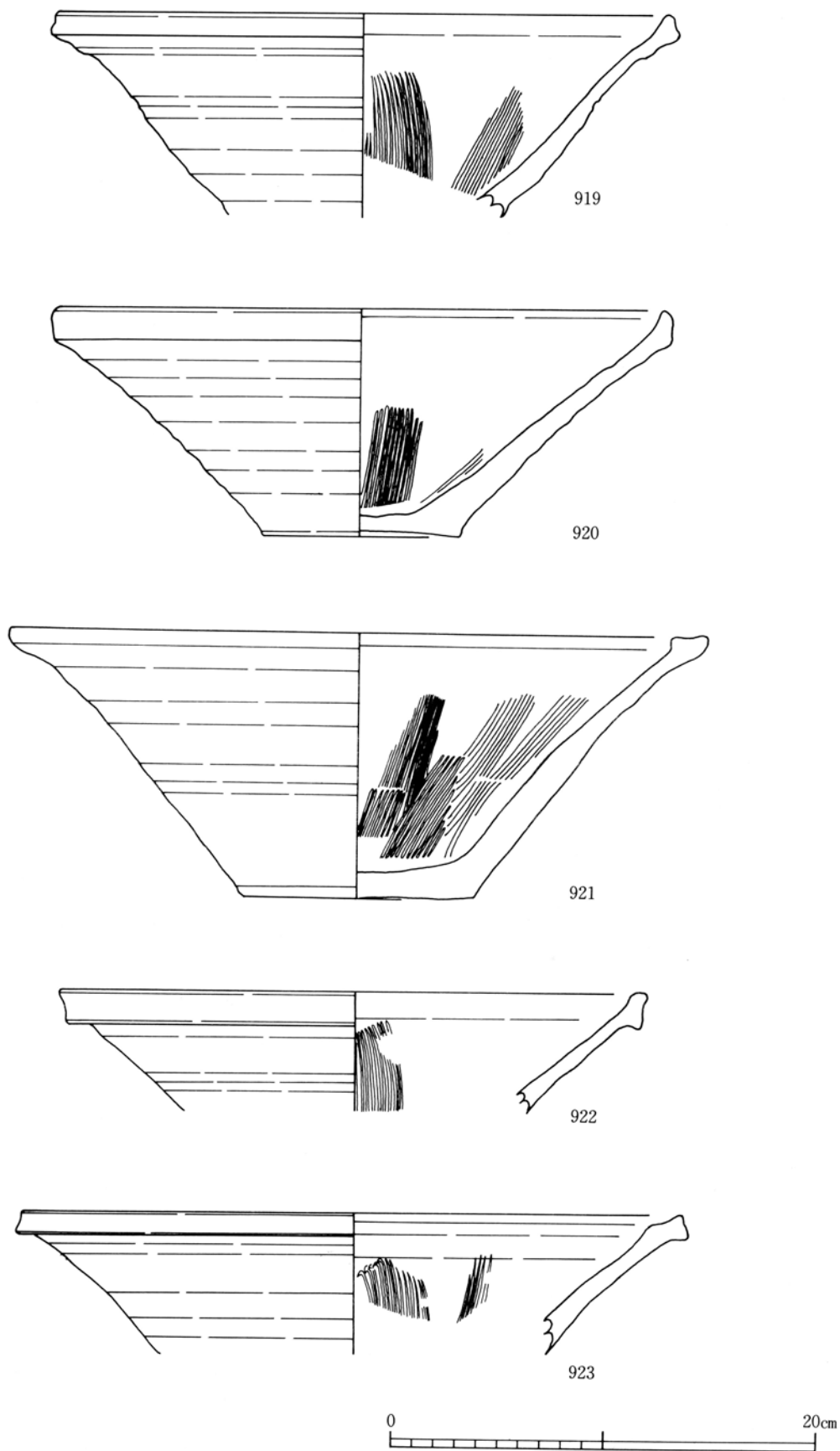
NR03 (2)



第84図 城下町期の遺物 (53)

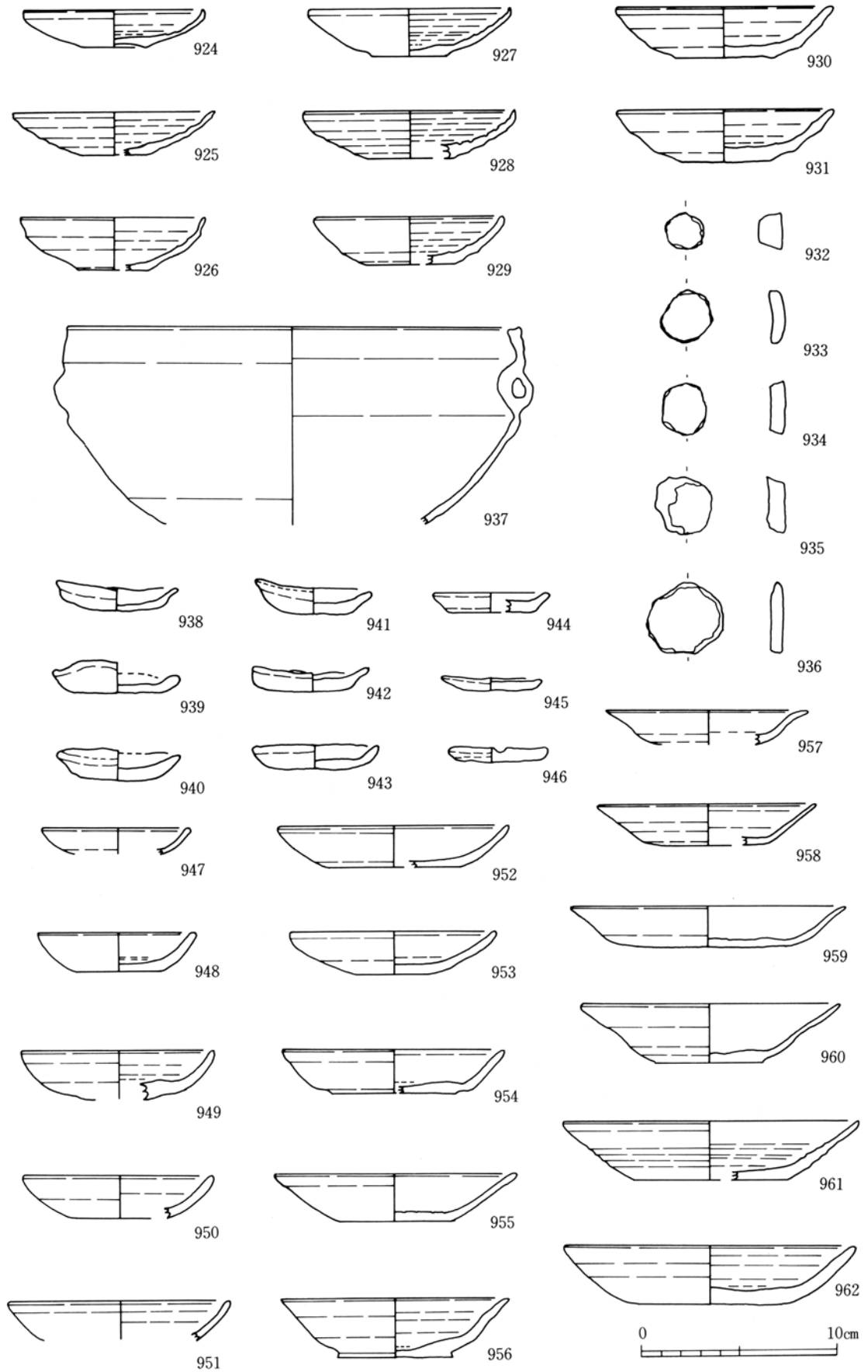
NR03 (3)





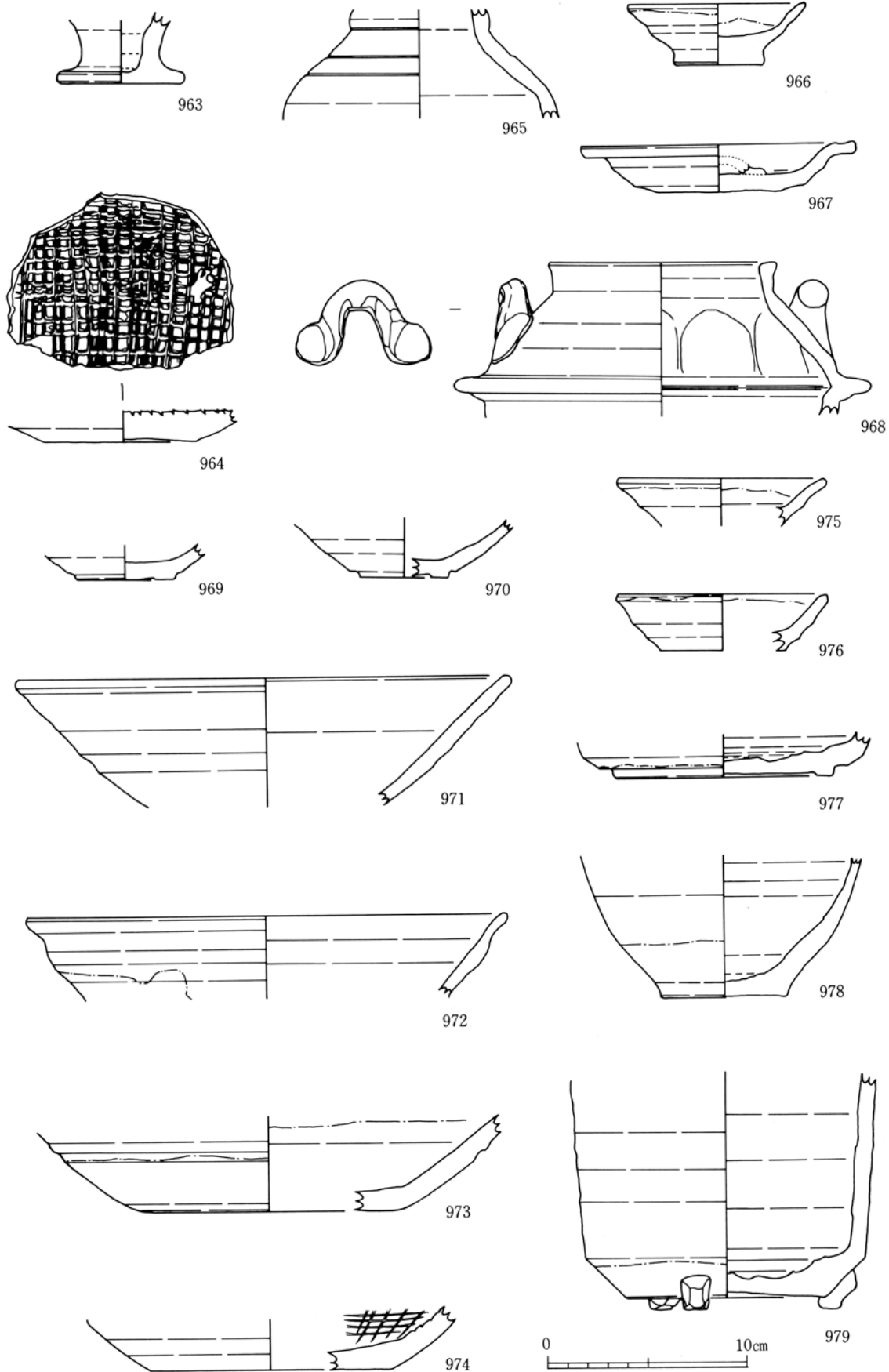
第85図 城下町期の遺物 (54)

NR03 (4)



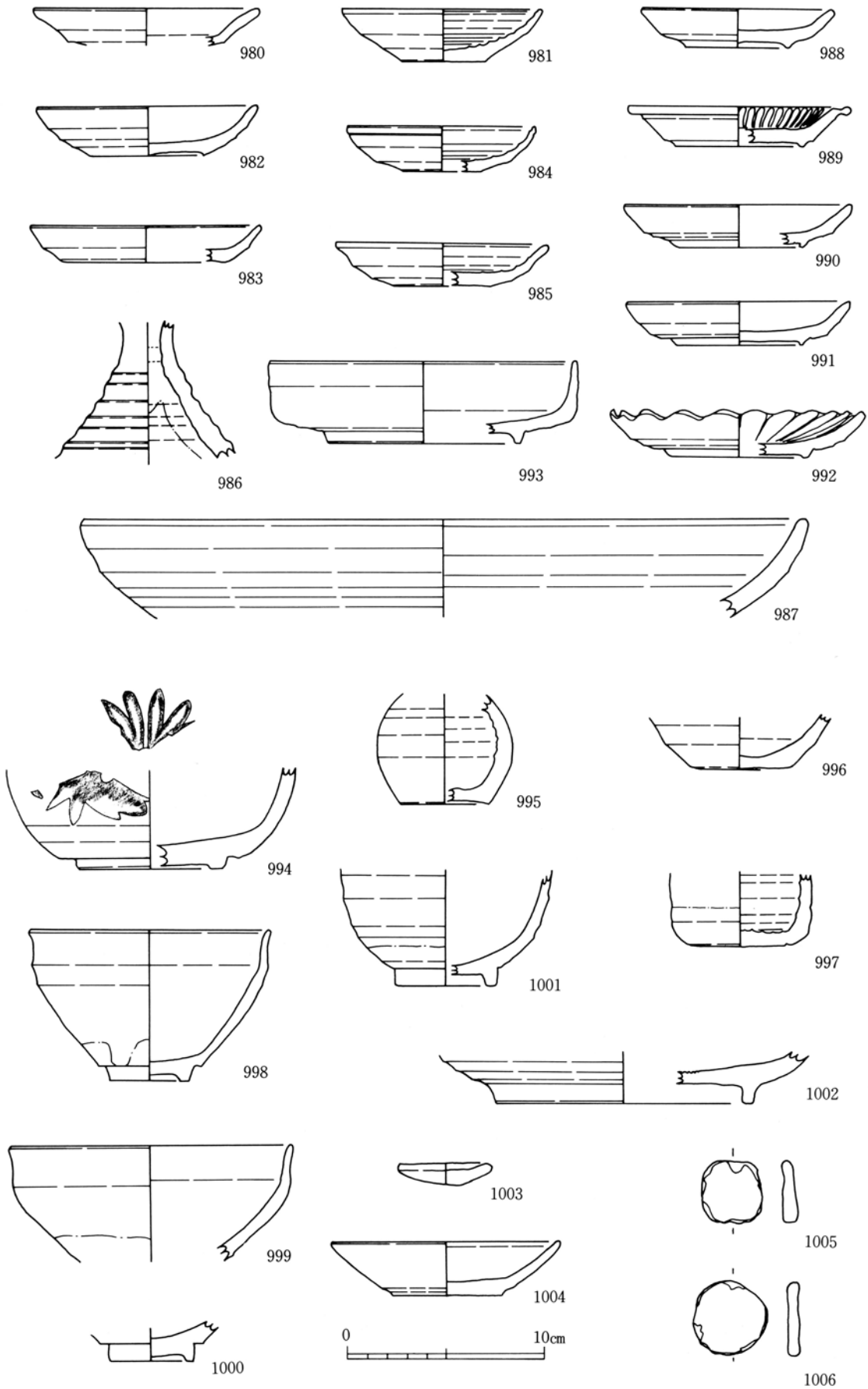
第86図 城下町期の遺物 (5)

NR03 (5)



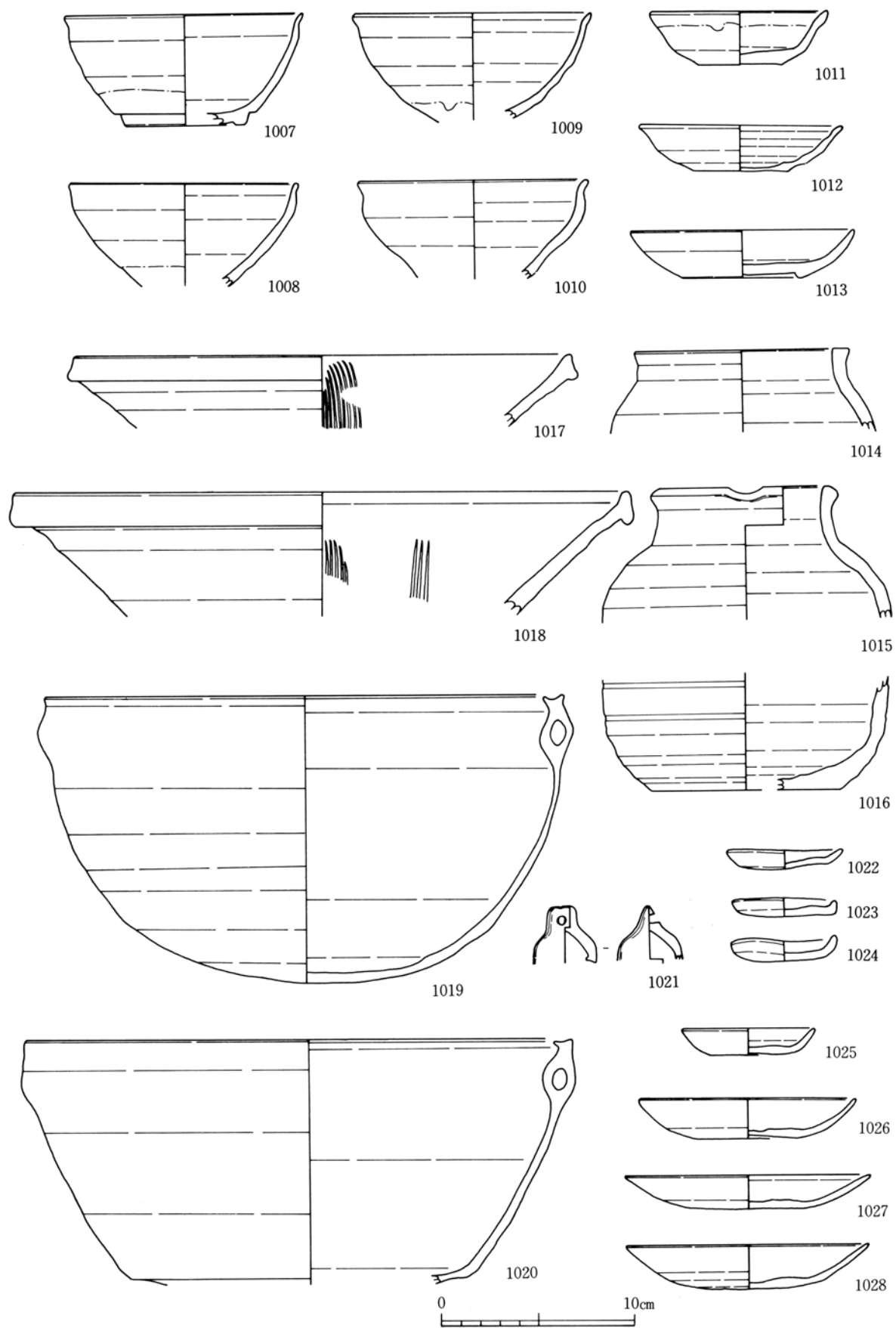
第87図 城下町期の遺物 (56)

SD39 (1)



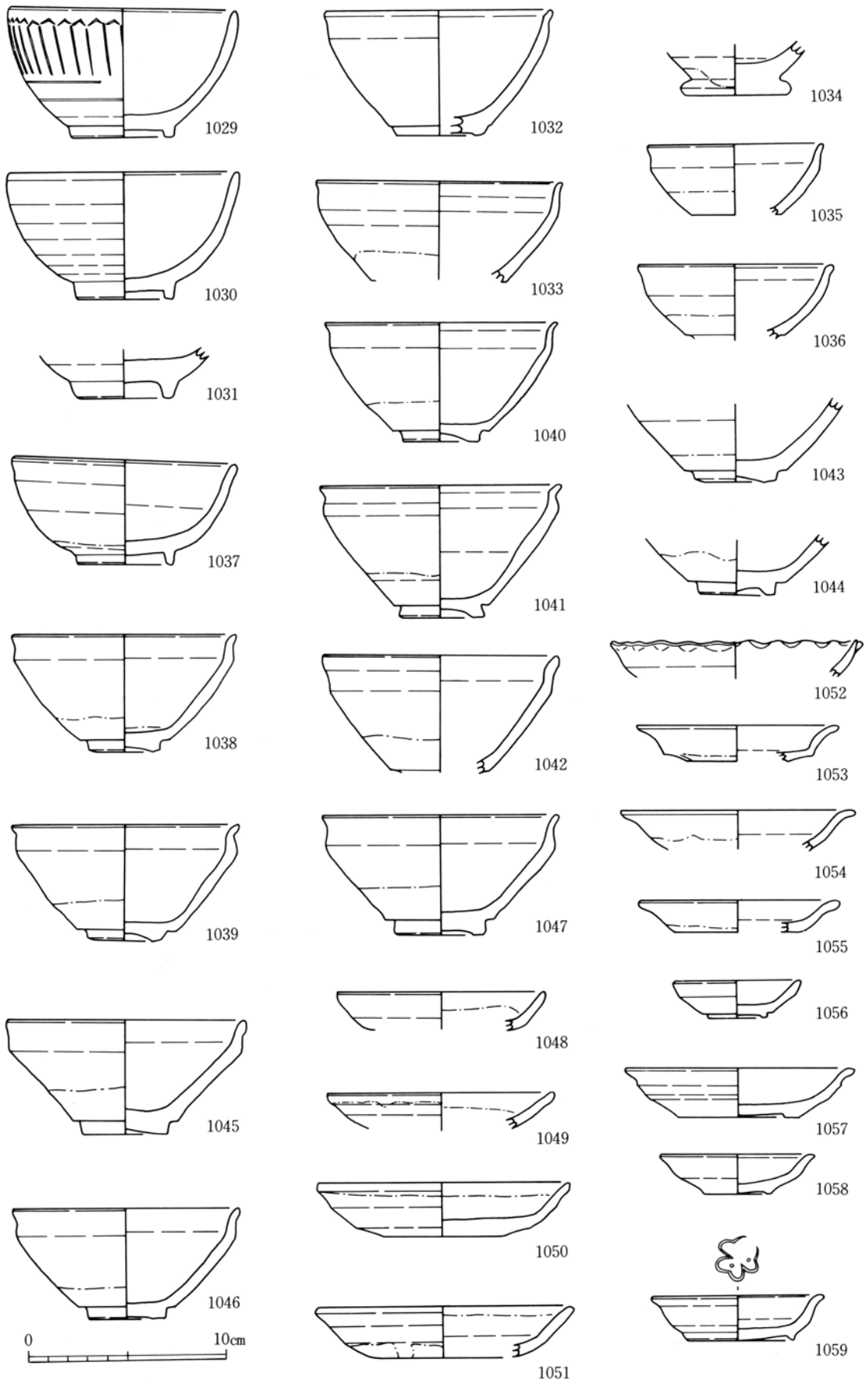
第88図 城下町期の遺物 (57)

SD39 (2)



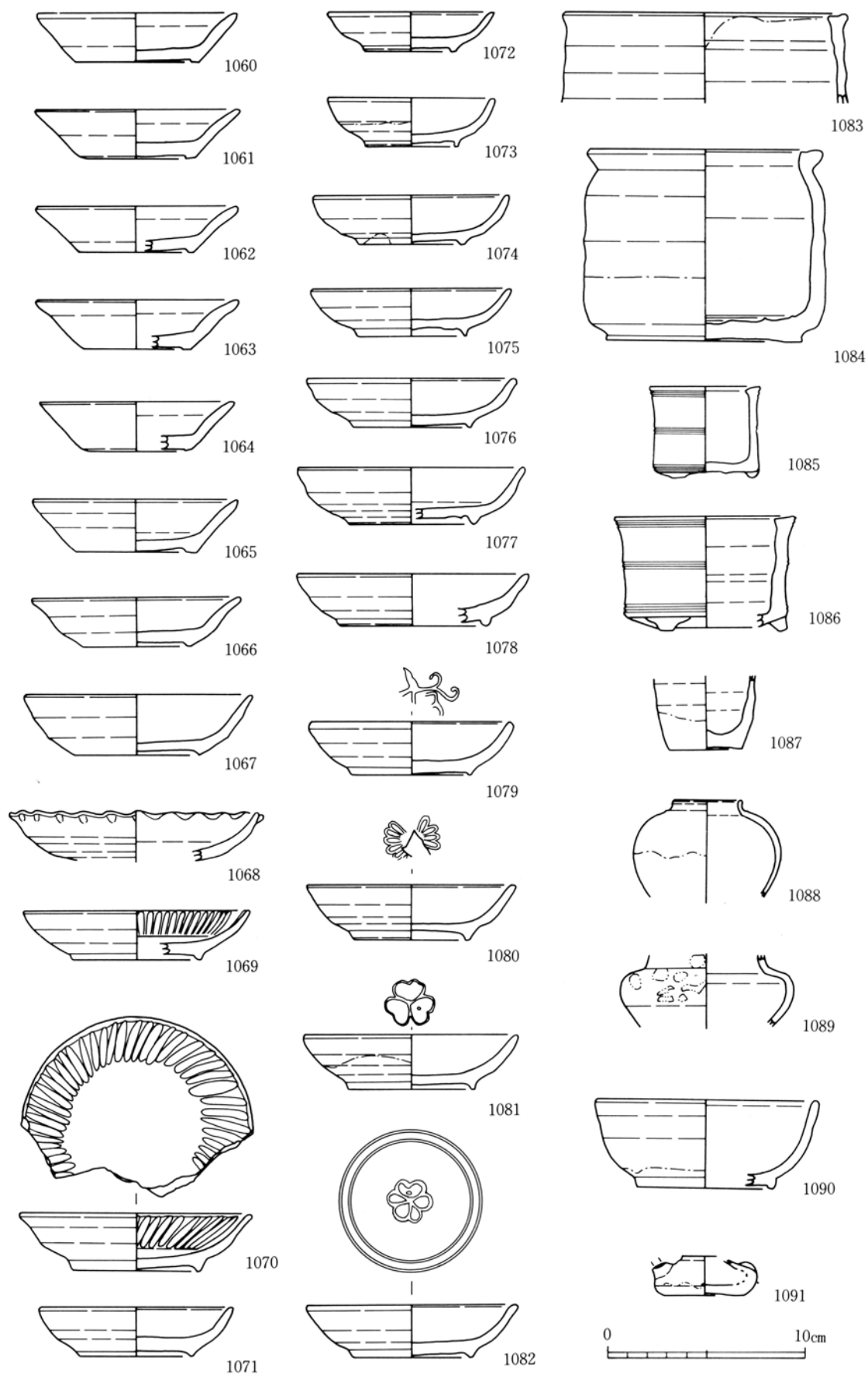
第89図 城下町期の遺物 (58)

SD48



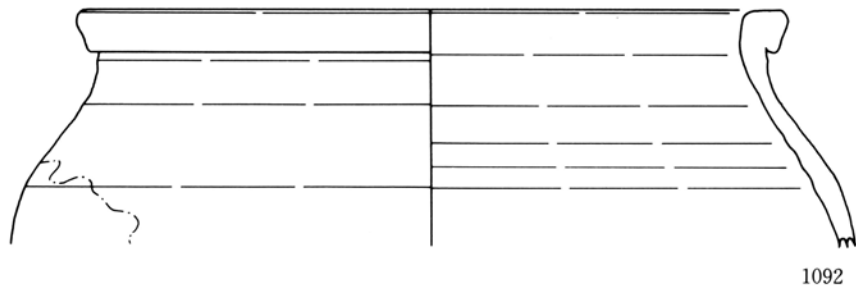
第90図 城下町期の遺物 (59)

SD13 (1)

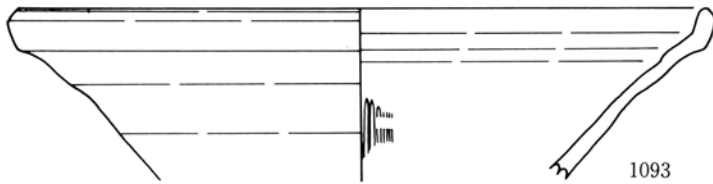


第91図 城下町期の遺物 (60)

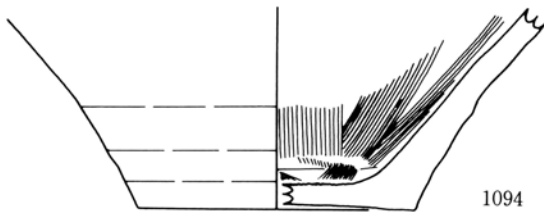
SD13 (2)



1092



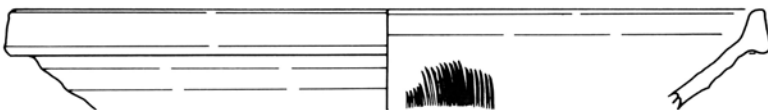
1093



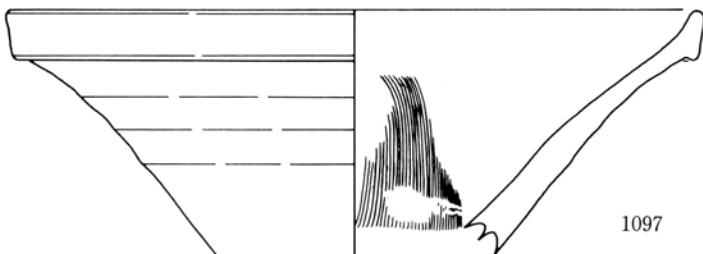
1094



1095



1096



1097



1098



1099



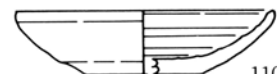
1100



1101



1102



1103



1104



1105



1106



1107



1108



1109



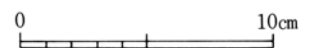
1110



1111



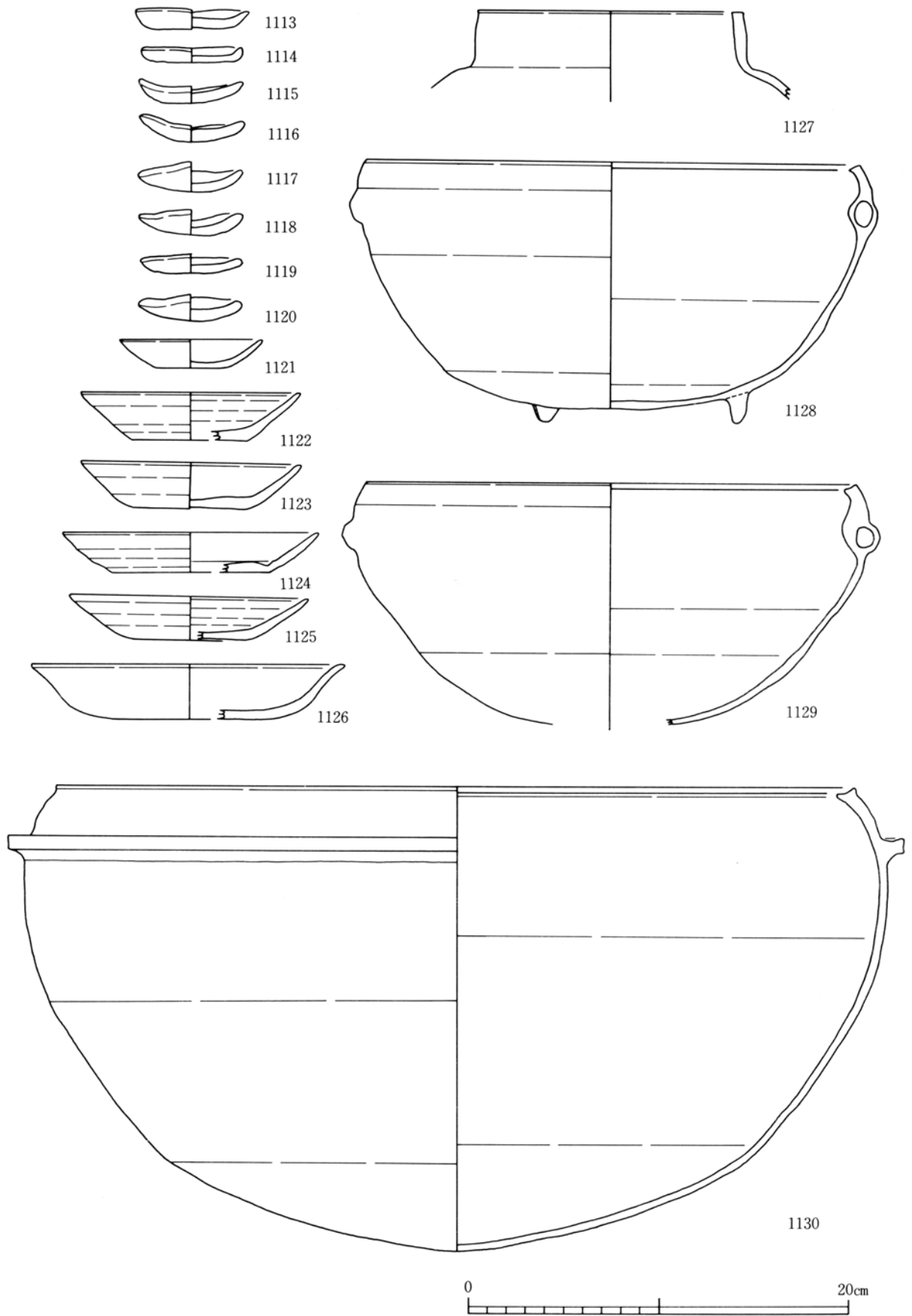
1112



SD13 (3)

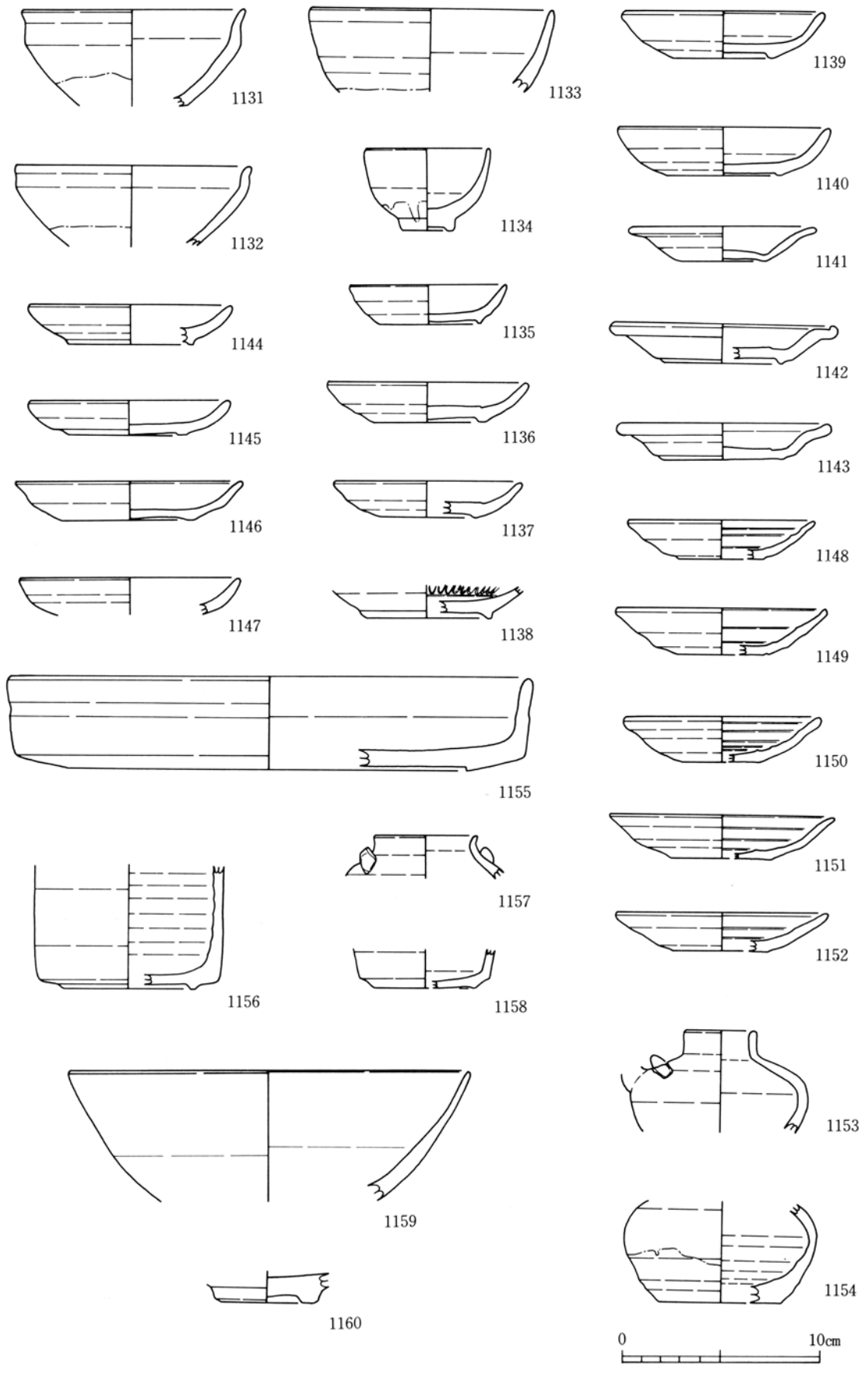
第92図 城下町期の遺物 (61)





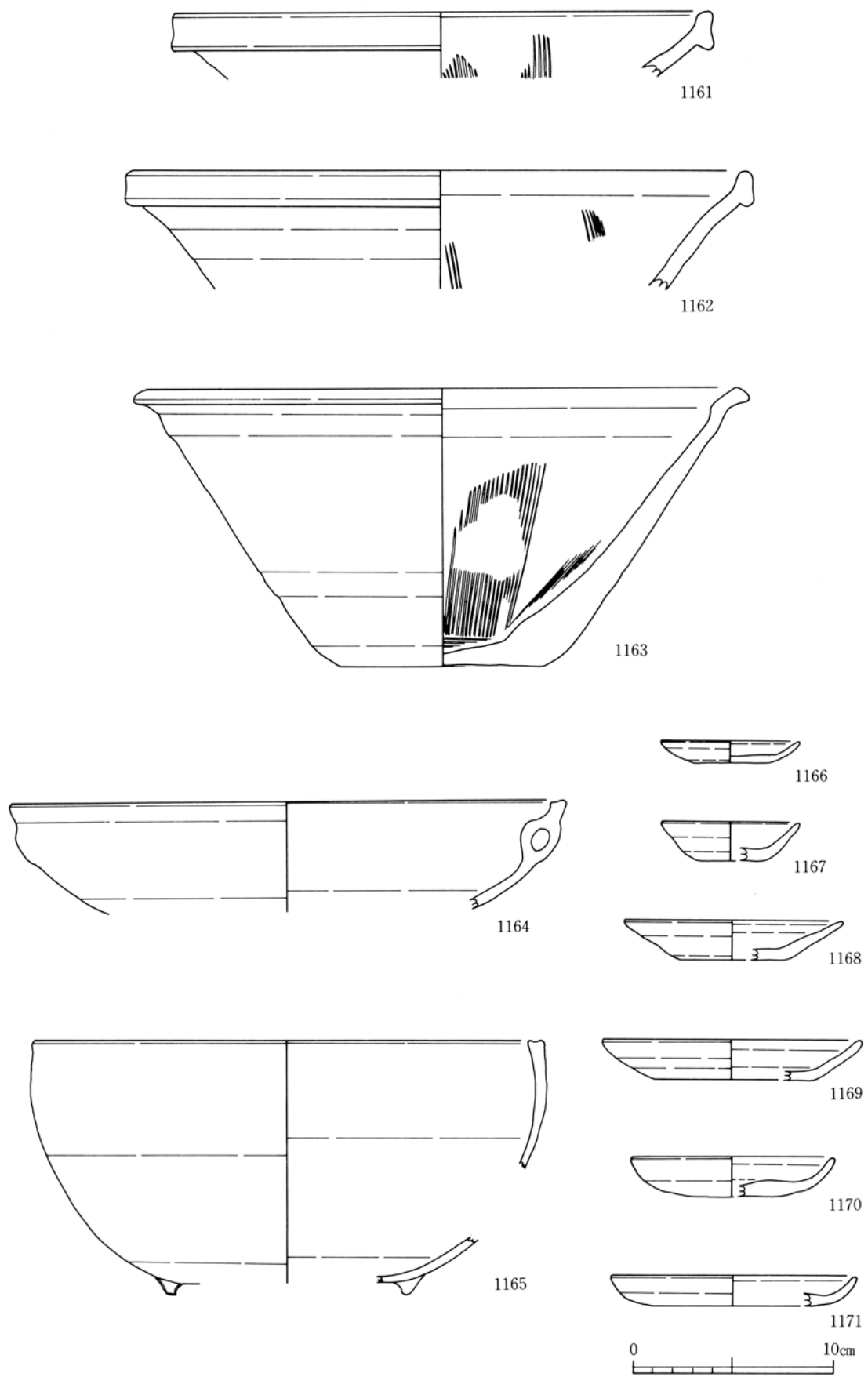
第93図 城下町期の遺物 62

SD13 (4)



第94図 城下町期の遺物 (63)

SK05 (1)



第95図 城下町期の遺物 (64)

SK05 (2)

可能性もある。土師器には口径約6cmの手づくね成形の皿と口径10cm前後のロクロ成形の皿がある。煮炊具では三足のつく内耳鍋(1128)や茶釜型羽釜(1127)などがある。1130は口径が約40cmの大型の羽釜である。

SK05(第94~95図 1131~1171) 瀬戸・美濃窯の製品では大窯Ⅱ~ⅢのものVのものが多くみられる。中でも志野どら鉢(1155)や志野角向付(1156)など志野の製品が注目される。播鉢では1161と1162は大窯Ⅱb期のものであるが、1163は大窯Ⅴ期に下るものである。

SK40(第96図 1172~1177) 1172は黄瀬戸どら鉢である。時期的には大窯Ⅴ期のものであると思われる。1173は大窯Ⅲ期の皿である。

その他の遺構および包含層出土の遺物については、特徴的なものを取り上げ述べることにする。

1178は15世紀後半に位置づけられる鉄釉播座茶入れである。

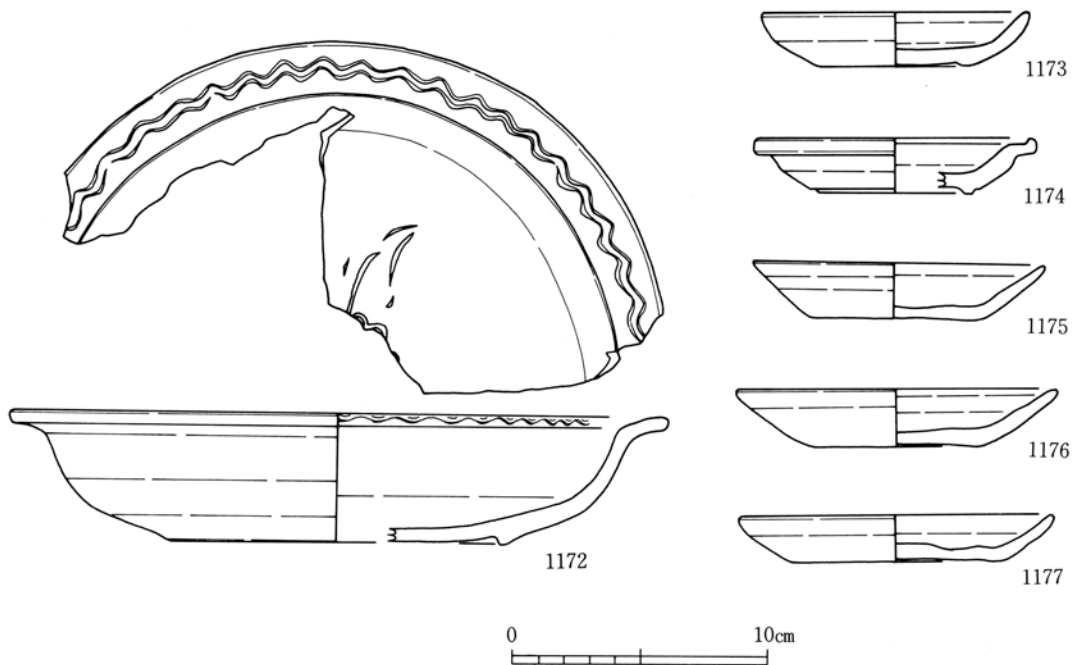
1181はSD58から出土した灰釉稜皿である。底部に墨書がある。内容は平仮名で「なうら」と読める。

1189は灰釉を施した向付である。型打ちで六角形に成形したもので、中心に巴文を配する。

1193は包含層中から出土した備前大鉢である。時期的には16世紀後半代が考えられる。

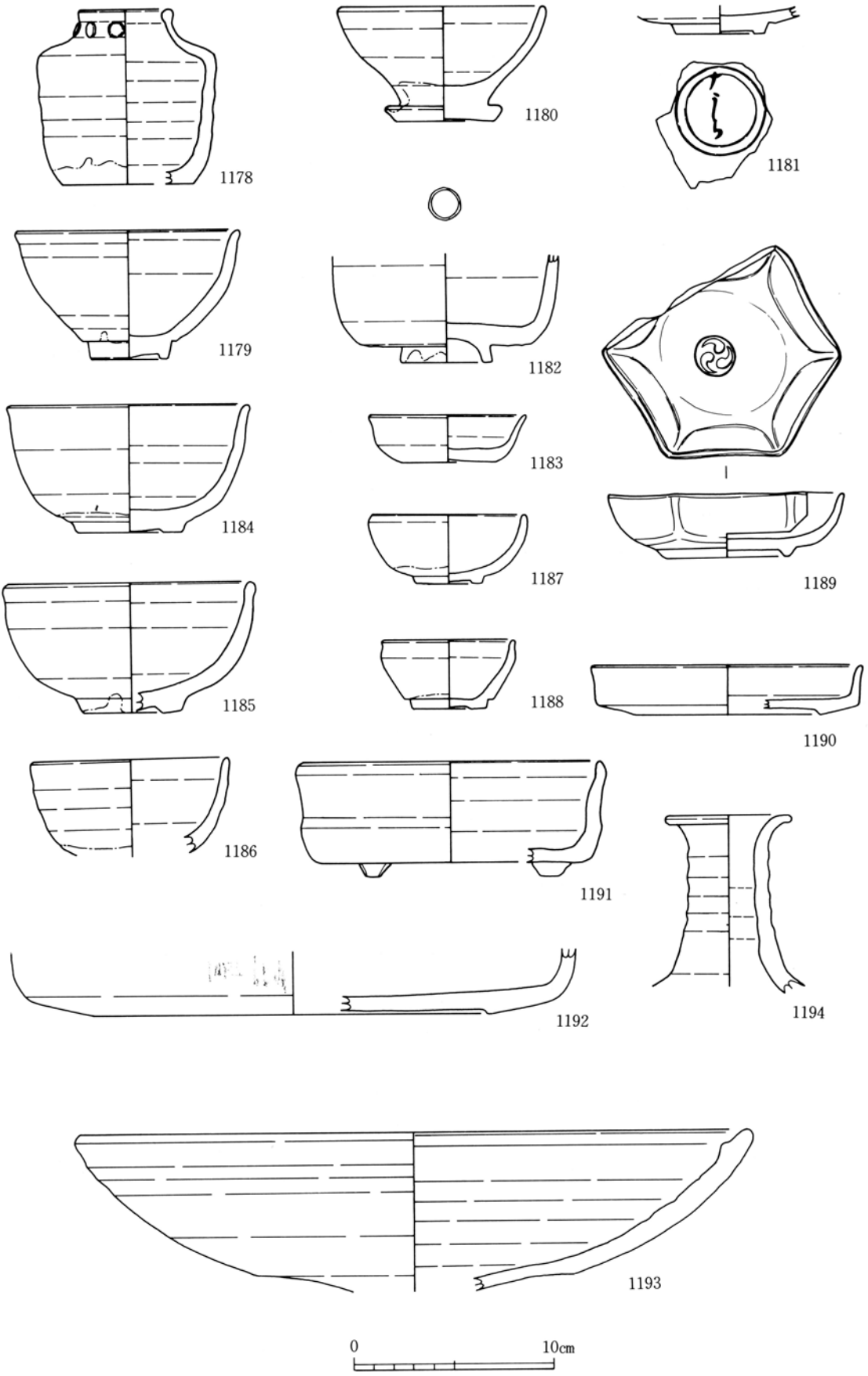
輸入陶磁器もかなり多く出土している。青磁・白磁・青白磁・青花などの中国陶磁器と朝鮮陶器があるが、種類ごとに述べることにする。

白磁(第99図 1201~1221) 白磁は椀・皿がほとんどである。1201のような中世に遡る玉縁口縁椀も見られるが、主体となるのは16世紀代のものである。量的に多いのは端反皿(1211~1218)である。また、1208~1210のように高台に切れ目を入れる皿がみられる。1221は蓋であると思われるが、天井部には文様がある。



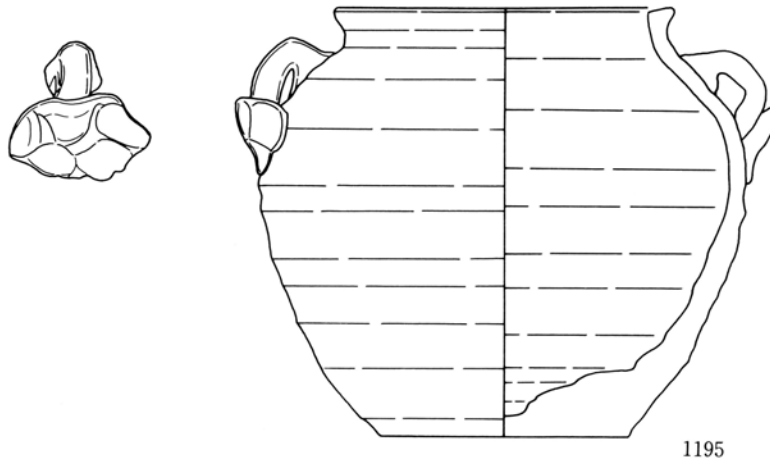
第96図 城下町期の遺物(65)

SK40(1)

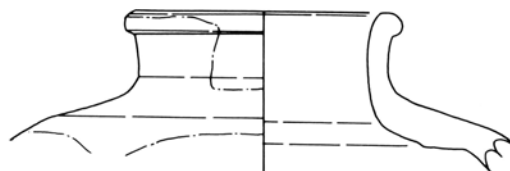


第97図 城下町期の遺物 (66)

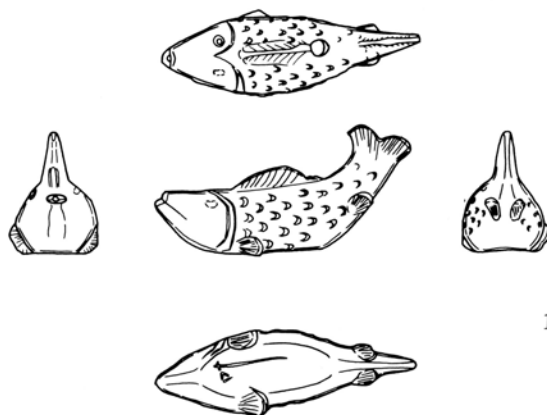
その他 (1)



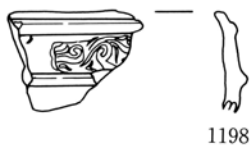
1195



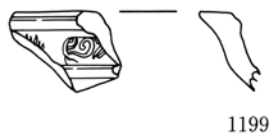
1196



1197



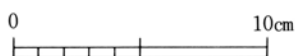
1198



1199



1200



第98図 城下町期の遺物 (67)

その他 (2)

青磁（第100～101図 1222～1256） 青磁には椀・皿・鉢・壺蓋などがある。1222は龍泉窯の蓮弁文椀で、時期的には13世紀に遡るものと思われる。1232は口縁部内面に2条の沈線を施し、その下に劃花文を描く。1226～1231は篋書き蓮弁文である。1235～1241は底部見込み部分に花文、文字を描く。1245は大型の壺蓋の口縁部であるものと思われる。1250は口縁部が折縁になる宋代の双魚文皿である。

青白磁（第104図 1291） 1291はほぼ完形で出土した青白磁水注である。体部が瓜の形態で、上向きの注口と帯状の取っ手をつけている。

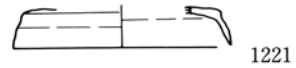
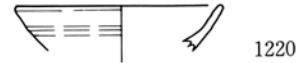
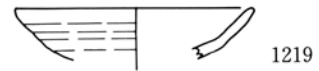
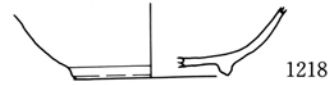
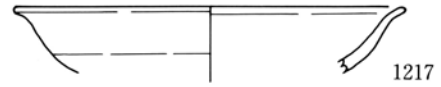
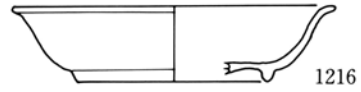
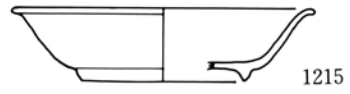
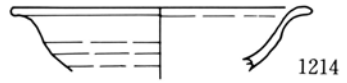
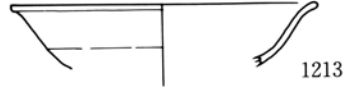
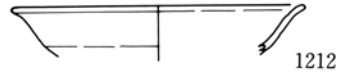
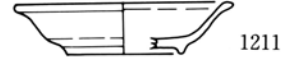
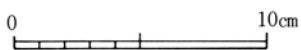
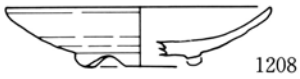
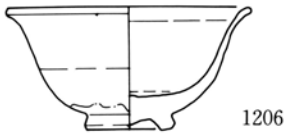
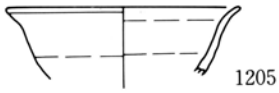
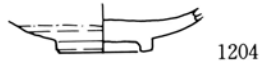
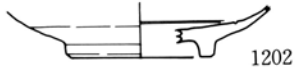
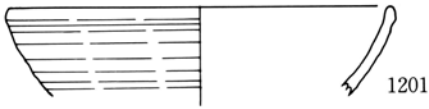
青花（第102～104図 1257～1294） 青花白磁（染付）は椀・皿がほとんどである。描かれた文様は様々であるが、1285は蟹の文様である。1257は内面に花文をかき、底外面には「大明年製」の銘がある。1260には「長命富貴」の銘がある。1293・1294は内面に花文を描く大鉢である。

朝鮮陶器（第105図 1295～1299）の出土は量的に少ない。1295・1296は体部が直線的に開く椀である。1297は口径約30cmの盤であると思われる。1298・1299は徳利である。肩には数条の沈線が回っている。

（城ヶ谷和広・小澤一弘）

#### 註

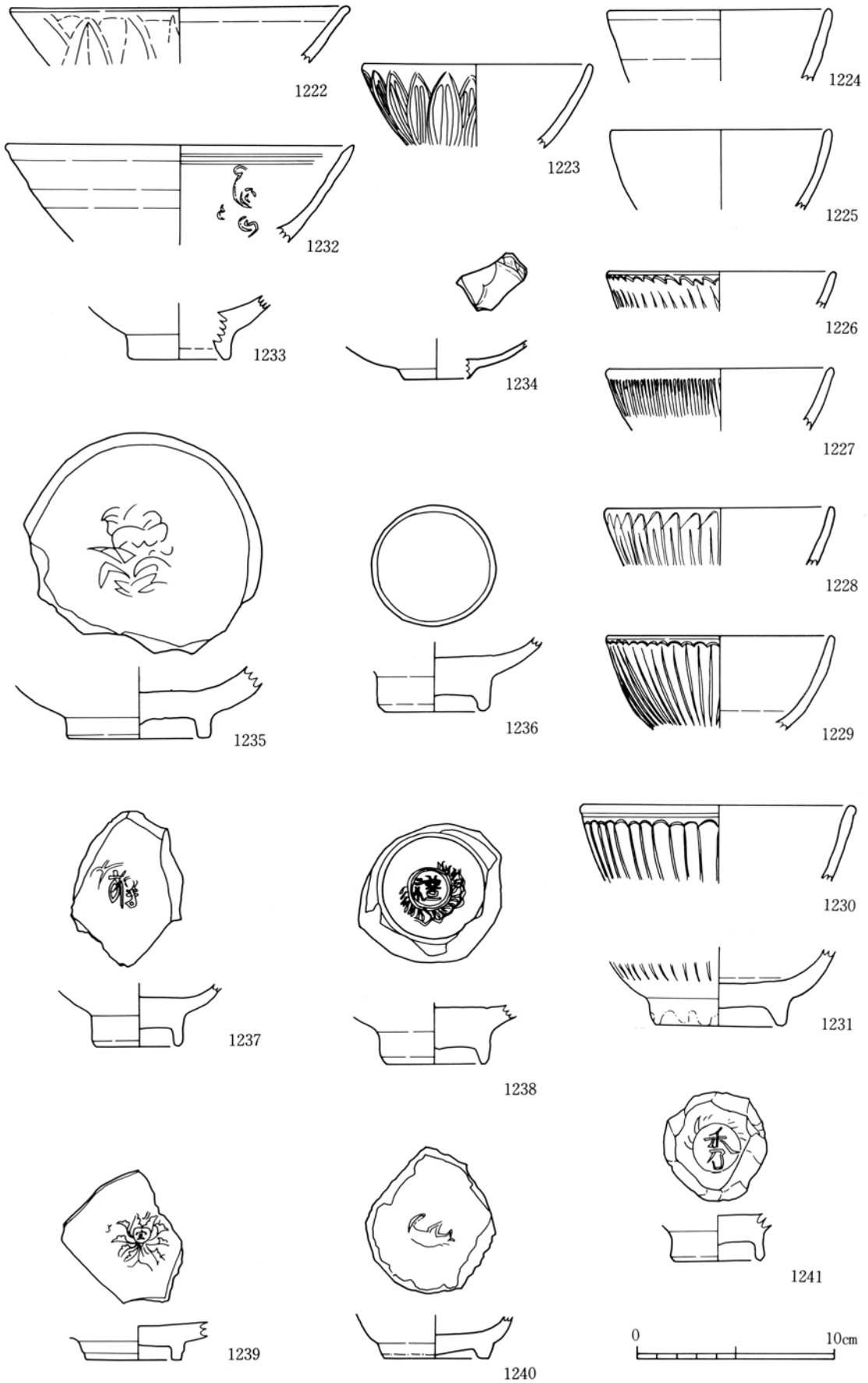
- 1) 本書で用いる編年観は土器組成の主体となる瀬戸・美濃窯の生産地の編年によっている（井上喜久男 1992『尾張陶磁』）。実年代としては大窯Ⅰa期が1490年頃～1510年頃、大窯Ⅰb期が1510年～1530年、大窯Ⅱa期が1530年頃～1550年頃、Ⅱb期が1550年頃～1570年頃、Ⅲ期が1570年頃～1580年頃、大窯Ⅳ期が1580年頃～1585年頃、大窯Ⅴ期が1585年頃～1605年頃と考えられている。



第99図 城下町期の遺物 (68)

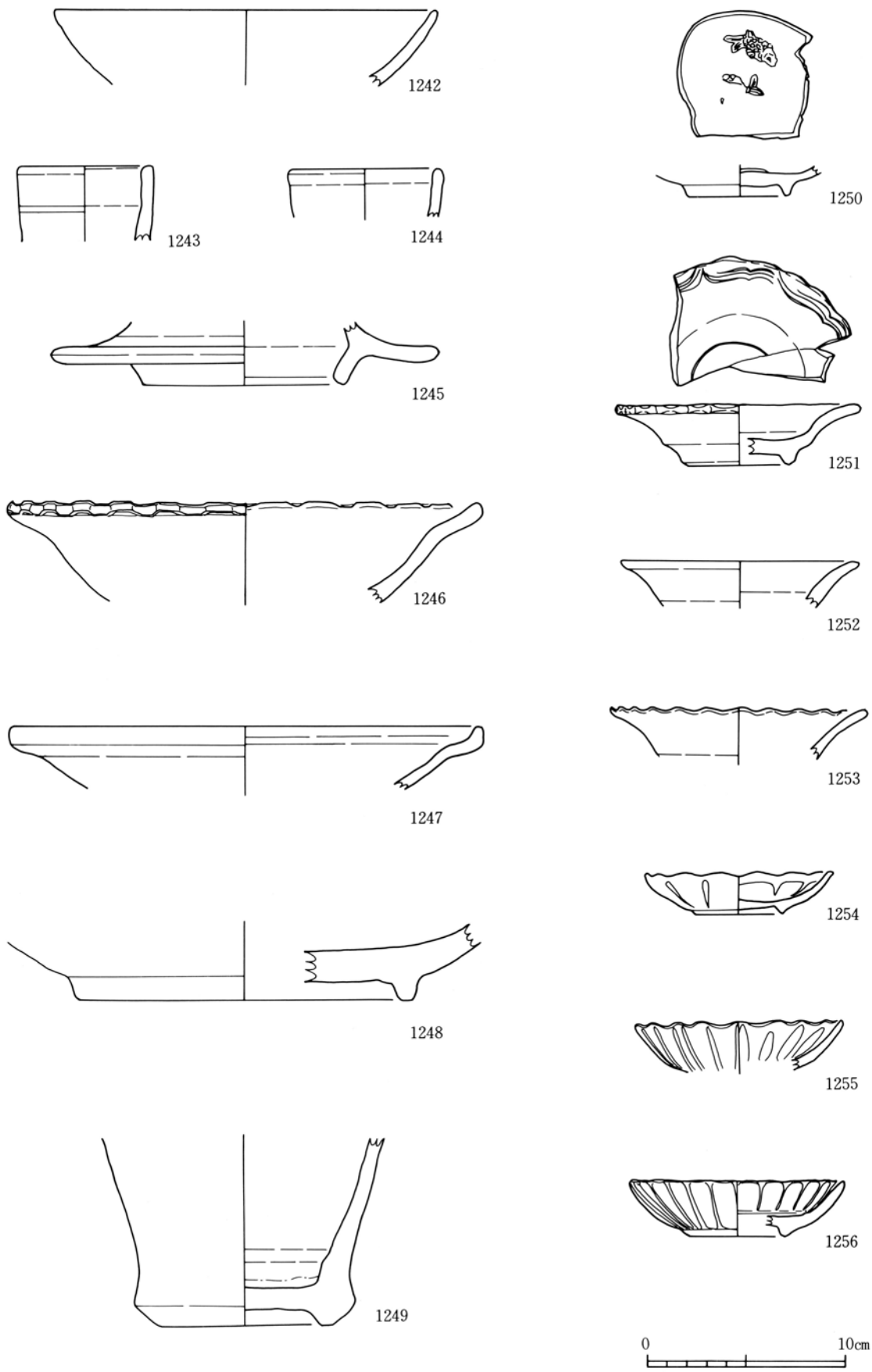
輸入陶磁器：白磁





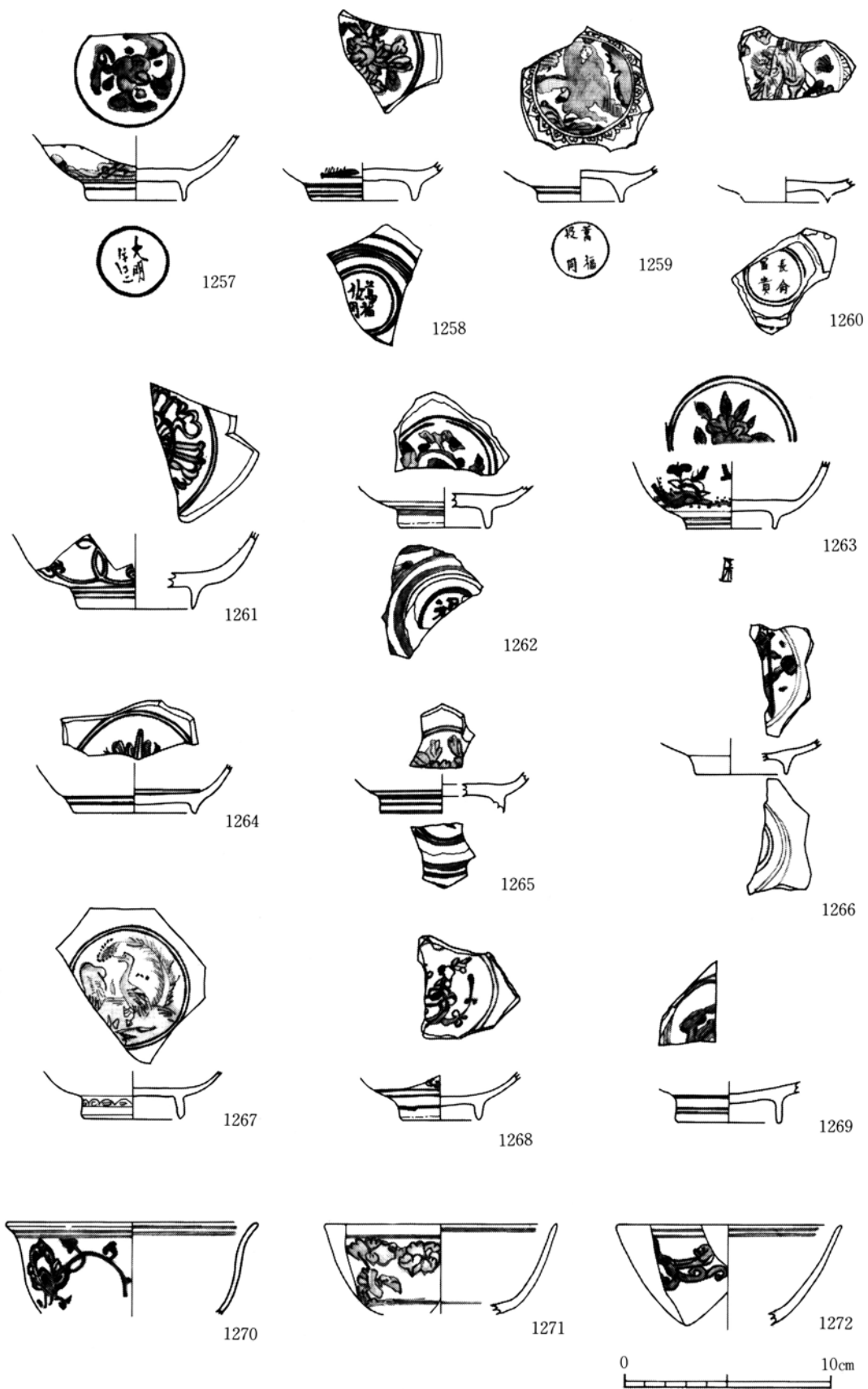
第100図 城下町期の遺物 (69)

輸入陶磁器：青磁 (1)



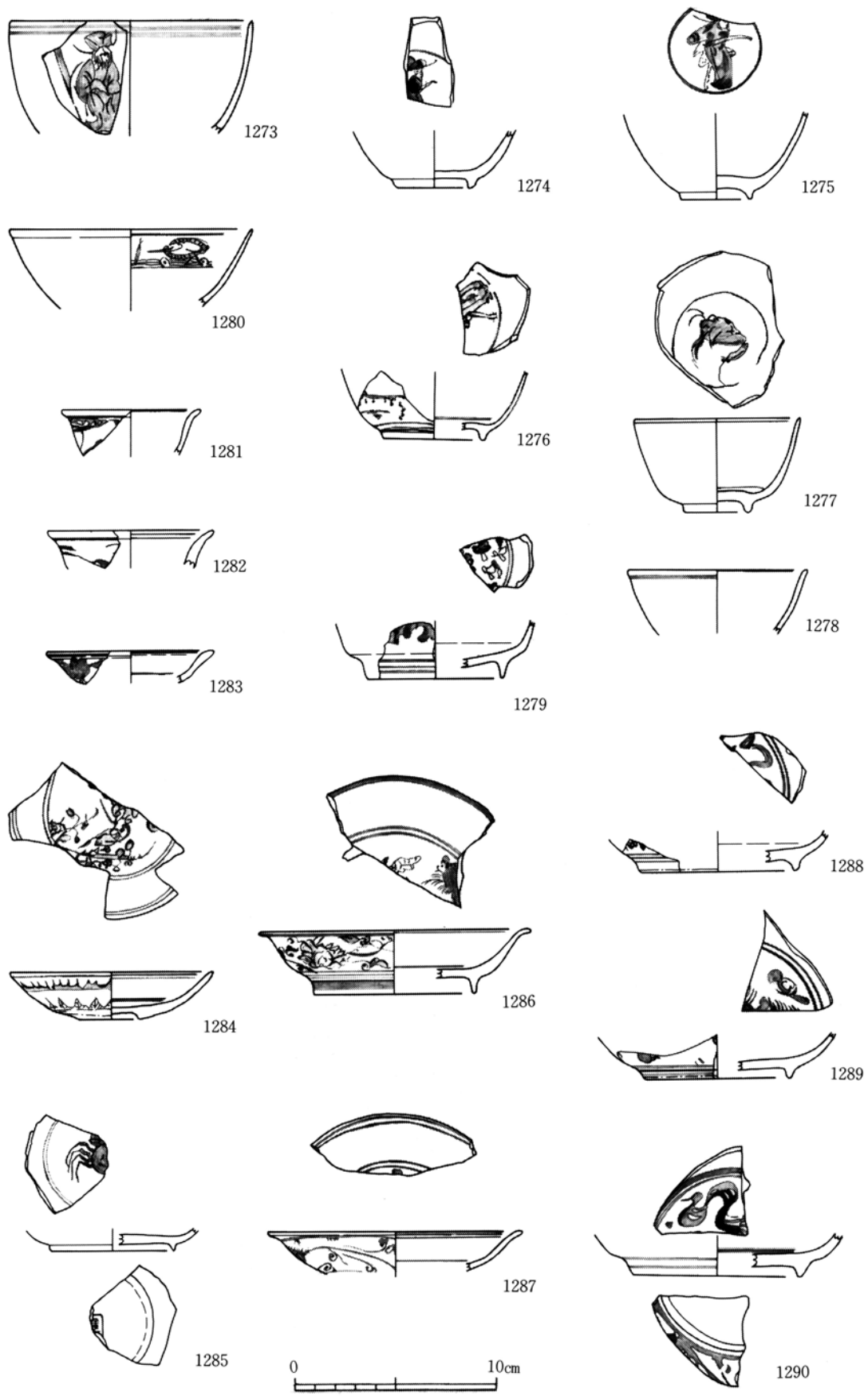
第101図 城下町期の遺物 (70)

輸入陶磁器：青磁 (2)



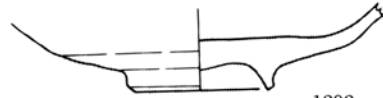
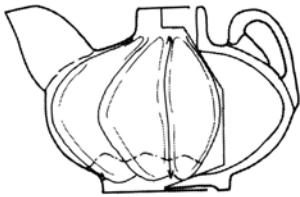
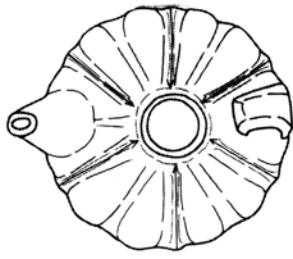
第102図 城下町期の遺物 (71)

輸入陶磁器：青花 (1)



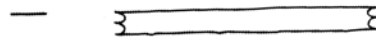
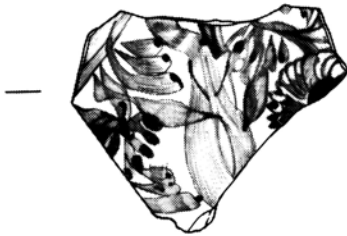
第103図 城下町期の遺物 (72)

輸入陶磁器：青花 (2)

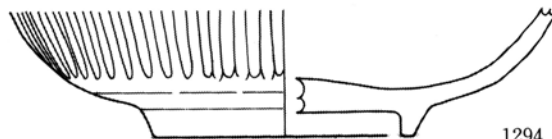
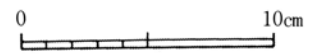


1291

1292



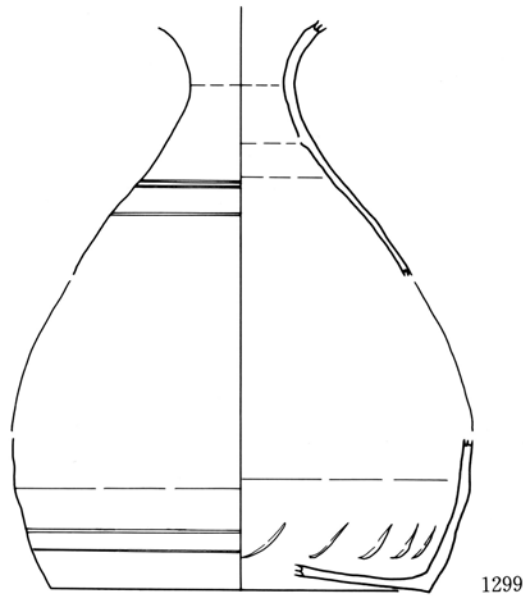
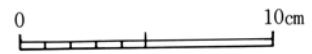
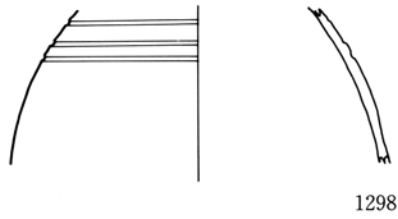
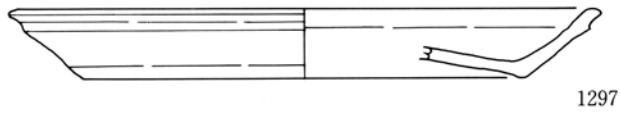
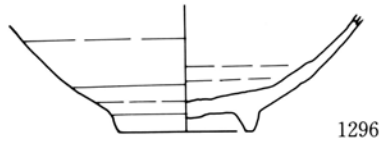
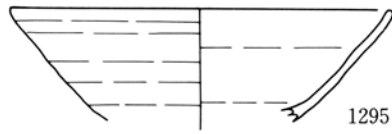
1293



1294

第104図 城下町期の遺物 73

輸入陶磁器：青白磁、青花(3)



第105図 城下町期の遺物 (74)

輸入陶磁器：朝鮮陶器

### 第3節 瓦

清洲城下町遺跡、朝日西遺跡からは、非常に沢山の瓦が中堀・廃棄土坑・包含層などから出土した。<sup>(1)</sup>瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・鯨瓦・鬩斗瓦・面戸瓦・飾り瓦・伏間瓦など各種がある。ここでは、種類別にその概要について記述することとする。

#### 軒丸瓦（第106～108図）

瓦当の文様・規模をもとに、以下のとおり分類する。<sup>(2)</sup>

I類（第106図 1～3） 桐文の軒丸瓦。五三の桐文で、桐の端が開いているもの（a類）と、閉じているもの（b類）に二分できる。丸瓦部分は凹面にコピキBを看取できる。

#### II類 三つ巴文の軒丸瓦

II a 1類（第106図 4・5） 瓦当径16cm内外のもので内区の文様は左巻三つ巴文。巴の尾が長く伸びるもの。外区には推定18個の珠文をめぐらす。丸瓦部分の凹面は、コピキAのものとコピキBのもの両方が混在する。

II a 2類（第106図 6～8） 瓦当径16cm内外のもので、II a 1類に比べて巴の尾が細くなったもの。外区には推定16個の珠文をめぐらす。7は凸部に金箔を張った跡が残っている。

II a 3類（第106図 9・10） 瓦当径16cm内外のもので、巴の尾が太く短いもの。外区には12個の珠文をめぐらす。文様は深くはっきりしている。

II b 1類（第107図 11～15） 瓦当径13～14cm内外のもので、内区の文様は左巻き三つ巴文。巴の尾が長く伸びるもの。外区に16個の珠文をめぐらす。丸瓦部分は玉縁になっており、凹面にはコピキBによる横線が観察できる。巴部分と周縁部分（凸部）に金箔を張ったものと、凹部に金箔を張ったものが存在する。

II b 2類（第107図 16～18） 瓦当径13～14cm内外のもので、内区の文様は右巻き三つ巴文。巴の尾が細く長く伸びて、隣の巴と接しているもの。外区に16個の珠文をめぐらす。

II c類（第108図 19～24） 瓦当径13～14cm内外のもので、内区の文様は左巻三つ巴文。巴の尾がなだらかに尾部に移行するもの。外区には8個の珠文をめぐらす。丸瓦部分は行基葺になっており、凹面には、コピキBによる横線が観察できる。本瓦葺をすることができないと考えられる事から、菊丸瓦として使用したのと考えられる。<sup>(3)</sup>

III類（第108図 25） 瓦当径13～14cm内外のもので、内区の文様は右巻き三つ巴文。巴の尾が細く長く伸びているもの。<sup>(4)</sup>外区には推定12個の珠文をめぐらす。

IV類（第108図 26） 瓦当径10cm内外の小型の左巻三つ巴文軒丸瓦。他の軒丸瓦類に比べて、大きさが小さいことから、使用場所が塀など小型の建物に限られていたと推定できる。

#### 軒平瓦（第109～112図）

瓦当の文様をもとに以下の通り分類する。<sup>(5)</sup>

I類（第109図 27～30） 均整桐唐草文。中心飾りは桐文で、左右に唐草を巻き出す。先端は右が上

に巻き上がるのに対し、左は横に向かって伸びている。凹面に水返しの付いたものも出土している。

## Ⅱ類 均整唐草文軒平瓦

Ⅱ a 1類 (第109図 31~33、第110図 34~36) 中心飾りには三つの子葉を置き、左右には、下向きと上向きの早蕨状の唐草を配する。中心飾り、唐草共に細くシャープである。36は切隅瓦である。

Ⅱ a 2類 (第110図 37・38) 文様のパターンはⅡ a 1類と同じである。中心飾りには三つの子葉を置き、その子葉は剣先ようになっており、またⅡ a 1類に比べ外に開いている。左右の唐草は巻き込んでいる。

Ⅱ b類 (第110図 39・40) 中心飾りには五つの子葉を置き、左右には下向きと上向きの唐草を配する。胎土はサンドイッチ状になっている。

Ⅱ c類 中心飾りに三つの子葉を置くもので、中心飾りの形状と唐草の形状により細分できる。

Ⅱ c 1類 (第111図 41~43) 中心飾りには先端が剣先状になった三つの子葉を置き、左右には下向きと上向きの唐草を配し、唐草の末端を巻き上げている。

Ⅱ c 2類 (第111図 44) 中心飾りには先端が剣先状になった三つの子葉を置き、左右には下向きと上向きの唐草を配し、唐草の末端は直線状になっている。Ⅱ c 1類に比べ、大きさが小さい。

Ⅱ c 3類 (第111図 45・46) 中心飾りには先端が剣先状になった三つの子葉を置き、左右には下向きと上向きと下向きの唐草を配しており、唐草の先端はすべて巻き込んでいる。唐草は細くシャープである。

Ⅱ c 4類 (第111図 47) 中心飾りには先端が三つ葉状になった三つの子葉を置き、唐草は下向き、上向き、上向きであるが、上向き二つの唐草は接している。唐草は中心寄りのものは巻き込んでいるが、後の二つは巻き込まれてはいない。

Ⅱ c 5類 (第111図 48) 中心飾りには先端が剣先状になった三つの子葉を置き、左右には、上向き、下向き、上向きの唐草を配しており、中心寄りの二つの唐草は完全に一体化している。文様の外側には枠線を配している。

Ⅱ d類 (第111図 49) 中心飾りには松葉状の物を置き左右には上向き、下向き、下向きの唐草を配する。唐草はすべて巻き込んでいる。また、唐草は細くシャープである。

Ⅱ e類 (第112図 50) 中心飾りには柏葉状のものを配し、左右の唐草は下向き、上向き、下向きである。右の上向きの唐草には子唐草を配している。中心飾り、唐草ともに細くシャープである。

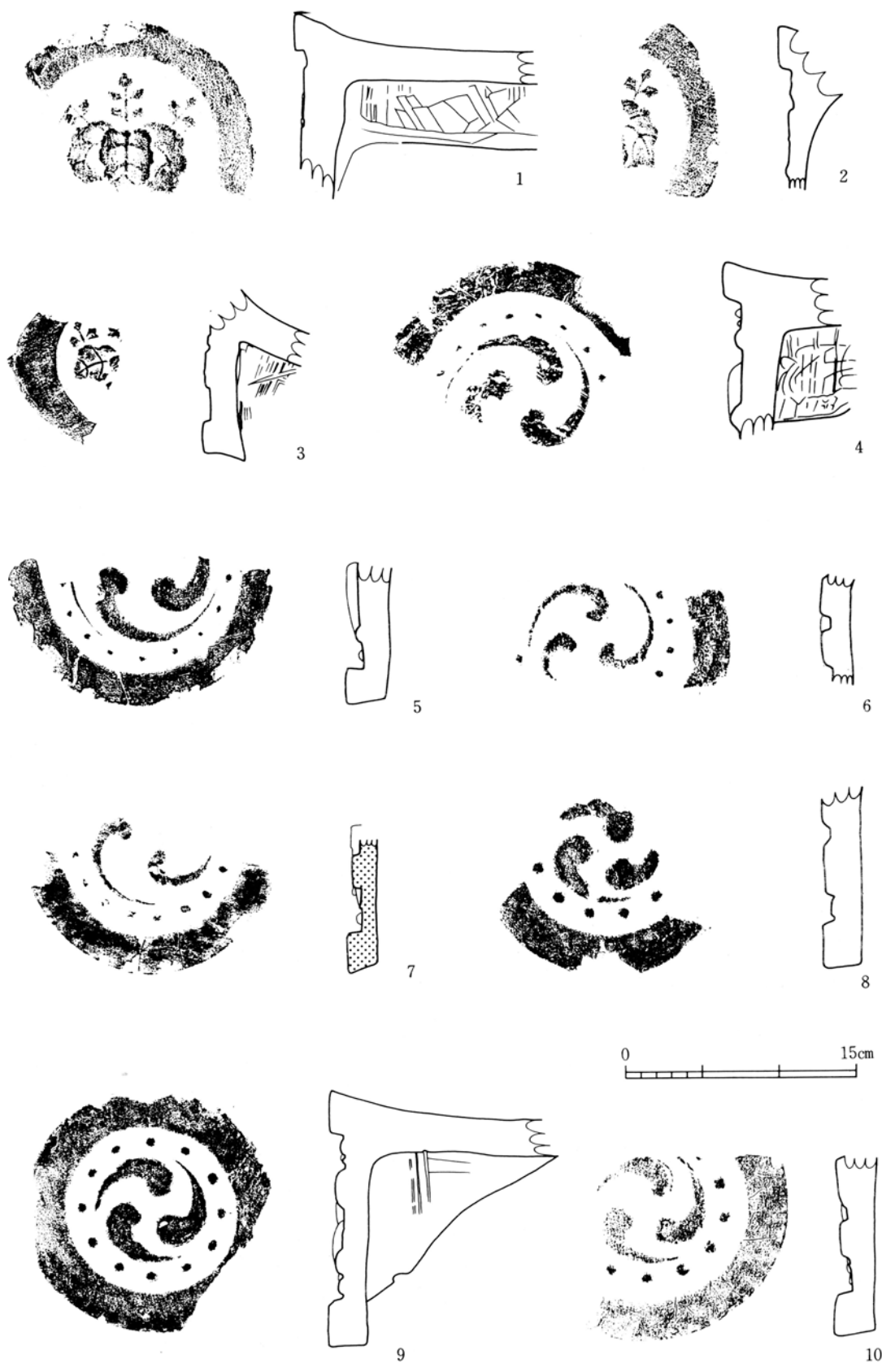
## Ⅲ類 均整剣菱唐草文軒平瓦

Ⅲ a類 (第112図 51~54) 中心飾りには剣菱を配し、左右には下向きの早蕨状の唐草を三つ配している。中心飾り、唐草共に細い。胎土はサンドイッチ状になっている。

Ⅲ b類 (第112図 55) 五条川改修に伴う調査で中堀から出土した。中心飾りには剣菱を配し、左右には上向き、続いて下向きの早蕨状の唐草を3つ配する。唐草は隣の唐草と接しており、細くシャープである。胎土は砂粒を多く含む粗い。

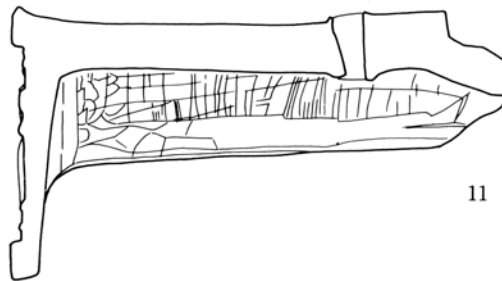
Ⅳ類 (第112図 56) 瓦当の文様は、ハの字状に左右とも5つの直線を配している。





第106図 城下町期の遺物 (75)

瓦(1) (アミは金箔瓦)



11



12



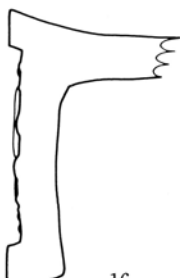
13



14



15



16



17

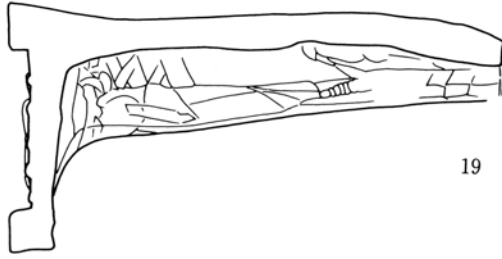


18

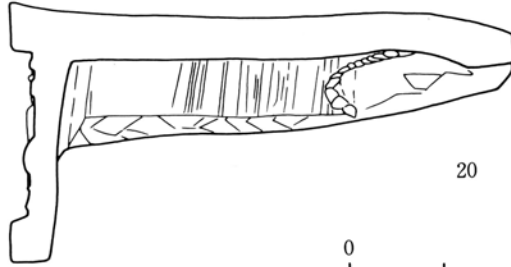


第107図 城下町期の遺物 76

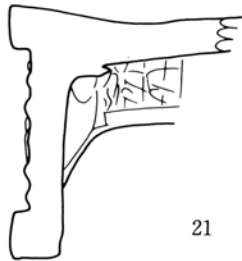
瓦(2) (アミは金箔瓦)



19



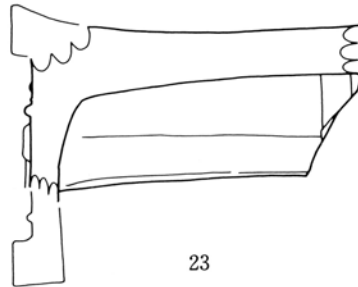
20



21



22



23



24



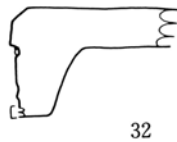
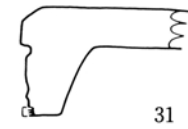
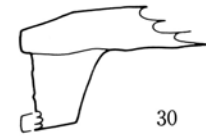
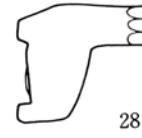
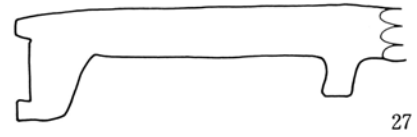
25



26

第108図 城下町期の遺物 (77)

瓦 (3)



第109図 城下町期の遺物 (78)

瓦 (4)



34



35



36



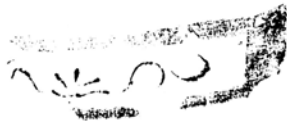
37



38

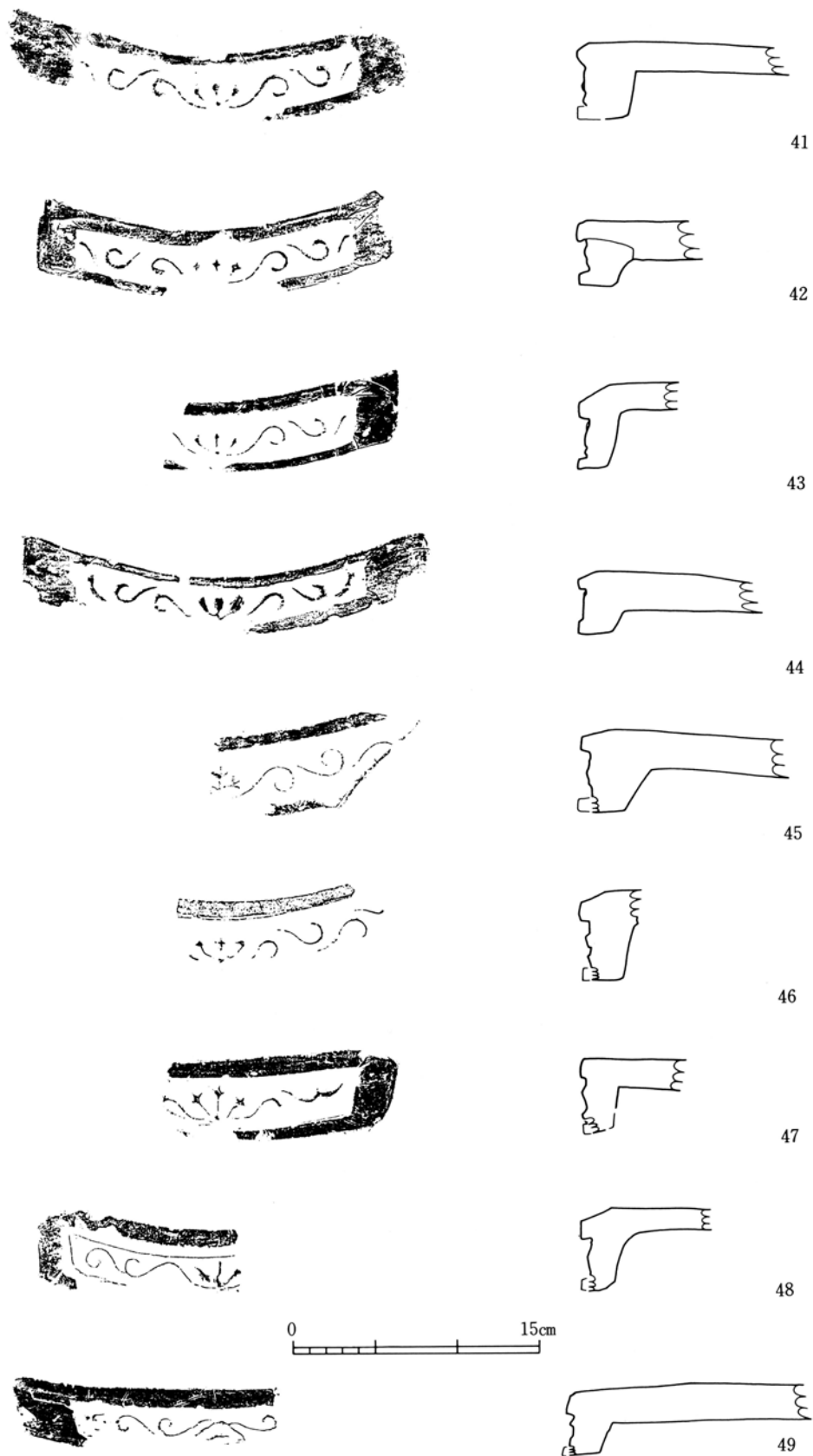


39



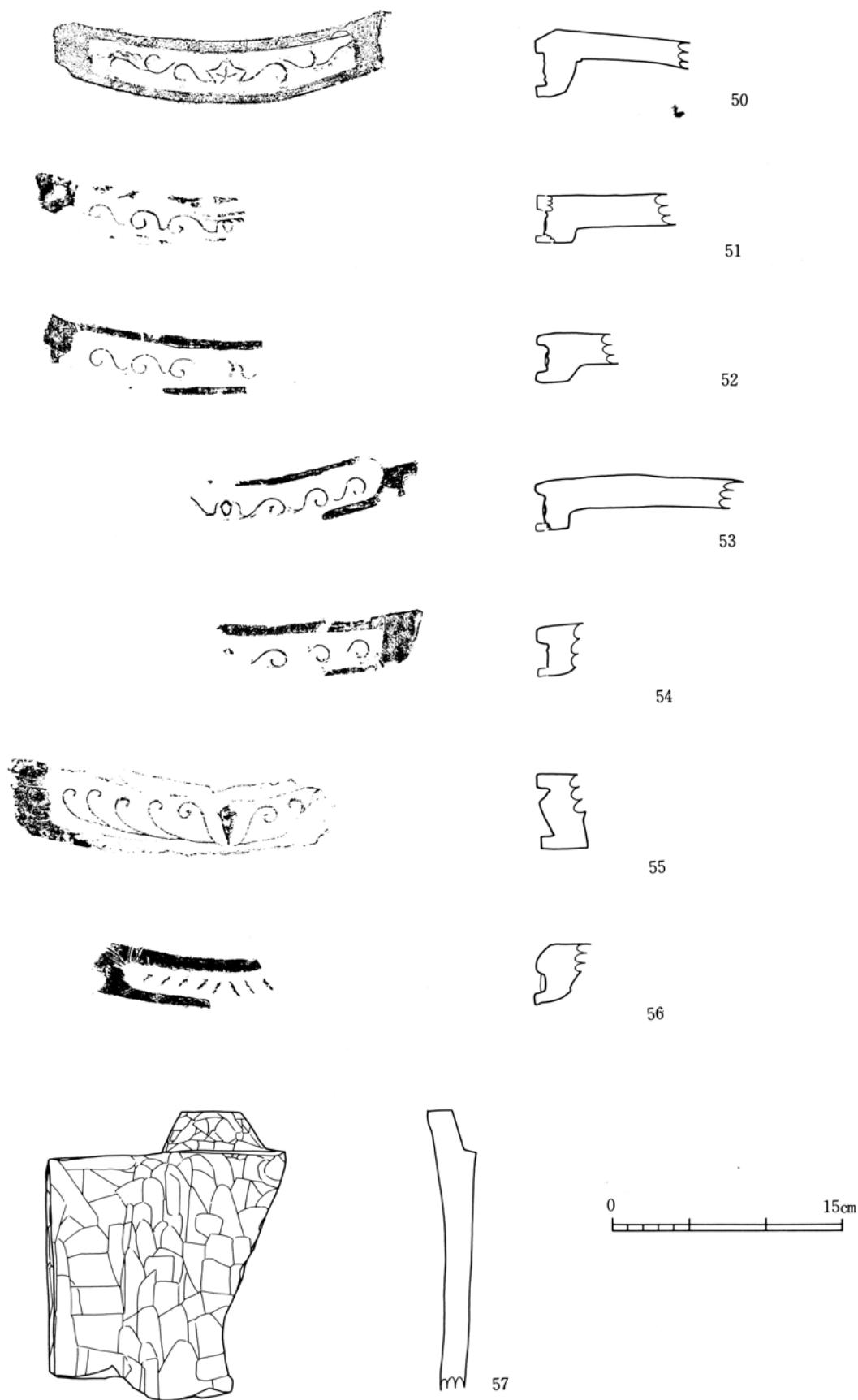
第110図 城下町期の遺物 (79)

瓦 (5)



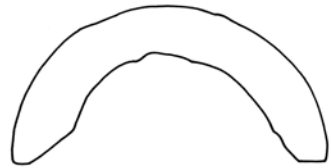
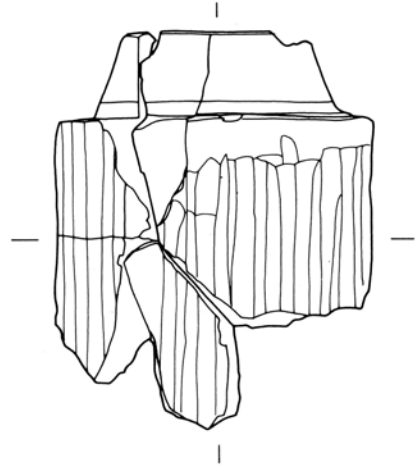
第111図 城下町期の遺物 (80)

瓦 (6)

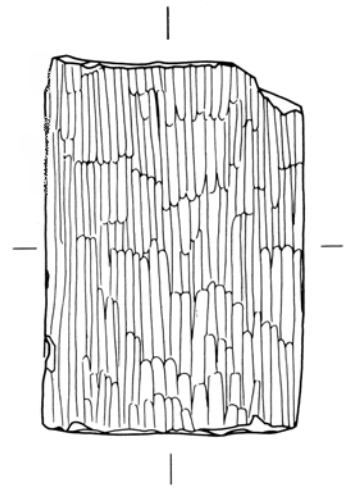


第112図 城下町期の遺物 (81)

瓦 (7)



58



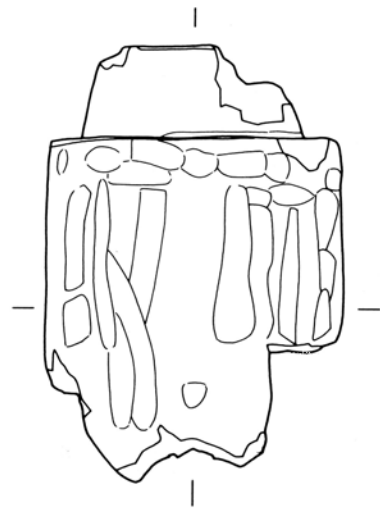
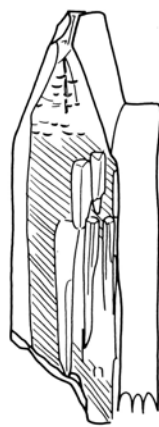
59



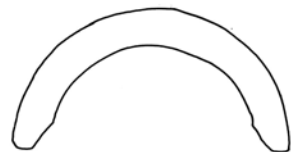
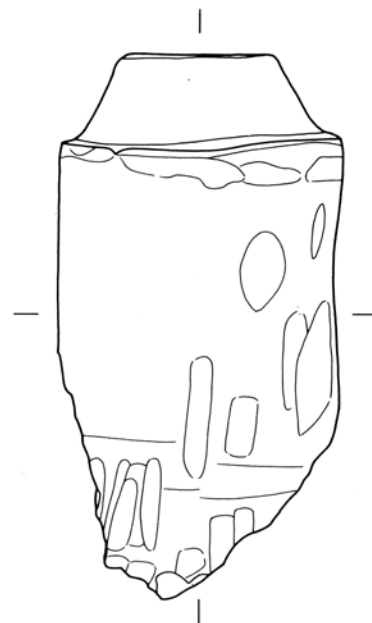
第113図 城下町期の遺物 (82)

瓦 (8)





60

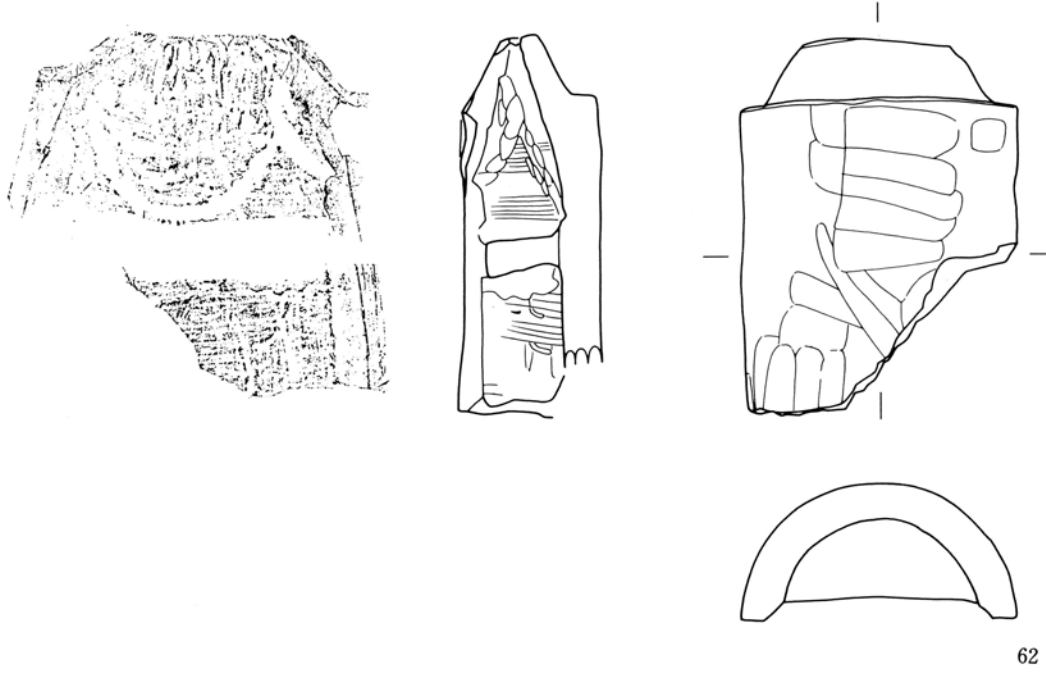


61

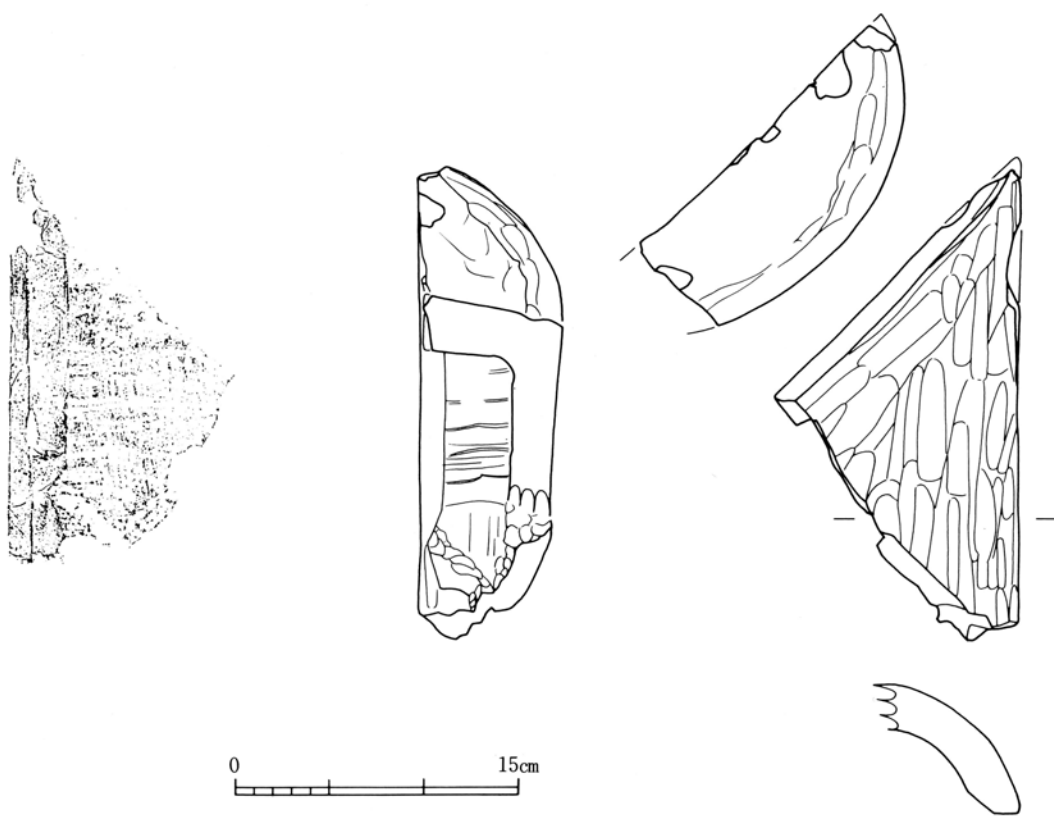


第114図 城下町期の遺物 (83)

瓦 (9)



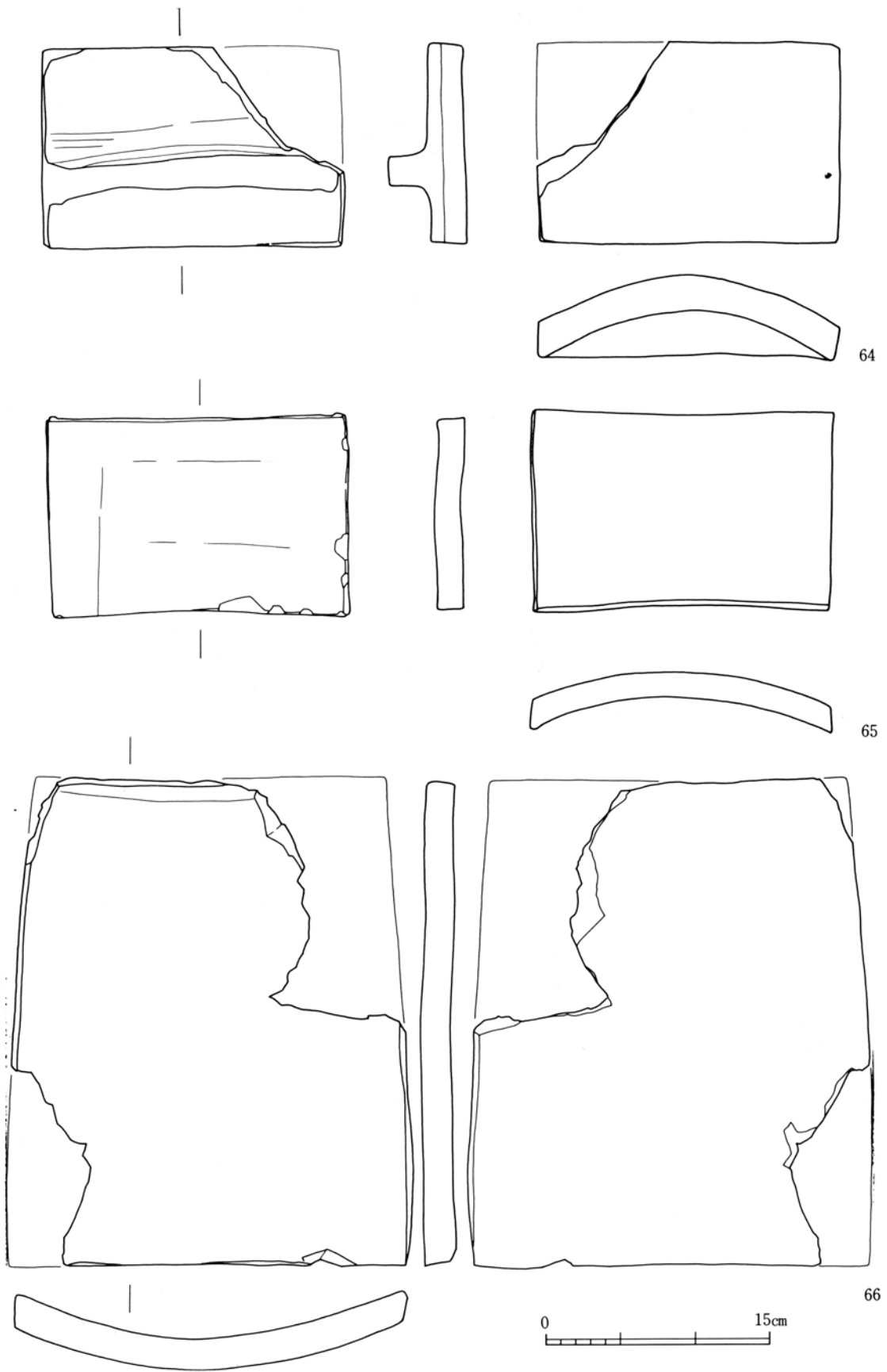
62



63

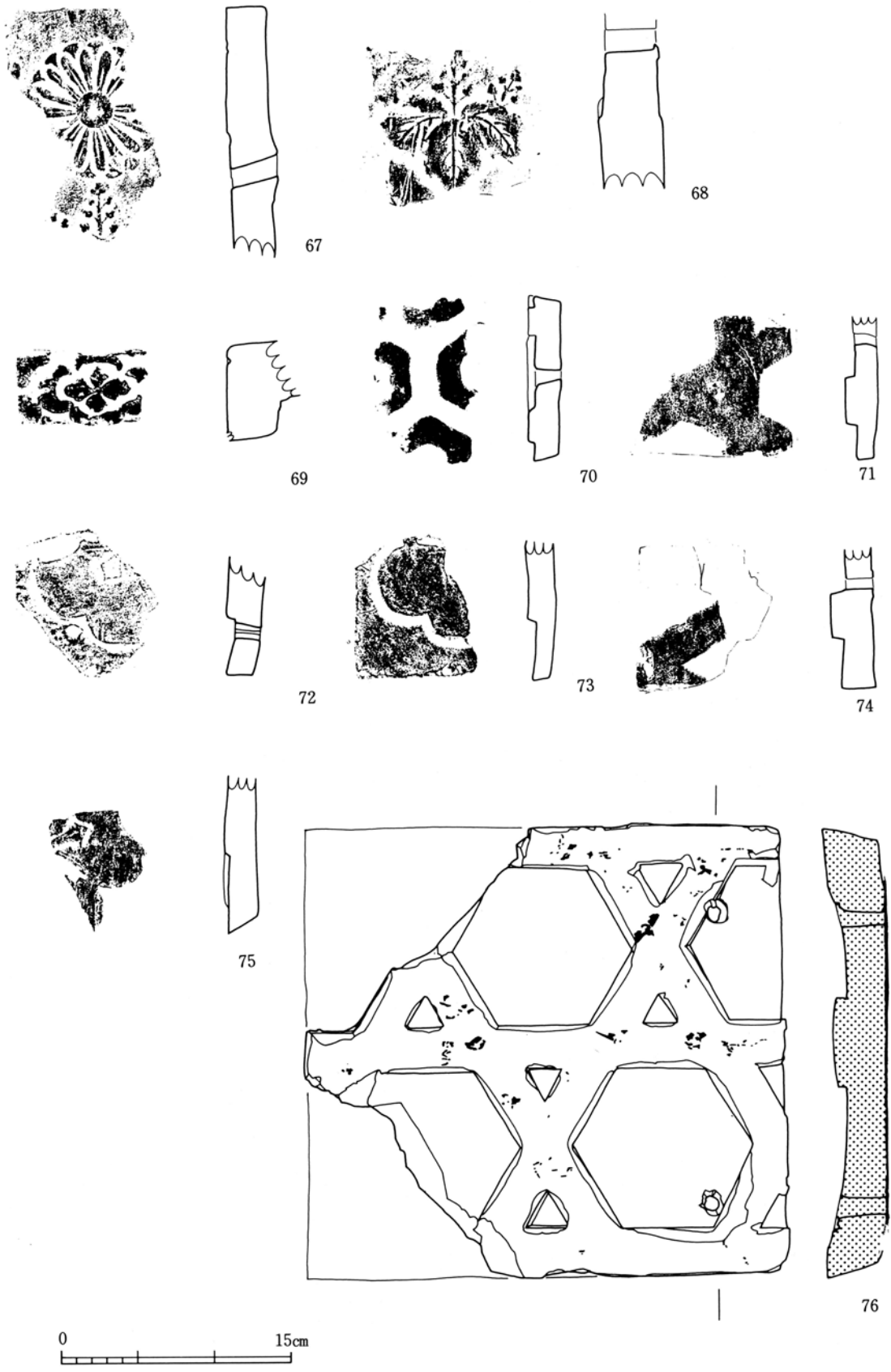
第115図 城下町期の遺物 (84)

瓦 (10)



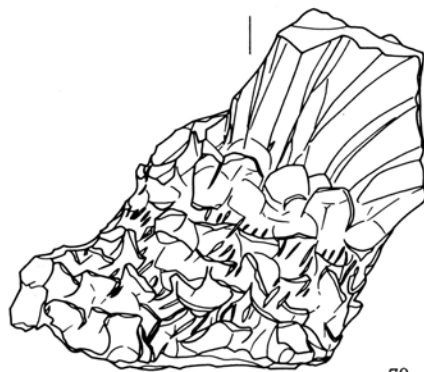
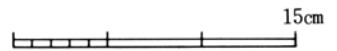
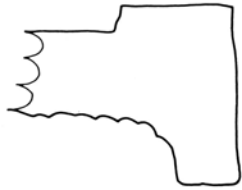
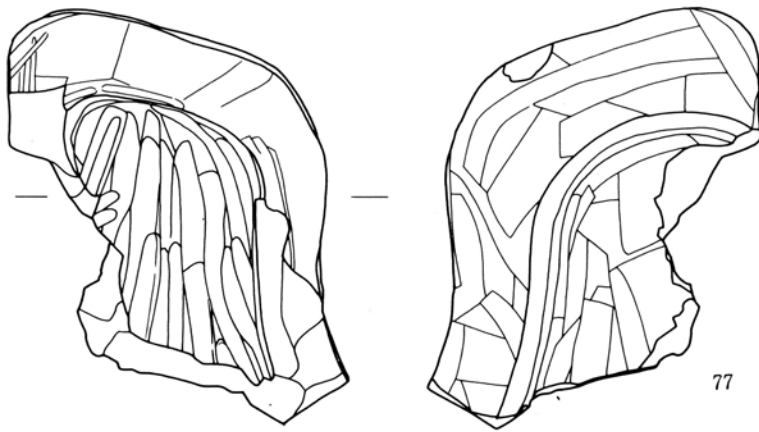
第116図 城下町期の遺物 (85)

瓦 (11)



第117図 城下町期の遺物 (86)

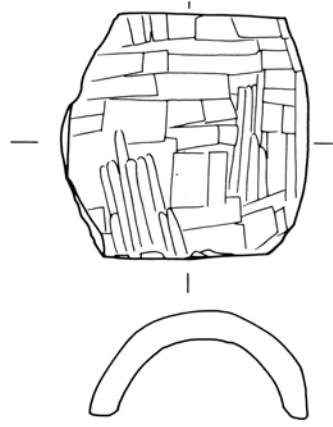
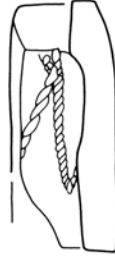
瓦 (12) (アミは金箔瓦)



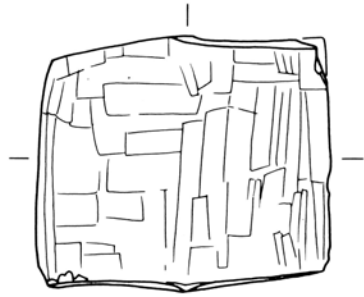
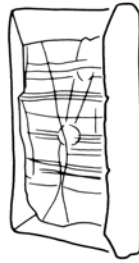
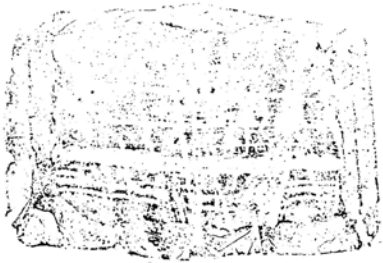
80

第118図 城下町期の遺物 (87)

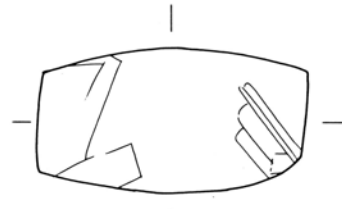
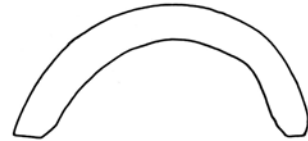
瓦 (13)



81



82



83



84



85

第119図 城下町期の遺物 (88)

瓦 (14)

### 丸瓦 (第113~115図)

非常に多く出土しているが、平瓦同様細片がほとんどで全体をうかがい知る資料は非常に少ない。これまでの中近世の丸瓦の分類の指標とされてきた、たたらからの粘土板切り離しの際にできた跡によってコビキAとコビキBとに分類されており、清洲城下町遺跡からはどちらのものも出土している。<sup>(12)</sup>出土量が多く全体を把握しきれなかったが、概観したところコビキAのものとコビキBのものがほぼ同量出土している。コビキAの丸瓦には、凹面に叩きの跡の見られるものも存在する(60)。58はSD52(中堀)から出土した天正14年銘のある丸瓦である。凹面にはコビキAが看取できる。凸面は丁寧に磨いている。凹面には、半乾燥時に刻された『天正十四 清』の篋刻が残り、使用年代が推察される。63は谷丸瓦である。凹面にはコビキBが看取できる。

### 平瓦 (第116図)

非常に多く出土しているが、細片がほとんどで全体をうかがい知ることのできる資料は非常に少ないが、わずかな資料から、大きさにより二分できる。一つは熨斗瓦として使用されたと推定できる小型のもの(64・65)、他の一つは本瓦葺部分の平瓦として使用されたと推定できる大型のもの(66)である。共に凹面に離れ砂が付着していることから凹形台で整形したものと考えられる。またどちらも表面を丁寧に撫でており、それ以前の調整は看取できない。

### 飾り瓦 (第117図)

文様により細分できる。花と七五の桐(67・68)、木瓜(69)、亀甲(70・71・76)、剣かたばみ(72・73・75)、重ね菱(74)などが出土している。亀甲文の飾り瓦は、一部欠損するものの全容をうかがい知ることのできる資料が出土している<sup>(13)</sup>(76)。またこの瓦には凸部に金箔を張り付けた跡を看取できる。

### そのほかの瓦 (第112図 57、第118・119図)

道具瓦(輪違い瓦、面戸瓦など)、鯨瓦、鬼瓦、伏間瓦などが出土している。輪違い瓦(81~83)は、丸瓦と同じ製法で作られており、凹面には、コビキBの跡が残る。伏間瓦(57)は、凹面にはコビキAの後が僅かに看取できるが、後で丁寧に撫でている。鯨瓦は鱗を1枚1枚張り付けたもの(79)とへらで書いたもの(80)が出土している。前者は顔に当たる部分が欠損しているのみで、おおよその形状を看取できる。鬼瓦は全体の形状は不明だが、文様により2種類が確認された(77・78)<sup>(14)</sup>。

### 小結

上述の通り、清洲城下町遺跡からはたくさんの瓦が出土している。これらの瓦は堀を中心に出土している。とくに内堀と推定されるSD39からはまとまって瓦が出土した。<sup>(15)</sup>このことから、当時は堀が廃棄土坑と同様の働きをしていたと考えられよう。これらの瓦が何時頃から使用されていたか、また、軒瓦のセット関係はどのようなものであったか、について考えてみたい。

## 清須城下町の年代

清須は、1478年に尾張の守護所が下津から移転してから発展してきた町である。清須城下町の年代区分については、既報告に従うと、天正14年(1586)の大改修を基に前・後期の二期区分がなされており、さらに細分化が試みられている。<sup>16</sup>その他推定し得る画期をあげると、信長の入城(1555)、清須越(1610～1615)が時期区分のメルクマールとしてあげられよう。これらの中では、天正地震及び信雄の大改修の後に瓦の使用が始まったといわれている。<sup>17</sup>

織豊系の城郭での瓦の使用は、永祿10年(1567)の信長の岐阜城入城に始まると考えられている。<sup>18</sup>その後、天正4年(1576)に、安土城では、大規模な城郭工事と共に瓦葺きの建物の築造が行われている。そのころから、それに倣うように、織豊系の城郭では瓦の使用がかなりの割合で行われるようになる。<sup>19</sup>

### 瓦の採用

それでは清須では何時頃から瓦の使用がなされているのであろうか。清須の変遷を考える上で大きな画期として3時期をあげた。しかし、信長の入城段階には瓦の使用はなかったと考えられる。<sup>20</sup>それ以外にも幾つかの画期をあげることができる。それは、本能寺の変の後の清須会議(1582)と信雄以降の清須の城主の交替である。こういった出来事が、町の変化にも大きく影響していったと考えてもおかしくはない。これらを契機に瓦葺きの建物を取り入れていったものと考えられる。

#### 軒瓦の変遷1

まず、最初の契機であるが、1576年に、織田信長は織田信忠に岐阜城を譲っており、その際に尾張地区の街道整備と共に城郭の整備を行ったとされる。当時は尾張、美濃共に同一領主により統治されている。清須と岐阜城については、軒丸瓦Ⅱb2類と軒平瓦Ⅲ類とが共通しており、その頃のものとして推定されている。<sup>21</sup>そしてそれはまた、軒瓦のセット関係の一つともいえよう。丸瓦にはコビキAが採用されている。この時点で、清須では最古の瓦葺きの建物が存在したと考えられる。また、少量ではあるが、天正地震による噴砂直下より瓦片の出土がある事からも、天正地震以前の瓦葺き建物の存在が確定できよう。<sup>22</sup>

#### 軒瓦の変遷2

次の時期にあげることができる種類の軒瓦としては、軒丸瓦Ⅱb1類が考えられる。この軒丸瓦Ⅱb1類には金箔を張り付けたものが出土しているが、その金箔は軒部分の凸部に張り付けたものと凹部に張り付けたものが共に存在する。このような2種類の金箔瓦が同時に存在するところとしては、三重県松阪市に所在する松が島城がある。<sup>23</sup>この城は織田信雄によって天正7年(1579)に築城された。信雄は、天正10年(1582)の清須会議によって尾張を統治することになったが、この事は、軒丸瓦Ⅱb1類がそのころのものであることを推定させる。丸瓦部分はコビキBが看取できる。コビキBは天正11年(1583)から築城し始めた大坂城が初現とされており、また松が島城からも出土していることから、年代的には問題がないと思われる。しかし、軒丸瓦Ⅱb1類が出土した遺跡はほとんどが城下町期後期に比定される遺構内からであり、この事から考えると、この軒丸瓦が天正地震後にも使用された可能性を示している。これは、金箔を張った場所が天正地震をはさんだ年代で凹部から凸部へと転換したのかもしれない。しかしこれはあくまでも推定であり、今後の検討課題であろう。また、大きさが



異なるが、文様が類似している点が多い軒丸瓦Ⅱ a 2類もこの時期に比定できよう。軒平瓦は、胎土が軒平瓦Ⅲ類に類似している軒平瓦Ⅱ b類の使用が考えられる。このタイプのものの出土は少量であり、また、このタイプの軒平瓦は、城下町期前期の遺物が多い遺構から出土している。このことから推定できよう。

### 軒瓦の変遷 3

次の契機であるが、『天正十四』銘の丸瓦とその共伴資料から、軒瓦は軒丸瓦Ⅱ a 1類と軒平瓦Ⅱ a類とがセットになっていると考えられる<sup>24)</sup>。この時期の丸瓦は、コピキAとコピキBとが混在している。コピキについては、森田克行氏の論考に拠れば、天正の後半期に転換が行われたと考えられており<sup>25)</sup>、それを裏付ける結果を示している。また大坂城と同様の様相を呈している。この時期には、大規模な城郭整備が行われており、何種類もの軒瓦を使用したと考えることができる。その後も城主交替の度にある程度の整備が行われたと思われるが、そのことを遺構や陶磁器の年代から明確にすることはできない。また、軒瓦の前後関係についても前述のように明確にできない。このことから、天正地震以前に使用されたと考えられる種類の軒瓦を除いた瓦の使用がなされたと考えられる。またそれらの軒瓦の使用、菊瓦としての軒丸瓦Ⅱ c類の使用もこのときであると思われる。丸瓦、平瓦類などについても、城下町期後期に比定される遺構からの出土量が圧倒的に多いことから、このときに瓦葺きの建物が多く築かれたと考えられよう。天正地震後の大改修は、町ぐるみの大改修であり、こうした大々的な瓦の使用によって、関東の巨鎮といわれるような町に発展していったのであろう。

以上のことから考えられる軒瓦の組み合わせについては、以下のような流れを推定できる。

分類 \ 時期	1	2	3
軒丸瓦	Ⅱ b 2	Ⅱ a 2 Ⅱ b 1	I Ⅱ a 1 Ⅱ a 3 (Ⅱ b 1)
軒平瓦	Ⅲ	Ⅱ b	I Ⅱ a 1 Ⅱ c 類

表 軒瓦の組み合わせと時期

これらの軒瓦の使用年代についてまとめてみると次のとおりになる。

- 1 織田信忠による城郭整備から本能寺の変及び清須会議 (1576～1582)
  - 2 清須会議から天正地震 (1582～1586)
  - 3 天正地震後の織田信雄の大改修から清須越 (1586～1615)
- 3については、1、2に比べ年代幅も多くさらに細分が可能である。しかし、現在のところ出土遺物からその細分ができないため、ここでは一括して扱い、今後の検討課題としておきたい。

(鈴木とよ江)

### 註

- 1 これらの瓦の名称については、坪井利弘『日本の瓦屋根』理工学社 1976に従う。
- 2 この後の分類については、小澤一弘「清洲城下町遺跡出土の瓦について」『年報 昭和61年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1986に従い、それを補足していく形をとる事とする。

- 3 高槻市教育委員会の森田克行氏の御教示による。
- 4 清洲町所蔵資料を掲載した。資料の実見にあたっては清洲町教育委員会の野口哲也氏の御厚意を得た。
- 5 註4に同じ
- 6 註4に同じ
- 7 註4に同じ
- 8 註4に同じ
- 9 註4に同じ
- 10 註4に同じ
- 11 梅本博志他「清洲城下町遺跡」『年報 平成元年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990
- 12 森田克行『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1984
- 13 註4に同じ
- 14 註4に同じ
- 15 梅本博志他「清洲城下町遺跡」『年報 昭和61年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1986において総破片数が記されている。
- 16 鈴木正貴他『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990
- 17 梅本博志他「清洲城下町遺跡」『年報 昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1985
- 18 土山公仁「岐阜城の瓦について I」岐阜市歴史博物館研究紀要 第3号 岐阜市歴史博物館 1989
- 19 中井 均「織豊系城郭の画期 -礎石建物・瓦・石垣の出現-」村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社 1990
- 20 中島 隆『史跡小牧山城発掘調査概要報告書 I』小牧市教育委員会 1988  
この報告によれば、信長段階の瓦は皆無であった。
- 21 註17に同じ
- 22 鈴木正貴「天正地震下層の出土遺物-清洲城下町遺跡90D区出土遺物の検討」『年報 平成二年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1991
- 23 中村博司「金箔瓦試論 補遺」『大阪城天守閣紀要 8』1980
- 24 註2による
- 25 註12による

## 第4節 木製品

木製品は、SD66・NR11などの深く掘り込まれた遺構の埋土から出土しており、漆器・下駄・箸・木簡など多種多様な製品が見られる。ここでは、遺構ごとに木製品の概要を紹介し、器種ごとに具体的な記述を行う。

### SD66 (第120～132図 1～123)

SD66 から出土した木製品には、漆器・曲物桶・結桶・折敷・釣瓶等の容器、下駄・箸・糸杵・杓子・櫛・木簡等の道具類がある。生活用具類を主体とした内容を持つ一括資料である。

**漆器** 1～25は漆器類である。器形から高台部が高い碗の碗A類(1～10)・高台が低い碗の碗B類(11～19)・皿類(20～22)・口径が小さい杯類(23～25)に分類できる。

**碗A類** 1～3は外面に「丸に鶴」の紋様が赤色漆で描かれている。4は雲紋・菱形紋・草花紋が赤色漆で配置されている。5は亀甲紋、6はかたばみ紋、8は扇紋、9は亀紋、10は鶴紋・亀紋がそれぞれ赤色漆で施されている。7は外面が黒色漆で塗布された他の碗と相違して、器壁が薄くて高台底の削りが深く、口縁端部が外反する内外面ともに赤色漆を施した碗である。いわゆる「根来手」と呼ばれる比較的精巧な漆器である。底部外面と口縁端部には黒色漆が塗布されている。8は高台内に傷が3本付けられており、底部が非常に厚い作りをしている。

**碗B類** 11は扇紋、15は「丸に三ツ巴」紋が赤色漆で描かれ、12は遺存状態が不良のため紋様が不明である。14は鶴紋・亀紋が簡略化されて施されており、底部に十字の傷が認められる。16は「丸に鶴」と「簡略化された鶴紋？」が赤色漆で描かれている。17・18は体部下半がやや張ったもので、17は外面に草花紋、18は鶴紋と草花紋(あるいは蓬萊紋か)がセットになっている。19は草花紋が描かれている。

**皿類** 20～22は内外面ともに赤色漆を施した「根来手」の皿である。20は底径がやや大きい皿で、底部外面には黒色漆が塗布されている。21は口縁部が外反し、底部外面に赤色漆の花紋が描かれている。22は底部に方形の図形を組み合わせた傷が付けられている。

**杯類** 23～25は内外面とも赤色漆を施し、底部外面に黒色漆が塗布されている小杯であり、23・24は口縁部が外反する。

SD66 から出土した漆器全体を通観すると、高台が高い碗A類と高台が低い碗B類が約4割づつを占めており、漆塗は外面に黒色漆・内面に赤色漆を塗布したものが多い。「根来手」と呼ばれる内外面ともに赤色漆を施した碗は1割程度の比率で存在する。漆塗は漆膜の断面観察を実施していないため、塗布の状況は明確に得ない。施紋は独立した紋様を繰り返す場合と、2～3個の紋様を組み合わせる場合が見られる。後者の場合は「鶴と亀」というようにセット関係が認められる場合が多い。

**曲物桶** 26～44は曲物桶類の一部である。26～42は曲物桶類の底板・蓋板、44は曲物桶類の側板、43は柄杓の柄を支えるために曲物桶側板の内面に取り付けられた部材である。ここでは底板・側板などの対応関係が詳らかではないので、個々に説明を加える。

曲物桶類の底板、蓋板はその平面形と規模で4類に区分できる。さらに孔・桜皮の有無で細分類が可能である。

**底板A類** 直径4cm～5cmの円形の曲物桶の底板・蓋板である(26～29)。26・27は中央に孔が穿たれており、この孔に紐状の取っ手が取り付けいた蓋板の可能性はある。28は側面に角が残存しており、円形に加工する途中の状態である。44のような側板が巡らされていたと思われる。なお、側板を接続させるための桜皮や側面の穴は認められない。

**底板B類** 平面形が一辺約7cmの隅丸方形の柁目板である(30～33)。これらはすべて、3ヶ所に2個ずつ側板を固定するための孔が穿たれている。32・33のように側板の付着した痕跡が残存しているものもあり、曲物桶の側板が上面に乗る形で作られた底板であることが分かる。3ヶ所の孔の位置は、正三角形の配置になるもの(30・33)と直角三角形の配置になるもの(31・33)の2種類が存在する。

**底板C類** 直径10cm～12cmの円形の曲物桶の底板・蓋板である(34～38)。曲物桶の側板を接続する方法は、①桜皮を縫い込むもの、②側面に釘穴が存在するもの、③特別に加工を施さないものの3種類がある。34～36は円形の板の両端部に桜皮を縫い込んだもので、この桜皮で曲物桶類の側板を固定したものである。34・35は底板と側板の接続位置を確定できないが、36は側面に釘穴が少なくとも2ヶ所存在することから、底板の側面に木釘などを用いて側板を接続したものである。37は側面に釘穴があったと思われる欠損部が見られる。表面には刃物による微細な傷の圧痕が残っている。

**底板D類** 直径13cm以上の円形の曲物桶の底板・蓋板である(39～42)。39は中央部にやや大きめの孔が開いている厚手の板目板で、表面に削りの痕跡が残る。孔には別材が埋め込まれている。40は十字形の配置で5ヶ所に孔が穿たれていたと思われ、細長い板を十字形に組み合わせた受け台に取り付けた底板と推定できる。孔は1ヶ所に4個ずつ穿たれている。41は孔が1個認められるが、大部分が欠損しており、孔の数や配置は明らかにできない。受け台の圧痕が認められることから40と同様の製品であろう。42は表面に刃物による微細な傷・圧痕が無数に残っている直径30cm弱の底板である。

**側板** 44は薄い板目板を2重に巻いた側板で、桜皮の縫い方は明らかでないが、綴じ合わせ部分のみ桜皮で縫われた痕跡が確認できる。

**柄杓固定具** 43には下端部に柄杓の柄を差し込むための孔が存在し、上端部には桜皮で側板と固定するための括れ部分が見られる。

**結桶** 45～48は結桶類の一部で、45～47は側板、48は底板の一部である。

**側板** いずれも板目板材を用いている。45は上半部が欠損しているが、高さは21cmを超える。46は上端部が一部欠損しているが、外面のタガの圧痕と内面の底板の圧痕が確認できる。47は底板の圧痕の位置まで下端部が丸く切り取られている。結桶の下端部が半円状に窓が開いた状態になっているものと思われる。

**底板** 結桶の底板は、本来は複数枚の板目板を継ぎ合わせて円形に形作ったものであり、48はその中程の一部である。継ぎ合わせの接合面に竹釘の穴が4ヶ所で認められる。竹釘による「合釘

接」が行われている。

**折敷** 49～67は折敷類の一部で、49～57は底板、58は脚部、59～67は側板である。

**底板** 49～53は角を斜めに切断した柁目板に、各辺のほぼ中央に2個ずつ孔を穿ったものである。この孔は折敷の側板を固定するための孔と考えられる。折敷の大きさに規格性があつたと思われ、一辺が約10cmのもの、約15cmのもの、約22cmのもの3者が確認できる。54も角が斜めに切断された柁目板である。切断された一辺に側板を固定するための桜皮が存在している。55は木目に対して斜めにそれぞれの辺を成形しているもので、小孔が数ヵ所施される。56は49～53と同様に角を斜めに切断したものであるが、側板を固定するための加工は施されていない。57は脚部が接続したと推定される圧痕が2条平行して走っている。側板の接合については詳らかにしない。底面には無数の微細な傷が多数残存している。

**脚部** 58は下端部に加工を施した細長い板である。両端部は断面形を鋭く尖らせた状態に加工し、他の板材と重ね合わせたものである。方形に板を曲げて作製した折敷類の脚部と推定できる。

**側板** 59～67は細長い板材で、61～64・66・67には桜皮が施される。底板と同様、長さに規格性が認められることが想定できるが、完全に遺存しているものが少なく、この点は明確にできなかった。60は端部に鉄釘が打ち付けられたものである。

**糸枘** 68～70は糸枘（繰枘）の一部である。68は中央部に幅の広い溝がえぐられており、もう一つの同様の材で十字状に組む「十字形相欠き継ぎ」が行われた製品と思われる。交差部に存在する孔の部分に繰枘の中心に当たる軸棒を取り付けたものと思われ、繰枘の枘木と軸棒を支える部分に相当するのだろう。69・70は繰枘の外側部分の部材（枘木）に当たり、2個のほぞ穴に68の両端部が接合する。縦断面形は細長い台形を呈している。

**釣瓶** 73は釣瓶の側板の下半部である。内面に側板同士を接合するための段差が設けられ、接合するための釘孔が一定間隔で設定されている。72は厚手の方形の板目板の中央部に孔を持ち、この孔の中に木片が挿入されているものである。釣瓶の部材か否かは現在のところ詳らかにし得ないが、木製容器の蓋板ないし底板と想定できる。

**下駄** 74～88は下駄及びその一部である。下駄は複数の材を用いて台と歯部を別々に作る差歯下駄（74～84）と、一木から台部と歯部を繰り出した一木作りの連歯下駄（85～88）の2種類に大別できる。

**差歯下駄** 差歯下駄は、歯が台部を貫通している「露卯下駄」のみであり、歯が台部の途中で止まる「陰卯下駄」は一点も存在しない。歯を差し込むためのほぞ孔の数が、1つの歯部について1個のものと2個のものがあり、後者のものが数量的に多い。やや小型の露卯下駄の場合はほぞ孔の数は1個である。台部の平面形はすべて楕円形を呈している。また、台部の縦断面は下部が狭くなり逆台形となるものが大半である（74～77・81・82・84）。

台部と歯部が共に残存しているものは4点を数える。74は歯部の半分が欠損している左右用の下駄である。鼻緒のための前の孔（前壺）を円形に作り、後ろの孔（後穴）は表面ではそれぞれ円形、裏面では2つの孔を合わせて方形に作り出している。後穴は内側に向かって斜めに開いている。75は後歯の半分が欠損している右足用の下駄で、ほぞ孔の数は1個ずつである。76はほぞ

孔の数は遺存状態が不良で詳らかではないが、2個あったものと推定できる。77はやや小型の露卯下駄で、ほぞ孔の数は1個穿たれている。ほぞ孔の裏面の平面形は方形で、他の下駄と作りを異にする。78～80は差歯下駄の歯部である。81～84は差歯下駄の台部である。81は歯部のほぞ部分のみが残存している。台部の上面の後部に刻印で楓の葉の紋様が施されている。83は扁平な厚手の板材で作った台部であり、縦断面は逆台形とはならない。

**連歯下駄** 連歯下駄は規模によって2種に大別できる。85・86は大型の連歯下駄で、上述の差歯下駄と同様の大きさを測る。平面形は楕円形を呈しており、歯部は台部から横にはみ出さない。85は左足用の下駄で歯部が一部欠損している。歯部を作り出すために、台部の歯部との境界部に鋸を挽いた溝状の傷が残存している。86は磨滅によって後歯の全部と前歯の大部分が失われている。87・88は小型の連歯下駄で、全長約15cmを測る。平面形は隅丸方形を呈しており、歯部は台部から横にはみ出さない。歯部下端面の磨滅はほとんど確認できないことから、頻繁に使用されたものとは思われない。共に、台部の上面の中央部から後部にかけて笹の葉の紋様が刻印されている。

**杓子** 89～91は杓子である。89は全長が65cmを測る長大な杓子で、皿部に凹みが見られない。柄部の断面形は円形である。90は柄部が一部欠損して全長は不明である。89と同様、皿部に凹みが見られないもので、断面形は三角形状を呈している。91は柄部が一部欠損し、その断面形は円形である。皿部は凹みを持ち、凹部を作り出した削りの加工が確認できる。また、柄部は皿部に向かって緩やかに折れ曲がっている。

**匙類** 92～95は匙類で、92～94は両側面をえぐり出して作る通常の匙類であるのに対し、95は片側のみをえぐり出して刃物状に作るいわゆる切匙である。92は皿部の先端部が方形を呈しているものである。93・94は皿部の先端部が隅丸方形を呈したものである。95は小型の切匙で、皿部は先端を尖らせ、角張った形状を呈している。

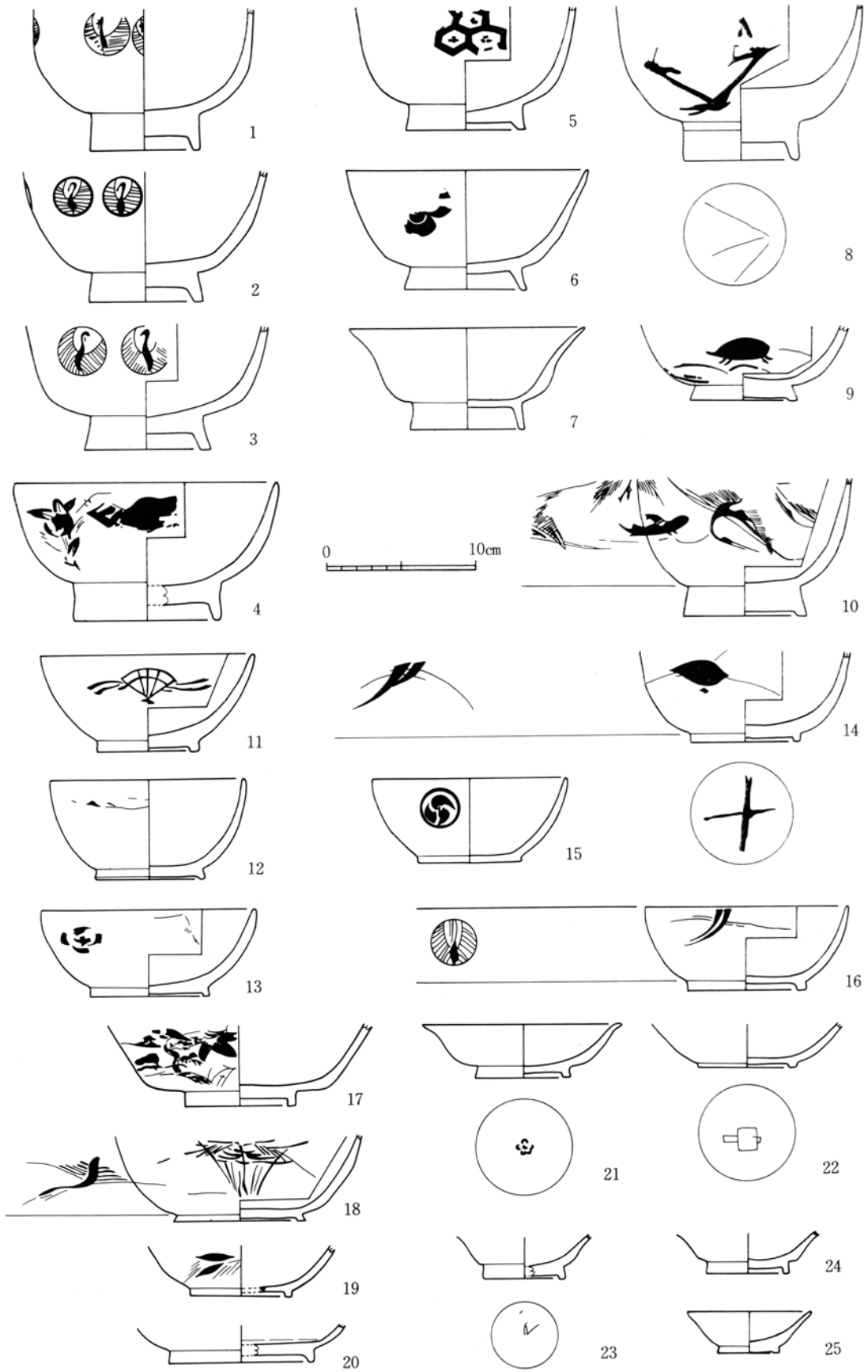
**爪楊枝** 96・97は爪楊枝である。97は先端を鋭利に尖らせたものである。

**箸** 98～105は箸である。長さは17.3cmから26.5cmまで分布し、22.6cmから23.0cmの長さのものが全体の17パーセントを占める。長さの分布状況は、17cm～18cmが6点、18cm～19cmが5点、19cm～20cmが5点、20cm～21cmが14点、21cm～22cmが19点、22cm～23cmが29点、23cm～24cmが15点、24cm以上が3点となる。1mm間隔で分布グラフを作製すると、23.7cmと22.7cmと21.4cmの部分に若干の山ができる。箸の断面形は多角形を呈し、正円形のものは見られない。

**櫛** 106は半分以上が欠損している櫛である。

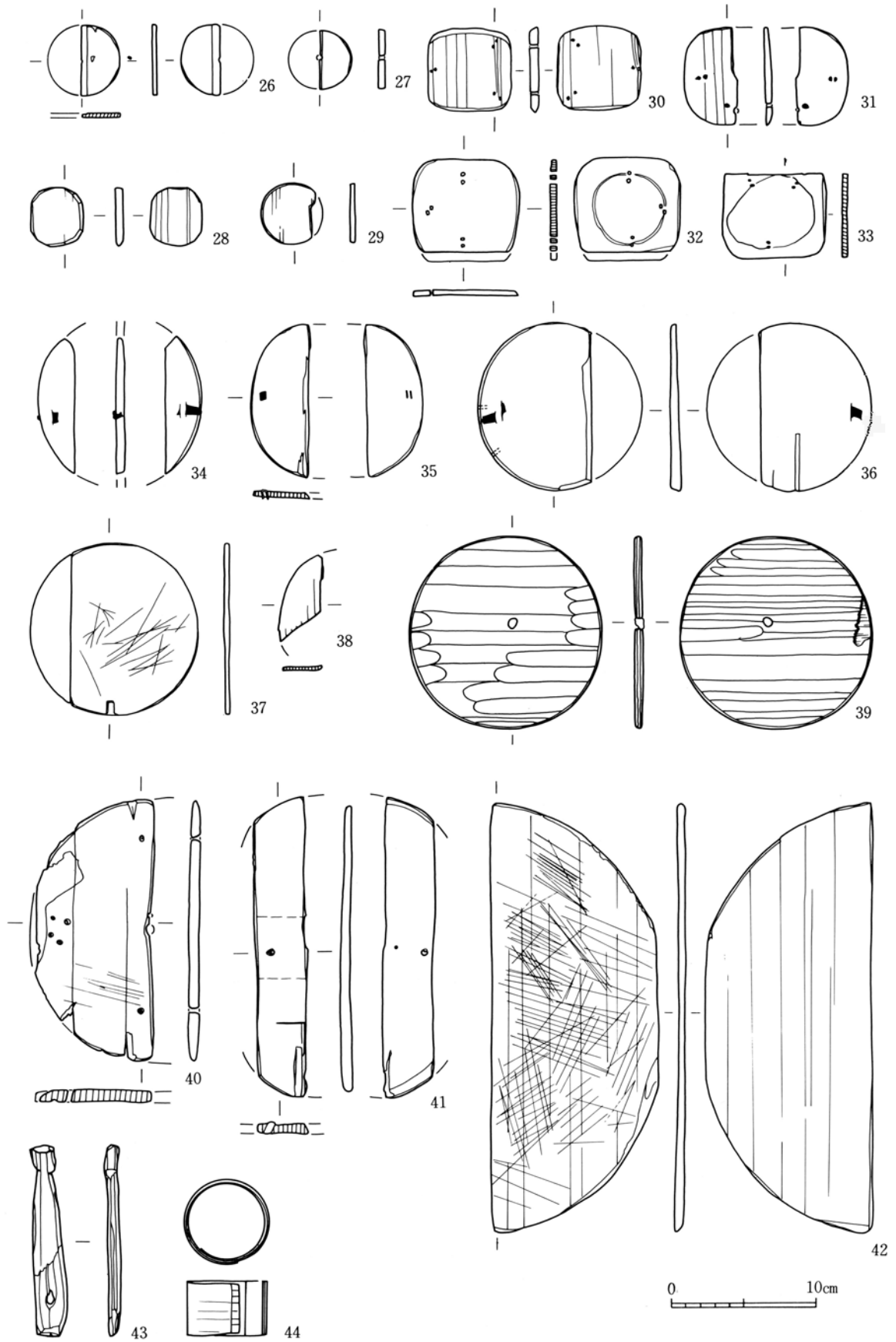
**木簡** 墨書が記された製品は3点確認されている(121～123)。121は細長い柁目板に梵字が記されており、柿経の一部と推定できる。経文の同定・内容については明確ではない。122は上端部・下端部ともに欠損している極めて薄い板材である。折敷の底板の可能性もある。板の中央部に判読不明の墨書が記されている。123は五角形の小さな板の表面に花押のような判読不明の墨書が記され、裏面には「永 三月八日」と書かれている。札材と推定される。

**その他** 71は折敷の底板の部分であると思われる、側板を接合するための孔が穿たれている。しかし、木目に対して斜めに切断することで柄部を作り出しており、しかも、微細な傷が多数存在してい



第120図 城下町期の遺物 89

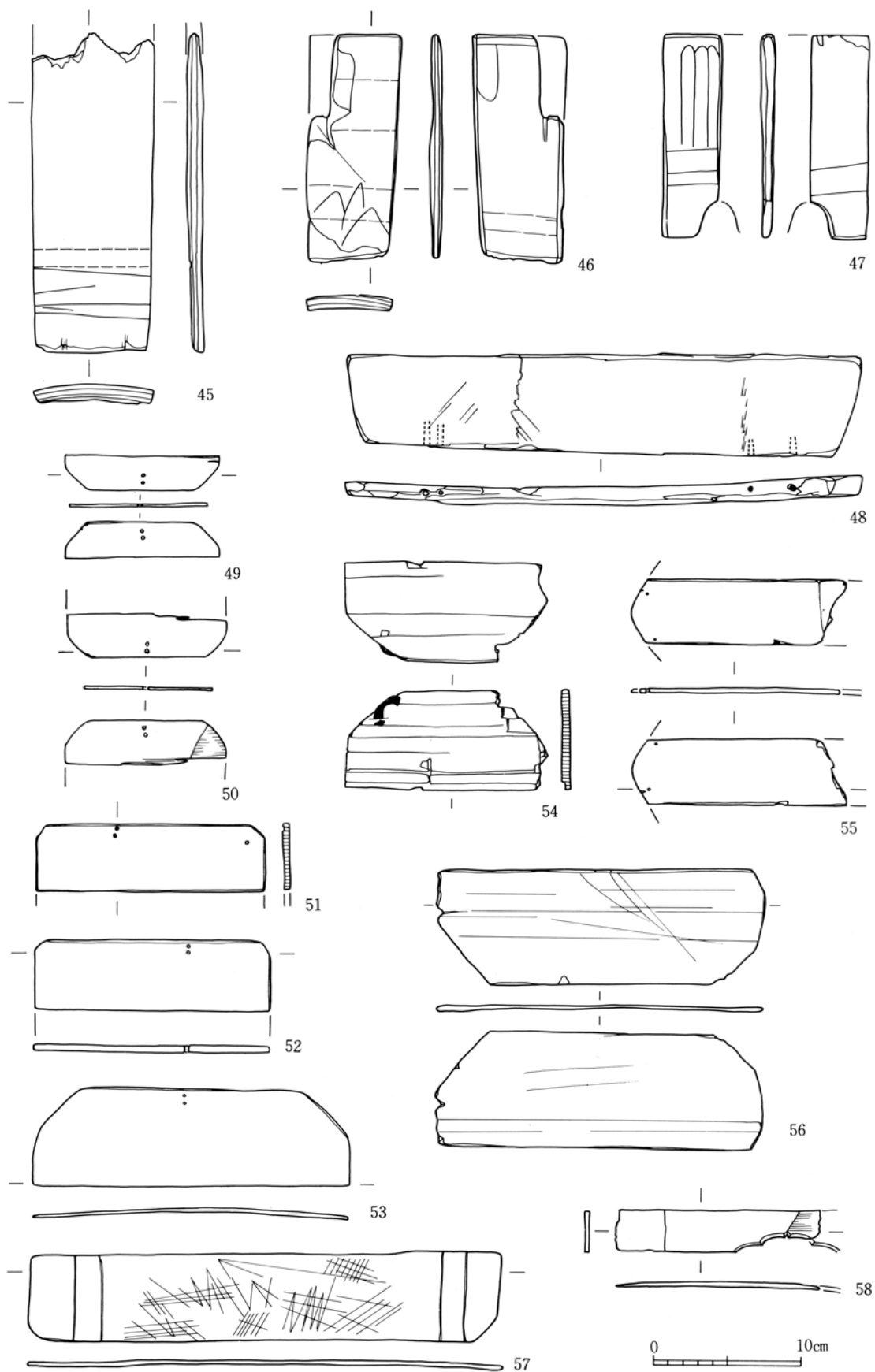
木製品(1) SD66(1)



第121図 城下町期の遺物(90)

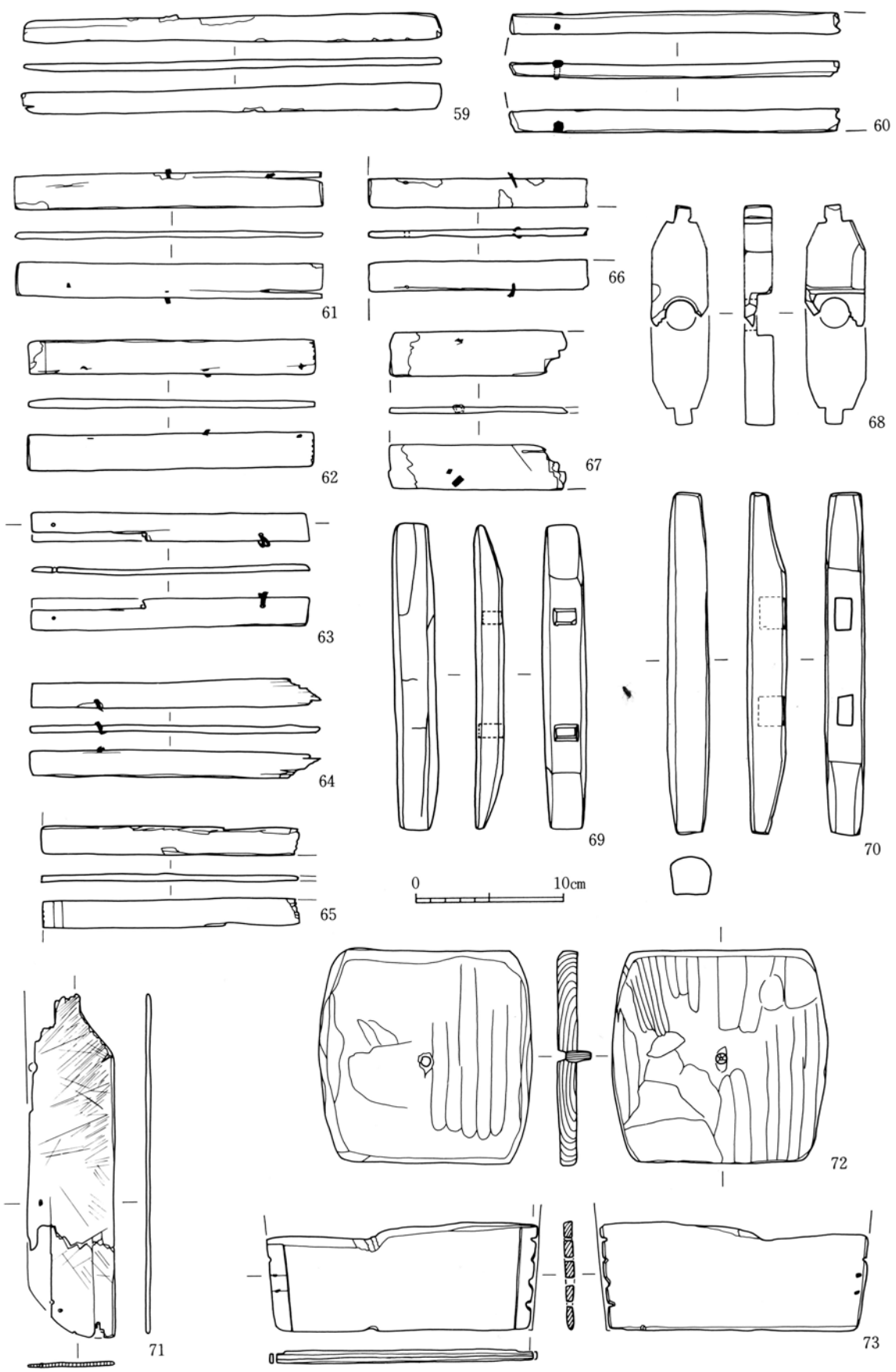
木製品(2) SD66(2)





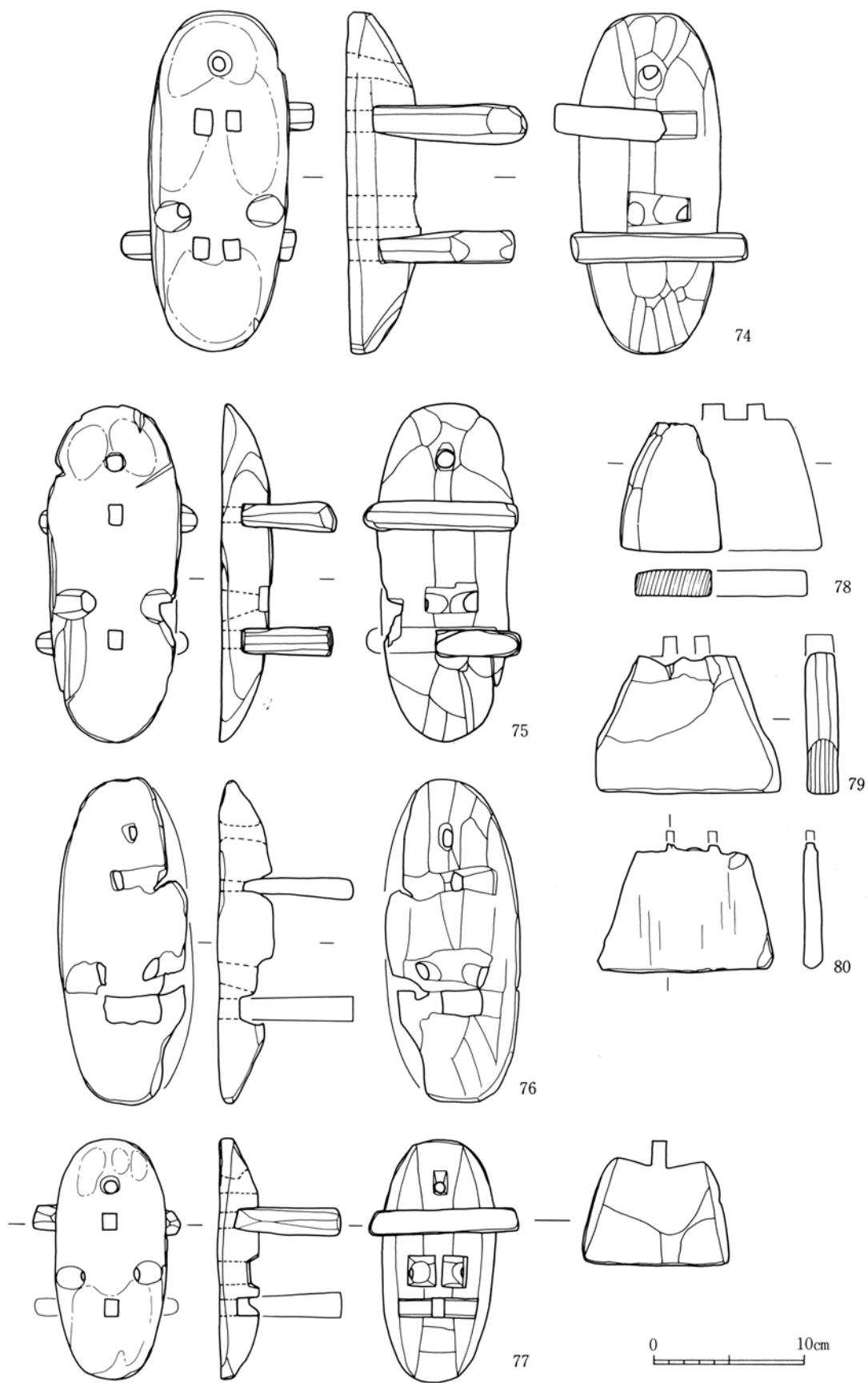
第122図 城下町期の遺物 (91)

木製品 (3) SD66 (3)



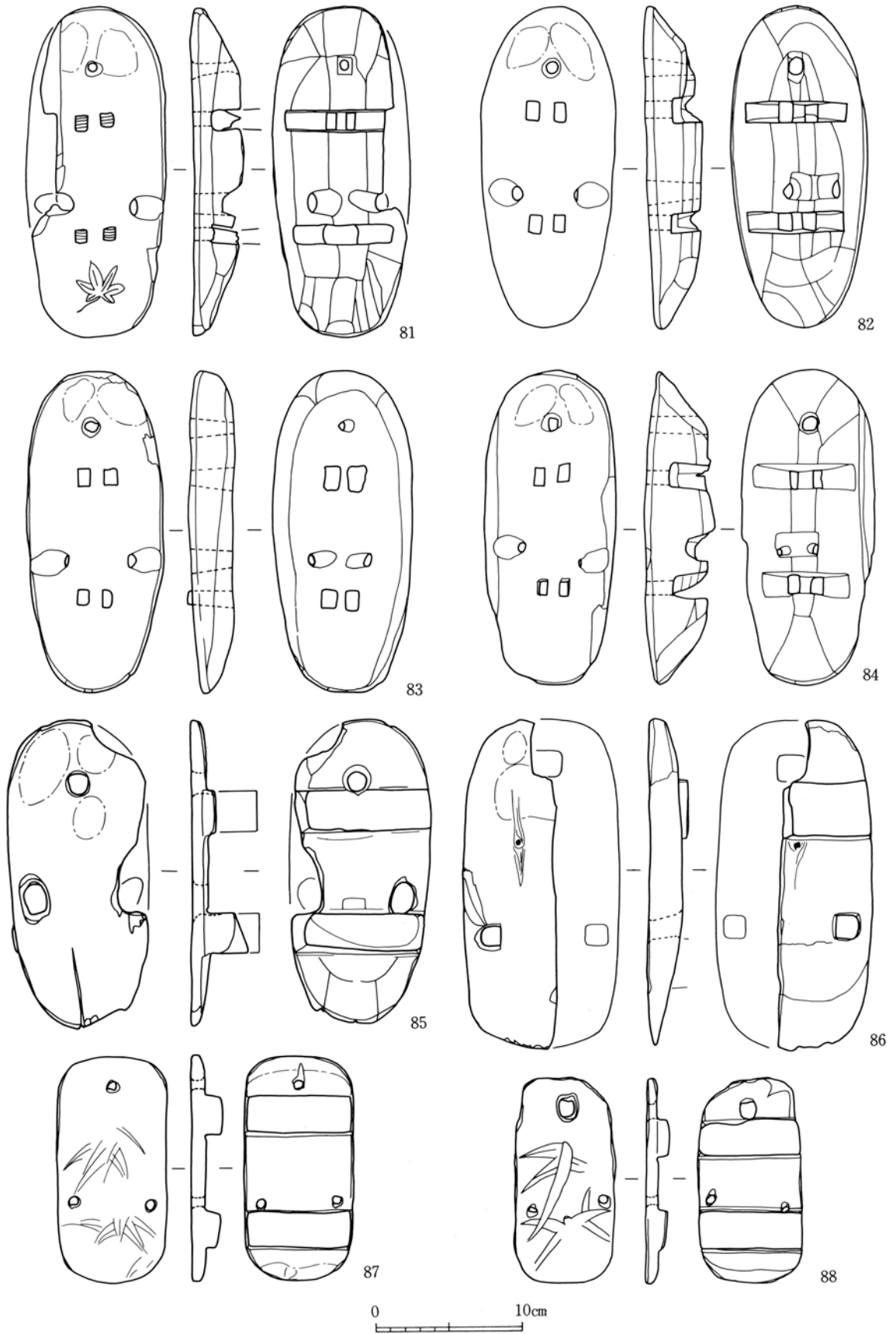
第123図 城下町期の遺物 (92)

木製品 (4) SD66(4)



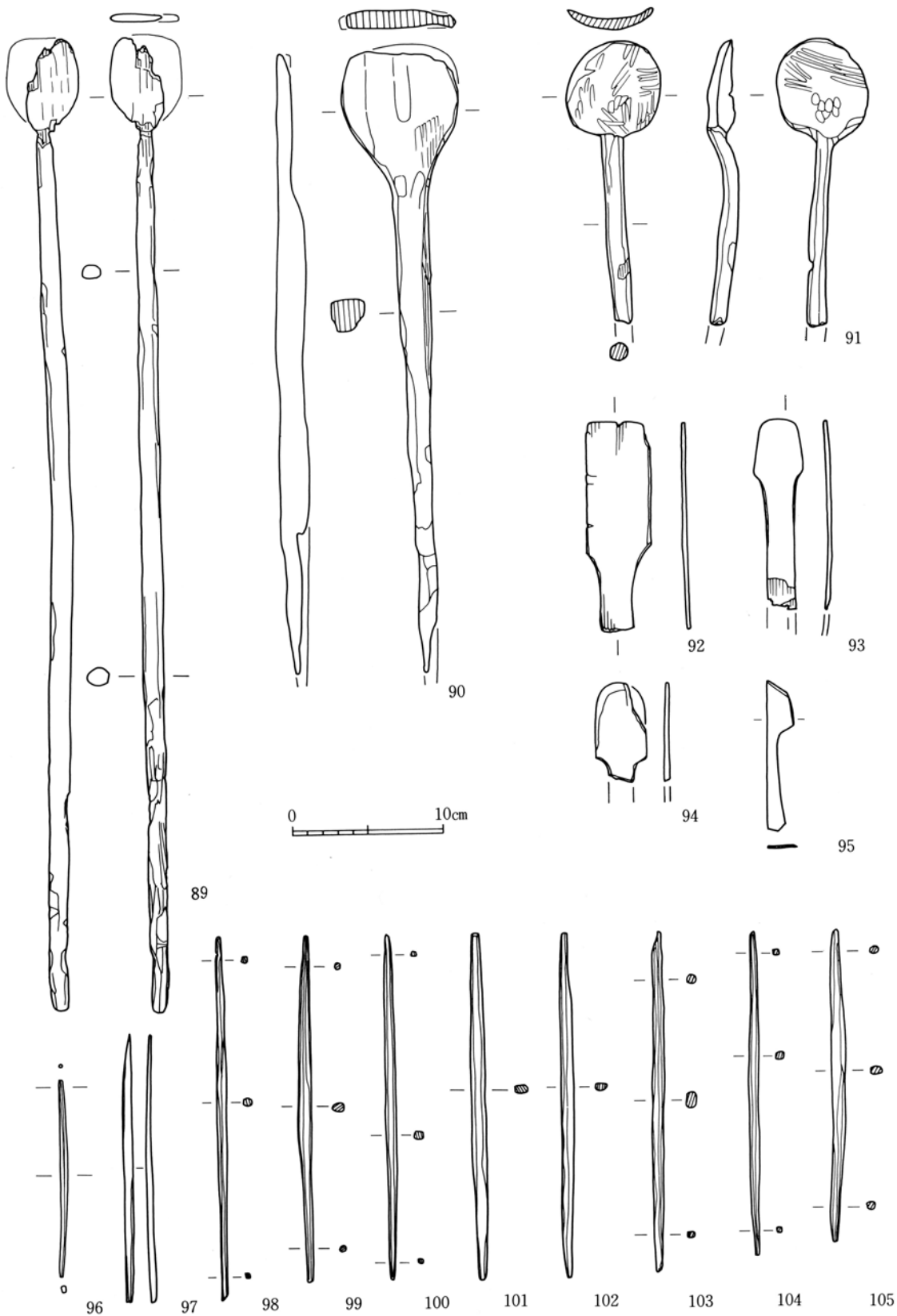
第124図 城下町期の遺物 (93)

木製品 (5) SD66(5)



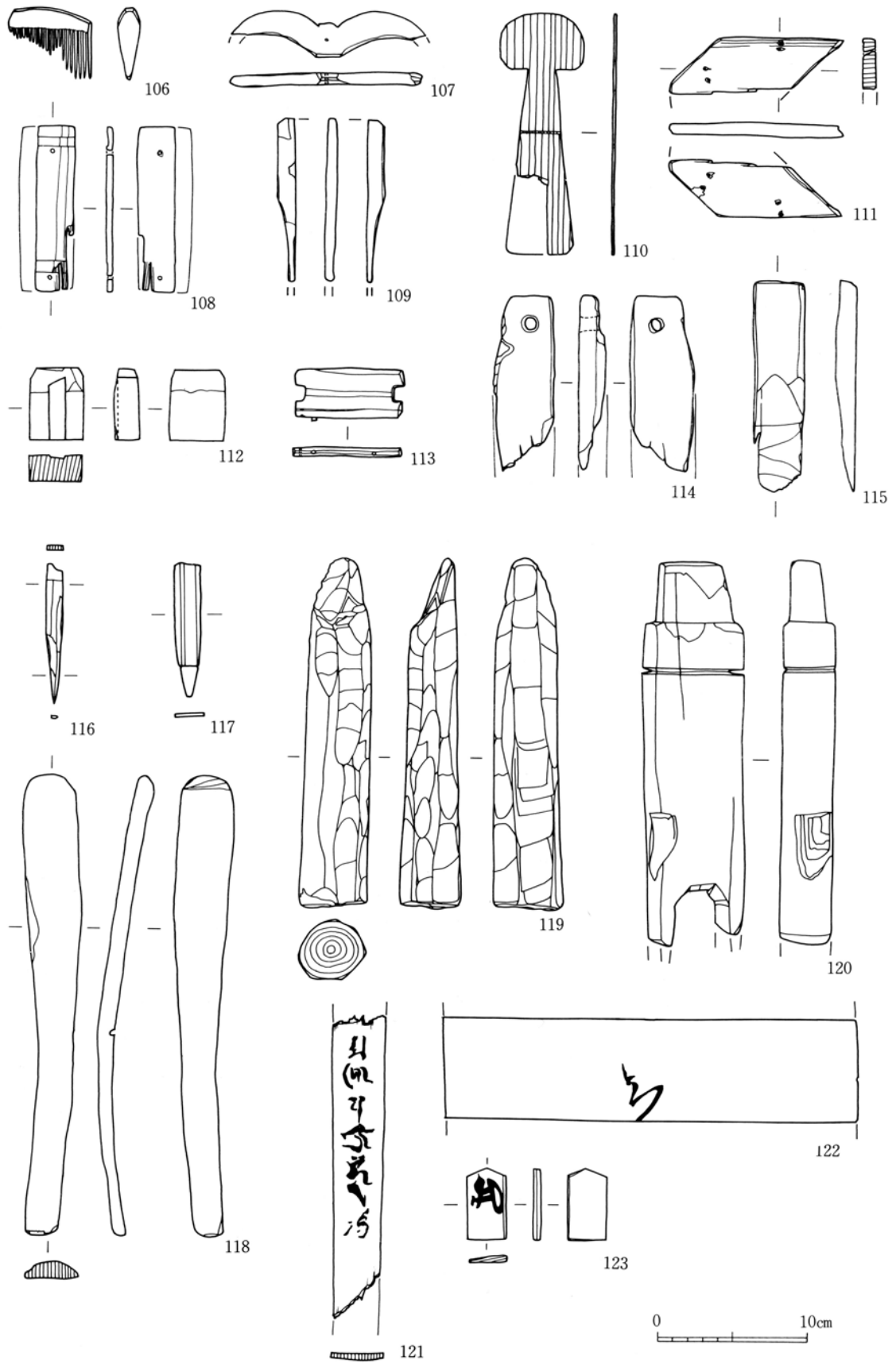
第125図 城下町期の遺物 (94)

木製品 (6) SD66 (6)



第126図 城下町期の遺物 (95)

木製品 (7) SD66 (7)



第127図 城下町期の遺物 (96)

木製品 (8) SD66 (8)

ることから、他の用途に用いられた製品の可能性がある。107は鳥の羽状に材を作った製品で装飾の一部かあるいは形代かと思われる。108は刃物の柄部の一部である。外側には2条の凹みが見られ、これは金具で止め付けた痕跡である。しかし、内面に刃物の刃部が納まっていた凹みは確認できなかった。113は箱物の側板と思われる。両端部にはほぞ加工が施され、「三枚組接」による組合せが行われていた。底板を取り付ける釘が2ヶ所確認できる。115は中央部から先端に向けて鋭利に削ったくさびである。規模と形状から桶のタガを締め付ける際に用いられたくさびと推定できる。119と120は組み合わせで一つの製品を形成していたと思われるが、全形は不明である。120の下端部のほぞ孔に119は差し込まれたのであろう。

#### NR01 (第128～130図 124～249)

NR01 から出土した木製品には、木簡・漆器・曲物桶・結桶・折敷・下駄・箸・形代などがある。生活道具類の他に柿経や形代といった信仰に関わる製品(祭祀具)が多数見られ、この遺構の性格を物語る遺物群となっている。

**漆器** 124～129は漆器で、124～127は椀A類、129は椀B類、128は皿である。124の高台部にはロクロ挽きの痕跡が同心円状に残存している。125と126の高台裏にはやや鈍い刃物で付けられた傷が存在する。127の内面は焦げていて漆塗布の状況は不明である。

**曲物桶** 130～133は曲物桶の底板である。柾目板材を正円形に加工したもので、釘穴や桜皮を取り付けた痕跡は見られない。130・131は直径約7cm、132は直径3cmを測る。134は細長い板材を2枚十字状に重ね合わせた製品である。板の交差部にはほぞ加工が見られず孔が3個穿たれており、さらにそれぞれの板の端部にも孔が存在する。端部の4つの孔が釣り手となり、おそらくは曲物桶がその上に乗る受け台であると思われる。143は孔が穿たれた板材で134のような十字状の曲物桶受けの一部の可能性がある。

**結桶** 135・136は結桶の側板である。135は高さ26cmを測り、柾目板材である。136は小型の結桶の側板で高さは11cm弱である。137は結桶と底板材である。他の板材と継ぎ合わせるための釘穴が2ヶ所ある。

**折敷** 142・144～148は折敷あるいは箱物の部材である。142・144は細長い板材に桜皮を3ヶ所で縫い合わせているもので、折敷の側板と推定できる。145～148は竹釘が施された孔が存在する。146は黒色漆を施した膳の底板である。脚部が接続する部分には漆塗がなく、孔が数個存在する。147は端部に2個の孔が穿たれた折敷の側板で、下面にも底板と接続するための孔が開けられている。148は端部に孔を持ち、折敷の底板の一部と思われる。

**柄** 138は刃物の柄の一部である。柄の両端に浅い幅広の溝が施されている。

**栓** 141は上端部の断面形が方形、下端部が円形を呈する栓で、中央部に孔が1個穿たれている。

**櫛** 139・140は櫛であるが、いずれも、遺存状況は不良で全形は不明である。140は歯部の先端を尖らせている。

**下駄** 149・150は一木作りの下駄である。149は右足用の下駄で鼻緒のための孔がやや小さいものである。

**箸** 151～153は箸で、長さは最大28.2cmを測る(153)。全て荒く割り削ったままの状態、断面形は多角形を呈している。

**形代** 154～167は刃物や鳥などを形作った形代と思われる。154・155は剣状の板目板材で先端を鋭利に尖らせている。墨書は見られないが塔婆類とも考えられよう。156は頭部を圭頭状に加工したもので、これも剣状の形代の可能性がある。157～163は片刃状の刀代である。157・158は刃部と柄部の境界部分に段差が存在する。159・161～163は柄部が欠損している。164は孔を持つ短い短剣状の形代である。165～167は鳥形の形代である。165は頭部が鳥形をなし、羽の接合部にはぞ加工が見られる。尾部は欠損して不明である。167は2ヶ所に浅い溝が施されており、溝には小さな穴が穿たれている。背部に切り込みが1ヶ所存在し、羽が接続したものと思われる。

**爪楊枝** 173～176は爪楊枝である。長さは11cm～13cmの範囲に分布する。

**札類** 177～179は長方形の板材の上部に孔を持つ札類である。墨書は認められなかった。177の表面には微細な傷が多数残存している。

**木簡** 木簡には、経文を記した柿経・位牌・将棋の駒・習書木簡などがある。

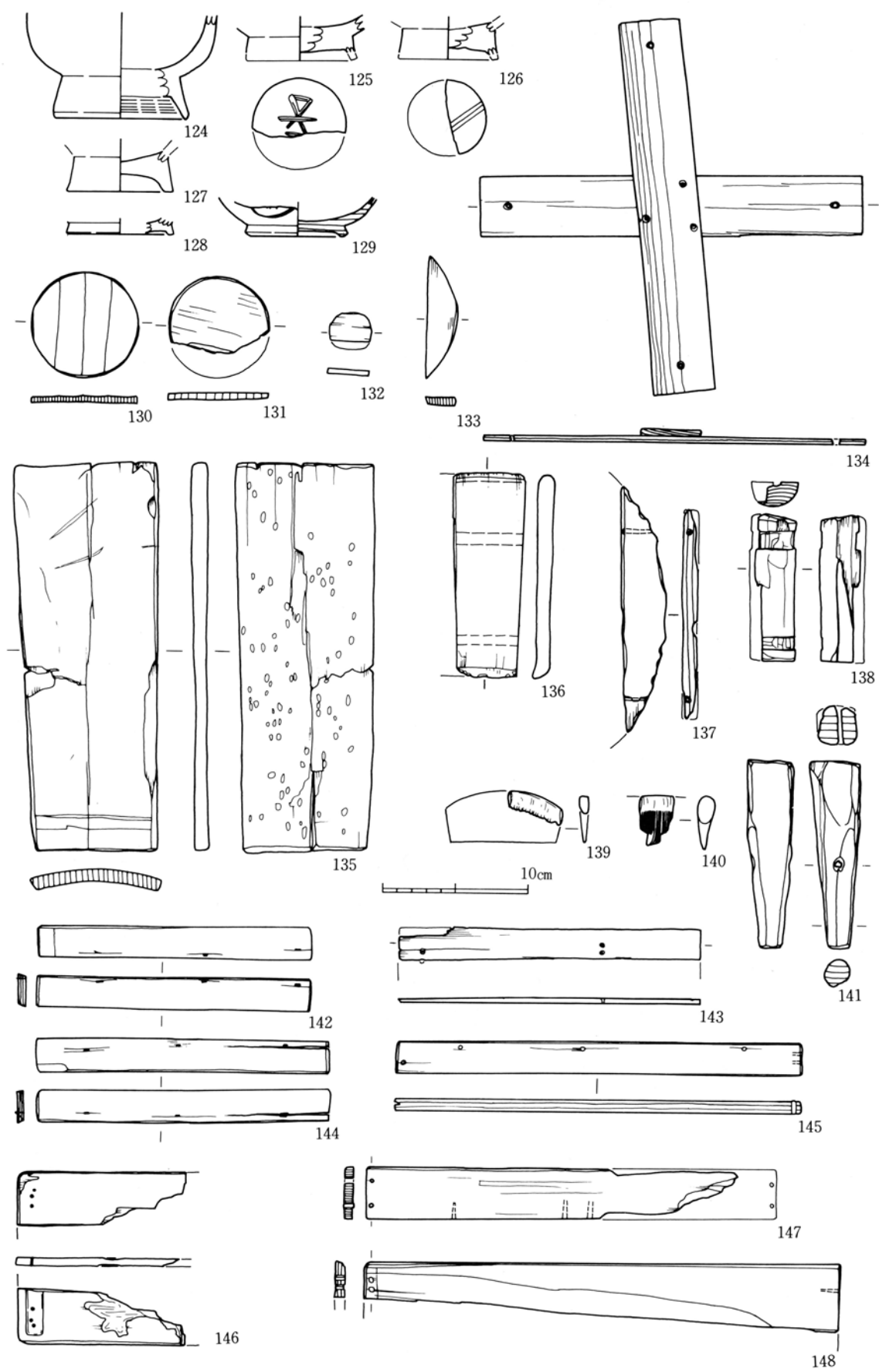
**柿経** 柿経は完形品が存在せず、断片がばらばらの状態で残存しているのみである。現在残っている柿経の断片は49点である。この中で、頭部が残存しているものは196～205の10点、最下部が残存しているものは241～244の4点を数える。頭部の形状は圭頭状に加工しており、短冊状になっているものは存在しない。最下部の形状は短冊形となっている。板は非常に薄く1mm以下のものばかりで、幅は約3cmを測るものが大半である。長さは不明であるが、30cm程度であったと推定できる。木目がきれいに揃った材から柁目板にへぎ取ったものである。経文は片面にのみ書写されており、これまで清洲城下町遺跡から出土した柿経と共通する。柿経の書体は、196・198・202・206と比較すれば分かるようにそれぞれ異なっている場合があり、この柿経は複数の人の手によるものであることが判明する。なお、206は他の柿経と比べ文字が大きく筆も太い点が著しく異なり、別の製品の可能性がある。この柿経の経文の原典は、妙法蓮華経(法華経)八巻一部である。経典を書写する場合、通常経文の部分は1行に17字、偈頌の部分は1行に16字ないしは20字記載するのが一般的であり、本柿経もこの書式で記載されている。写経の原典となる経文がこの書式で書かれ、これをそのまま書写するので、各行に記載される経文はそれぞれに決まっている。従って、経文の同定に際しては行の位置を特定すればよいことになる。妙法蓮華経(法華経)八巻一部は、各巻にいくつかの品があって各品にも「第一」という通番が存在することから各行の経文の位置を、巻番号・品番号・行番号(各品毎の行番号を付与する)の組合せで表示できる。具体的に例をあげると、196は「巻第一・方便品第二・百七十行目」を書写したものであるから「1・2・170」と表示して特定することにしたい。ただし、この番号は柿経約20枚を一束にして番号を付与する「巻束番号」とは異なる。以下に各柿経の釈文と同定番号を記す。( )は欠損番号を復元したものである。

196 「無量衆所尊為説(実相印舍利弗当知我本立誓願)」――「1・2・170」

197 「薩説大(乘経名妙法蓮華教菩薩法仏所護)」――「7・21・27」

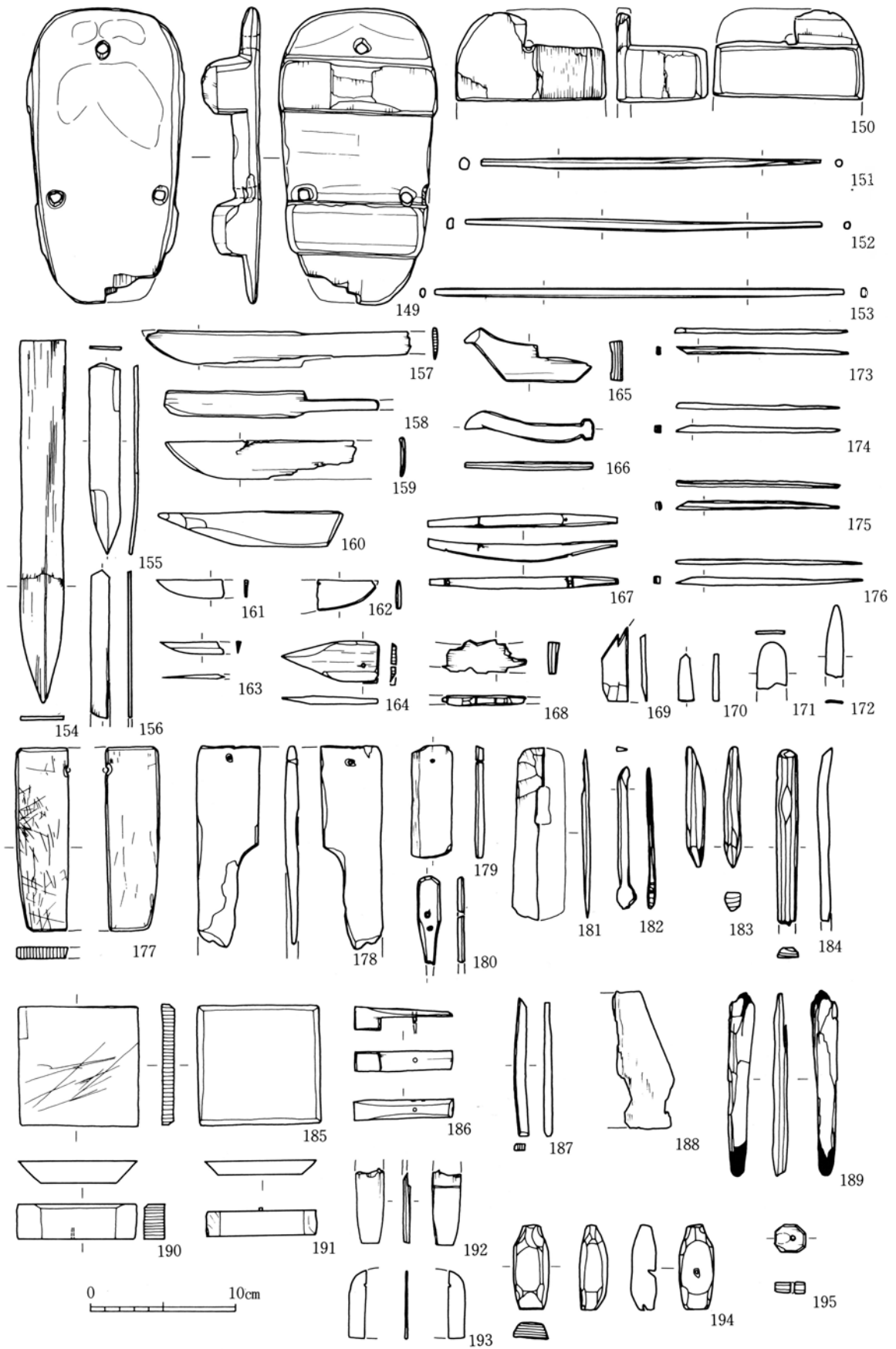


- 198 「能持此經者（則為已見我亦見多宝仏及諸分身者）」 --- 「7・21・56」 或は  
「能持此經者（不久亦當得能持此經者於諸法之義）」 --- 「7・21・60」
- 199 「縁果報生処（悉見悉知爾時世尊欲重宣此）」 ----- 「6・19・10」
- 200 「娑婆世界其（地瑠璃坦然平正閻浮檀金以）」 ----- 「6・17・92」
- 201 「□□□□□----- 「不明」
- 202 「又諸仏子（専心仏道常行慈悲自知作仏）」 ----- 「3・5・84」
- 203 「羅頻婆（羅阿門婆等偈大王我今當還供養）」 ----- 「7・23・51」
- 204 「南□----- 「不明」
- 205 「□----- 「不明」
- 206 「□□□□〔七十カ〕□□----- 「不明」
- 207 □〔無カ〕妙法□〔蓮カ〕----- 「不明」
- 208 南無□----- 「不明」
- 209 □----- 「不明」
- 210 □具足六□----- 「不明」
- 211 □□□----- 「不明」
- 212 「（仏前）而説呪曰」 ----- 「8・26・36」 或は  
「（此陀羅尼即於仏前）而説呪曰」 ----- 「8・28・41」
- 213 婆羅□----- 「不明」
- 214 □□□----- 「不明」
- 215 目皆令----- 「不明」
- 216 □----- 「不明」
- 217 □----- 「不明」
- 218 □〔満カ〕□□----- 「不明」
- 219 □求声----- 「不明」
- 220 □----- 「不明」
- 221 □----- 「不明」
- 222 □----- 「不明」
- 223 □----- 「不明」
- 224 □----- 「不明」
- 225 □----- 「不明」
- 226 □----- 「不明」
- 227 □〔彼カ〕国----- 「不明」
- 228 □----- 「不明」
- 229 □----- 「不明」
- 230 □----- 「不明」
- 231 □----- 「不明」



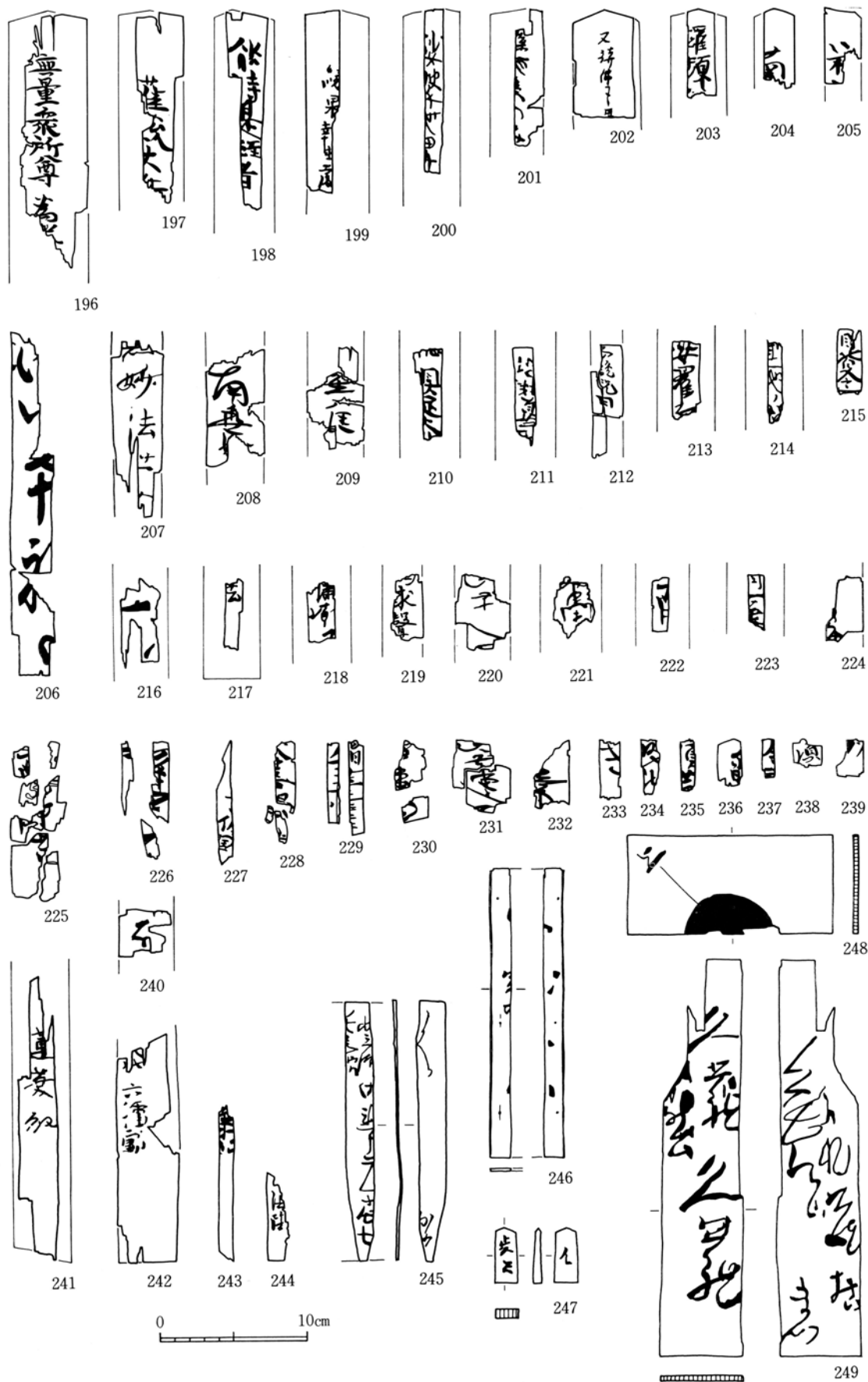
第128図 城下町期の遺物 (97)

木製品 (9) NR01 (1)



第129図 城下町期の遺物 (98)

木製品 (10) NR01 (2)



第130図 城下町期の遺物(99)

木製品(11) NR01(3)

- 232 □----- 「不明」  
 233 □----- 「不明」  
 234 □----- 「不明」  
 235 須□----- 「不明」  
 236 爾時----- 「不明」  
 237 □----- 「不明」  
 238 須----- 「不明」  
 239 □----- 「不明」  
 240 □----- 「不明」  
 241 蓮□□〔華経か〕----- 「不明」  
 242 「（諸仏声歎声及弾指之声周聞十方国地皆）六種動」---- 「7・21・52」  
 243 □]----- 「不明」  
 244 □]----- 「不明」

**位牌** 245は頭部が短冊形で先端を尖らせている。両面に墨書が見られる。

- 245 ・「□□〔定治か〕御れうこんさま  
 長□□」  
 ・「[ ] お□」

**将棋の駒** 247は将棋の駒の「歩兵」である。

- ・「歩兵」  
 ・「金」

**標的** 248は柁目板の中央を墨書で円形に塗りつぶしたものと思われ、半分欠損している。ここでは図化していないが、同様の板材が数点存在する。248は一方の角に「上」と記載されており、対角線上に針書も見られ、的矢の標的であろう。

- ・「上」

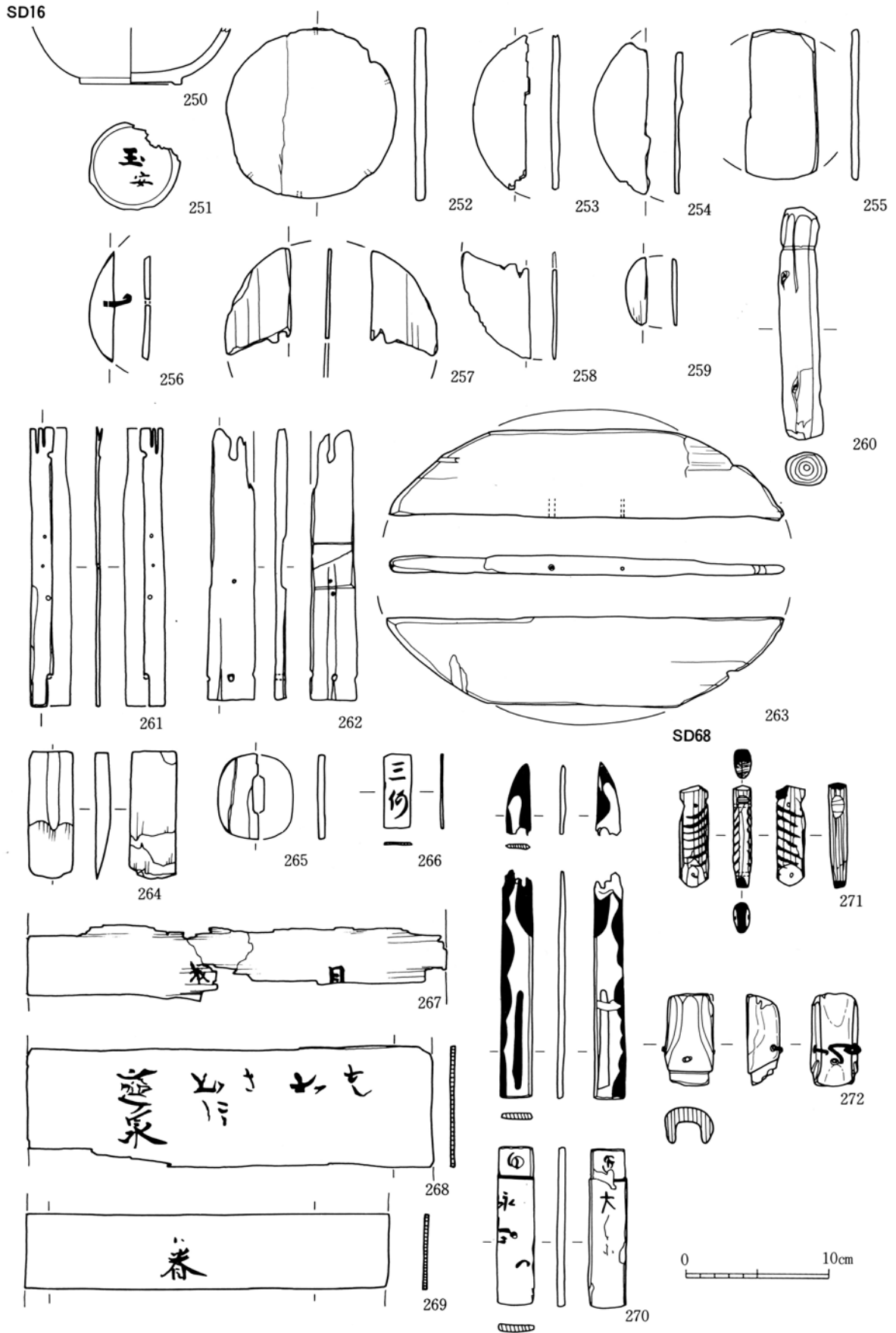
**習書木簡** 249は柁目板の両面に「久罷」・「仕候」などの書簡の文言らしきものを繰り返している。板材の本来の用途は不明であるが、習書の使用されたものである。

- ・「久罷久罷  
 □」  
 ・「□□□  
 □□□〔仕候か〕まい」

#### SD16 （第131図 250～270）

SD16 から出土した木製品には漆器・曲物桶・結桶・木簡・形代等がある。生活用具類を主体としつつも、刀代も含む一括資料である。

**漆器** 250は高台の低い椀B類、251は椀類の底部の漆膜である。251は黒色漆の上に赤色漆で「王」「安」と記されているが、それぞれの文字の色は異なり、別筆である。



第131図 城下町期の遺物 (100)

木製品 (12) SD16・SD68

**曲物桶** 252～259は曲物桶の底板で、直径は12cm以下のものばかりである。欠損したものが多いが、釘穴を持つ252、桜皮を縫いつけた256を除き側板と接続するための特別な加工は見られない。261・262は十字状に材を組み合わせて作る桶の受け台である。

**木簡** 折敷底板と見られる柁目板に墨書したもの（267～269）と札類（266）がある。268は人名らしき文字を繰り返しており、習書木簡と思われる。

266 「三何」

267 「□〔目か〕」

268 「□

□〔如か〕□

□〔道か〕□

如□〔肝か〕

□〔道か〕泉」

269 「眷」

**形代** 270は一個体分と思われる三片からなる刀代であり、柄部に「大くに□」・「永□」と針書して墨書を入れる。刀身部には墨書で刃文を表現する。265はこの刀代の鏝であろう。

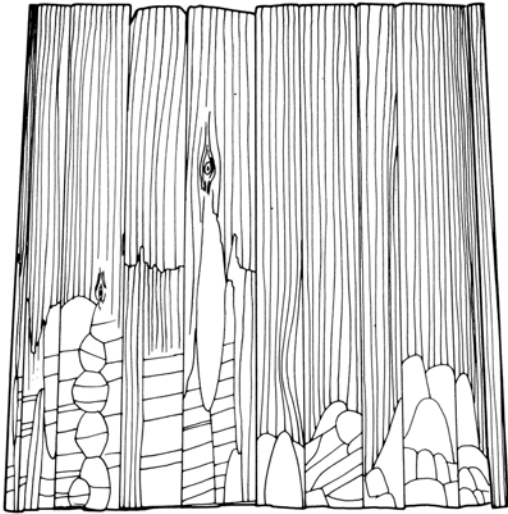
#### **SD68** （第131図 271～272）

SD68 から出土した木製品のうち特徴のあるものとして形代（271）がある。頂部に顔面が描かれ赤色塗布物が施されている。側面には墨書で縞模様が記され、手足が取り付けいたと思われる孔が2個存在する。猿状の形代である。

#### **SE02・SE22・SE17** 出土井戸桶 （第132図 273～275）

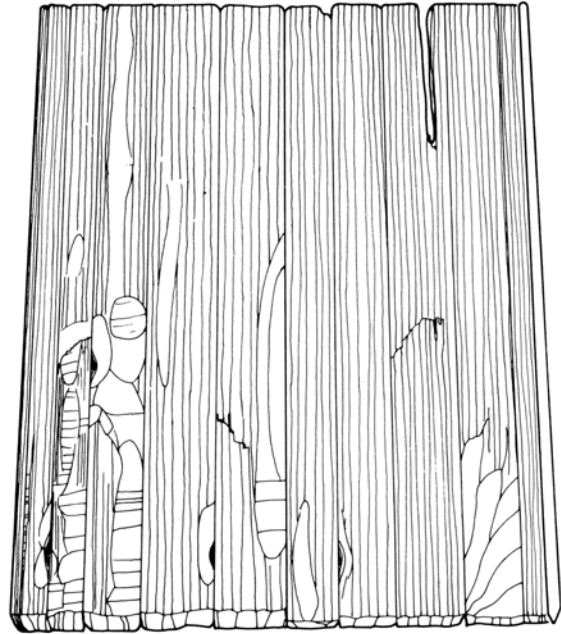
井戸桶の用材は全て割裂法による製版を行い、表面を若干削ることで整形している。273はSE22から出土した最下段の井戸桶で、下端部内面を薄く削っている。274はSE02の井戸桶で、下端部の内外面を共に削って鋭利に尖らせている。275はSE17出土井戸桶で、上端部の遺存状況が不良である。  
(鈴木正貴)

SE02



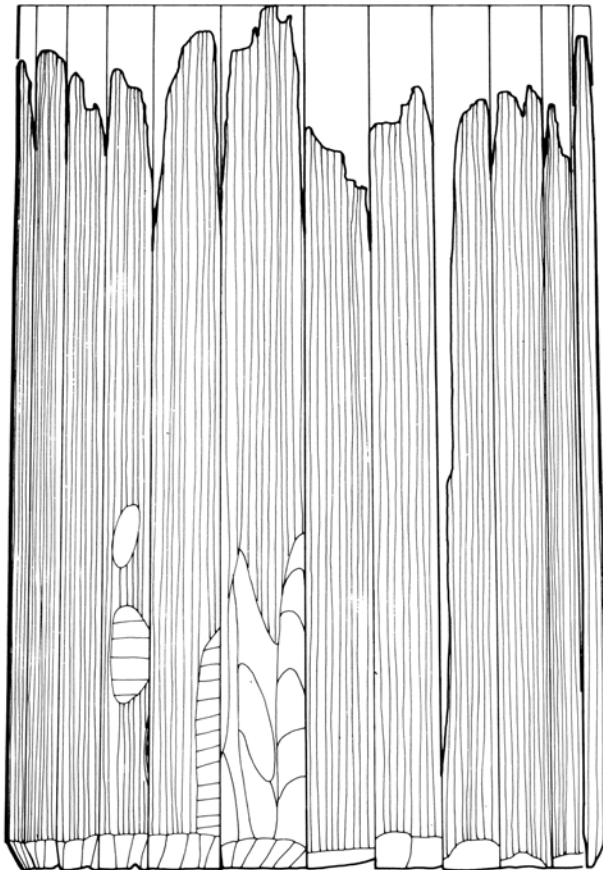
273

SE22

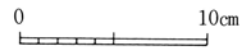


274

SE17



275



第132図 城下町期の遺物(101)

木製品(13) SE02・SE22・SE17



## 第5節 石製品（第132図～第137図）

### 1. 硯（第133図－1～6）

硯は完形・破片を含めて7点出土した。長方硯が6点と形態が不明のものが1点ある。長方硯の中には、2点の両面硯と1点の小型硯がある。

57は墨堂がくぼんだ長方硯、32は海部の破片。31は海部が欠損し墨堂が大きくくぼんだ長方硯で覆手の面に雑な削りで浅い海と墨堂がある。使用痕が認められる両面硯。33も両面硯である。30は小型で墨堂のくぼみが海部まで続き、海部の一部には三条の線刻が、覆手には「大下」の文字が線刻されている。34は形態不明の硯で、墨堂の一部に墨が残る。

### 2. 砥石（第133図－7～14、第134図）

砥石は総計18点出土したが、そのほとんどが破損品である。砥石は形態による分類よりも、砥石そのものの粒子の粗細により荒砥、中砥、仕上砥に分けるのが一般的であるが、中砥の判別ができない為、ここでは平面と断面形態を基準とした。平面、横断面が長方形を呈し、側面観は中央部がレンズ状にくぼむ砥石（2、4、5、13）と平面と横断面が長方形を呈す薄手の砥石（3、6～11、12）とがある。この他に横断面が長方形を呈し、側面観の中央部がレンズ状にくぼんだ砥石（13、14、17）がある。14は長方形の横断面が多角形ないし丸形になっており、よく使用されたことが窺える。また大形で平面と横断面が長方形を呈した砥石15と中央部がくぼんだ砥石18がある。

### 3. たたき石（第135図－22～23）

円礫の下面に、敲打痕のあるものをたたき石とした。22は細長い円礫で、下面にある敲打痕は明瞭な深くぼみにはならず、高い頻度で使用されたため敲打痕がよく摩耗している。すり石に使用していた可能性もあるが、ここではたたき石とした。23は円礫で、下面に敲打痕が、上面にはアバタ状の敲打痕がある。

### 4. 磨石（第135図－24～28）

円礫で摩耗痕が周縁部を含め全体に認められるものを磨石とした（21、24～28）。いずれも砥石ほどではないが、周縁部の一部に敲打痕が少し見られる。敲打痕のみを取り上げればたたき石ということになるが、磨る、敲くという二つの機能をかね備えた石器と考えられる。当時の作業の中でたたき石と磨石が密着した関係にあったことを窺いうる。

### 5. 台石（第136図）

台石は3点出土した。このうち33は小形の破片である。32は完形品で、断面形態から明らかなように平坦面をもつ。34は半分が欠損しているが、中央部に明瞭なくぼみがある。いずれも内面部分は摩耗あるいは敲打のためなめらかになっている。

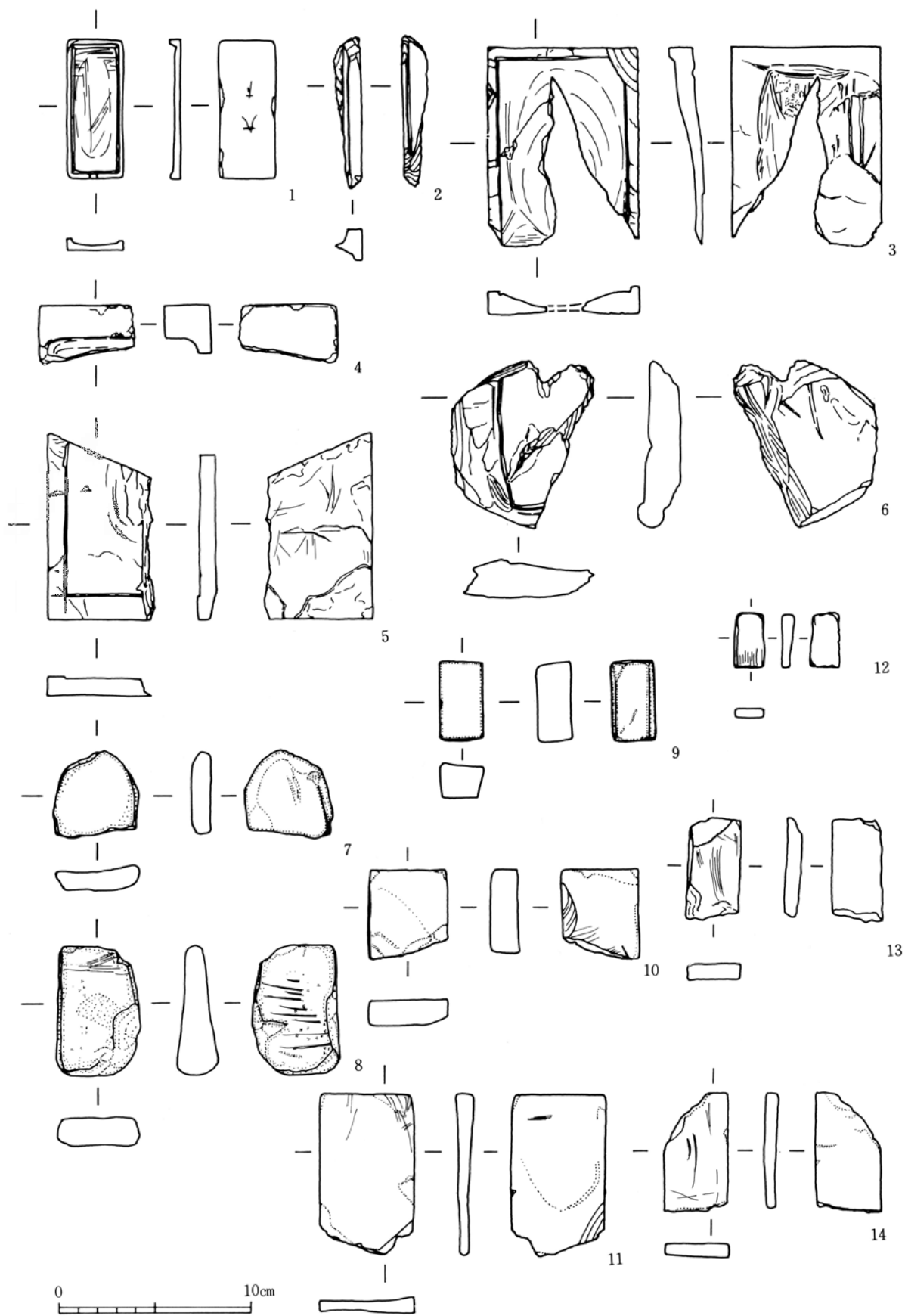
### 6. 軽石（第135図－29～31）

用途不明であるが、3点出土した。

### 7. 基石（第138図－40～49）

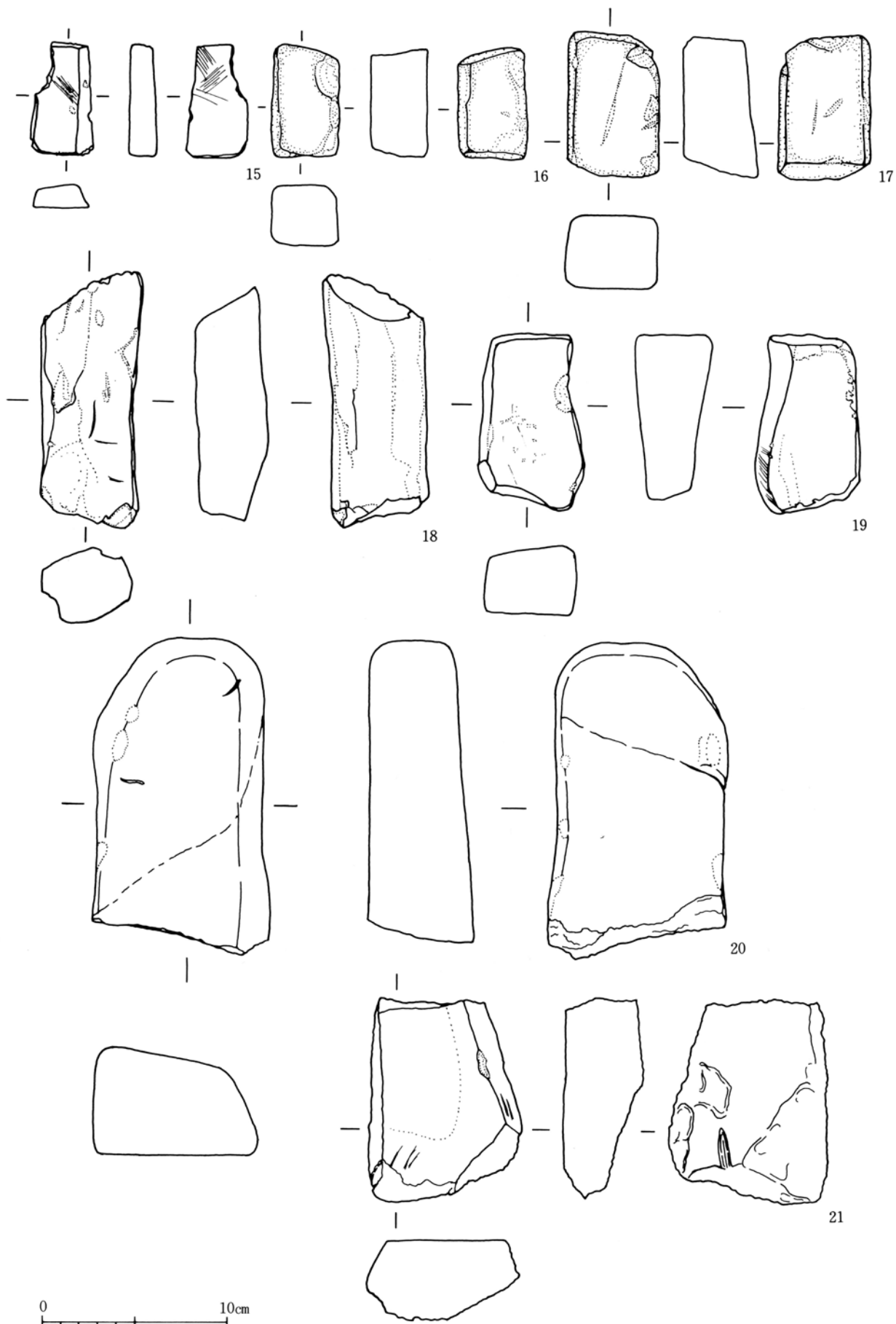
基石は10点出土した。いずれも黒色の基石で、径13mm～20mmを測る。16mm前後のものが多い。

### 8. 不明石製品（第138図－51、52）



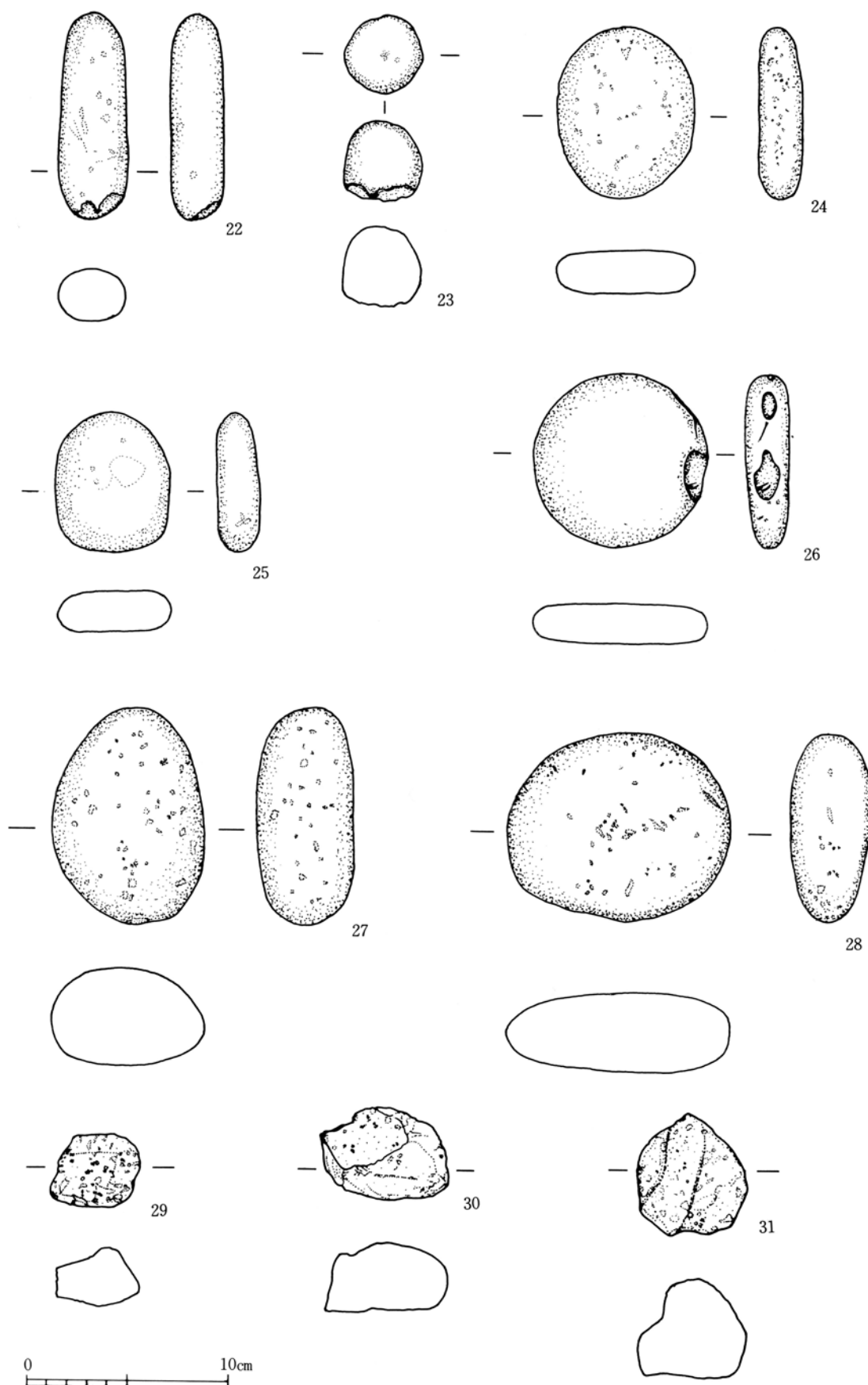
第133図 城下町期の遺物(102)

石製品(1) 硯・砥石(1)



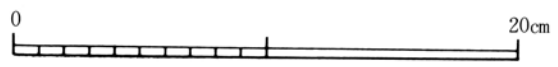
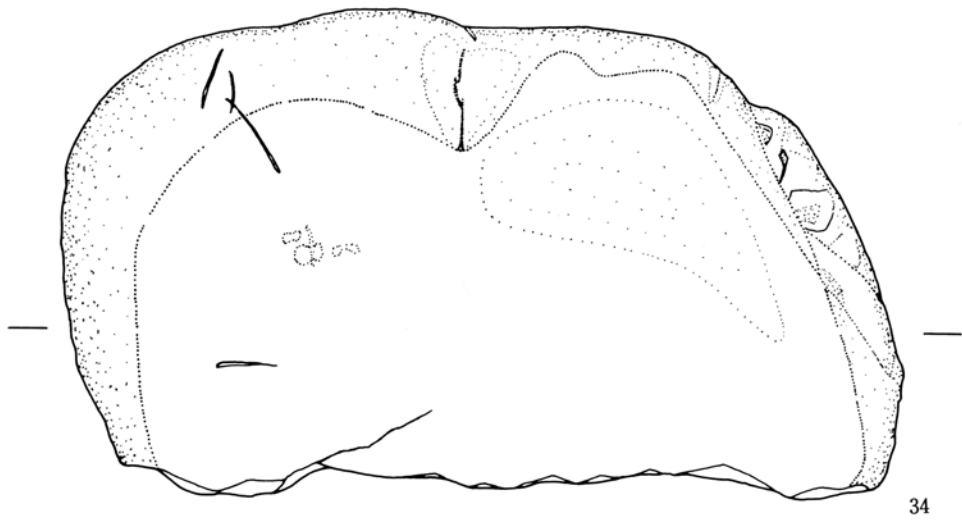
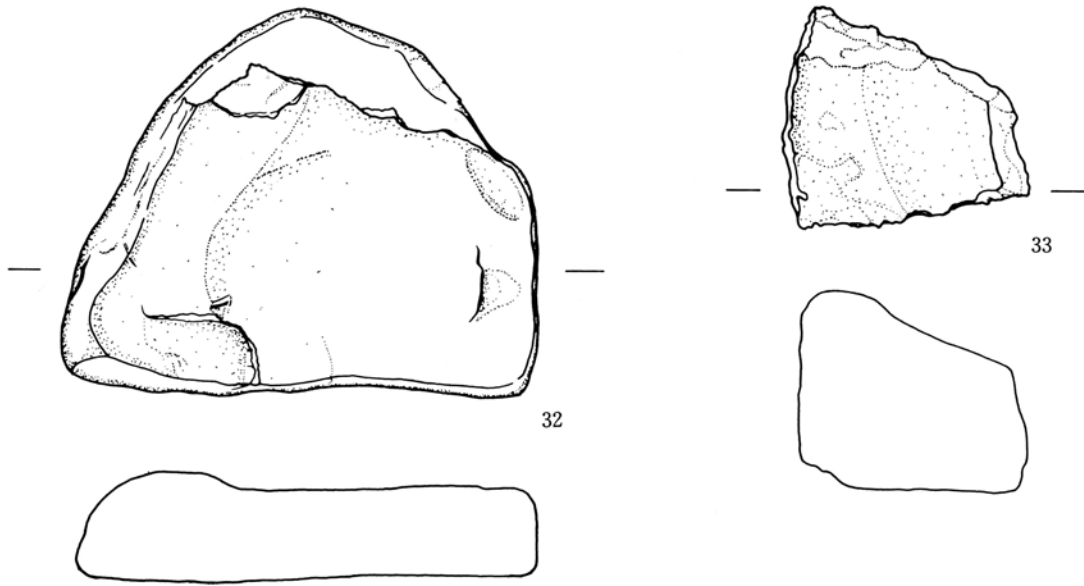
第134図 城下町期の遺物(103)

石製品(2) 砥石(2)



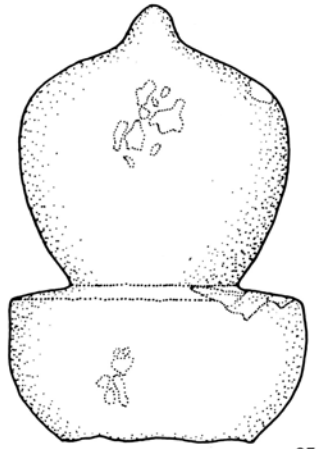
第135図 城下町期の遺物(104)

石製品(3) 敲石・すり石・他

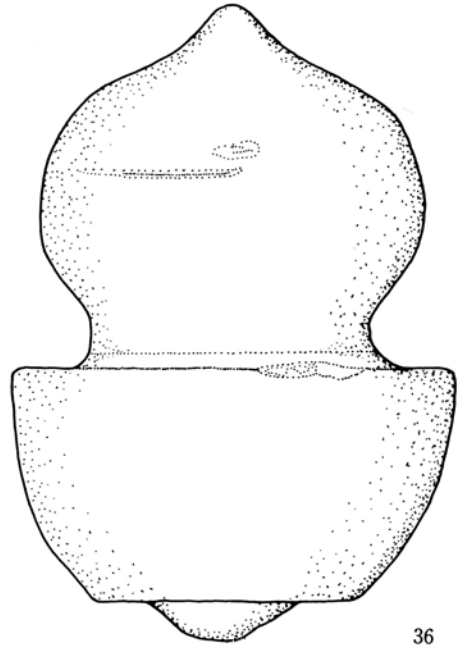


第136図 城下町期の遺物(105)

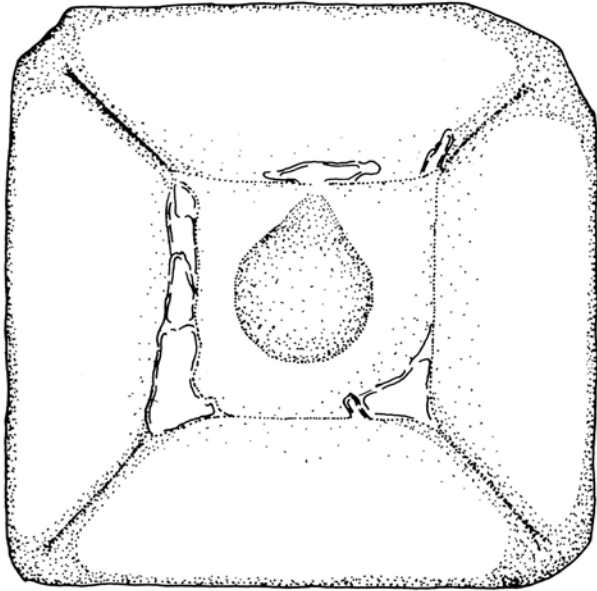
石製品(4) 台石



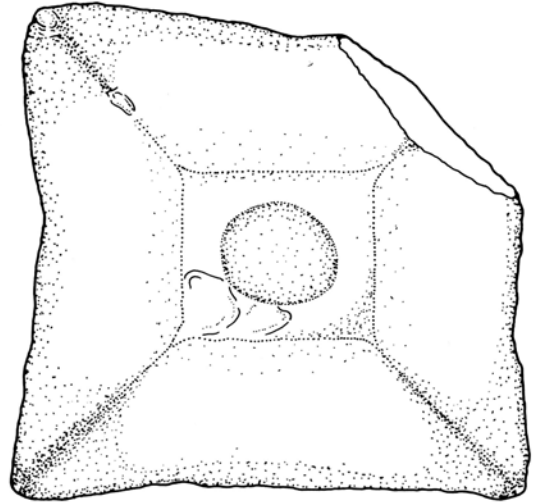
35



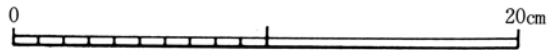
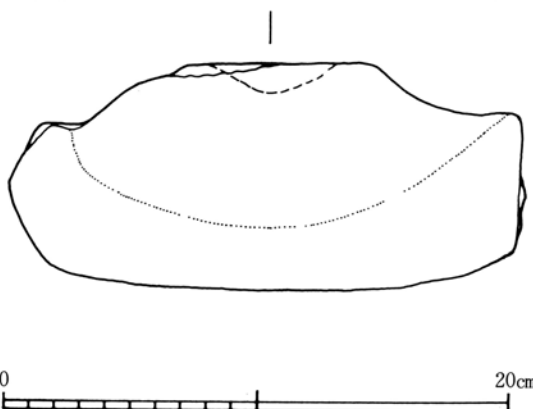
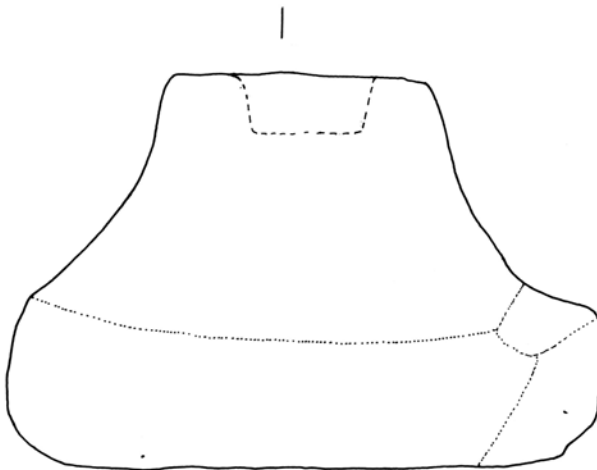
36



37

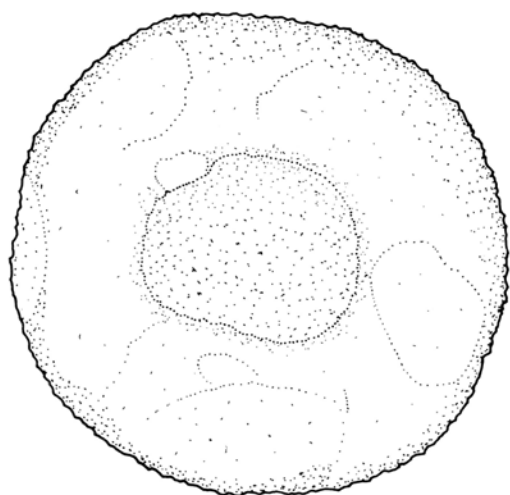


38

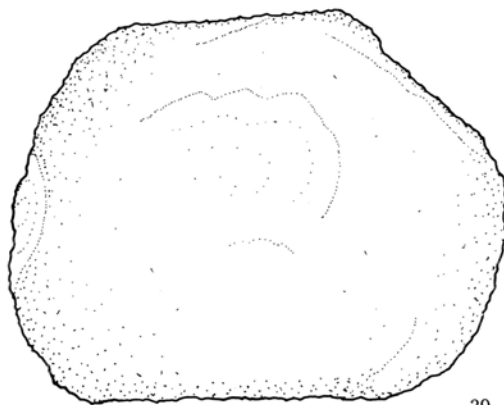


第137図 城下町期の遺物(106)

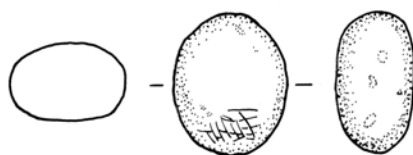
石製品(5) 五輪塔



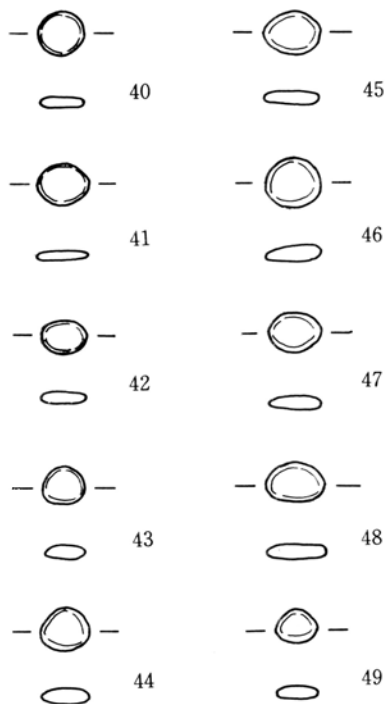
1



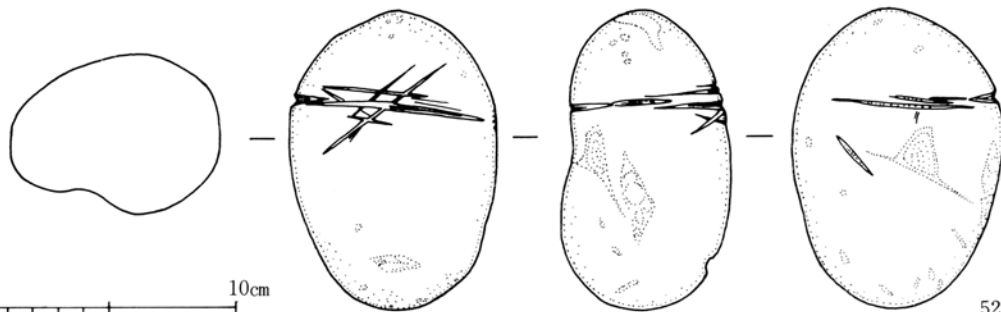
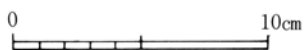
39



51



50



52

第138図 城下町期の遺物(107)

石製品(6) その他

2点あり、いずれも線刻？がある。51は円碟で、周縁の一部には縦、横の線刻？が走り、全面が磨石のように摩耗している。52は拳大の円碟で、上半部には深さ3mmを測る線刻がほぼ同じ位置で巡っている。

#### 9. 五輪塔 (第137図、第138図39)

五輪塔の空風輪部が2点(35、36)、火輪部が2点(37、38)、風化した水輪部が1点39出土している。(小澤一弘)

### 第6節 金属製品 (第139～140図1～29)

煙管、釘、小柄、鎌、鋸、銭貨等が出土しており、その大部分は腐食あるいは錆の付着がひどくて、残存状態が悪い。ここでは比較的残存状態のよいもののみを取り上げた。

#### 煙管 (第139図-5)

煙管の雁首と吸口がある。ともに井戸からの出土で、あるいは同一個体だった可能性もある。

#### 釘 (第139図-8、7)

すべて鉄釘で、ほとんどが腐食のために破損したり錆ている。掲載できたのは頭巻釘(8)と角釘(7)のみである。

#### 小柄 (第139図1～4)

小柄の柄の部分(1～3)と刃部(4)がある。

#### 鋸 (第139図-6)

出土当初は小柄の刃部としていたが、錆の付着を取り除いたところ刃と考えていた部分から刻みが現れ、小形の鋸であることが判明した。

#### 鎌 (第139図-9)

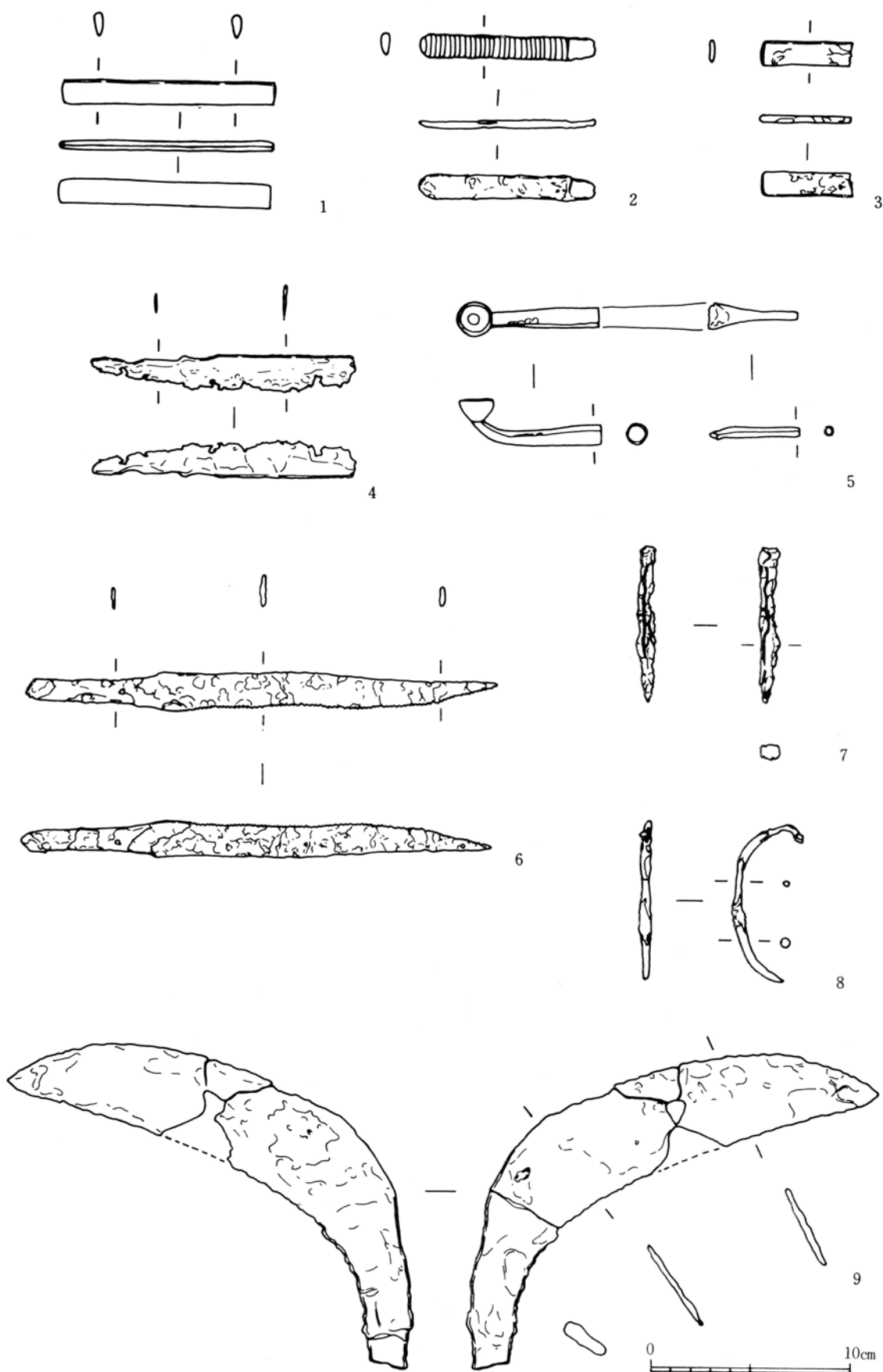
錆の付着がひどく、刃の一部を欠損している。

#### 銭貨 (第140図)

銭貨は104点出土している。銭文により分類すると元豊通寶12枚、熙寧元寶8枚、皇宋通寶8枚、開元通寶6枚、元祐通寶5枚、永樂通寶4枚、寛永通寶4枚、嘉祐元寶3枚、天禧通寶3枚、治平元寶3枚、洪武通寶3枚、政和通寶2枚、至道元寶2枚、景德元寶2枚、祥符元寶2枚、聖宋元寶1枚、天聖元寶1枚、咸平元寶1枚、元符通寶1枚、文政二宋銀1枚、判読不明32枚である。同じ清須城の城下町遺跡である朝日西遺跡から61点出土している。(小澤一弘)

※本章のうち第2節の図版類作成は小澤一弘が担当し、当該部分の原稿についてはそれらに基づいて城ヶ谷和広  
が執筆したものであることを付記しておく。



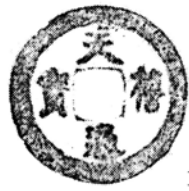


第139図 城下町期の遺物(108)

金属製品(1) 小柄・煙管・他



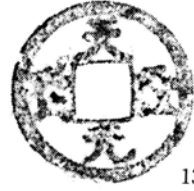
10



11



12



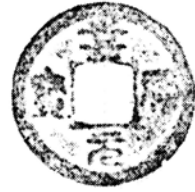
13



14



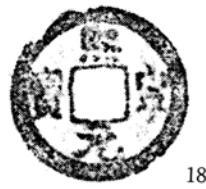
15



16



17



18



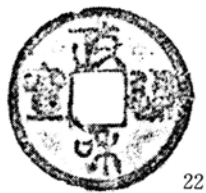
19



20



21



22



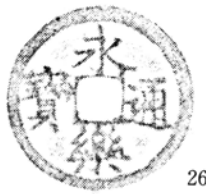
23



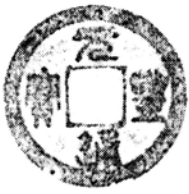
24



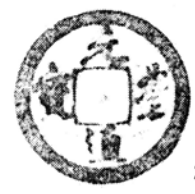
25



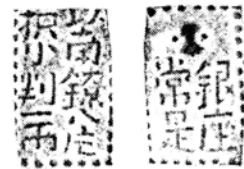
26



27



28



29

第140図 城下町期の遺物(109) (S = 1 / 1)

金屬製品 (2) 錢貨

## 第Ⅳ章 自然科学的分析

### 第1節 井戸出土のカメの遺体

#### はじめに

1983年から1986年にかけて発掘調査が行われた清洲城下町遺跡の井戸跡から、8体のカメの遺体が出土した。遺体はすべてイシガメのメスで、大型で老齢な個体が多い。頭骨が一個しか見られず、誰かが何らかの意図をもってカメを井戸に投下したのではないかと考えられている。本論の目的は、この興味深い出土例を紹介し、生物学的な検討を加えることである。

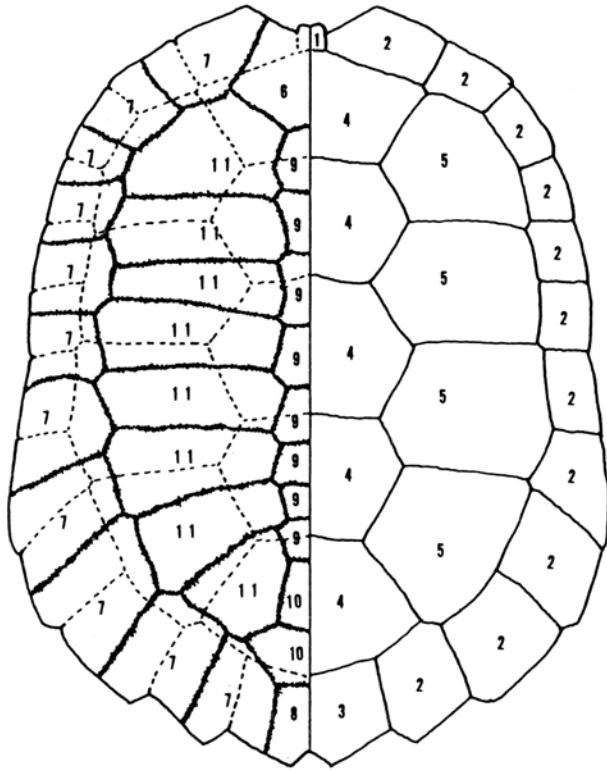
全国の様々な遺跡から出土したカメはあまり重要視されておらず、その多くが分析のなされないまま放棄されたり、あるいは収蔵庫に眠ったりしていると聞く。このことは、人文学的にも、生物学的にも大変残念なことである。これまで軽視されてきたそれらの資料を分析することによって、人はカメに対してどのような感情を持ち、どのように付き合い、どのように利用してきたのか、といったことが明らかになるのではないだろうか？ また、カメの分布様式の時間的な変化も推測できるし、その生息条件から逆に当時の地勢・植生などの古環境をも推定することができよう（金子・丹羽, 1985）。

#### 日本産カメ類の生物学的側面

本論に入る前に、日本で出土したカメの分析に有用と思われる情報を記す。なお、情報は日本産のバタゲル類（ヌマガメ科 Emydidae、バタゲル亜科 Batagurinae）5種と、スッポン類（スッポン科 Trionychidae）1種に絞り、ウミガメは割愛した。

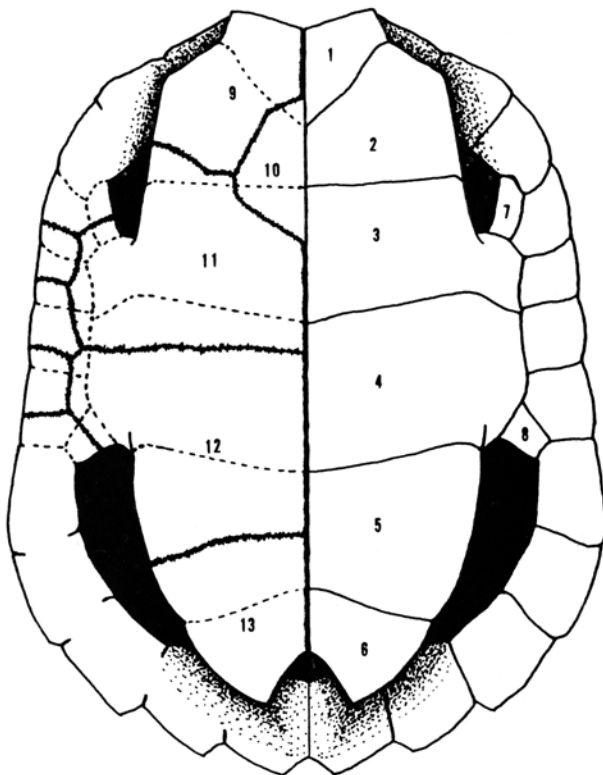
#### ① 骨格

カメは、甲羅に体を覆われるという、非常に特異な形態をしている。甲羅は、椎骨や肋骨が広がって縫合し一枚板になった骨板の表面を、角質化した薄い皮膚である甲板が覆う、という2層構造になっている。第141・142図はそれぞれイシガメの背甲と腹甲における甲板と骨板の構成を示している。甲板と骨板の基本的な構成は、ヌマガメ科においてはほぼ共通している。図から分かるように、甲板の境界線と骨板の縫合線は互いにずれていて、強度が増すようになっている。カメが死亡すると、甲板は割合速やかに剥がれ落ちる。しかし、骨板の表面には第141・142図のそれぞれ左側に点線で示したように甲板の境界の痕が残るので、復元の助けになる。若い個体では肋骨の拡がり不十分で、骨板には隙間が見られる。カメは脊椎動物であるから、第153図のX線写真に見られるように甲羅の中（背甲の裏側）には脊椎がある。肩帯や腰帯までもが骨（甲羅）の中に収まっているのが確認できるが、このような脊椎動物はカメだけである。第143図に骨格の各部位の名称を示した。脊椎の前端からは8個の頸椎が延びている。頭骨は第144図のような構造になっており、顎には歯がなく、角質の鞘に覆われてくちばしとなっている。各甲板には年輪が刻まれ、種によっては（例えばイシガメ）、骨板にも年輪が見られる。一番内側から0歳・1歳・・・と数えてゆけば良い。しかし実際には、年齢査定にはある程度の経験を要するし、老齢な個体では年輪が摩耗して消えていて年齢査定は不可能である。第153図はクサガメの骨格である。この写真から分かるように、骨格の基本構造はイシガメ



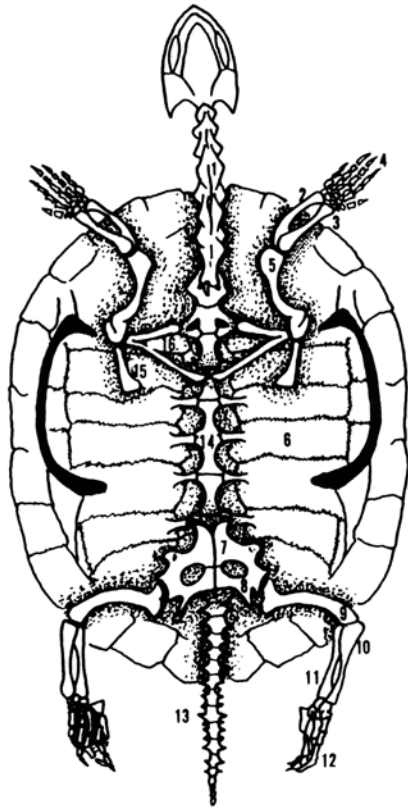
第141図 イシガメの背甲の骨板と  
甲板の構成

左の太い線が骨板の縫合線、右の実線と左の波線が甲板の境界線。1) 項甲板 nuchal scute 2) 縁甲板 marginal sc. 3) 臀甲板 supra-caudal sc. 4) 椎甲板 central sc. 5) 肋甲板 costal sc. 6) 項骨板 nuchal plate 7) 縁骨板 peripheral pl. 8) 臀骨板 pygal pl. 9) 椎骨板 neural pl. 10) 上臀骨板 suprapygal pl. 11) 肋骨板 costal pl.



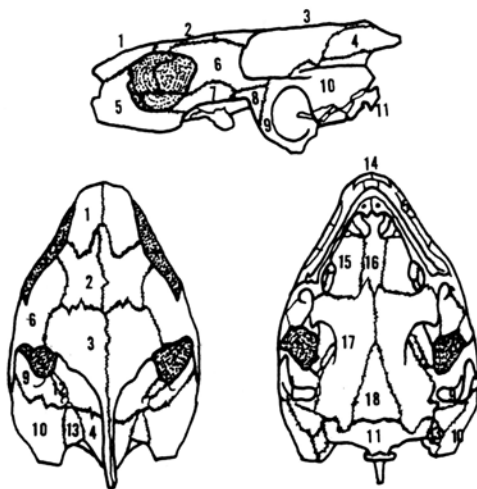
第142図 イシガメの腹甲の骨板と  
甲板の構成

左の太い線が骨板の縫合線、右の実線と左の波線が甲板の境界線。1) 咽甲板 gular scute 2) 肩甲板 humeral sc. 3) 胸甲板 pectoral sc. 4) 腹甲板 abdominal sc. 5) 股甲板 femoral sc. 6) 肛甲板 anal sc. 7) 腋下甲板 axillary sc. 8) 鼠蹊甲板 inguinal sc. 9) 上腹骨板 epiplastron 10) 内腹骨板 entoplastron 11) 中腹骨板 hyoplastron 12) 下腹骨板 hypoplastron 13) 剣腹骨板 xiphiplastron



第143図 イシガメの骨格

1) 頸椎 cervical vertebra 2) 橈骨 radius 3) 尺骨 ulna 4) 指骨 phalanx 5) 上腕骨 humerus 6) 肋骨板 7) 恥骨 pubis 8) 座骨 ischium 9) 大腿骨 femur 10) 脛骨 tibia 11) 腓骨 fibula 12) 趾骨 phalanx 13) 尾椎 caudal vertebra 14) 胸椎 thoracic vertebra 15) 前烏口骨 procoracoid 16) 肩甲骨 scapula



第144図 イシガメの頭骨

中村ら(1988)から転写した。上段：側面、左：背面、右：腹面。1) 前前頭骨 prefrontal bone 2) 前頭骨 frontal bone 3) 頭頂骨 parietal bone 4) 上後頭骨 supraoccipital bone 5) 上顎骨 maxilla 6) 後眼窩骨 post-orbital bone 7) 頬骨 jugal bone 8) 方形頬骨 quadratojugal bone 9) 方形骨 quadrate bone 10) 鱗状骨 squamosal bone 11) 基後頭骨 basioccipital bone 12) 前耳骨 prootic bone 13) 後耳骨 opisthotic bone 14) 前顎骨 premaxillae 15) 口蓋骨 palatine bone 16) 鋤骨 vomer 17) 翼状骨 pterygoid bone 18) 底蝶形骨 basisphenoid bone

と同じである。

スッポンはヌマガメとは形態がかなり異なっており、甲羅には甲板がなく、皮革状の皮膚に覆われている。第145図に示したように、背甲には縁骨板がなく、その後部では肋骨板が背中線上で接している。肋骨板には肋骨が突き出ている。腹甲もヌマガメほど完全ではなく中央部には間隙がある（第146図）。背甲と腹甲は靭帯組織で接合している。

## ② 各カメの分布と形態的特徴

以下に、縄文時代以降の遺跡から出土する可能性のある日本産のカメの分布と形態を紹介する。

### ・イシガメ *Mauremys japonica* (Temminck and Schlegel,1835)

本州・四国・九州とその属島に分布する日本固有の淡水棲のカメである。背甲には中央に1本のぶくて不連続な隆条がある。背甲後縁は鋸歯状であり、種の同定に役立つが、老齢になるにつれ摩擦してくる。後述のクサガメが平地の川や池沼に生息するのに対して、この種は山麓の池や溪流に見られる（第147図a）

### ・ミナミイシガメ *Mauremys mutica* (Cantor,1842)

石垣島・西表島・与那国島に分布する淡水棲のカメで、京都近辺にも見られるが、おそらく帰化したものであろう。国外では、台湾・中国中南部・海南島・インドシナ半島北部に分布している。若いときには背甲に3本の隆条が見られるが、歳をとるにつれてそれらは消えてゆき、甲羅はイシガメに比べて非常に滑らかになる。オスの腹甲は中央がひどく凹む。（第147図b）

### ・クサガメ *Chinemys reevesii* (Gray,1831)

本州・四国・九州とその属島に分布する淡水棲のカメで、国外では朝鮮半島・中国東部・台湾に分布している。背甲に3本のはっきりした隆条がある。甲板の境界には黄色い線が走っており、首の横にも黄色い模様があるが、老齢なオスは黒化し、黄色い模様は消える。（第147図c）

### ・セマルハコガメ *Cuora flavomarginata evelynae* (Ernst and Lovich,1990)

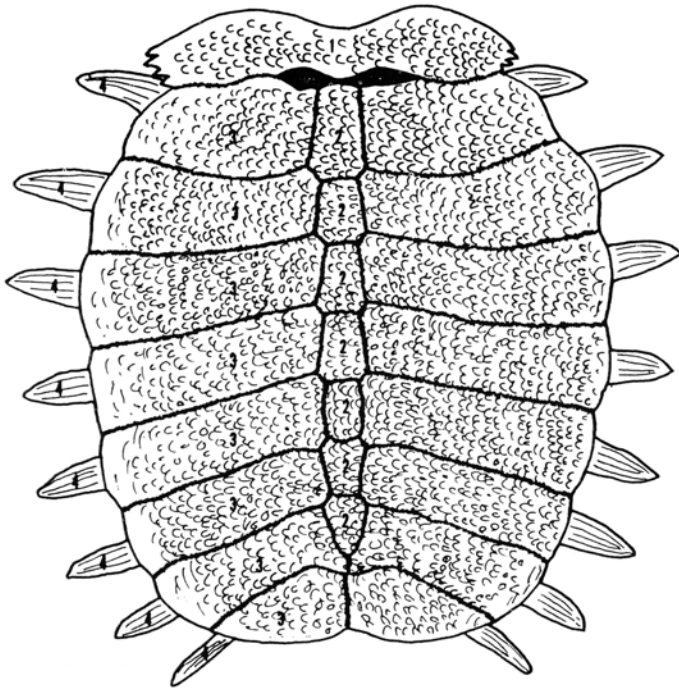
石垣島・西表島に分布する。1990年に*Cuora flavomarginata*（中国南部・台湾に分布）から独立した（Ernst & Lovich,1990）が、現在では亜種とされている（McCord and Inverson, 1991）。胸骨板と腹骨板との間が蝶番になっており、ここで腹甲を折り曲げて甲を閉じ、頭・肢・尾を完全に隠すことができる。胸骨板と腹骨板との側縁は橋を形成せず、靭帯組織のみで背甲に結ばれている。背甲は高く、ドーム状で、不明瞭な3本の隆条がある。普通は腋下甲板も鼠蹊甲板もない。水にはあまり入らず、森林やその周辺などの湿った場所に生息している。（第147図d）

### ・リュウキュウヤマガメ *Geoemyda spengleri japonica* (Fan,1931)

沖縄本島・渡嘉敷島・久米島に分布する。中国南部から東南アジアにかけて分布する *Geoemyda spengleri* の亜種とされているが、独立した種として扱うのが適当であるとの報告（安川・太田, 1991）もある。背甲の前縁も後縁も鋸歯状であるが、特に後縁が顕著である。背甲にははっきりした3本の隆条がある。腋下甲板は小さく、鼠蹊甲板は原則として欠如している。あまり水に入らず森林の湿った場所に生息している。（第147図e）

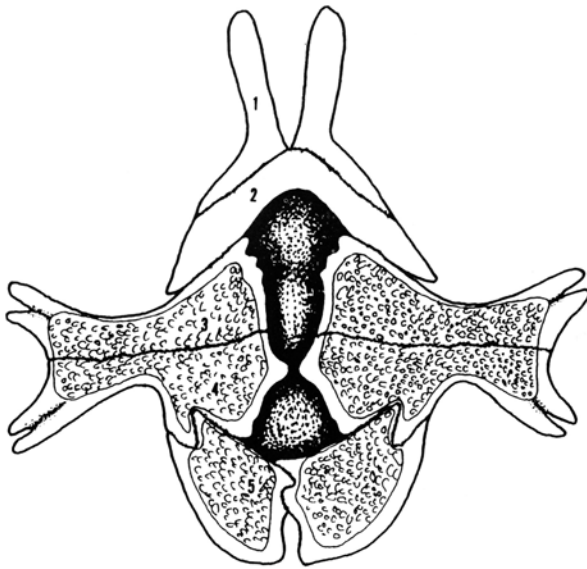
### ・スッポン *Pelodiscus sinensis* (Wiegmann,1835)

本州・四国・九州・壱岐・石垣島・西表島・与那国島などに分布しているが、土着か移入かがはっ



第145図 スポンの背甲

Ogushi(1911)から転写した。1)項骨板 2)椎骨板 3)肋骨板 4)肋骨rib



第146図 スポンの腹甲

Ogushi(1911)から転写した。1)上腹骨板 2)内腹骨板 3)中腹骨板 4)下腹骨板 5)剣腹骨板

きりしない地域もある。国外ではモンゴル・朝鮮・台湾・中国・海南島・インドシナ北部に分布する。ヌマガメよりも食用にされ易い種で、自然死のものでないと考えられる保存状態の良い遺体の出土例もある（東京都教育委員会、1975）。（第147図 f）

カメの出土場所と形態を上記の説明に照らし合わせてみれば、よほど特殊な事情のないかぎり、種の同定は比較的容易である。

### 分析結果と考察

カメの遺体は、清洲城下町遺跡の井戸跡（SE28）から出土した。井戸は木枠を伴う形態である（第148図 a）。

カメの遺体が出土したのは、井戸の遺構面から約50cmの深さのところであった。遺体は8体で、第148図 bに見られるように、折り重なったり腹甲を上にしていたものがあった。自然状態でカメが死亡した場合、このように折り重なったりひっくり返っていたりすることは非常にまれである。また、野性のカメが井戸枠を越えて井戸の中に入るといっても考え難い。このほか、この井戸からは、哺乳類の肩甲骨と思われる骨が1個出土している。

出土したカメの遺体の甲羅を第149～151図に示す。背甲後縁は、擦り減っていながらも鋸歯状を呈しているのが認められ、背甲に明瞭な隆条が見られなかったので、8体すべてがイシガメであると同定できた。また、各遺体の年齢に対する甲羅の大きさは、それらがすべてメスであることを示していた。甲羅の状況は表1に示したとおりで、甲長は平均 179mm（個体数=8，標準偏差23.1，最大値 205mm，最小値 127mm）、腹甲長は平均 163mm（個体数=8，標準偏差21.7，最大値 186mm，最小値 114mm）であり、Yabe（1989）が調査対象とした個体群を基準とすれば、甲長 127mmの個体以外はメスの中でも大型の個体であると言える。骨板に残った年輪の跡から、8体のうち甲羅8の個体は6歳、甲羅7の個体は8歳であると断定され、甲羅1～6は、甲羅の摩耗の程度および老化に伴う甲羅の変形から老齢な個体であると判断された。背甲と腹甲の接続部位（「橋 Bridge」という）が充分観察できる甲羅1～6では橋を切断された甲羅はなく、甲羅7も観察可能な部分を見るかぎり橋を切断された様子はなかった。カメを食用にするときには橋を切断して腹甲を外す場合が多いので、本報告におけるイシガメは食用ではなかったと考えられる。甲羅以外の骨格の出土状況は第4表のとおりであり、写真6に骨格のいくつかを示す。第4表によれば、脊椎や四肢の肩帯や腰帯の主な骨はいずれも数個体分ずつ出土しているが、頭骨は1個体分しか出土していない。その頭骨の保存状況が比較的良好なこと、および遺体の年代や甲羅の保存状態が本報告書のイシガメに比較的似ていると判断できる他の遺跡出土のスッポンでも頭骨の保存状態が非常に良好なこと（東京都教育委員会、1975）を考えると、頭骨が1個体分しか出土しないことは非常に不自然である。出土した頸椎の観察によれば、刃物などで傷つけられた痕のあるものは見つからなかったため、人為的に首を切り落としたと断定することはできないが、可能性は捨てきれないと思われる。

以上から、清洲城下町遺跡から出土したイシガメは、大きな個体（イシガメでは必然的にメスの老齢な個体となる）が選択されて人為的に井戸に投下されたと考えられることができる。また、出土状況から、死亡後投下された可能性が高く、死亡要因としては首を切断された可能性がある。



ところで、清洲を含む濃尾平野西部は、地勢的にはクサガメが分布していてもおかしくない地域である。クサガメのメスは、イシガメのメスに比べてひとまわり（甲長にして数cm、体重にすれば約1.5倍）大きくなるので、単に大きなカメを選ぶのであれば、クサガメのメスの方が適している。にも関わらずイシガメのメスばかりが出土したのには、次のような可能性が考えられる。一つは、当時この地域ではクサガメの生息密度が低かったか、あるいは分布していなかったという可能性である。他の可能性としては、当時の人は、イシガメとクサガメとを区別しており、イシガメを選択的に利用したことが考えられる。時代はやや新しいが、『和漢三才図会』では13種のカメを認識しているので、当時の人がカメには何種類かあり、イシガメとクサガメを区別していたことは十分に考えられる。これら2つの場合においては、少なくともイシガメは、特定の条件の個体を集めるのに十分なほど生息していたのであろう。また他の可能性として、現在でもイシガメが非常に多く生息する、木曾三川を隔てた北伊勢～西美濃地方から移入したことも考えられる。

#### 〔謝 辞〕

クサガメの骨格をお借りした三重県立博物館、カメの骨格に関してご教示いただいた帝京技術科学大学の平山廉博士、リュウキュウヤマガメの写真を提供して下さった京都大学の安川雄一郎氏、スッポンの撮影に協力して下さった千葉県松戸市の後藤潤一郎氏、カメの分布について重要な情報をいただいた愛知県佐織町の村上光男氏に深く感謝いたします。 (矢部 隆)

#### 〔引用文献〕

- 東京都教育委員会. 1975. 青戸・葛西城址調査報告書Ⅲ.  
金子浩昌・丹羽百合子. 「動物遺存体と考古学」. 1985. 季刊考古学(雄山閣出版)No11: pp14-16.  
中村健児・疋田努・松井正文. 1988. 動物系統分類学第9巻下B1爬虫類I. 中山書店  
安川雄一郎・太田英利. 1991. リュウキュウヤマガメの分類学的地位の再評価(講演要旨). 爬虫両棲類学雑誌 14(2): pp82.  
寺島良安. 1712. 和漢三才図会.  
Ernst, C.H. & J.F. Lovich. 1990. A New Species of *Cuora* (Reptilia: Testudines: Emydidae) from the Ryukyu Island. Proceedings of the Biological Society of Washington 103 (1): 26-34.  
McCord, W.P. & J.B. Iverson. 1991. A new Box Turtle of the Genus *Cuora* (Testudines: Emydidae) with Taxonomic Notes and a Key to the Species. Herpetologica 47 (4): 407-420.  
Ogushi, K. 1911. Anatomische Studien an der Japanischen dreikralligen Lippenschildkrote (*Trionyx japonicus*). Morpholog. Jahrduch 43: 1-106.  
Yabe, T. 1989. Population Structure and Growth of the Japanese Pond Turtle, *Mauremys japonica*. Japanese Journal of Herpetology 13 (1): 7-9

\*カメに関する参考文献としては、中村・疋田・松井(1988)のほか、原色日本両生爬虫類図鑑(中村・上野著, 保育社, 1963)、原色両生爬虫類(千石編, 家の光協会, 1979)、脊椎動物のからだ(ローマー・パーソンズ著, 平光訳, 法政大学出版局, 1983(原著第5版は1977)), Encyclopedia of Turtles (Pritchard, P.C.H., T.F.H. Publications, 1979)、Turtles of the World (Ernst, C.H. and R.W.Barbour, Smithsonian Institution Press, 1989)が有用である。

第3表 イシガメ出土骨の甲羅の状況

甲羅の番号	甲長 (mm)	腹甲長 (mm)	年齢	備考
1	190	175	老齡	骨板には年輪が見られない。 第4・5椎甲板と右第4肋甲板に当たる場所が4甲板に分かれている(奇形)。(注2)
2	187	170	老齡	骨板には年輪が見られない。
3	205	186	老齡	骨板には年輪が見られない。 背甲右肩部破損。
4	197	178	老齡	骨板には年輪が見られない。右第1縁骨板・右第11縁骨板・右第1肋骨板・第6椎骨板・内腹骨板が欠損。
5	175	166	老齡	年輪が7本確認できる。縁骨板・椎骨板に欠損がある。甲羅の腹部ではなく胸部が最大幅になっていることが、老齡であることを示している。
6	186	171	老齡	左剣腹骨板と背甲後部が欠損。 甲長は腹甲長から推定。
7	161	144	8	左剣腹骨板と背甲の臀部・右部とが欠損。 年齢は7歳の可能性もある。甲長は腹甲長から推定。
8	127	114	6	腹甲下部と背甲の一部のみ。 甲長と腹甲長は肛甲板と股甲板から推定。

注1) 甲羅の番号は写真の番号と対応している。

注2) 甲板の境界が変化するような奇形は時々見られるもので、生命に関わるようなことではない。

注3) 甲長・腹甲長は復元した甲羅の測定値。

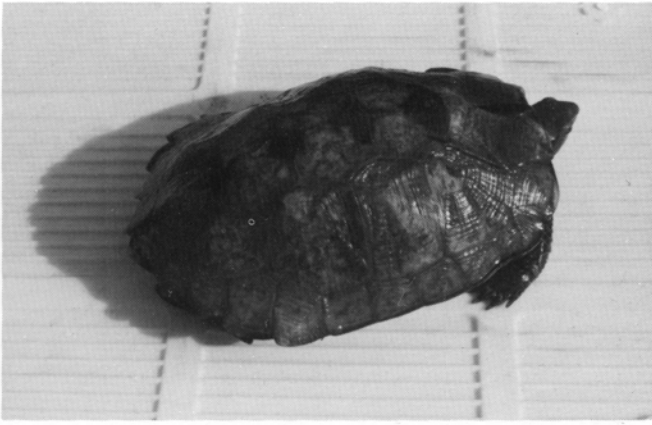
第4表 イシガメ出土骨の各部位の状況（甲羅を除く）

部 位	左 右	大きさ (mm)	備 考	部 位	左 右	大きさ (mm)	備 考
頭 骨			右鼻骨・右前頭骨・左右頭頂骨・後頭骨、左右頭頂骨以外はすべて破損箇所あり	桡 骨	右	23.7	
				尺 骨 1	右	21.8	尺骨1と尺骨2は同一個体のものである可能性あり
口 蓋 骨	右		破損箇所あり	尺 骨 2	左	21.6	
口蓋骨の一部	左		破片2個	尺 骨 3	左	17.4	
頸 椎 1		11.3	第2～7頸椎4個、第8頸椎1個、大きさは第8頸椎の最大幅	骨 盤 1	右		腸骨骨端破損
	左				49.5	大きさは恥骨骨端と腸骨骨端との最大距離	
頸 椎 2		11.4	第2～7頸椎6個、第8頸椎1個	骨 盤 2	右	47.7	腸骨骨端やや破損
	左				47.7		
頸 椎 3		13.0	第2～7頸椎5個、第8頸椎1個	骨 盤 3	右		破片
	左				53.0		
頸 椎 4			第2～7頸椎4個、第8頸椎1個、第8頸椎は破損している	骨 盤 4			破片
頸 椎 5			3個の破片	仙肋骨1	右	14.4	大きさは腸骨との接触面から椎骨との接触面までの最大幅、骨端やや破損
	舌 骨	?			19.5	左	
肩 甲 骨 1	右	39.7		仙肋骨2	右	13.3	骨端やや破損
	左	39.3			左	13.2	
肩 甲 骨 2	右	42.2	ひび割れあり	仙肋骨3	右	12.6	
	左	42.0			左	12.2	
肩 甲 骨 3	右	40.9		大腿骨1	右	44.6	
	左	40.5			左	44.7	
肩 甲 骨 4	右	32.4		大腿骨2	右	44.7	
	左	32.7			左	45.0	
肩 甲 骨 5	左		破片	大腿骨3	右	45.0	
前烏口骨1	右	30.9	骨端がやや破損	大腿骨4	右	47.5	ひび割れあり
	左	30.7	骨端がやや破損	脛 骨 1	右	31.9	
前烏口骨2	右	30.5		脛 骨 2	左	31.8	
	左	30.9		脛 骨 3	左	32.6	
前烏口骨3	右	32.3	骨端がやや破損	脛 骨 4	左	30.4	骨端やや破損
	左	32.4	骨端がやや破損、ひび割れあり	腓 骨 1	右	31.4	
前烏口骨4	右	24.2		腓 骨 2	左	31.2	
	左			腓 骨 3	右	30.8	
上 腕 骨 1	右	37.7		尾 椎 1			11個
	左	37.7		尾 椎 2			8個
上 腕 骨 2	右	38.4		尾 椎 3			7個
	左	37.6		尾 椎 4			4個
上 腕 骨 3	右	36.3	ひび割れあり	尾 椎 5			2個
	左	36.4					
上 腕 骨 4	左	38.3	大きさは上腕骨2右と近いが、それと対ではない	四 股 骨 の 破 片 ・ 骨 片			20個
				脊 椎 の 破 片 ・ 骨 片			
上 腕 骨 5	左	31.0		そ の 他			5個
上 腕 骨 6	右		破片				

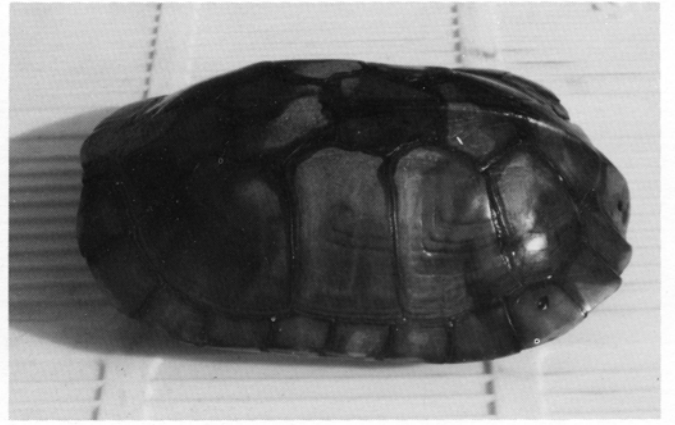
注1) 部位の番号は一個体分であることを示しているだけで、同じ番号が同一の個体を示しているのではない。また甲羅の番号とも対応していない。

注2) ことわり書きのない限り、大きさは骨端から骨端までの直線距離。

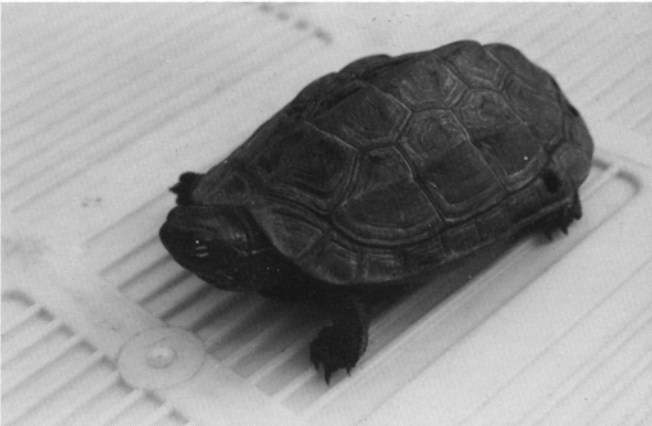
注3) 骨盤は恥骨・座骨・腸骨の癒合したものの。



(a)



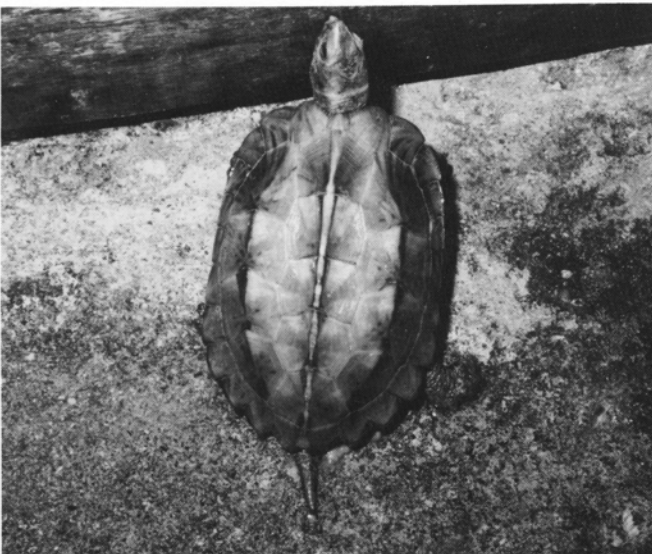
(b)



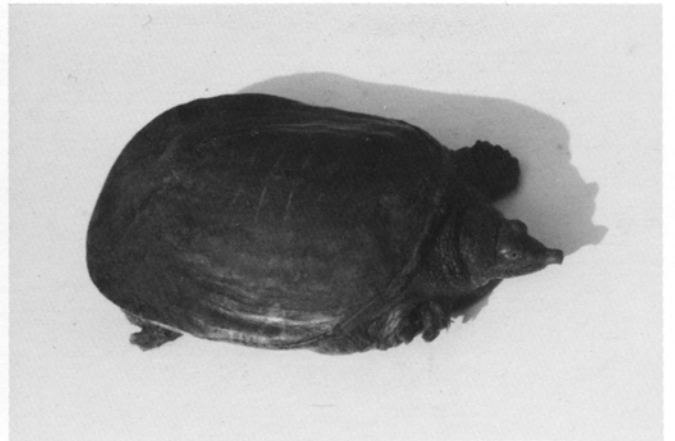
(c)



(d)



(e)



(f)

第147図 日本産のカメ (a) イシガメ (b) ミナミイシガメ (c) クサガメ (d) セマルハコガメ  
(e) リュウキュウヤマガメ (f) スッポン



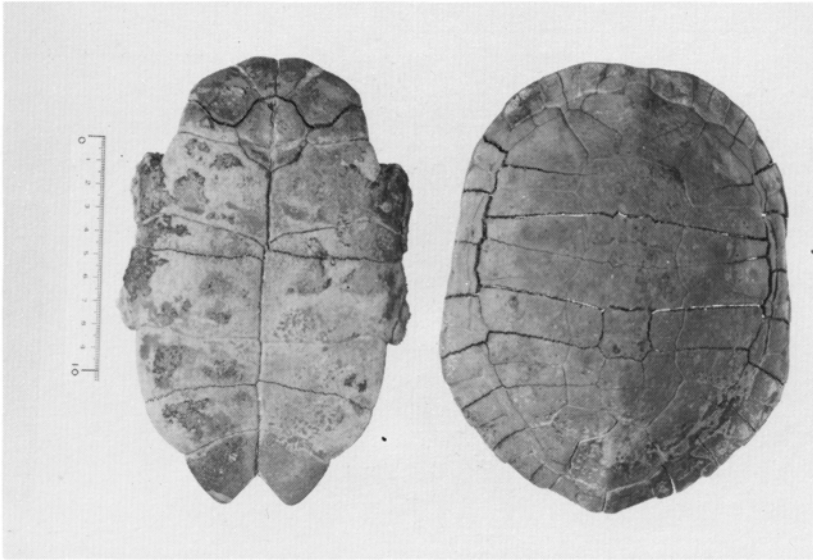
( a )  
SE28全景



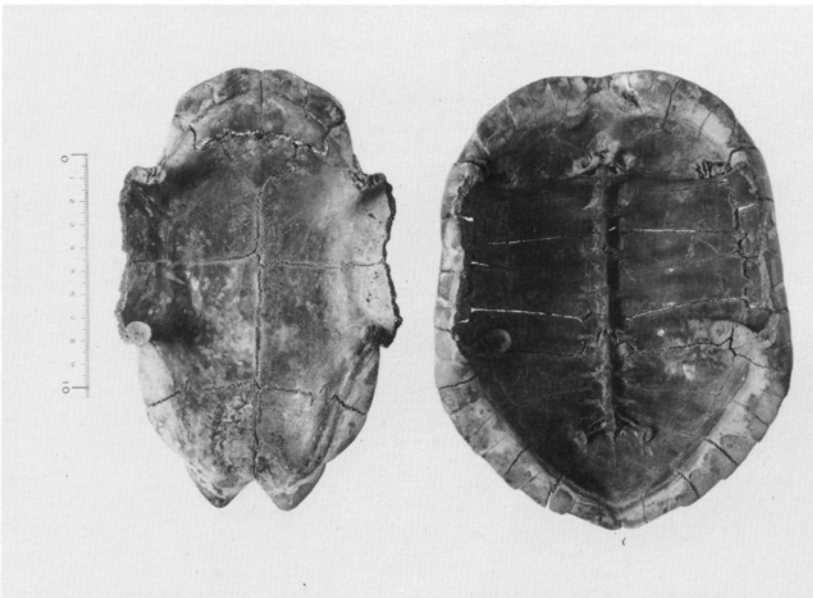
( b )  
SE28  
井戸枠内カメ出土状態

第148図 カメ出土状態

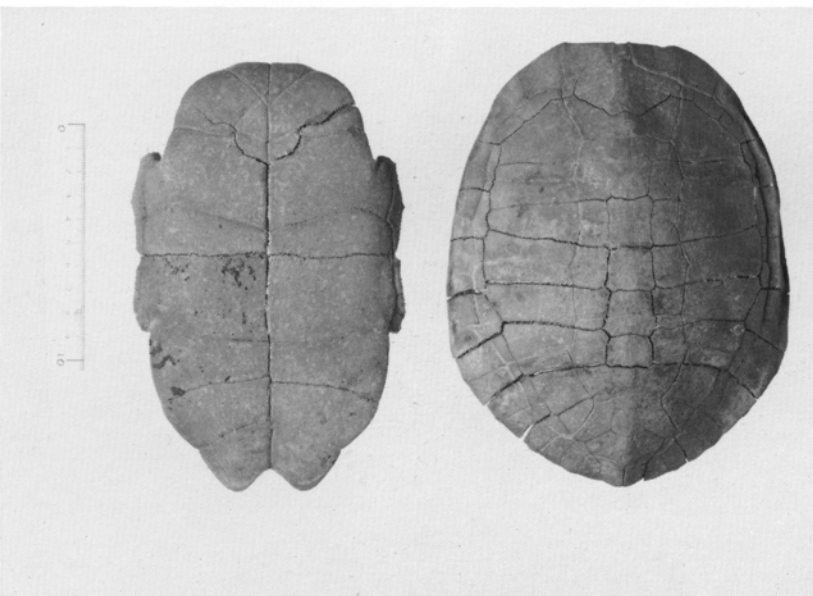
出土したイシガメの  
甲羅の写真



(a) 甲羅1 外側より



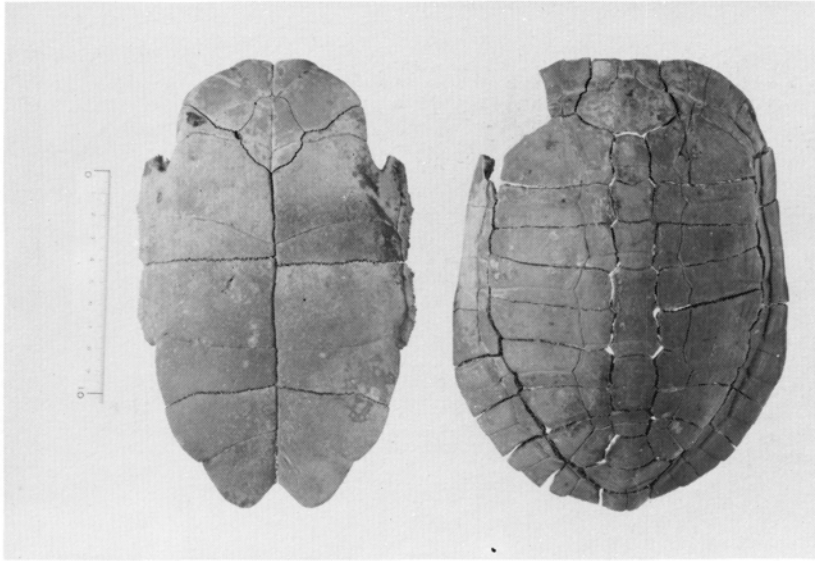
(b) 甲羅1 内側より



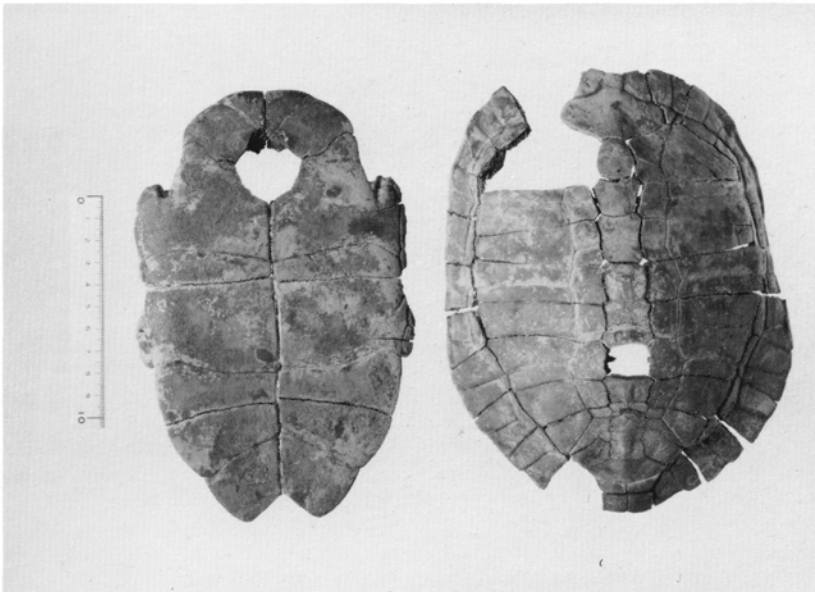
(c) 甲羅2

第149図 出土したイシガメの甲羅 (1)

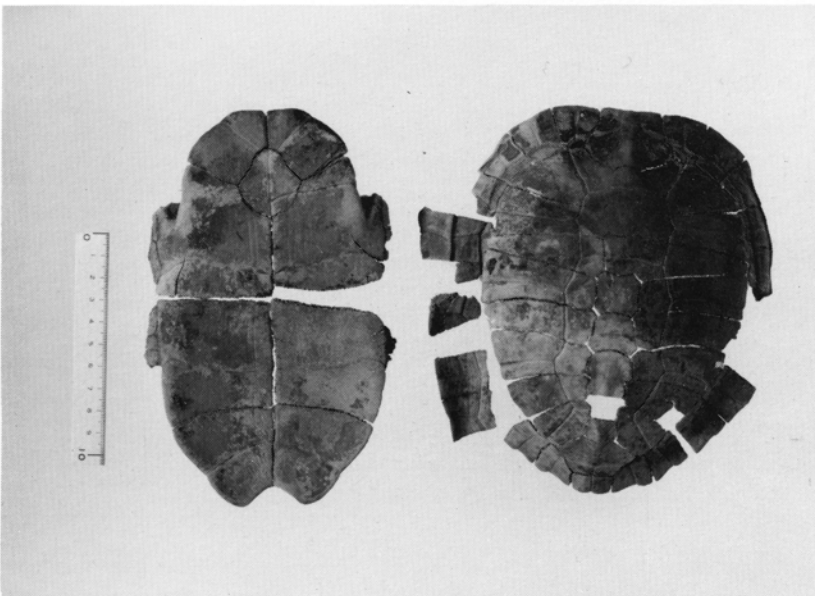
出土したイシガメの  
甲羅の写真



(d) 甲羅3



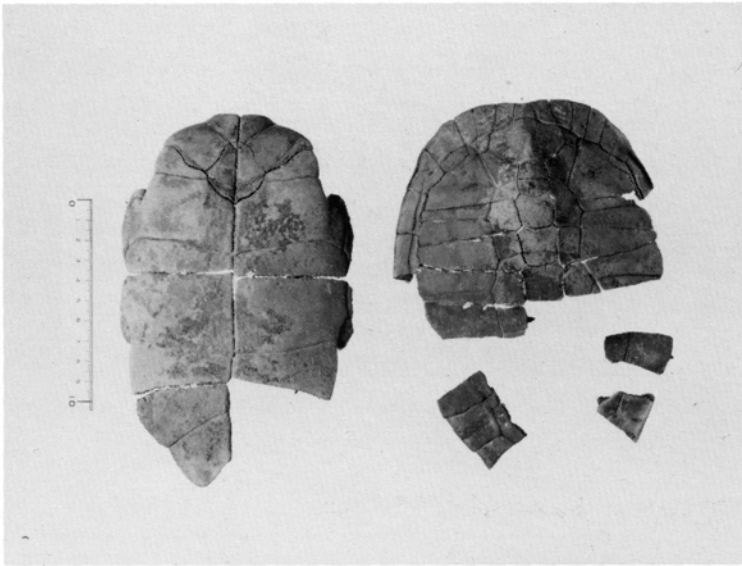
(e) 甲羅4



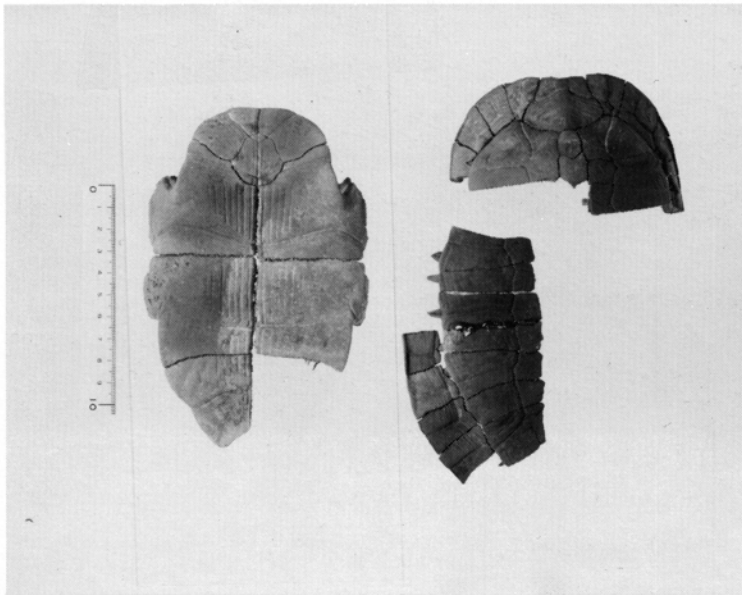
(f) 甲羅5

第150図 出土したイシガメの甲羅 (2)

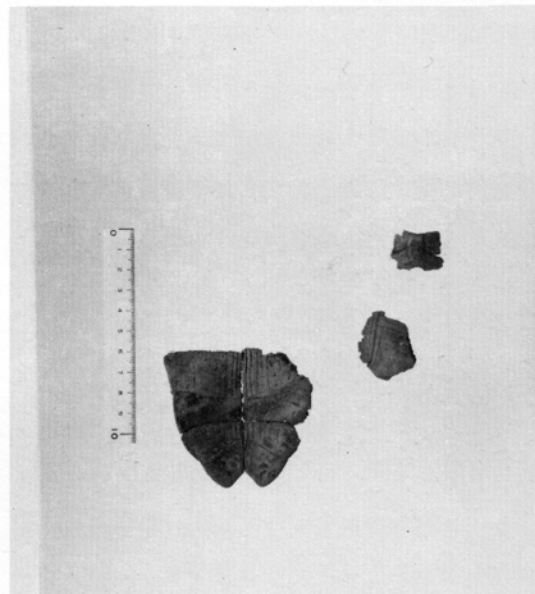
出土したイシガメの  
甲羅の写真



(g) 甲羅 6



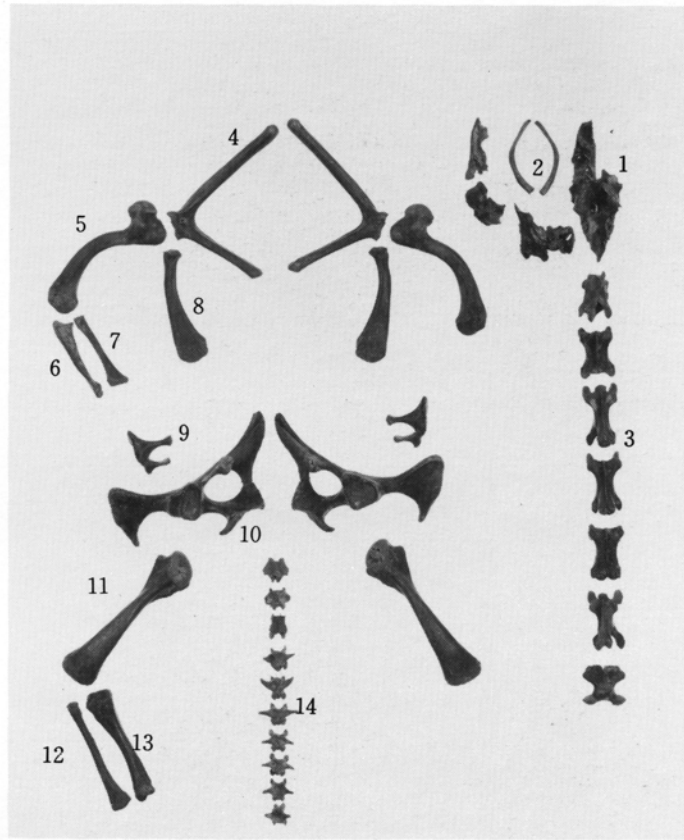
(h) 甲羅 7



(i) 甲羅 8

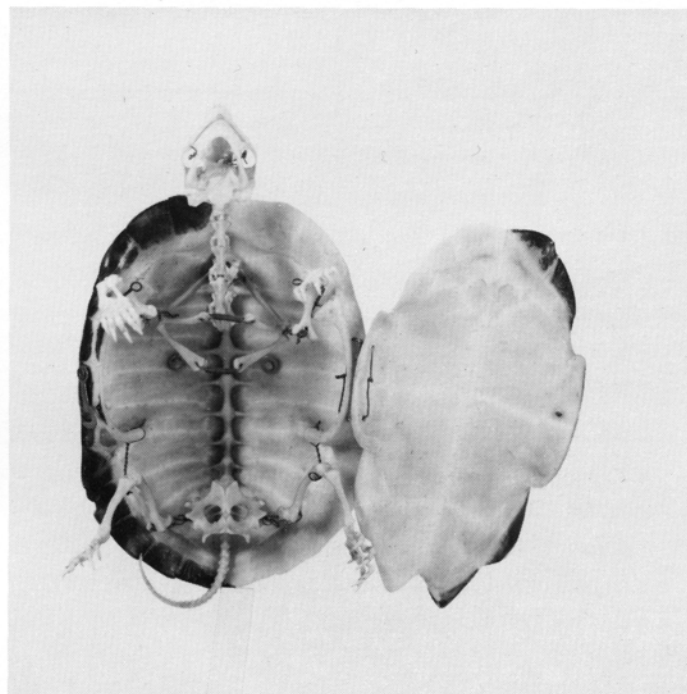
第151図 出土したイシガメの甲羅 (3)





第152図 甲羅以外の骨格

写真の左側が遺体にとっての右側になる。1)頭骨 cranial bones, 2)舌骨 hyoid apparatus, 3)頸椎, 4)肩甲骨, 5)上腕骨, 6)尺骨, 7)橈骨, 8)前烏口骨, 9)仙部肋骨 sacral rib, 10)骨盤部 epiphyses, 11)大腿骨, 12)腓骨, 13)脛骨, 14)尾椎



第153図 クサガメの骨格

## 第2節 清洲城下町遺跡で見られた地震痕

### —— 砂脈の方向性に関する一考察 ——

#### 1. はじめに

近年、近畿地方を中心とした地殻変動の活発な地域での遺跡の発掘調査において、歴史地震の痕跡が数多く発見されるようになった。このような地震の痕跡（以下、地震痕と記す）は地震による地層の変形（地割れ・断層など）という物理学的な現象を地層中にとどめるだけでなく、地震発生当時の人間社会におよぼした被害状況を推定するうえでも重要な証拠となる。また、地震という極めて短時間に起こる現象が地層中に記録されるため正確な時間軸の設定という考古学的にも利用価値の高い情報を提供することになる。

愛知県においても、森・鈴木（1989）により西春日井郡清洲町の清洲城下町遺跡（昭和63年度調査分）における天正地震（1586年発生）および濃尾地震（1891年発生）の地震痕が、伊藤（1991）により一宮市大和町の山中遺跡における濃尾地震の地震痕が報告されている。これらの成果をふまえたうえで、小論では、昭和59年度～昭和61年度に発掘調査が行われ、当時まだ地震痕という認識がなかった清洲城下町遺跡および朝日西遺跡の空撮写真をもとにした地震痕（おもに砂脈）の推定とその方向性について検討を試みる。

#### 2. 空撮写真からの地震痕の推定

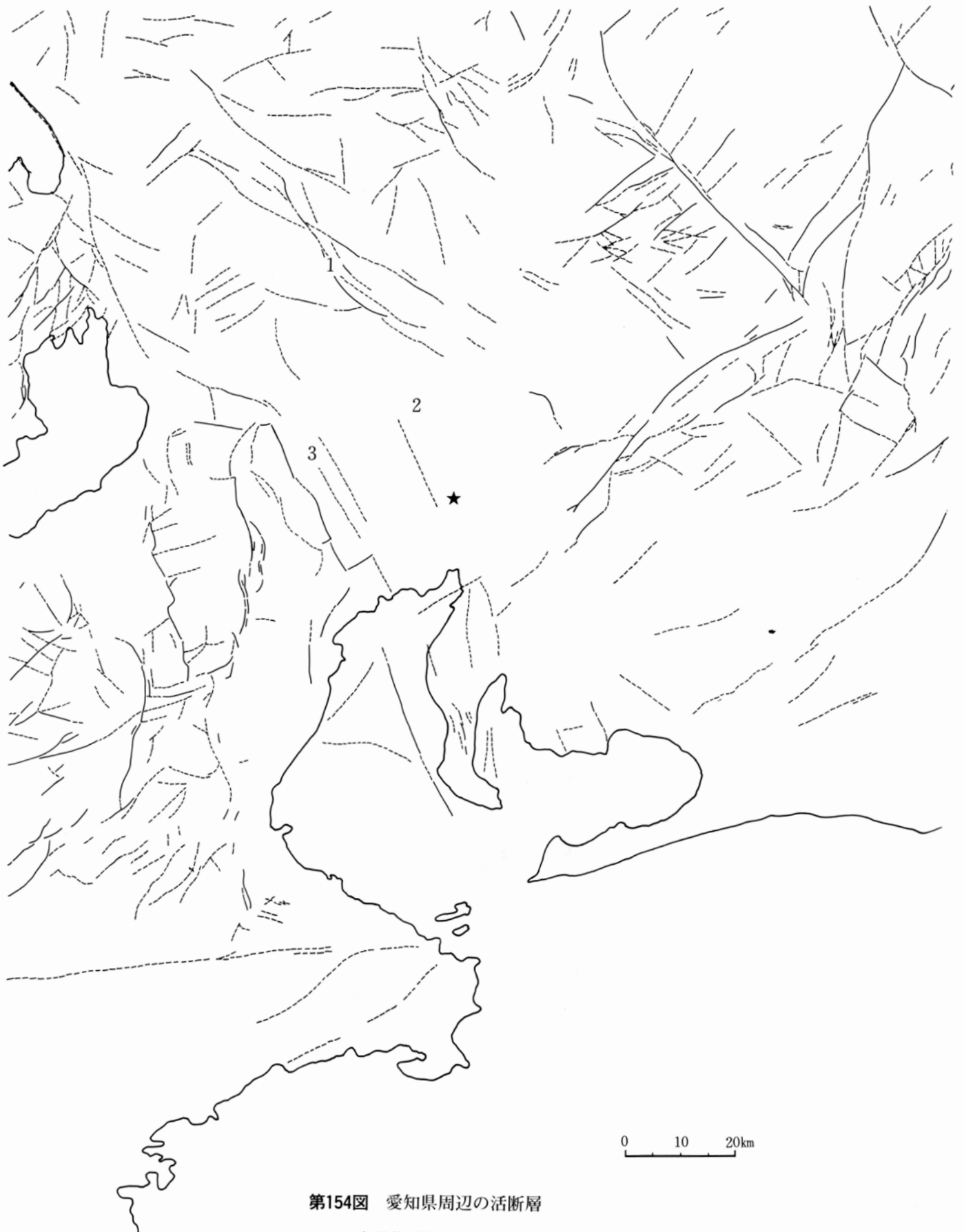
調査地域は五条川左岸の自然堤防およびその後背湿地上に位置する。この関係は、調査区内の遺構の基盤層が淡黄褐色シルト層である区域と灰色砂層である区域に分かれる（財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1986）ことから確認できる。このような構成層の違いは空撮写真（白黒写真）の上でも識別が可能である。すなわち、灰色砂層は、層厚が厚いため上層部では保水力が弱く、水分の蒸発により写真上で白色を呈するのに対し、淡黄褐色シルト層は保水力が強く、写真上で暗色を呈するためである。

この地域で確認、報告されている地震痕は、砂の液状化による噴水状の噴砂と、地割れを伴う噴砂（砂脈）が一般的な型であり、特にシルト層をつき破って旧地表面に達している噴砂は、前記の堆積物の写真上の特性により空撮写真上での確認が可能となる。（しかし、噴水状の噴砂の砂と砂堆の砂との区別は写真上からは難しいためこの報告では砂脈のみを扱うことにする。）

砂脈は図版2～10でみられるように白い傷状のリニアメントとして観察されるため、ともするとフィルム面の傷、あるいは焼付けの際に入った傷を誤認する可能性もある。そのため、2カット以上の写真に共通して確認できたもののみを砂脈と認定した。

#### 3. 砂脈の方向性

調査地域は、活断層の分布図（第154図）から見ると濃尾地震を起こした根尾谷断層の延長とされる「岐阜—一宮線」（活断層研究会、1980）の上に位置している。このことが砂脈の形成に大きな意



第154図 愛知県周辺の活断層

1：根尾谷断層 2：岐阜—宮線 3：養老断層 ★は清洲城下町遺跡

味をもつとすれば、その砂脈の方向性に規則性が見いだされるのではないかと推測される。そこで、空撮写真上で観察された砂脈の方向性を5°刻みで分類し第155図のように各調査区ごとに整理した。

この図を見る限り、砂脈の方向性には2つのピークがあるように思われる。1つはN30-50°W方向、もう1つはN10-20°E方向のものである。この2つの方向性にはどのような意味があるのだろうか。

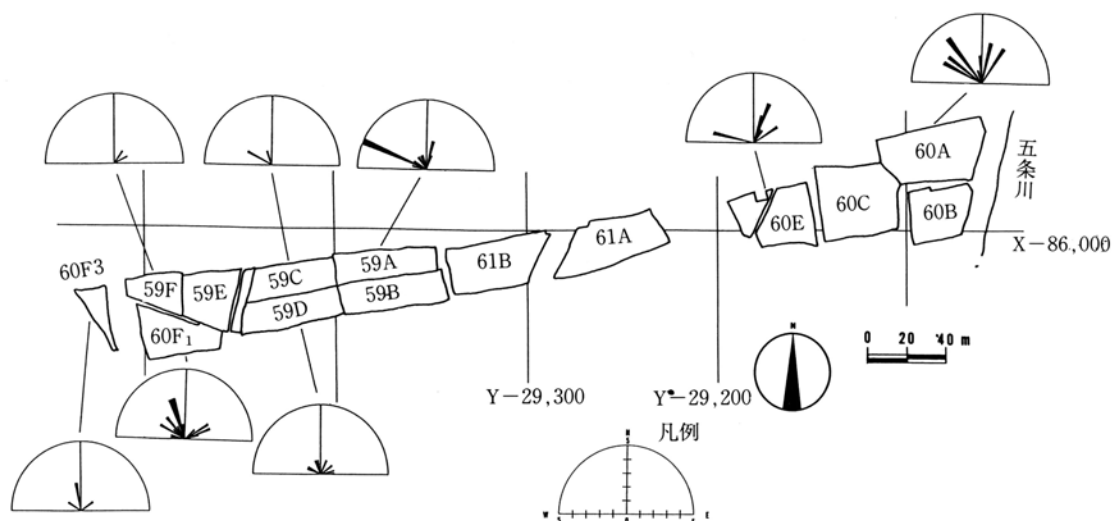
① N30-50°W方向の砂脈

調査地域周辺で噴砂を起こした可能性のある地震として、森・鈴木(1989)は天正地震(1856)と濃尾地震(1891)の2つをあげている。調査地域は、「岐阜-宮線」(N30°W方向)上に位置するためこの影響を受けることは避けられないであろう。森・鈴木(1989)の報告においても濃尾地震の砂脈はN30°Wの方向性を持つことが指摘されており、第147図におけるN30-50°Wのピークは濃尾地震の砂脈の方向性を示していると考えてもさしつかえないであろう。

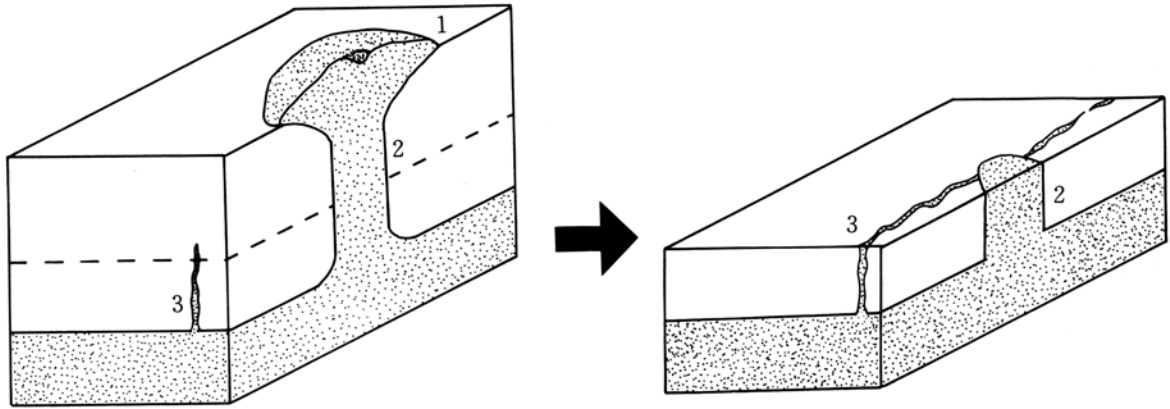
② N10-20°E方向の砂脈

第147図では「岐阜-宮線」などの断層方向とは別の方向性を持つ砂脈が確認できる。これらの方向の砂脈は①のN30-50°W方向の地割れとの共役関係が認められないので、ここでは濃尾地震による砂脈とは別のものとして考えることにする。

筆者は、平成3年度の清洲城下町遺跡の発掘調査において、天正地震による噴砂を立体的に観察する機会を得た(『清洲城下町遺跡Ⅳ』にて報告予定)。第156図はその模式図であるが、天正地震の噴砂はほとんどが噴水状の噴砂で、旧地表面付近では噴砂丘(噴砂により吹き出した砂が丘状に盛り上がった部分)は見られるが、砂脈は見いだせない。しかし、旧地表面を掘り下げると砂道(噴水状噴砂で砂の吹き出す筒状の部分)周辺に砂脈が観察されるようになる。この砂脈は、液状化した砂の圧力によって生ずるもので、1箇所でも噴き出し口ができることにより圧力が解放され、地表まで達する砂脈になり得なかったものと考えられる。



第155図 清洲城下町遺跡における砂脈の方向性



第156図 清洲城下町遺跡（91A区）で観察された噴砂模式図

1：噴砂丘 2：砂道 3：砂脈

このように考えると、その方向性には大きな意味があるとは考えにくいですが、平成3年度調査ではN-S方向の砂脈が目立った。従って、他の方向の砂脈も含め下面のものは天正地震の吹き上げ直前にできた砂脈の可能性が高い。

#### 4. 今後の課題

今回の報告では砂脈の方向性について検討を試みたが、まだ断層活動や噴砂発生メカニズムなどの結び付きについて結論を出せる段階には到達していない。しかしながら、広域的な断層運動の影響を受けている地震痕が存在していることは明かである。特に砂脈の方向性についての問題は数多くのデータを統計的に処理することにより解明される部分が多いと考えられるので、今後はデータの蓄積が重要な課題となろう。

幸か不幸か濃尾平野地域は軟弱な地盤を有するために古くからの地震災害の記録が文献中にも数多く記録されている。また、発掘調査においても複数の歴史地震の地震痕の発見が増加しつつある。考古学的資料と併せて歴史地震のメカニズムを考察することにより、濃尾平野の地震災害史を構成することが可能となろう。

(服部俊之)

#### 文 献

- 伊藤隆彦（1991）：愛知県山中遺跡から発見された地震痕。名古屋地学、53、31-35。  
 梅本博志（1986）：清洲城下町遺跡。財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報（昭和60年度版）、10-13。  
 森 勇一・鈴木正貴（1989）：愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義。活断層研究、7、63-69。

## 第V章 ま と め

名古屋環状2号線建設事業に伴う清洲城下町遺跡の発掘調査は、延べにして4か年、調査面積は計17,231㎡に及んだ。その内容は、以上に述べてきた通りであるが、複数の時代の遺構が複雑に交錯し、遺跡全体のイメージを掴むことはなかなか容易なことではない。本遺跡については、ことさら清須城とその城下町の時代のみがクローズ・アップされ過ぎてきた嫌いがあるが、本章では、調査によって明らかとなった3時期、すなわち、中世（13-14世紀）、城下町期前期（15世紀後半-16世紀後半）、城下町期後期（16世紀末期-17世紀初頭）に区分して遺跡の動向を概略的にまとめておきたい。

### 中 世

調査区中央に、南北方向に走る旧河床と考えられる後背湿地があり、集落はその左右両側に展開する自然堤防状微高地の上に営まれている。掘立柱建物2棟（SB05・06）が東側の微高地上で検出されたにとどまり、少なくともこの時期、当該地点では、中世集落は密なる状況ではなかったことを示している。しかもそれらの建物遺構が東側の自然堤防上から発見されたことは、この集落が五条川を挟んで東側に広がっている西春日井郡清洲町朝日西遺跡（本センター調査報告書第28集 1992）と一連のものであり、その西端付近に相当していることを伺わせる。溝、井戸などと関連させても、屋敷地の区割り、その相互関係はつかみえなかった。

出土遺物には、土師器皿、山茶碗類、施釉陶器、焼き締め陶器、龍泉窯系青磁、白磁、加工円盤などがあるが、その多くを山茶碗類が占めている。山茶碗類は常滑、瀬戸、美濃窯産のものからなり、中でも美濃産の山茶碗類が最も多く、商品取り引きの一端を示している。また、井戸 SE31・33 から出土した山茶碗に「あこ」と墨書された資料が2点あり、「あこ」が水夫を意味していることから、海上交通を利用した物流・交易があったことも伺わせていて、興味を持たせる。

### 城下町期前期

尾張守護所が中島郡下津（稲沢市）の地から清須に移った文明10年（1478）以降、天正の大地震が起こった天正13年（1586）までを城下町期前期としてとらえている。当該地では、依然として中世的な土地形状が存続し、主として東西二つの自然堤防の上に屋敷地が営まれている。しかし、この時期になると、集落は西の自然堤防上に発達し始め、SD18 や SD19 に代表されるように、屋敷地は溝で囲まれるようになる。道路に沿って短冊型地割りの屋敷が立ち並ぶ一本街村状の景観を見せ始め、一方東側の自然堤防上には御園神社の前に続く町屋と思しき建物遺構群が展開してくる。しかし、この時期を100年近く取っているため、これらの遺構が厳密な意味で城下町形成のどの時期に相当するのか、判然としていないところも多い。

城下町期前期の遺物としては、瀬戸・美濃窯編年の窖窯Ⅳ期から大窯Ⅲ期のものまでがみられ、瀬戸・美濃窯産天目茶碗、平碗、皿、三足盤、卸し皿、香炉、四耳壺、播鉢、土師器の皿、鍋、釜、常滑窯甕、壺、青磁碗、皿・白磁碗、皿、青花などがある。瀬戸・美濃窯産の製品が圧倒的に多く、中

国陶磁器類の占める割合が堺などと比べて低いのは、その生産地に近いという地域的特色の反映である。

### 城下町期後期

天正13年以降を城下町期後期してとらえている。天正大地震後、清須城下町の再整備が実施されたと考えられており、これを城下町形成の画期としているのである。また、清須城とその城下町の遺構の概略については、清須越しの後の江戸時代前期に描かれた絵図に示されていて、方法論的には検出遺構をそれと照合することによって検証していくことも可能となっている。

この時期、旧川床跡とみられていた沼沢地はすべて埋めつくされ、大規模な整地地業が展開されている。城下町期前期にみられた一本街村状の町屋は大きな屋敷地にかえられ、埋め立てられた沼沢地部分には幅約45.0メートル、深さ約2.0メートルの大形の溝（SD39）、旧東側自然堤防上には幅約18.0メートル、深さ約3.0メートルの大形溝（SD52）が前者に直交する形で設置されている。名古屋市蓬左文庫が所蔵する『春日井郡清須村古城絵図』にこれらの大溝を対照させてみると、前者を内堀に、後者を中堀に対応させることが可能となる。両者ともに堀底に隅丸方形または不定形の浅い土坑が連続して築かれていて、常時湧水状態にあるように工夫されている。SD52の場合、堀の南側、すなわち堀に向かって一段低いテラス状の部分があって、あたかも近世城郭における武者走到にちかい形状となっていて、城郭構造の発達をみるうえで興味深いものがある。

さらに、SD52からは、「天正十四」とヘラ描きされた丸瓦を初めとした多量の瓦が出土しており、この時期に清須城下町の大改造が行われたことを裏付けている。これら二つの堀は、この時点で設置されたものと考えられ、清須城下町の総構え構造設定は、下ってもここまでと見られる。

出土遺物としては、瀬戸・美濃窯編年の大窯Ⅳ期以降のものがみられるが、器種構成は城下町期前期の場合とさほど変わりがない。しかし、この段階になると、新たに朝鮮陶器や国内製品でも信楽、備前、唐津の陶器が加わり、また瀬戸・美濃窯製品では、志野のどら鉢、角向付や、黄瀬戸の製品が目につくようになる。

以上のように、本報告書では、清洲城下町遺跡のごく一部分の時期的変化を明らかにすることができたのであるが、時間的制約などから、事実記載のみに止まり、十分な分析・考察はできないままに終わった。力不足であったことも否めない。清須城とその城下町遺跡がもつ歴史的価値については、既に各分野で明らかにされつつあり、中世都市の構造を解明する上で大変高い評価も与えられている。本報告書は、必ずしもこの課題を明らかにするのに十分な資料を提供したとはいいがたいが、しかし、それでも、これらのデータが中近世史研究の一助ともなれば幸いである。（加藤安信）

# 報 告 書 抄 録

フリガナ	キヨスジョウカマチイセキ ニ								
書名	清洲城下町遺跡Ⅱ								
副書名									
巻次									
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書								
シリーズ番号	第27集								
編著者名	小澤一弘、遠藤才文、城ヶ谷和広、鈴木正貴、服部俊之、鈴木とよ江、矢部 隆、加藤安信								
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター								
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方 802-24								
発行年	西暦 1992年3月30日								
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 〃 〃 〃	東経 〃 〃 〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
キヨスジョウカマチ 清洲城下町	ニシカスガイゲンキヨスチヨウ 西春日井郡清洲町 大字清洲他	23346	21002	35 2 58	136 6 57	19830701	600	道路建設	
						19830930			
						19840601			5,222
						19840930			
						19850401			7,474
19850331									
19860401	3,935								
19860731									
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
清洲城下町	城館跡	中世	掘立柱建物 2 井戸 他	山茶碗類、土師器、瀬戸窯産施釉陶器、常滑窯産焼き締め陶器、青磁、白磁、加工円盤		清須城の内堀、中堀			
		室町時代	掘立柱建物 井戸 地震痕 他	瀬戸・美濃窯産碗・皿、土師器皿・鍋・釜、青磁、白磁、染付					
		戦国時代	掘立柱建物 井戸 堀 他	瀬戸・美濃窯産碗・皿・壺類 土師器皿・鍋・釜、青磁、白磁、染付、朝鮮陶器					